

博士学位申請論文

日本人エクスパトリエイト・コミュニティに関する  
社会学的実証研究  
— 駐在員女性配偶者の日常生活実践の事例 —

立教大学大学院 社会学研究科

三浦 優子

## 目次

第1章 問題の所在と分析方法.....	5
1.1 本論文の背景と目的.....	5
1.2 分析方法.....	6
1.2.1 調査方法—ライフストーリー・インタビュー.....	7
1.2.1.1 調査者の立ち位置.....	8
1.2.1.2 先行研究からの知見や「構え」.....	8
1.2.1.3 インタビュー・データ分析における留意点.....	8
1.2.1.4 トランスクリプションと表記ルール.....	9
1.2.2 調査対象地.....	10
1.2.3 調査協力者.....	10
1.3 本論文の構成.....	13
第2章 トランスナショナルな社会空間とエクスパトリエイト・コミュニティ.....	14
2.1 トランスナショナルな社会空間.....	14
2.2 エクスパトリエイトの定義.....	15
2.3 ソジョナー概念.....	15
2.4 エクスパトリエイト及びコミュニティの特徴.....	19
2.5 日本人エクスパトリエイト及びエクスパトリエイト・コミュニティ.....	24
第3章 デュッセルドルフの日本人エクスパトリエイト・コミュニティの特徴と変容.....	27
3.1 ドイツ・デュッセルドルフと在留日本人.....	27
3.2 NRW州及びデュッセルドルフの日本人長期滞在者の特徴.....	28
3.2.1 邦人数及び人口構成.....	28
3.2.2 デュッセルドルフ日本人滞在者.....	34
3.2.3 日本人居住地区.....	35
3.3 デュッセルドルフ日本人エクスパトリエイト・コミュニティの形成—戦後の歴史から.....	38
3.3.1 戦後の経済再建期（1950年代）—商社のデュッセルドルフ進出.....	39
3.3.2 高度成長期（1960年代）—製造業・金融他企業の海外進出.....	40

3.3.3	本格的な直接投資の展開（1970年代）—製造業企業の進出本格化	41
3.3.4	進む日本企業の多国籍化（1980年代）—「リトル東京」の誕生	41
3.3.5	バブル経済の終焉（1990年代）—日本企業一部撤退	42
3.3.6	ドイツ企業・ドイツ人社会との安定した連携（2000年以降）	45
3.4	日本人組織	45
3.4.1	日本クラブ	46
3.4.2	日本人教育機関	49
3.4.2.1	デュッセルドルフ日本人学校	50
3.4.2.2	日本語補習校	55
3.4.2.3	インターナショナルスクール	57
3.5	デュッセルドルフエキスパトリエイト及びコミュニティの現状・変容と多様性	60
3.5.1	現地社会とのつながりと日本人コミュニティの紐帯	60
3.5.1.1	デュッセルドルフ日本人学校の現状から	61
3.5.1.2	日本クラブの現状から	62
3.5.1.3	日本人関連団体及び関係者から見た現状	63
3.5.1.4	ドイツ人から見た日本人社会と駐在員配偶者	65
3.5.2	日本人駐在員の変容と駐在員配偶者の生活意識の多様性	67
3.5.2.1	日本人駐在員の変容	68
3.5.2.2	駐在員家族の教育観の変容	69
3.5.2.3	駐在員女性の生活意識面における多様性	70
第4章	駐在員配偶者の日常生活実践	73
4.1	「駐在員配偶者」カテゴリーに期待される規範	73
4.1.1	「庶民」としての自分の位置づけ—Kさん	74
4.1.2	「駐在員配偶者」への感化とためらい—Fさん	77
4.1.3	「駐在員配偶者」カテゴリーからの差異化—Jさん	81
4.2	「駐在員配偶者」同士における関係性	84
4.2.1	「与えられた環境の中で」わだかまりなくつながる—Gさん	84
4.2.2	「駐在員配偶者」と離れすぎない関係性—Iさん	89
4.2.3	「無色透明」な存在—Dさん	92
4.3	駐在員配偶者たちの結束と連帯	97

4.3.1	支え合いの中のためらい—JD さん	98
4.3.2	初めての母親グループ—JE さん	103
4.3.3	ともに支え合う仲間—JF さん	105
4.3.4	緩い結束—L さん	107
4.4	駐在員配偶者の妻・母としての立ち位置	110
4.4.1	家族をつなぐ接着剤—M さん	110
4.4.2	義務としての夫・子のサポート—H さん	115
4.4.3	価値観のずれへの恐怖—B さん	121
4.5	駐在生活における自己への意味づけ	124
4.5.1	経済的自立の重要性—A さん	125
4.5.2	自分への挑戦—JA さん	130
4.5.3	「運命」の駐在生活—C さん	133
4.6	エキスパトリエイト・コミュニティからの解放	140
4.6.1	現地の人びとの触れ合い—JB さん	141
4.6.2	グラデーションのある生活—JC さん	146
4.7	中断されるライフコース	153
4.8	自国の親・兄弟とのつながり	156
4.8.1	自国の親を案じる気持ち—E さん	156
4.8.2	申し訳なく思う気持ち—C さん	159
第5章	デュッセルドルフ日本人エキスパトリエイト・コミュニティの特徴	162
5.1	アンクレーブ化したエキスパトリエイト・コミュニティの閉鎖性	162
5.2	エキスパトリエイト・コミュニティ内の結束と連帯	163
5.3	エキスパトリエイト同士の軋轢や摩擦	163
5.4	同じエスニック集団の他のサブコミュニティとの乖離	164
5.5	妻の社会関係と夫の仕事の関係	165
5.6	深刻な適応—妻として・母として	166
第6章	結論 トランスナショナルな社会空間の日本人エキスパトリエイト・コミュニティの特徴	168
6.1	同質性を生み出す社会構造	168

6.2 駐在員配偶者のニーズに合ったサポートの必要性.....	168
6.3 双国のかみ合わない制度や枠組み.....	169
6.4 変容する家族との関係性.....	169
6.5 エクスパトリエイト・コミュニティの再考.....	170
参考文献.....	172
付録.....	179
謝辞.....	185

## 第1章 問題の所在と分析方法

本章では、本論文の背景と目的、分析方法、並びに本論文の構成を提示する。

### 1.1 本論文の背景と目的

本論文は、トランスナショナルな社会空間に形成されるエクスパトリエイト・コミュニティを描き、その中に暮らす駐在員配偶者の生活の特徴を提示することが目的である。なお、本論文では、日本の多国籍企業から派遣された駐在員をエクスパトリエイトと捉え、駐在員中心のコミュニティをエクスパトリエイト・コミュニティとする。

グローバル化が進み、輸送と情報伝達の技術が発達し、時間的距離と空間的距離の圧縮が起こっている（日高 2012: 240）。ハーヴェイは、「時間—空間の圧縮」という表現で、1970年頃から人びとが空間的、時間的に諸世界が「圧縮」している感覚を持つようになり、実際に、「時間—空間の圧縮」は、「文化的、社会的な生活のみならず政治—経済的実践」に対して大きな影響を与えてきたと述べる（Harvey 1989=1999）。人の移動においても様々な社会層の人びとが多様な目的で国境を越えて移動する。近年のテクノロジーの発達、テレコミュニケーションやトラベルコストの低下などによりトランスナショナルな領域はますます拡大し、移動する人びとのトランスナショナルな活動は強化されている（Vertovec 2007: 1043）。

樽本は移民を「循環移民」とし、自国からホスト国へ、そしてまた一定期間を経て、自国に戻り、またホスト国に移動すると述べる（樽本 2016: 13）。また、永田は、国外に移住し「状況に応じて、故郷と移住先を往来するという移動」を生活基盤とするフィリピン人の活動を「トランスナショナル実践」と位置づける（永田 2011: 3）。移民たちによるトランスナショナルな活動はホスト国や送り出し国の政治、文化、社会、経済面において様々な影響を与える。政治活動としては、母国の民主化を支援したり、滞在国内政府に母国への支援を働きかけたりする活動がある（樽本 2016: 13-4）。さらに小井土は移民たちが海外にいても出身国の政治に関与したり、二重国籍を容認され、直接在外投票に参加できたりするケースを提示する（小井土 2005b: 17）。また、経済活動としては、国境を越えて移住した移民企業家が、母国に投資したり、生まれ故郷のまち起こしをサポートしたりする社会貢献<sup>1</sup>もある（樽本 2016: 14）。政府によっては、移民たちの母国への送金や投資を自国の経済発展に貢献するものと位置づけ、移民たちの活動を奨励し維持する（Portes 2003: 878-9）。また、企業家やエクスパトリエイトの活動などは、ホストコミュニティへの貢献にもつながる。

個々の移民たちのアイデンティティや家族の生活などの社会文化的な現象もトランスナショナルな活動により変容する（Vertovec 2004: 970-1）。アイデンティティに関して

---

<sup>1</sup> 経済面では「送金の増大」があり、移民送り出しの家族にとっては、送金を、前提に生計を営んでいる。また、送金が送り出し国の生活基盤の拡充など「社会的インフラ構築」にも貢献している（小井土 2005a: 384-5）。

は異国での生活を通して、ナショナルアイデンティティが強化されたり、根無し草のようになったり、母国と異国のナショナルアイデンティティを重国籍を利用して使い分けたり、両国のナショナルアイデンティティを統合させた独自のアイデンティティを構築することもある（小内 2007: 4-5）。

このように移民のトランスナショナルな活動が進む中で、トランスナショナルな視点からの移民の経験や実践に関する研究は、1990年代頃から広がってきている（Vertovec 2003: 641）。中でもサッセンは、経済活動について言及し、「経済活動のグローバル化に伴い、空間の編成に関わる構造が変わってきている」と述べ、「国境線を越える経済活動」において「国家以外の空間」の影響力の大きさについて言及する。越境的地域やデジタル化されたグローバル市場などの超国家的な空間が 2000 年以降出現している（Sassen 2001=2018: 24-5）。国境を超えるトランスナショナルな都市システムの存在、「ネットワークの複雑さ」「グローバルな広がり」などにより、都市の空間性にも変化が生じている（Sassen 2001=2018: 31-2）。

このように変容する都市空間の中で、国境を移動する人びとが創り出す「越境的社会空間」も大きく変化している。小井土は、「国境を越えて複数の場に生きる移民たち」は、「経済・社会・政治的に相互に意識し合い影響を与える 1 つの社会的場あるいは空間」を創り出すと述べる（小井土 2010: 875）。エクスパトリエイト・コミュニティもトランスナショナルな社会空間の中に存在し、変容していると考えられる。それでは、エクスパトリエイト・コミュニティで暮らす駐在員配偶者たちは、どのようなネットワークを広げ、他の駐在員配偶者や同エスニック集団、ホスト国コミュニティ、そして自国の家族とつながっているのだろうか。宮島は国境を越えて「移動する」という現象は、「つながる」「帰属する」という現象と深く関わり、連動しあい、自国や受け入れ社会で様々なネットワークでつながり、「生活の基盤を形成」し、同エスニック集団や現地社会、地域共同体そして家族などに帰属しながら、その帰属の在り方や意味を改めて意味づけたり、価値づけたりすると述べる（宮島 2015: 4）。駐在員配偶者は、海外での生活をどのように意味づけ、価値づけようとしているのだろうか。

海外駐在員配偶者たちの生活の特徴を提示するにあたり、トランスナショナルな社会空間に存在する、エクスパトリエイト・コミュニティにおける女性たちの日常生活実践に注目する。

本論文の最後では、トランスナショナルな社会空間にあるエクスパトリエイト・コミュニティの特徴を明示することを試みる。

## 1.2 分析方法

本研究は、インタビュー・データをもとにしている。インタビューは、ドイツ・デュッセルドルフへの赴任の夫に伴い駐在した配偶者 19 人（内、帰国者 6 人）、並びに日本人関連組織団体や日系不動産経営者など合計 12 人、デュッセルドルフ在住のドイツ人 2 人、ドイツ人と国際結婚した日本人永住女性 1 人に行った。以下、調査方法、調査対象地、調査協力者について説明する。

### 1.2.1 調査方法—ライフストーリー・インタビュー

海外駐在員配偶者を対象にライフストーリー・インタビューを行った。ライフストーリーとは、「個人のライフ（人生、生涯、生活、生き方）についての口述の物語」であり、「個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法の一つ」である（桜井 2012: 6）。桜井はライフストーリー・インタビューは、「私たちの自己概念」を表し、「私たちは何者なのか、どのようなやり方で今の自分を作り上げたのか、を伝えたり認めてもらったりする重要な手段である」と述べる。そして、「私たちは、集団やコミュニティの成員とライフストーリーを通して自己の在り方を探したり、自分が重要な成員であることを証明したりする」と述べ、「ライフストーリー・インタビュー」を、「自己の構築をめぐる社会的交渉の一環」とする（桜井 2002: 210）。

語り手の自己呈示は、「調査者の先入観や否認」を伴い、「修正されつつ構築されていくダイナミックな過程」である（桜井 2002: 214）。そして、語り手においては、「内的な自己を反省的に振り返り、その中にあるさまざまな葛藤を調整し、過去から現在へ至った自己の意味に一貫性をあたえ全体を構成する」と捉える（桜井 2012: 38）。

その意味でインタビュー・データとしての「語り」は「過去の出来事や語り手の経験したことというより、インタビューの場で語り手とインタビュアーの両方の関心から構築された対話的混合体」である（桜井 2002: 31）。

本論文の目的であるエクスパトリエイト・コミュニティを描き、駐在員配偶者の生活の特徴を提示するにあたり、エクスパトリエイト・コミュニティ内で暮らす駐在員配偶者が、コミュニティや他集団をどのように捉え、つながり、コミュニティ内での自己をどのように認識・構築しているのかを見ていくことが重要である。その為には、ライフストーリー・インタビュー調査法が適していると考ええる。

インタビューの内容は、幼少期から大学時代、就職、結婚、出産、渡独するまでの生活、渡独後のライフスタイル、日本人及びドイツコミュニティとのつながり、夫や子どもとの関係、子どもの教育方針、将来の予定や希望、そして帰国女性に対しては、前述の項目に加えて、帰国後の生活、海外生活を振り返り、今、どのように感じているかなど基本的にライフコースに沿ってはいるが、特に時系列通りの順番を決めずに自由に語ってもらった。インタビューは、現地においては調査協力者宅並びにデュッセルドルフ市内のカフェ、また帰国女性たちは、都内のカフェで行った。インタビューは1対1形式で（ただし帰国者のJDさん、JEさん、JFさんは3人のグループインタビュー）行い、時間は、ひとり2時間半から4時間である。インタビュー内容は、全員に許可を得て、ICレコーダーに録音した。そして録音されたインタビュー・データはすべてトランスクリプトを作成し、インタビューの全過程を繰り返し見られるようにした。以下にインタビュアーにおける調査者の立ち位置、インタビュー並びにインタビュー分析における留意点、トランスクリプションの表記ルールについて提示する。



### 1.2.1.1 調査者の立ち位置

調査者が調査協力者をカテゴリー化すると同時に調査協力者も調査者を「カテゴリー化し、それに対応する自己カテゴリー化を通してインタビューの相互行為」を行うのであり、語り手にとって調査者である私たちは何者なのかということを常に自覚することが大切になる（桜井 2012: 46）。筆者も調査対象者と同じ海外駐在員配偶者としてデュッセルドルフでの生活経験者であり、女性であり、すでに帰国しており、海外駐在員配偶者に関する研究を行う者である。そしてそのような筆者の立ち位置は語り手とのストーリーの構築、そして双方の自己の構築において影響を与えている点も認識することが求められる。

また、語り手の調査者に対するカテゴリー化は固定したものではなく、インタビューを通して変化していく。語り手は、インタビュー過程を通して、インタビュアーを解釈して、その解釈によって媒介された語りの世界をインタビュアーは解釈していく（桜井 2012: 49）。本調査においても、実際にインタビューの回数を重ねるごとに語り手が筆者を調査者としてではなく、同じ経験をした駐在員配偶者と捉え、同意を求めてきたり、感想や意見を求めたりすることもしばしばあった。そしてそのような過程を通して、調査者の語り手に対する解釈も影響を受けていく。

### 1.2.1.2 先行研究からの知見や「構え」

今までのエクスパトリエイト・コミュニティに関する先行研究によれば、コミュニティ内はアンクレープ化が進み、同質的であり、男性は仕事、女性は家事・育児に追われるという構図が一樣に描かれているが、調査者は、そのようなフレームワークをもとにインタビューやデータに向き合うことに懐疑的でなければいけない。桜井は、調査者のあらかじめ持っている枠組みを「構え」と称し、このような「構え」は、すべての語りを自分の持つコンテクストに回収してしまい、「語りの個性的な側面や生活や人生という意味の多義性を把握する妨げになる」と述べる。そして、ライフストーリー・インタビューにおいては、「人間の全体像をふまえた解釈が求められる」としている（桜井 2012: 119-20）。インタビューは語り手と調査者の「言語的相互行為による共同の産物」であり、インタビュー過程も含め、そのトランスクリプト分析においても調査者の解釈が入り込む（桜井 2002: 174）。この点も認識する必要がある。

筆者自身も 2000 年から 2010 年まで駐在員配偶者としてドイツに暮らしたが、その後エクスパトリエイト・コミュニティの構成メンバーも変わり、駐在員配偶者の生活意識やライフスタイルの変容も考えられる。ステレオタイプ的な視点や自身の持つ先入観から離れ、「柔軟」な構えで臨みたい。

### 1.2.1.3 インタビュー・データ分析における留意点

インタビュー・データ分析においては、「何を語ったのか」という点のみならず、「いかに語ったのか」という点にも留意する（桜井 2002: 28）。海外駐在員配偶者たちの語りの内容のみでなく、語り方や、使うフレーズや言葉にも留意していく。桜井はインタ

ビューにおいては、語り手のよく使う言葉や個性的な表現があるとし、語り方に注目することで、「自己と社会、すなわちコミュニティや全体社会との関係のあり方」を見いだすことができると述べる（桜井 2002: 183-88）。そして語り方から、「自己と社会（家族、コミュニティ、全体社会）のあいだの同一化、受容、妥協、あるいは反抗、拒絶、排除など」を読み取ることができる（桜井 2012: 99-100）。

また、「自己と社会」の関係性を解釈する場合には、「語りの様式」に留意する必要がある。ライフストーリーは、「複数の語りの様式」を用い、語られる（桜井 2012: 104）。

桜井は、「語りの様式」として、個人の「パーソナルヒストリー」、ある一定のコミュニティの中で機能する「モデル・ストーリー」、全体社会の支配的文化で語られるストーリーである「マスター・ナラティブ」をあげる。そして、「マスター・ナラティブ」や「モデル・ストーリー」は、「個人のアイデンティティ形成や行為の動機を提供するが」、一方において「多様なストーリーを抑圧する権力」にもなる（桜井 2002: 288）。桜井は、語りの中の「冗談」「照れ」「笑い」などもそのようなストーリーに「回収されまい」とする語り手の「個別化＝主体化」の実践と捉える（桜井 2002: 288）。

本研究の焦点となる海外駐在員配偶者は、国境を越え、トランスナショナルな社会空間である駐在員中心のエキスパトリエイト・コミュニティを起点に暮らす。女性たちにとり、自国のコミュニティも常に身近な存在である。また、現地コミュニティとも隣り合わせであり、様々な世界が交錯している。語りの分析においては、女性たちの帰属するコミュニティの重層性にも留意することが必要である。それぞれのコミュニティの持つモデル・ストーリーにも注意を配りたい。

また、語りは、〈いま-ここ〉に時空間で成立している〈ストーリー領域〉と〈あのとき-あそこ〉の〈物語世界〉から成る。〈ストーリー領域〉は、語り手とインタビュアーの相互性から成立しているが、〈物語世界〉は、登場人物の行為の場である。〈ストーリー領域〉の自己と〈物語世界〉の自己の二つの相互関係も重視していく必要がある（桜井 2002）。

さらに語りを解釈する際、その背後にある社会的コンテキストを考慮する必要がある。本論文ではデュッセルドルフのエキスパトリエイト・コミュニティに暮らす駐在員配偶者の語りを中心になるが、コミュニティ形成の歴史や社会構造上の特徴や状況などとの関連から語りの考察・分析を行うことが不可欠である。しかし、その際、社会的コンテキストに語りを当てはめるのではなく、語りから、語りに内在する社会的コンテキストを取り出すことを試みたい。

#### 1.2.1.4 トランスクリプションと表記ルール

本研究においては、インタビュー・データのトランスクリプション（テープ起こし）は、逐語起こしを試みる。それは、ライフストーリーの語り、「語り手とインタビュアーの相互行為を通して構築されるもの」と考えるからであり（桜井 2002: 28）、聞き手の質問や相づちなどもテープ起こしする。

インタビュー・データの表示は、主に桜井によるトランスクリプション・ルールに従

う（桜井 2002: 177-80）。

- (1) \*は筆者を表し、アルファベットは調査協力者を表す（アルファベット該当者の詳細は、巻末付録の「インタビュー調査協力者のプロフィール一覧」を参照）。
- (2) 丸括弧内のドット（・・・）は発話の流れの中での沈黙、休止、途切れである。ドットの数はおよその時間を表し、（・）は約1秒を目安とする。
- (3) （笑）は語り手の笑いを表す。
- (4) 発話では省略される助詞など、補うことで文脈が明確になる場合は、丸括弧で挿入する。

なお、本論文中、一貫して「駐在員配偶者」という語を用いるが、インタビューや聞き取り調査においては「駐妻」「駐在妻」「駐在員妻」「駐在員の妻」「駐在員の奥さん」など様々な語が使われており、トランスクリプション記載においては、語りに使用されたままを表示した。インタビュー・データ分析においてその語の使われ方にも留意する。

### 1.2.2 調査対象地

本研究ではドイツのデュッセルドルフのエクスパトリエイト・コミュニティに焦点を当てる。デュッセルドルフは、ドイツ中西部に位置し、ノルトライン・ヴェストファーレン州（以下、NRW 州とする）の州都で経済都市である。ドイツには日本の現地法人が英国に次いで2番目に多く（東洋経済 2017）、多くの日本企業がデュッセルドルフに進出している。また、当市には、ドイツ国内最多の7,391人の日本人が住み、そのうち長期滞在者は6,261人で全体の84%<sup>2</sup>（外務省領事局 2016年）を占め、多くが民間企業派遣者である。デュッセルドルフには、戦後から形成され今も続く日本人エクスパトリエイト・コミュニティがあり、その特性を見ていく上で多くの示唆を得られると考える。

また、筆者は夫の赴任に伴い、デュッセルドルフに2000年から2010年まで家族で生活した。筆者の長女は、渡独後、デュッセルドルフ日本人学校に小3から小6の夏まで、そしてその後、デュッセルドルフのインターナショナルスクールへ編入し、12年生卒業まで、次女は現地の幼稚園から現地の学校に入学し、9年生まで通学した。このような生活環境の中で、現地の日本人駐在員を含め、現地永住の日本人、現地のドイツ人、現地の日本人受け入れ機関など様々なネットワークが広がった。インタビュー・データ収集においてインタビュー協力者へのアクセスのしやすさもデュッセルドルフを調査対象地に選んだ理由の一つでもある。

### 1.2.3 調査協力者

前述のようにデュッセルドルフ海外駐在員配偶者19人（内ひとり夫が研究者とし

---

<sup>2</sup> 外務省領事局政策課 2016年10月1日

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000293757.pdf> 2018年8月10日閲覧。

で渡独し、インタビュー時、夫はデュッセルドルフにて日系企業に勤務)、日本人関連団体など 12 人、デュッセルドルフ在住ドイツ人 2 人、ドイツ永住日本人 1 人の合計 34 名にインタビューをお願いした。このうち、海外駐在員配偶者の 3 人、ドイツ人 2 人、ドイツ永住日本人は筆者の直接の知人であり、他の駐在員配偶者たちは知人からの紹介または調査協力者から紹介を受けた。また、日本人関連団体に関しては、筆者が 2000 年から 2010 年のデュッセルドルフ滞在中に何らかの形で接点があり、調査協力を依頼した。インタビュー協力の依頼は、インタビュー協力者全員にまずは紙面にてお願いし、承諾を得た。

なお、インタビュー日時、駐在員配偶者のデュッセルドルフ滞在期間、及び日本人関連組織団体等の詳細は、本論文付録の「インタビュー調査協力者のプロフィール一覧」にて記載されている。

調査協力者の海外駐在員配偶者に関しては、デュッセルドルフ及び隣町のメアーブッシュに在住している駐在員配偶者 13 人には 2015 年から 2018 年、帰国した「駐在員配偶者」(2004 年から 2017 年の間に帰国) 6 人には 2016 年から 2018 年にインタビューを行った。また、デュッセルドルフ滞在中に 2 回インタビューを行った D さんは、2017 年本帰国になり、日本にて 3 回目のインタビューをお願いした。調査協力者の年齢はインタビュー時には 30 代が 5 人、40 代が 8 人、50 代が 5 人、60 代が 1 人である。

インタビュー協力者のうち 3 人 (C さん、JA さん、JB さん) は、筆者が駐在員配偶者としてドイツに 2000 年から 2010 年滞在した時に知り合った。C さんとは、当時 C さんと筆者の長女が同じデュッセルドルフインターナショナルスクール (ISD) に通っており、その保護者会で知り合う機会を得た。子どもたちも友だち同士であり、筆者は、C さんの長女と次女の英語の勉強を時折みるように頼まれることがあり、その関係で個人的に話をするようになった。C さんの長女は、高校 1 年で渡独し、インターナショナルスクールには、10 年生の終わりから入学し、次女もまた、日本からドイツに来て、いきなりインターナショナルスクール (ISD) <sup>3</sup>に入学した為、英語の勉強のサポートが必要であった。

JA さんには、デュッセルドルフ市民大学 (VHS) <sup>4</sup>のドイツ語コースで初めて知り合った。JA さんが学んでいたコースは外国語としてのドイツ語の資格試験を目指すもので、週に 4 回、毎回 3 時間のコースで、宿題や課題も多く勉強量もかなりあった。筆者は、次女を現地の学校に入れていた為、ドイツ人の先生との面談や学校関係の連絡などにおいてドイツ語が必要であり、しっかりドイツ語を学ぼうと思い市民大学に通い始めていた。そして、市民大学で同じドイツ語のコースで学んでいた JA さんと知り合い、話をするうちに JA さんも長男を現地校に入れていることを知り、共感を覚えた。2000

---

<sup>3</sup> International School of Duesseldorf (ISD) 詳細は 3 章 3.4.2.3 参照。

<sup>4</sup> VHS (Volkshochschule) Duesseldorf は国籍を問わずドイツ在住者に開かれた市民大学で、年に 2 回登録でき、語学以外に経済や心理学など講座、スポーツやコーラス、美術、料理など様々なコースがある。 <https://www.duesseldorf.de/vhs/> 2018 年 9 月 2 日閲覧。

年初頭時には、駐在員家族で、子どもをドイツの現地校に入れるケースは非常に少なく、多くが日本人学校に入れていた。実際に、筆者の次女の通っていた現地校も、日本人集住地区にあり日本人学校の目と鼻の先にありながら、駐在員家族の子弟は、同学年で筆者の娘ひとりだけであった。次女をドイツの現地校に入れる際に、親子ともどもドイツ語もままならず、またドイツの教育システムもよく把握しておらず、まさに「清水の舞台から飛び降りる」心境であった。当時、JAさんといろいろ現地校の話共有したり、相談にのってもらい、JAさんの存在は、筆者にとり、大変心強いものであった（三浦 2017: 48）。

JBさんとは、日本クラブの文化部主催で行われたヨーロッパデザインの大判スカーフの様々な巻き方を習う「スカーフの巻き方講習会」で知り合った。当日そこには多くの駐在員配偶者たちが参加していた。また、JBさんとはその後、筆者の長女が通っていたデュッセルドルフのインターナショナルスクール（ISD）での保護者の集まりでも何度かお会いし、大変積極的に学校の行事等に参加している姿を目にした。JBさんは、非常に親しみやすく、オープンな雰囲気を持つ女性であった。そして、その後、現地校に通う筆者の次女が日本語補習校に通学していた時に、JBさんが日本語補習校の先生をなさっていることを知り、「駐在員配偶者」で現地で仕事をする人は非常にまれなので驚いたことを覚えている（三浦 2017: 48-9）。

次に筆者の直接の知り合いである調査協力者のドイツ人2人（MFさんとWHさん）との出会いであるが、両者には筆者の子どもの関係で知り合う機会を得た。MFさんは、60代女性で、筆者の次女の家家庭教師であった。次女はドイツの現地校に通っていた為、ドイツ人の家庭教師を探しており、デュッセルドルフの日本クラブの掲示板にてMFさんの「ドイツ語家庭教師をいたします」という掲示を目にし、お願いした。また、MFさんは、何年もドイツ市民大学のVHSでも「外国語としてのドイツ語」の授業を週2回受け持っている。夫はイラン人で20代の息子がおり、MFさんは以前日本で数年暮らした経験も持ち、日本人や日本文化に大変興味を持っている。筆者も何度か家に招待されたり、一緒にカフェに行くなど、個人的にも親しく、筆者の帰国後も交流は続いている。

もうひとりのドイツ人女性のWHさんは、筆者が滞独中、デュッセルドルフのインターナショナルスクール（ISD）の学長補佐をしており、筆者の長女が当学校に通っていた関係で知り合った。以前日本の大学に留学した経験もあり、日本語・英語が大変流暢でいろいろとお世話になった。体調を崩されてから、学校をやめ、現在は、難民受け入れセンターでドイツ語を教えたり、日独親善の為のコンサート主催などを手掛けている。

また、ドイツ人と国際結婚した永住日本人女性のZさんであるが、筆者がデュッセルドルフ滞在中に、現地の子どもの向け水泳教室にて知り合った。当時、Zさんの2人の娘も同じ水泳教室に通っており、筆者の子どもたちと大変年齢が近いこともあり、親子ともども親しくなった。また、Zさんの次女と筆者の次女が同じドイツの現地校に通っていた為、さらに交流が深まり、ドイツの学校関係についてもいろいろと教えてもらい、大変助かった。インタビュー時には、Zさんは、ドイツ人の夫の仕事の関係で、3年の

予定で日本に駐在になった為、日本にてインタビューをお願いした。

### 1.3 本論文の構成

本論文は、6章から構成されており、各章の概要は以下のとおりである。第1章では、本論文の背景と目的、調査方法と調査対象地・調査協力者について述べる。

第2章では、トランスナショナルな社会空間に存在するエクスパトリエイト・コミュニティの特徴を描くにあたり、トランスナショナルな社会空間の意味を検討する。次にCohenによるエクスパトリエイト概念を提示し、それに関する筆者の見解を示す。章の最後では、日本人エクスパトリエイト及びエクスパトリエイト・コミュニティに関する今までの研究を概観する。

第3章では、ドイツ・デュッセルドルフの日本人エクスパトリエイト・コミュニティの特徴と変容を捉えることを目的とする。まずは、デュッセルドルフの邦人数及び人口構成も含めた長期滞在者の特徴、日本人居住地区、戦後からの日本経済の発展・経済のグローバル化に伴う日本人コミュニティ形成の変遷、教育機関を含めた日本人関連組織というマクロな視点から、その後、日本人関連団体機関などからの聞き取り調査も踏まえ、ミクロな視点からコミュニティの現状と近年の変容を捉え、駐在員配偶者女性の生活意識面の多様性にも言及する。

第4章においては、第2章で提起されたエクスパトリエイト・コミュニティに関する6つの問いをもとに、新たに8つの視点を設定し、駐在員配偶者たちの日常生活実践をインタビュー・データをもとに記述する。

第5章では、第2章で提起された6つの問いに対して、インタビュー・データから考察を行い、デュッセルドルフのエクスパトリエイト・コミュニティの特徴を実証的な観点から提示する。

結論においては、第1章、第2章で提示した概念と実証データのつながりや相違点を確認する。そして、トランスナショナルな社会空間に存在する日本人エクスパトリエイト・コミュニティの特徴を明らかにする。

なお、本論文の巻末には参考文献リストの他、インタビュー調査者協力者のプロフィール一覧表を付録として収録している。

## 第2章 トランスナショナルな社会空間とエクスパトリエイト・コミュニティ

トランスナショナルな社会空間に存在するエクスパトリエイト・コミュニティを描くにあたり、まずはトランスナショナルな社会空間の意味を検討する。次に Cohen による見解をもとにエクスパトリエイト概念を提示する。エクスパトリエイト概念は、ソジョナー概念と重複する部分が多い為、ソジョナー概念も対比して見ていく。さらに Cohen のエクスパトリエイト概念に関する筆者の見解を記す。

本章の最後では、日本人エクスパトリエイト及びエクスパトリエイト・コミュニティに関する今までの研究を整理する。

### 2.1 トランスナショナルな社会空間

トランスナショナルな社会空間にあるエクスパトリエイト・コミュニティを提示するにあたり、まずはエクスパトリエイトが、トランスナショナルな存在であることを検討する。

水上は、グローバル化に伴い、出身国からホスト国への移住行為の完了後も両国を頻繁に行き来したり、ホスト国にしながら、出身国とつながりを切らずに暮らす移住者の増加に言及し、多国籍企業等に勤務する駐在員もホスト国で生活しながら、出身国との絆を維持し続けるという点で「トランスナショナルな存在」であると捉える(水上 2018a: 244-5)。実際、多国籍企業は、“Transnational Enterprises”あるいは、「超国家企業」などと称され、事業活動が「2か国以上という特徴」を持ち、「本国本社の世界的な経営戦略にしたがって、世界各地域に設立された海外子会社が一体として国際的事業活動を行い、最大の利潤を獲得することを目的としている国際独占体」を指す(丸山 2012: 6)。このような背景を持つ多国籍企業から海外に派遣されるエクスパトリエイトも水上の指摘のようにトランスナショナルな存在として位置づけられるであろう。

トランスナショナルな存在である駐在員は国境を越えて移動し、トランスナショナルな社会空間を形成する。それではトランスナショナルな社会空間とは一体何を指すのであろうか。トランスナショナルな社会空間についてはいくつかの見解があるが、フェイストによれば、トランスナショナルな空間とは、国境を越えて広がる相対的に安定した長期的に持続する密度の濃い結びつきであり、その空間は、少なくとも2か国以上の国境を越えて存在する組織や機関、そして人びとや組織のネットワークの組みあわせから成る(Faist 2004: 3)。トランスナショナルな社会空間は国境を越えた人びとの家族・親族や他者との絆、そして組織内における人びとの社会・文化的ネットワーク、及び、越境的な社会空間内における組織・機関など様々な要素を含む(Faist 2004)。

また、ブラジルから日本に越境してトランスナショナルに生きるブラジル人労働者の研究を行う三田は、ブラジル人労働者のトランスナショナルな社会空間の中に、就労しているホスト社会の「絶対的空間」、母国ブラジルの「相対的空間」、そして彼らの形成するエスニック・コミュニティの存在をあげる。さらにトランスナショナルな社会空間としてエスニック・コミュニティに暮らす移民とホスト社会や自国の人びとや組織・機

関とのネットワークも含める（三田 2011）。

上記の点も踏まえ、本論文においては、エクスパトリエイト・コミュニティをトランスナショナルな社会空間に存在すると位置づけ、そのコミュニティ内で暮らす駐在員配偶者のネットワークや日本人関連の組織や機関などにも留意しながら、エクスパトリエイト・コミュニティの特性を考察する。次節では、エクスパトリエイト及びエクスパトリエイト・コミュニティ概念を検討する。

## 2.2 エクスパトリエイトの定義

ここでエクスパトリエイトの定義を再確認する。

水上によれば、エクスパトリエイトとは、英語圏のマス・メディアにおいて一般的に、母国を離れ海外に駐在する駐在員などのことである（水上 2008: 86）。また、Cohen はエクスパトリエイトの本来の意味は、母国から追放されたり、亡命したりした者を指すが、主に裕福な国から自発的に一時的に海外に在住する者と定義し、目的に応じて以下の4つのグループに分けている（Cohen 1977: 6-10）。

- ① ビジネス目的—外資系あるいは多国籍企業などの代表者、マネージャーや社員
- ② 派遣目的—外交あるいは政府代表者、軍の海外駐屯代表者、宣教師など
- ③ 教育及び研究目的—研究者、科学者や芸術家など
- ④ レジャー目的—海外別荘所有者、富裕退職者、長期旅行者など

そして移民労働者や留学生はのぞき、エクスパトリエイトを旅行者と永住移民の間の移民中間層カテゴリーとして捉える（Cohen 1977: 7）。また、Cohen の定義は駐在員以外の政府関係者や研究者、長期旅行者などもエクスパトリエイトに含めているが、前述のように本論文では、主に海外駐在員をエクスパトリエイトの中心構成要素として捉える。

エクスパトリエイトは国境を越えて移動する移民カテゴリーの一形態として捉えることができる。移民は国境を越えて移動し、ホスト国に永住する永住移民と永住を目的としない一時滞在移民とに分けられるが、エクスパトリエイトは、基本的には、永住意志を持たず帰国予定が明確な一時滞在移民である。水上は、エクスパトリエイトは、仕事やミッションなどの限定的な滞在目的を持つ点、「異質性」やホスト社会の成員とみなされない点、人口構成上少数派である点において、かなりの部分でソジョナーと重なり、ソジョナーの一形態と捉える（水上 1995: 136）。エクスパトリエイトを明確化する為、最初にソジョナー概念を整理する。

## 2.3 ソジョナー概念

ソジョナーは、「帰国を前提とするホスト社会の期間滞在者」であり、永住者としての移住者と対比して捉えられてきた（水上 1996: 69）。シウは、移民としてアメリカのシカゴに在住する中国人洗濯屋（ランドリーマン）と中国におけるアメリカ人宣教師を典型的ソジョナータイプとしてあげ、ソジョナーを異邦人“stranger”の社会学的タイプ



とし、パーク (Park) の「マージナルマン」<sup>5)</sup>“marginal man”とジンメル (Simmel) の「異邦人」<sup>6)</sup>“stranger”とはまた別のタイプとして類型づける (Siu 1952)。ソジョナーは、マージナルマンのようにホスト社会と自国の二つの異なった文化に生きるのではなく、ホスト社会に長い年月滞在するが、永住意志を持たず、同化することがなく孤立し自国のエスニック集団文化に固守する (Siu 1952: 34)。そして、ホスト国における定住者として自分を位置づけることは意としない。もしソジョナーが定住するのであれば、マージナルマンになる (Siu 1952: 34)。

さらにシウは、ジンメルの“stranger”に言及する。ジンメルの“stranger”とは、職業を目的とする「今日訪れ来て明日去り行く放浪者としてではなく、むしろ今日訪れて明日もとどまる者—いわば潜在的な放浪者」である。シウは、ソジョナーをジンメルのいうところの「潜在的な放浪者」という点では共通と捉えるが、明確にその違いは述べていない。

また、シウは国や状況によって異なりはするが、ソジョナーは主に以下の3つの特徴を有すると述べる (Siu 1952: 35)。

## ① 仕事

---

<sup>5)</sup> マージナルマンは、二つの文化と社会にまたがり存在するが、決して完全にどちらの社会にも浸透したり融合したりせず、多かれ少なかれ異邦人“stranger”である (Park 1928: 892-3)。ヨーロッパのゲットーから出て、アメリカの都市にもっと自由なコスモポリタンな生活をする場所を見つけようとしているユダヤ人もマージナルマンといえる (Park 1928: 892)。マージナルマンは、自国を出て新しい不慣れな国で自分の財や生活を見いだそうとするが、自国そして新しい世界においてもフルメンバーから排除される。その結果、不安や精神的不安定感、危機感を抱く。そしてそのような状態は、相対的に長く続くとされる (Park 1928: 893)。

<sup>6)</sup> ジンメルの「異邦人」は、「必要最低限の関心」(徳田 2005: 11)しか持たず、「遠離と近接、無関心と関与」からなり、「行為において習慣や忠誠や先例によって拘束されない」(Simmel 1908=2016: 287-8)。また、文化的な位相から見た場合、「職業に従事するに足るだけの高度なコミュニケーション能力、関係調整能力、客観的で分析的な観察眼」を持ち、「社会集団のメンバーとの対話に長けているような人びと」であり、社会的・文化的距離を有しながら、特別なメンバーとして社会集団と関係を維持し、職業人としての役割によって、一定の重要性とともに受容されている (徳田 2005: 8)。さらに内集団のニーズに合致した時に「有用性」、「信頼性」、「歓迎」の意をもって受け入れられる (徳田 2005: 14)。徳田は、このような「異邦人」モデルを「専門家」モデルと呼ぶ (徳田 2005: 9)。しかし、正式なメンバーとしては認知されず、マージナルマンにも重なる (水上 1995: 133)。また、徳田はシュッツの「ストレンジャー」をジンメルの「異邦人」と対比させ、「ストレンジャー」は、集団への参入に対して強い希望を持つ為、生活実践の中で、新たな処方箋を吟味し、客観的なものの見方から脱して徐々にその社会集団での生活者の視点を獲得し、集団内の者の見方へとシフトし、可能なかぎり対象へと近づこうとすると述べ「移民」モデルとして捉える (徳田 2005)。また、シュッツの「ストレンジャー」は、内集団の成員にとっては自明である事柄を検討する必要に迫られるが、「日常的思考」の限界を経験し、自国や新しい国のいずれの文化的パターンにも属さない周縁に位置する「マージナルマン」になることもある (Schutz 1964=1980: 21)。

ソジョナーが海外に行き滞在する目的は、できるだけ短期間で仕事をする事であり、目的達成後にも滞在し続けることはまれである。また滞在するコミュニティに全面的に参加する意思はなく、自分の仕事に関連する活動に従事し、自身をアウトサイダーと感じ、コミュニティ内において傍観者でいることに満足している (Siu 1952: 36)。ソジョナーは社会的ステータスを持つ者というよりもむしろ仕事をこなす個人であり、自分のエスニック集団か自分の仕事に関する社会仲間とつながりを持つ。ソジョナーの従事する仕事自体は現地において比較的目新しいものなので、現地において競争相手としては見られず、むしろ同じエスニック集団の人びとが競争相手となる (Siu 1952: 36)。

## ② 内集団志向性

ソジョナーは、内集団同士深く関わり、共通の関心を持ち、誇りや抱負、希望、夢、偏見、ジレンマ、ホスト国についての意見などを共有する (Siu 1952: 37)。ホスト国においては、マイノリティであり同国の集団内に隣人や友だちを求める。また、母国の文化的遺産を維持し、ホスト社会から孤立、凝離する傾向がある (Siu 1952: 36)。

## ③ 移動性

海外にいても自国とのつながりは決して失わず、数年ごとに自国とホスト国を行ったり来たりする。それは自己の仕事での成功を示すものでもあり、成功者は自国において称賛に値し、羨望のまなざしも受ける。

以上、ソジョナー概念をみてきたが、ウリエリは新たにソジョナーと異なるパーマネント・ソジョナー概念を提示する。ウリエリは、シカゴのイスラエル移民を事例に移民の滞在、経験をダイナミックなプロセスと捉え、帰国する意志はあるもののはっきりした帰国予定や時期を持たず、ホスト国にとどまるソジョナーをパーマネント・ソジョナーとして捉え、セトラーとソジョナーの中間に位置づける (Uriely 1994: 431) (表 2-1 参照)。表 2-1 が示すように、帰国意志と帰国の具体的予定の有無によりソジョナー、パーマネント・ソジョナー、セトラーの 3 タイプに分けられる。ソジョナーは帰国意志も明確な滞在予定期間もあり、母国に帰るという具体的な予定がある。そしてパーマネント・ソジョナーは前述のように、母国に帰るという意思はあるが、明確な滞在予定期間や帰国予定は持たない。セトラーは、ホスト国に定住し、母国に帰るという意志も帰国の具体的な予定もない。

さらにウリエリは、ソジョナーはどちらかというと“stanger”として基本的に自分の立場を楽しむが、パーマネント・ソジョナーは、母国とホスト国双方においてフルメンバーとは認識されない不安定な状況の為に不安を抱き精神的な悩みを抱えるという点では、パークのマージナルマンに近い者と捉える (Uriely 1994: 439)。

表 2-1 ソジョナー・パーマネントソジョナー・セトラーの比較

	帰国意志	帰国の具体的予定
ソジョナー	あり	あり
パーマネント・ソジョナー	あり	なし
セトラー	なし	なし

出典：Uriely 1994: 435

しかしながら、上記のウリエリの3タイプに加え、水上はさらにもう一つのタイプを提示する。つまり、帰国意志がなくてもホスト国に帰国予定があるケースに言及し、そのようなタイプをリラクタント・リターナー“Reluctant Returnee”として位置づける (Mizukami 2007: 23-4)。

また、ホスト国に定住意志があるにもかかわらず、様々な条件の為に帰国を余儀なくされたり、ホスト国に滞在の過程において、当初の予定と気持ちが変わる場合も考えられ、水上は結果的に自国に帰国したか否かで、ソジョナーとセトラーを以下の4タイプに分ける (Mizukami 2007: 27)。

- (1) ソジョナー—始めから一時的な滞在を予定し実際に帰国あるいはホスト国を出国。
- (2) 結果としてのセトラー—始めは一時的な滞在を予定していたが、結果としてホスト国に定住。
- (3) 結果としてのソジョナー—始めは定住を予定していたが、結果的に帰国あるいは出国。
- (4) セトラー—ホスト国に定住者として移動し、結果的にホスト国に定住し続ける。

ソジョナーから永住者に変化した事例としては、出稼ぎ労働者の日系アメリカ移民があり (水上 1995:133-4)、日系アメリカ人の1世の多くは、移住の初期過程においては、「アメリカに定住意志を持たない出稼ぎ労働者であったが、最終的に帰国するという考えを放棄する」に至る (Mizukami 2007: 20)。また、上記の4タイプが示すように移住を計画していた者が帰国したり、初期段階では、帰国の意思があっても、当初の予定より長期にわたって滞在するケースなど、ソジョナーと永住者の分類の難しい場合もあり、多様なセトルメント形態を指摘する (水上 1996: 83)。

多国籍企業から派遣されるエクスパトリエイトの場合は、その多くは水上の提示する4タイプによると (1) のソジョナータイプに属す。しかし、エクスパトリエイトの中には、そのまま帰国せずホスト国に滞在し、セトラーになることを希望する者も居る (Mizukami 2007: 28)。筆者の知人にも駐在員として企業から派遣されたが、数年の駐在生活を経て辞職し、現地採用の仕事を探したり、起業したケースや、駐在員の夫は帰国したが、妻はドイツでの生活が気に入り、母子で残るケースもある。このように人生

のプロセスにおいて、様々な変化がみられる。

次節では今までのソジョナー概念を踏まえた上でエクスパトリエイト概念を概観する。

#### 2.4 エクスパトリエイト及びコミュニティの特徴

ここでは、エクスパトリエイト及びエクスパトリエイト・コミュニティの特徴を見ていくにあたり、Cohen によるエクスパトリエイト概念を提示する。Cohen は、1970 年代に海外へ移動したアメリカ人エクスパトリエイト及び現地において形成されるエクスパトリエイト・コミュニティは、ホスト国における生活習慣等の違いの程度差やコミュニティの大きさの差異などにより相違はあるものの、全体からみてある共通の特徴を持つと述べる (Cohen 1977: 77)。また、そのような特徴を持つ背景要因として「一時的滞在」と「特権階級」という二つの要因をあげる。

まずは、「一時的滞在」についてみていく。前述のようにエクスパトリエイトの多くは、一時的な滞在を経て帰国する点において、セトラーではなくソジョナーの一形態として捉えられる。Cohen は、ジンメル「異邦人」を引き合いに出し、エクスパトリエイトとは「職業目的で一時的に滞在する」点で重なるが、両者には相違点もあるとして次のように述べる。

ジンメル「異邦人」が、「今日訪れ来て明日去り行く放浪者としてではなく、むしろ今日訪れて明日もとどまる者—いわば潜在的な放浪者」であるのに対して、エクスパトリエイトは、「今日来て明日去る」異邦人であり、仕事が終わるとともに立ち去る (Cohen 1977: 18)。ジンメル「異邦人」は、「移動者の性質と集団を構成する一員としての」定住者“の性質を併せ持つ” (徳田 2005: 7) が、エクスパトリエイトはホスト国にとどまったり、定住する要素はない。もちろん、前述のようにエクスパトリエイトの中には、帰国予定を持ち移動していても結果としてセトラーになる者もいるが、エクスパトリエイトの多くは一定の滞在期間を経て帰国する。その為、エクスパトリエイトは、ホスト社会の規範や制度に適応しようとする動機さらには機会も少なく、ホスト国に適応することを強要されることもなく同胞のエスニック集団との関わり合いを深め、アンクレーブ化する傾向がある (Cohen 1977)。

2 番目の要因とされる「特権階級」もアンクレーブ化したコミュニティの形成を助長する。エクスパトリエイトは、他の移民やマイノリティグループと比べて、特権を持ち、自分たちの希望やニーズに合わせて生活環境を変えることもでき、見知らぬ新たな土地に自国と同じような環境空間“environmental bubble”、アンクレーブ“enclave”を形成する (Cohen 1977: 77)。これは、コミュニケーションや輸送手段の発達により、以前に比べ、文化的にも社会的にも自国とつながることが容易になり、ホスト国に対して精神的にも物質的にも頼らなくても生活できることも背景にある (Cohen 1977: 9)。アンクレーブ化したエクスパトリエイト・コミュニティは、ホスト国から乖離して存在し、コミュニティの構成メンバーを不慣れなホスト国の環境から守ったり、ホスト国における異質性を軽減したり、メンバーの個人的、社会文化的ニーズに合うように様々な機関やスポン

サー的機構が存在する (Cohen 1977: 33)。その例として領事館、医療、法律関係サービス、social club や自国と同質なカリキュラムを持つ学校、銀行、旅行会社、自国スタイルのショッピングセンター、レストラン、映画館、レクリエーション施設などがある (Cohen 1977: 44-5)。Cohen は、このようなコミュニティに暮らすエクスパトリエイトをホスト社会に対して自らが排他的 (exclusive) であるとし、移民 (immigrant) が強制的に排除 (excluded) されるケースと区別して捉える (Cohen 1977)。

さらに Cohen は、「一時的滞在」「特権階級」という二つの要因に大きく影響を受け形成されたアンクレーブ化したコミュニティにおける負の側面について述べる。コミュニティは、実際には、忠実に自国を再現したものではなく、多くの点で異なり、誇張されたり屈曲されたりしている。また、エクスパトリエイトは自国の政府や機関、自身の会社を代表する者であり、責任を負ったり、言動やライフスタイル、仕事上のみでなく、プライベートに交わる仲間の選択などにも責任や抑制が生じやすい (Cohen 1977: 77)。

コミュニティ内部ではメンバーが来ては去り、常に構成メンバーが交替するので、コミュニティ全体において深い結束や強い連帯を発展させることは難しく、コミュニティの環境空間“environmental bubble”は、コミュニティのメンバー間の信頼や絆を生み出すことに失敗し、「あたたかな繭」“warm cocoon”というよりむしろ「からの貝殻」“hollow shell”ともいえる (Cohen 1977: 60)。エクスパトリエイト・コミュニティ内では同国のエスニック集団同士の親密な関係も構築しにくく、相互関係は表面的なものになりやすい (Cohen 1977)。このように、エクスパトリエイト・コミュニティ自体は、高い結束力に欠ける為、メンバー同士、特に友人同士のサークルや家族が中心的な支えになる (Cohen 1977: 47)。しかし、同胞同士の密接な環境は、エクスパトリエイト同士の軋轢や摩擦を生み出すこともある。場合によってはエクスパトリエイト間の階級差により、日常生活において階級闘争が起こったり、エクスパトリエイトの為のクラブなどにもエクスパトリエイトの職業や地位によっては、あるエクスパトリエイトは、入会できないことも生じる (Cohen 1977: 44-8)。また、Cohen は、エクスパトリエイトをビジネス目的の駐在員以外に宣教師や研究者、長期旅行者などのサブコミュニティから成ると捉えるが、同じサブコミュニティ内同士の強い結束と他のサブコミュニティとの乖離について言及する。一例として宣教師は、宣教師同士で固まり、銀行マンや大企業のビジネスマンなどはまた別のグループを形成し、政府関係者は大使館や領事館関係の社会システムの中で生活する。このように同じサブコミュニティ内ではかなり結束しているが、他のサブコミュニティとの連帯や理解の欠如がそれぞれのサブコミュニティ間の乖離を生み出し、無関心さや断絶があると述べる (Cohen 1977:51)。

ホスト国との関係においては、エクスパトリエイトはホスト国において相対的に高い社会的地位におり、ホスト国内の支配階級とつながりを持ち (Cohen 1977: 20)、逆にエクスパトリエイトが保持するエリート諸機関に対してホスト社会のアクセスを許容しない場合もある。また、ホスト社会は、エクスパトリエイトを称賛し、彼らを見習いたいという気持ちを持つと同時に、エクスパトリエイトの優越性や排他性に対して憤慨するという構図もある。しかし、エクスパトリエイトは一定期間の滞在の為、ホスト国の

ラディカルな層から敵意を抱かれるケースは少ない (Cohen 1977: 70)。一方、エクスパトリエイト・コミュニティ自体はホスト国に永続的に存続する為、ホスト国の若年エリート層などから、彼らの社会経済的昇進の機会を妨げるものとして、反感を持たれる場合もある (Cohen 1977: 73)。

さらに Cohen は、エクスパトリエイト・コミュニティ内における夫と妻のポジションについて言及する。エクスパトリエイト・コミュニティ内は男性中心で、海外に家族がいるのは夫の仕事の為であり、夫の仕事仲間や同僚、及びそのサブコミュニティにおいて、妻は社会的関係や友だち関係を結ぶことになる。そして、エクスパトリエイト・コミュニティ内では密な関係が生じる為、自分の交流仲間を選択したり、気の合わない人を避けることは難しく、妻は夫より深刻な適応問題に直面する (Cohen 1977: 58)。また、狭い社会に暮らす妻たちの言動は夫の成功にも影響し、他のエクスパトリエイトの妻たちとうまくやっていくことが大切になる (Cohen 1977: 47)。さらに夫は自国でもホスト国においても継続する仕事があり、異国でのショックは緩和されるが、妻は家族の生活を新たな環境に順応させ、新たな友だち関係を構築し、家族の健康や子どもの学校のことを心配しなければならない。特に仕事をしていた女性は、夫の海外赴任にあたり、辞職を余儀なくされ、適応が一番難しいとされる。もちろん仕事をしていなかった女性も今までとは違う家庭環境に戸惑い、生活をむなしく意味のないものと感じる場合もある (Cohen 1977: 59)。

以上、Cohen のエクスパトリエイト概念を提示したが、そこから以下の6つの問いが浮かびあがる。(1) アンクレーブ化したエクスパトリエイト・コミュニティの閉鎖性、(2) エクスパトリエイト・コミュニティ内の結束と連帯、(3) エクスパトリエイト同士の軋轢や摩擦、(4) 同じエスニック集団の他サブコミュニティとの乖離、(5) 妻の社会関係と夫の仕事の関係、(6) 深刻な適応—妻として・母として。これらの問いについて個々に見ていく。

#### (1) アンクレーブ化したエクスパトリエイト・コミュニティの閉鎖性

Cohen は、エクスパトリエイト・コミュニティは「アンクレーブ化」し、ホスト社会に対して「閉鎖的で排他的である」と述べるが、どのように閉鎖的であるのかが明示されていない。エクスパトリエイトは、「特権階級」ゆえ、ホスト国の支配階級とつながりを持つ (Cohen 1977:20) 点があげられているが、これは主に仕事を介したつながりと捉えられ、エクスパトリエイトの個人的なつながりについては述べられていない。また、Cohen のエクスパトリエイト概念は、目的を持ち、海外に移動したエクスパトリエイトを念頭にしており、海外駐在員である夫に帯同した配偶者がどのようにホスト国とつながっているのかが見えてこない。駐在員配偶者は、家事・育児も含めた日常生活実践において、ホスト社会から乖離して生活することは難しいと考えるが、どのように現地コミュニティや人びととつながっているのであろうか。

また、自国と同じような生活インフラが整うことで、ホスト社会に頼らなくても生活でき、コミュニティが閉鎖的で排他的になるというのは、理論的には理解できるが、そ

れが可能だとしても個々の人びとがホスト社会から孤立して生活しているのかどうかは、疑問である。さらに Cohen は、エクスパトリエイト・コミュニティは自国を再現しているものの「ゆがめられ、屈曲している」と述べるが、この点についても詳しく述べられていない。エクスパトリエイト・コミュニティの特性を見ていくにあたり、駐在員配偶者個々人が、生活インフラの整ったコミュニティの中でどのように感じ、どのように暮らしているのかに留意することが不可欠である。

## (2) エクスパトリエイト・コミュニティ内の結束と連帯

Cohen は、コミュニティ内では、メンバーが入れ替わる為、コミュニティ全体における深い結束や強い連帯を持つことが難しく、その為、友人同士や家族、同じグループが中心的支えとなると述べるが、結束の在り方については具体的に述べられていない。

本論文の焦点となる海外駐在員配偶者は、近くに頼れる親族や親しい友だちもいない状況の中で、新しい生活を夫と子どもとともにスタートさせる。また、駐在員は一時的滞在の為、仲良くなった友だちも帰国し、友だちとの別れに直面したり、新しい友だちとの出会いもある。そのような状況の中で、駐在員配偶者は、友人、家族、同じエスニック集団とどのように結束し、連帯しているのだろうか。

駐在員配偶者の結束の在り方に留意することにより、エクスパトリエイト・コミュニティの紐帯の在り方も見えてくると考える。

## (3) エクスパトリエイト同士の軋轢や摩擦

Cohen によれば、エクスパトリエイト同士の密な関係は、「軋轢」や「摩擦」を生み出す。親密すぎる人間関係はエクスパトリエイトだからということではなく、どんな場合でも「摩擦」を生じさせる可能性はある。これは (2) の結束の在り方にも関係するが、駐在員配偶者同士ゆえに起こる特有の摩擦はあるのであろうか。また、エクスパトリエイト・コミュニティにおいて社会的規範や抑制があるのであろうか。女性たちの日常生活実践から、生活におけるルールや規制も含め、駐在員配偶者同士のつながり方を検討する。

## (4) 同じエスニック集団の他サブコミュニティとの乖離

Cohen は同じエスニック集団においてビジネスマン、政府関係者、宣教師などのサブコミュニティ同士それぞれが固まり、サブコミュニティ相互の接点の少なさに触れているが、どのように乖離しているのかに言及していない。駐在員配偶者は、日常生活において駐在員配偶者のみでなく現地永住日本人や現地で長く仕事に携わる同エスニック集団などとの接点を持つことも考えられる。駐在員配偶者以外の同エスニック集団との関係性をみることにより、エクスパトリエイト・コミュニティの特徴も浮き彫りになる。

## (5) 妻の社会関係と夫の仕事の関係

Cohen は、エクスパトリエイト・コミュニティにおける妻の言動は、夫の成功にも影

響すると述べる。妻は、常に夫の会社や立場を意識しながら生活することになるが、妻の社会関係は、夫の会社や社内での立場を反映しているのであろうか。そうであれば夫の仕事上の立場を考慮し、妻としての言動に制約や規制があるのであろうか。また、Cohen は、エクスパトリエイトは「特権性」を保持しながらも、エクスパトリエイト間に階級差もあり、エクスパトリエイト同士における階級闘争に言及する。妻たちも夫の会社により、他の駐在員配偶者たちとの階級差を感じているのであろうか。

また、ここ数年でデュッセルドルフでは駐在員に若年化傾向があり、若い層の駐在員配偶者において夫の会社への意識の変容もみられる。さらに、「フラウ会」<sup>7</sup>もあまり催されなくなったとも聞く。夫の社内の立場による影響を受ける妻の社会関係は、時代とともに変容しているのか、あるいはいまだに根強く残っているのかもみていきたい。

#### (6) 深刻な適応—妻として・母として

駐在員配偶者は、自国で仕事を持っていた場合は、仕事をやめて海外に移動する。Cohen は、そのような女性が一番ホスト国において適応が難しいと述べ、仕事をしていなかった女性も異なる環境で、生活をむなしく意味のないものとして感じる場合があると述べる。しかし、Cohen は、駐在員配偶者がどのような気持ちで夫に帯同したかに全く触れていない。女性によってはやめることを余儀なくされたというより、自分の人生の転機と思い、退職することをむしろ前向きに考えたり、子どもにとり、とても良い機会と捉えたりする場合もある。妻たちがどのような気持ちで夫に帯同したかにより、ホスト国での生活意識や適応の度合いも異なると考える。また、「深刻な適応」というのは、異国で生活スタートさせたり、新しい環境に慣れることの難しさもあるが、今まで育児と仕事に追われ、時間をやりくりしながら頑張ってきた女性たちが、海外に移動後、仕事をもたないことにより、育児や家事と向きあわざるを得なくなる状況に陥ることや、海外駐在生活を帰国後や将来の自分の人生にどのようにつなげていけばいいのかという疑問や不安にも大きく関わっていると察する。

駐在員配偶者たちが、自国とは異なる新たな状況の中で、妻・母としての役割とどのように向き合い、夫や子どもと関係性を結んでいるのか、丁寧に見ていくことが大切である。

Cohen による知見から得た 6 つの点を踏まえながら、第 4 章では海外駐在員配偶者たちの日常生活実践を検討し、第 5 章においては、6 つの問いに対しての考察を試みるが、まずは次節にて日本人エクスパトリエイト及びそのコミュニティに関する今までの研究を概観する。

---

<sup>7</sup> 会社によっても異なるが、通常、駐在先において社内に数人以上の駐在員配偶者が居る場合は、女性たちの集まりが年に数回催される。通常ランチ会であり、上司から部下までの配偶者が参加することが前提となる。また、新しく来た駐在員や帰国予定者に対して、歓迎会や送迎会も兼ねて「フラウ会」が行われることもある。



## 2.5 日本人エクスパトリエイト及びエクスパトリエイト・コミュニティ

日本企業の海外進出は、1970年以降に著しく増加し（藤田他 2009: 57）、海外における日本人エクスパトリエイトも1970年代に急増した（Cohen 1977: 11）。2017年時点の在留邦人数<sup>8</sup>は、135万1,970人でそのうち64%（86万7,820人）が長期滞在者で、さらに長期滞在者の約53%（46万3,700人）が民間企業関係者、いわゆるエクスパトリエイトに相当する。日本人エクスパトリエイトに関しては、ロンドン（ホワイト 2003）、デュッセルドルフ（グレーベ 2003）、ロスアンジェルス（町村 1999: 2003）、シンガポール（ベン-アリ 2003）などの都市におけるエクスパトリエイト研究がある。ここでは今までの先行研究から日本人エクスパトリエイト及びエクスパトリエイト・コミュニティの特徴を整理する。

まず、1990年代初頭のロスアンジェルスの日本人駐在員に着眼した町村の研究を概観する。1980年代に「貿易摩擦と急速な円高の進行」により、日本企業の海外進出が激増し、1990年初頭のバブル期には進出企業はピークを迎えた。町村は当時のエクスパトリエイトの特徴を3点あげる（町村 1999: 215-7）。

1点目として企業駐在員は、「つねに国家や企業を背中に負った越境者」であり、命令によって滞在し、去っていく点から、移動の決断においては、「自分の意志が事実上存在しない」。家族にとっても、海外移住は突然の出来事である。2点目は、企業派遣者は、「短期滞在型の越境者」で2年から5年程度で帰国し、海外勤務中、日本と海外を周期的に往復することが多い。3点目として業種や企業によって経済面において駐在員の間にも「大きな格差」もあるものの、一般的に「経済的に恵まれた越境者」であり、現地社会の中流よりも上の生活を享受できる。

北林も2000年初頭のデュッセルドルフの日本人駐在員に焦点をあわせ、特徴として、移動に自主性がなく平均3.5年という短期滞在である点、社会的地位が保障され、経済的地位も保障されている点をあげている（北林 2006: 30-1）。また、グレーベも2000年初め頃のデュッセルドルフに在住する日本人エクスパトリエイトの「社会経済的な地位の高さ」（グレーベ 2003: 167）を指摘している。さらにこのように数年という日本人エクスパトリエイトの短期滞在理由に関しては、日本企業の経営において、企業が強い組織支配を持ち、企業派遣者が忠誠心を持って仕事することを期待され、会社の持つヴィジョンを持ち続ける為であるとされる（Goodman 他 2003: 9）。一方、エクスパトリエイトである夫に帯同した妻は夫を助け、子育てに専念するという構図がある。ベン-アリは、1990年代のシンガポールにおける「均質な日本人コミュニティ」を提示し、「キャリア形成の半ばにある既婚男性従業員とその家族」が中心に構成されていると述べる（ベン-アリ 2003: 188）。

上記のような特徴を持つエクスパトリエイトは、エクスパトリエイト中心のコミュニティを形成する。日本からの企業派遣者が多く住む海外の都市には、「日本企業を中心

---

<sup>8</sup> 外務省領事局政策課 海外在留邦人数調査統計 2017年10月1日データ  
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000368753.pdf> 2018年8月15日閲覧。

に、不動産業、小売業、サービス産業、学校・幼稚園、クラブなどのワンセットの生活基盤支持システムが出来上がり、その上に『日本人コミュニティ』が作られている」(岩崎 2003: 4)。コミュニティは、アンクレーブ (enclave) 化し、日本人コミュニティは、アメリカ人やヨーロッパ人のコミュニティに比べ、さらに構成メンバーのつながり密度が濃い傾向であることが指摘されている (Cohen 1977: 28 ; Goodman・Peach・Takenaka・White 2003: 9)。前述のようにコミュニティ内ではエクスパトリエイトとその家族のニーズに応じて子どもの教育や家族向けサービスを供給する機関が生まれ、日本人向け機関設立においても財政的なサポート、さらにはエクスパトリエイト向けの住宅のサポートなどもある (Goodman, Peach, Takenaka ほか 2003: 9)。顕著な邦人向け設立機関として校長のいる全日制日本人学校及び土曜日本語補習校があり、教師は文部科学省から派遣される。学校は、生徒たちが帰国後も日本の学校制度にできるだけ困難さを伴わず順応できるようにデザインされ、カリキュラムや教科書も含め、日本の学校を手本としている。その他の機関として、日本人向けクラブや協会、日本商工会議所があり、これは人口が多いエクスパトリエイト・コミュニティでは皆同様である (Befu 2001: 11)。

このように日本人企業駐在員は、異国に「日本的な暮らしのスタイルやリズム」をできるだけ再現しつつ、新たな環境に適応していこうとし、そこに「新しい特質を持った世界」を作り上げる (町村 1999: 216)。グレーベも、デュッセルドルフ日本人社会に言及し、同様にそこには「日本社会と文化の、ある種のレプリカ」が形成されているとしている (グレーベ 2003: 160)。岩崎・油井は日本人コミュニティに「日本独自の閉鎖的な内輪のコミュニティ生活を快適とする社会文化的コンテクスト」をみる (岩崎・油井 2003: 460)。山田はグローバルはむしろ国際政治や地域社会において、日本という属性カテゴリーに基づくコミュニティやアイデンティティを際立たせてしまうと述べている (山田 2013: 213-4)。

また、エクスパトリエイト・コミュニティの特徴として、コミュニティの継続性がある。コミュニティ構成メンバーは移動し、数年単位で入れ替わっても、生活インフラは継続し (Machimura 2003)、移動先でのコミュニティの外郭は継続する (水上 2018a: 257)。

今まで日本人エクスパトリエイトとエクスパトリエイト・コミュニティの特徴を見てきたが、次に日本人エクスパトリエイトのホスト社会との関係や他の同エスニック集団との関係性を概観する。

ホスト社会に対しては、エクスパトリエイトは、海外へのビジネスの発展とともにホスト・ビジネス社会においても深く関わっている (水上 1997: 213) が、いくつかの問題点も提示される。海外における西洋多国籍企業がローカルの従業員をさらに責任のあるポストに配属するのに対し、日本企業はトップの管理層や専門部署に日本人を配属させている為、ホスト社会から反感をかう危険性がある (Cohen 1977: 76)。また、日本の多国籍企業が主要な決定の際には、社内のローカルスタッフメンバーを外して東京の本社とだけで取り決めを執行したり、ローカル雇用面においても偏見がみられ、給料・昇進などにおいてもローカルスタッフに対して差別もある。このような状況下においてはエクスパトリエイトとローカルの間の衝突も生じることも否めない (Befu 2001: 11)。

それでは、エクスパトリエイトと同エスニック集団との関係はどうであろうか。町村は、ロスアンジェルス日本人社会を事例に、昔からの日本からの移民と新しく来た企業移民でもあるエクスパトリエイトの間には、結束感がなく（Machimura 2003）、企業駐在員と定住化する日本人（現地採用社員や企業家など）の間には、一種の「身分差別」が存在することを指摘する（町村 2003:181）。また、Befu も海外の日本人社会の複雑な関係性について言及する。Befu は同エスニック集団構成メンバーを（1）ビジネスエクスパトリエイトとその家族、（2）永住移民（3）地元の観光産業などに従事する日本人オーナー、ホテル、レストランマネージャー（4）日系アメリカ人などの移民に分けているが、4つのサブコミュニティ間には隔たりや断絶があると述べる（Befu 2001: 12）。

今までエクスパトリエイト及びコミュニティの特徴を概観してきたが、グローバル化やトランスナショナルな動きの中で、エクスパトリエイトそしてコミュニティも多様化の様相を見せている。前述のように駐在員は自国とホスト国を頻繁に行き来する「頻繁な移動者」でもあるが（水上 2018a: 244）、ロンドンやロスアンジェルスでは企業派遣者の中には会社をやめて、独立する者も増えている（岩崎・油井 2003:460）。また、駐在員として海外に滞在しても数年後にホスト社会で永住権を取得するケースもある。さらに、以前から言われてきた駐在員の特権性においても前述のように駐在員間で業種や企業によって経済面において格差もみられ（Befu 2001: 8 ; 町村 1999: 216-7）、エクスパトリエイトとしての特権性にも揺らぎがみられる。

本章では、Cohen によるエクスパトリエイト及びコミュニティの特徴、日本人エクスパトリエイト及びエクスパトリエイト・コミュニティの特徴を見てきたが、次章では事例の一つとしてデュッセルドルフの日本人エクスパトリエイト・コミュニティの特徴と現状、変容を捉えていく。

### 第3章 デュッセルドルフの日本人エクスパトリエイト・コミュニティの特徴と変容

第3章では、ドイツ・デュッセルドルフの日本人エクスパトリエイト・コミュニティの特徴と変容を捉えることを目的とする。まずは、デュッセルドルフの邦人数及び人口構成も含めた長期滞在者の特徴、日本人居住地区、戦後からの日本経済の発展・経済のグローバル化にともなう日本人コミュニティ形成の変遷、教育機関を含めた日本人関連組織というマクロな視点からみていく。次に、日本人関連団体機関などからの聞き取り調査も踏まえミクロな視点からコミュニティの現状と近年の変容を捉え、駐在員女性配偶者の生活意識面の多様性へとつなげていく。

#### 3.1 ドイツ・デュッセルドルフと在留日本人

本論文ではドイツのデュッセルドルフに焦点を当てるが、背景となるデュッセルドルフを州都とするノルトライン・ヴェストファーレン州（以下、NRW州とする）を最初に概観する。

ドイツは連邦国家で16の連邦州（旧西独10州、旧東独5州及びベルリン州で1990年10月3日に東西両独統一された）から成り、世界有数の貿易大国である。GDPは3兆267億ユーロで規模においては欧州内第1位で、日本にとり欧州最大の貿易相手国である。ドイツの総人口は8,274万人（2017年9月）<sup>9</sup>で、在留邦人数は45,784人<sup>10</sup>である。16州の一つであるNRW州は、人口1,764万、GDPは6,456億ユーロでドイツ国内総生産の4分の1を占め、人口、GDPともに16州の中で1位である（大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館 2016）。また、NRW州内の在留邦人数は、14,885人<sup>11</sup>でドイツ国内邦人数の約32%を占め、国内で最も邦人が多い州である。

NRW州は、経済力でも上位に位置し、約45万社の中小企業のほかに、多くの大企業が当州に拠点を持つ。以前は、ルール地方を中心に石炭と鉄鋼業が主であったが、近年では、科学産業、ハイテク産業、サービス業が盛んになってきている<sup>12</sup>。さらに、地理的に欧州の中心に位置しているという優位性もあり、外資企業誘致もおこない、戦後の重工業から脱却し、研究・サービス・先端技術への構造転換を目指している（北林 2006）。

先述のようにデュッセルドルフは、NRW州の州都であるが、当市の人口は、639,407

---

<sup>9</sup> 外務省 ドイツ連邦共和国

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/germany/data.html#01> 2018年8月15日閲覧。

<sup>10</sup> 外務省領事局政策課 海外在留邦人数調査統計 2017年10月1日データ

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000368753.pdf> 2018年8月15日閲覧。

<sup>11</sup> 同上

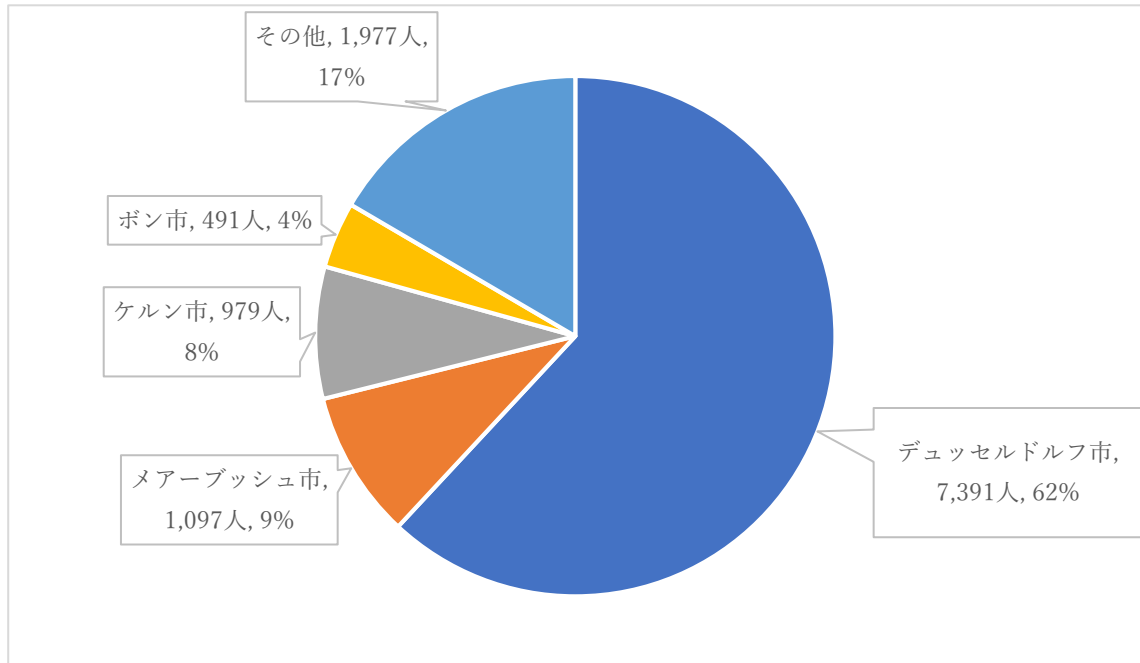
<sup>12</sup> ドイツ連邦共和国大使館・総領事館 <https://japan.diplo.de/ja->

[ja-themen/willkommen/nordrhein-westfalen/921450](https://japan.diplo.de/ja-themen/willkommen/nordrhein-westfalen/921450)

2018年8月15日閲覧。

人<sup>13</sup>でドイツ国内で7番目<sup>14</sup>に人口が多い。また、邦人数は、7,391人（2016年10月1日）で州内の他の24の市町村に比べ圧倒的に邦人数が多いこと<sup>15</sup>が、図3-1から読み取れる。

図3-1 NRW州在留邦人数



出典：外務省領事局政策課（2016年10月1日）

### 3.2 NRW州及びデュッセルドルフの日本人長期滞在者の特徴

ここでは、デュッセルドルフ市の在留邦人数の推移、長期滞在者及び民間企業関係者の推移のデータから、デュッセルドルフの日本人長期滞在者の特徴を捉えていく。

#### 3.2.1 邦人数及び人口構成

デュッセルドルフ市の人口を2005年10月から2017年10月までみると2017年には6,000人を割ったものの、2005年以降7,000から8,000人ほどで安定していることが分かる（図3-2参照）。

<sup>13</sup> Landeshauptstadt Duesseldorf 2017年12月31日データ

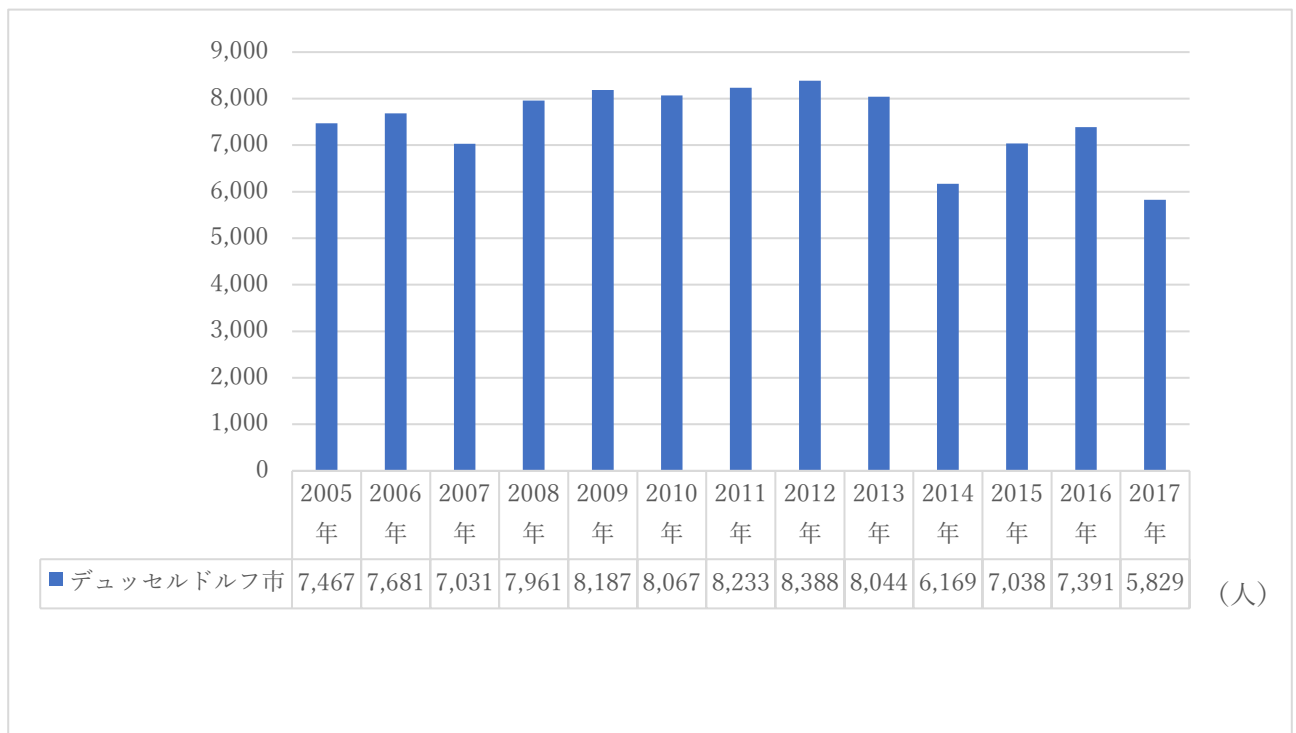
[https://www.duesseldorf.de/fileadmin/Amt12/statistik/stadtforschung/download/stadtbezirke/Duesseldorf\\_kompakt.pdf](https://www.duesseldorf.de/fileadmin/Amt12/statistik/stadtforschung/download/stadtbezirke/Duesseldorf_kompakt.pdf) 2018年8月5日閲覧。

<sup>14</sup> ベルリン（347万人）、ハンブルク（176万人）、ミュンヘン（143万人）、ケルン105万人）、フランクフルト（72万人）、シュトゥットガルト（61万人）でデュッセルドルフは7番目に人口が多い（大阪・神戸ドイツ連邦共和国領事館 2016年7月）

<sup>15</sup> 外務省領事局政策課 海外在留邦人数調査統計 2016年10月1日データ

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000293757.pdf> 2018年8月10日閲覧。

図 3-2 デュッセルドルフ市の在留邦人数推移 (2005 年～2017 年)



出典：外務省領事局政策課

注：2017年のデュッセルドルフ市のデータは、Landeshauptstadt Duesseldorf<sup>16</sup>閲覧

次に、デュッセルドルフ市在留邦人の永住者と長期滞在者並びに民間企業関係者の推移を見ていくが、当市独自の永住者数と長期滞在者数のデータは得られず、NRW州全体における情報のみしか把握できない。しかし、図 3-1 が示すようにデュッセルドルフ市が州内の他の 24 の市町村と比べ邦人数がかなり多いことから、ここでは NRW 州全体の在留邦人数、永住者数、長期滞在者数<sup>17</sup>、民間企業関係者数のデータをみていくことにする。なお、長期滞在者には、民間企業関係者、自由業関係者、留学生・研究者・教師、政府関係職員、その他が含まれる。

2005 年から 2017 年までの NRW 州在留邦人数を表した図 3-3 は、2005 年以降 NRW 州の在留邦人数が 10,000 人を超え、特に 2015 年以降は増え続け、2016 年と 2017 年には 14,000 人を超えていることを示している。また図 3-3 から、すべての年において、永

<sup>16</sup> Landeshauptstadt Duesseldorf

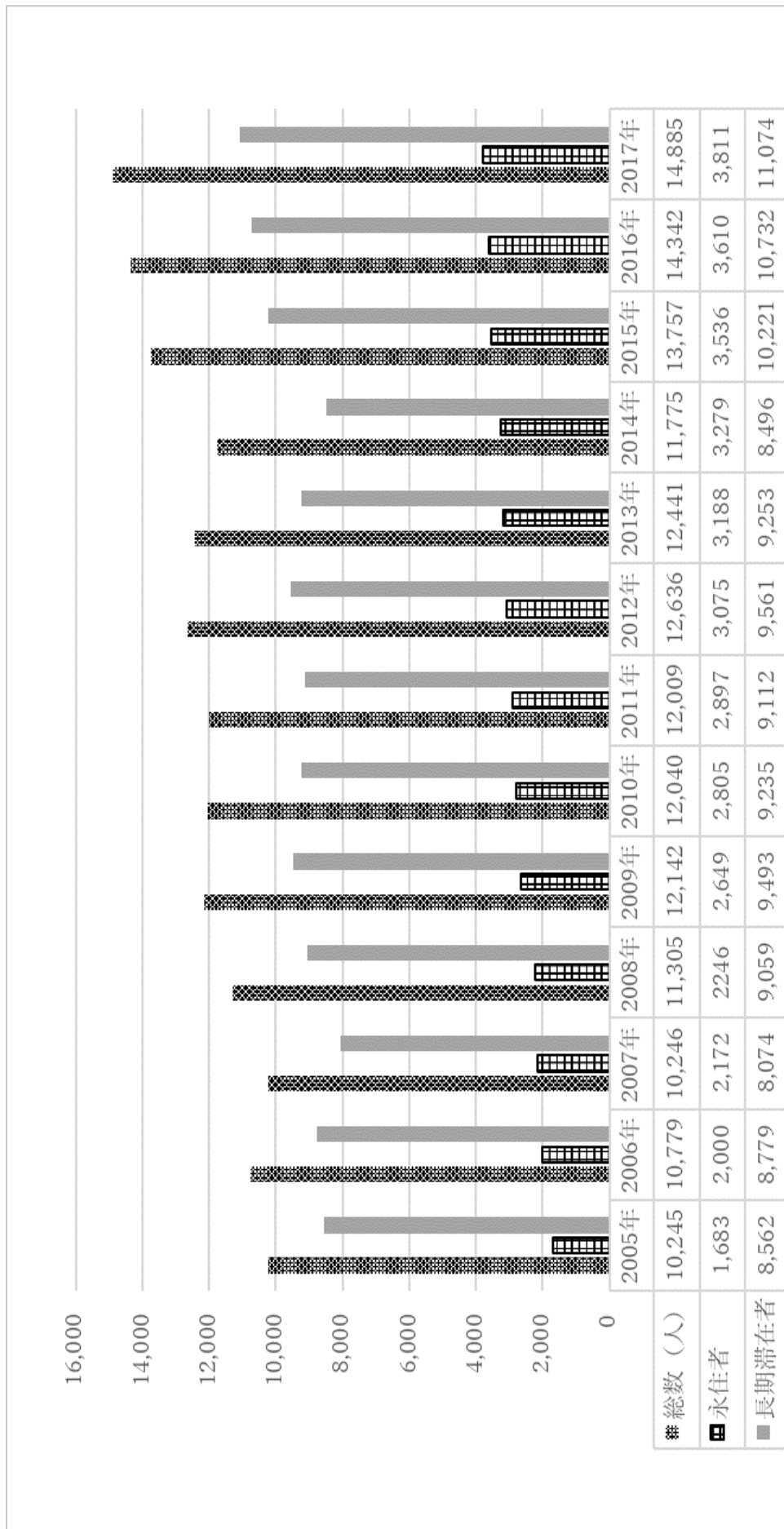
<https://www.duesseldorf.de/fileadmin/Amt12/statistik/stadtforschung/download/stadtbezirke/Stadtbezirk04.pdf> 2018 年 8 月 15 日閲覧。

<sup>17</sup> 在留邦人とは、海外に 3 か月以上在留している日本国籍を有する者で、永住者は、在留国等より永住権を認められていて、生活の本拠を日本から海外へ移した邦人を指し、長期滞在者は、3 か月以上の海外在留者のうち、海外での生活は一時的なもので、いずれ日本に戻るつもりの方を指す。

住者に比べ長期滞在の方が圧倒的に多いことが分かり、図 3-4 からは、長期滞在者のうち民間企業関係者の占める割合が、2005 年の 74%から 2017 年には 63%に減少しているものの平均して 60%以上であることが読み取れる。

ここで、2017 年の NRW 州邦人数のデータを例にとると NRW 州の日本人総数は、14,885 人でそのうち、約 74%が長期滞在者（11,074 人）である（図 3-3 参照）。そして長期滞在者の職業をみると、その 63%が、民間企業派遣者である（図 3-4・表 3-1 参照）。このことから、NRW 州の州都であり邦人数が一番多いデュッセルドルフ市には、永住せずに一時的に在留する日本人駐在員が多く存在することが分かる。

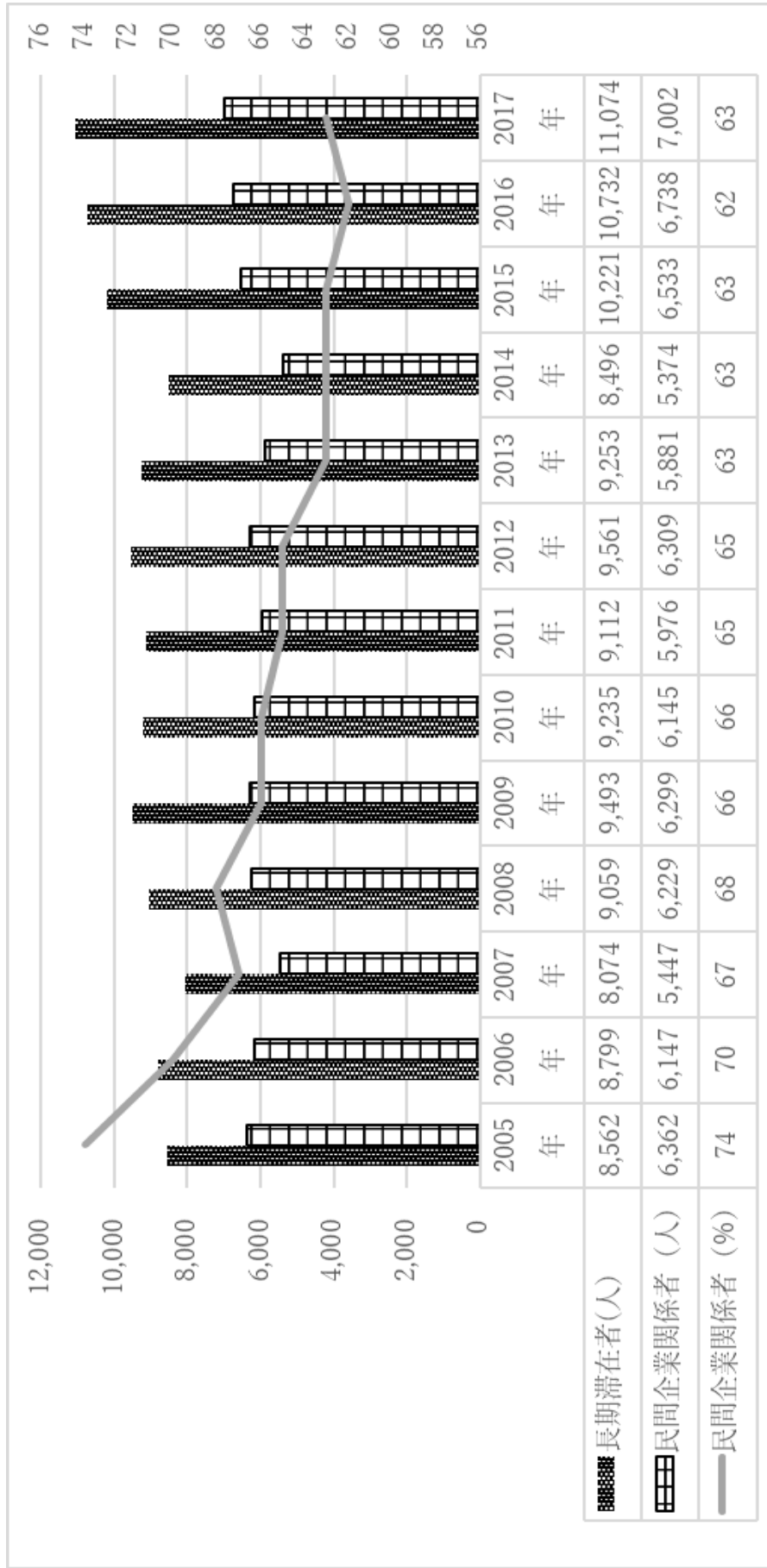
図 3-3 NRW 州在留邦人総数・永住者・長期滞在者数の推移 (2005 年～2017 年)



出典：外務省領事局政策課



図 3-4 NRW 州在留邦人長期滞在者のうち民間企業関係者の占める割合 (2005-2017 年)



出典：外務省総領事局政策課

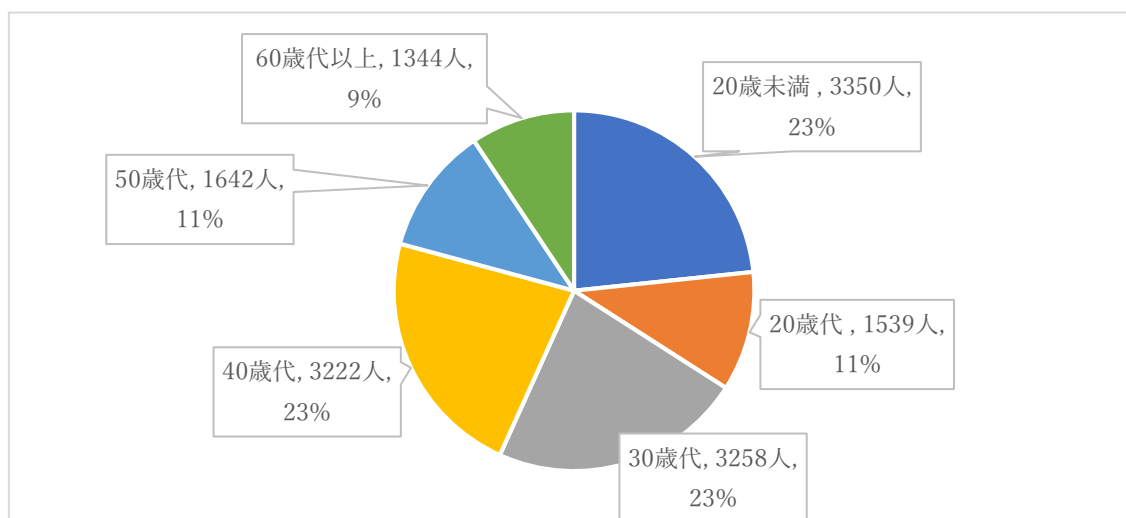
表 3-1 2017 年 NRW 州の日本人長期滞在者の職業

属性別機関	民間企業 関係者	報道関係者	自由業 関係者	留学生・ 研究者・教師	政府 関係職員	その他
人口及び パーセンテージ	7,002 人 (約 63%)	14 人 (0.1%)	997 人 (9%)	1,720 人 (16%)	232 人 (2%)	1,109 人 (10%)

出典：外務省領事局政策課 2017 年 10 月 1 日

次に NRW 州の在留邦人の年齢構成を示した図 3-5 に目を向けると、20 歳未満の人口が 23% で約 4 分の一を占め、60 歳代以上が 9% で他の年齢層の人口より少ない。北林はデュッセルドルフ市の日本人の年齢構成を市在住の他の外国人の年齢構成と比較して、他の外国人の年齢構成が 18 歳以下と 60 歳以上の人口が拮抗しているのに対して、日本人の場合は 18 歳以下が多く、60 歳以上の人口が少ないことに注目し、本市には、日本人民間企業者の多くが学童期の子どもを含む家族での移動を行う傾向がある点を指摘している（北林 2006: 31）。

図 3-5 2016 年 NRW 州在留邦人年齢構成



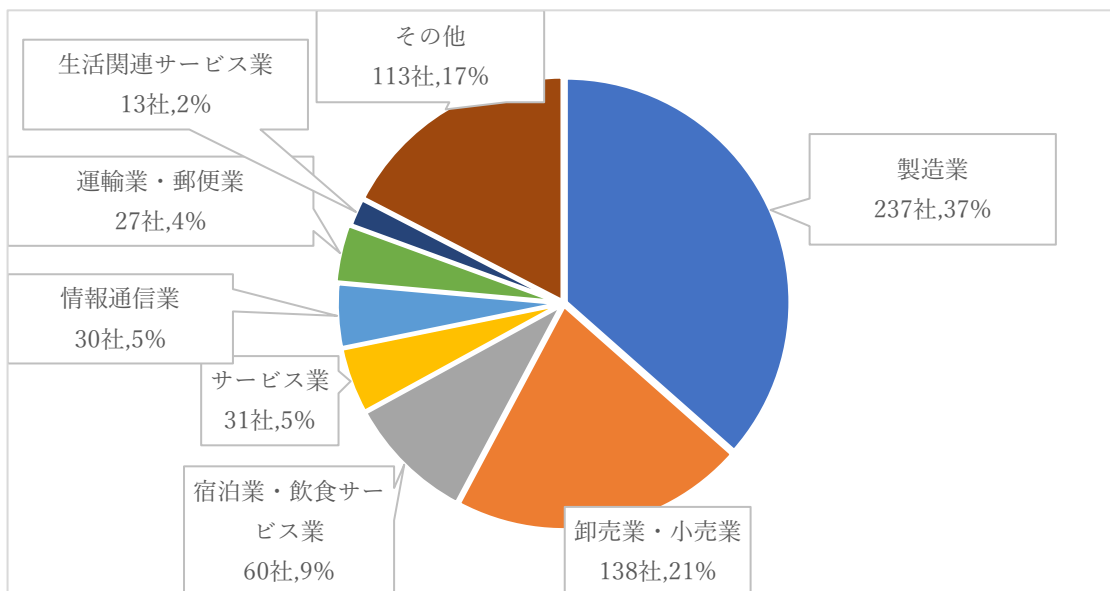
出典：外務省領事局政策課 2016 年 10 月 1 日データ<sup>18</sup>

<sup>18</sup> 外務省領事局政策課「海外在留邦人数調査統計」2016 年 10 月 1 日データ  
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000293757.pdf> 2018 年 8 月 10 日閲覧。

### 3.2.2 デュッセルドルフ日本人滞在者

次に NRW 州の民間企業派遣者の業種内訳を見ていく。州内には 622 の日系企業があり、その業種内訳は、図 3-6 をみると製造業関連が最も多い<sup>19</sup>。

図 3-6 2017 年 NRW 州日系企業業種別内訳



出典：外務省領事局政策課 2017 年 10 月 1 日データ

デュッセルドルフ日本商工会議所には、デュッセルドルフ市を中心とした NRW 州にある日系企業（現地法人、駐在員事務所）のほとんどが入会しているが、デュッセルドルフ地区において 538 ある会員のうち約 6 割近くの 296 社（2018 年 4 月）<sup>20</sup>が製造業関連である。

前述のように長期滞在者には、民間企業派遣者以外に、報道関係者、自由業関係者、留学生・研究者・教師、政府関係職員なども含まれるが、グレーベは、多国籍企業とその従業員たちが日本人社会の核を形成し、その他に彼らにサービスを提供する日本人、ドイツ人を配偶者とする日本人、学生等様々なグループが重層的に交錯している点をあげている（グレーベ 2003: 161）。そして、デュッセルドルフの日本人コミュニティは、企業派遣者のみの「同質的なものではなく、複雑なコミュニティ内の関係の中で相互に結びついた、多くの下位集団、さまざまな流動的グループによって構成されている」こ

<sup>19</sup> 外務省領事局政策課「海外在留邦人数調査統計」 2017 年 10 月 1 日データ  
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000368753.pdf> 2018 年 8 月 15 日閲覧。

<sup>20</sup> デュッセルドルフ日本商工会議所  
<https://www.jihk.de/ja/page/180> 2018 年 8 月 15 日閲覧。

とに言及する（グレーベ 2003: 161）。

北林も同市には、企業派遣者以外の日本人（政府派遣者やその家族、日本人向けビジネス従業員、ドイツ人の配偶者、学生など）も在住し、当市には日本人を対象としたビジネスを営利目的（日本食レストラン、日本食料品店<sup>21</sup>、美容院、本屋、開業医、語学学校、旅行代理店、不動産、塾、引っ越しサービスなど）と非営利目的の団体・施設（日本クラブ、日本人学校、日本語補習校、日本人幼稚園など）があると述べている。しかしながら、これらの非企業派遣者は、企業派遣者なしには存在せず、日本社会の中核は企業派遣者であることは否定できない（北林 2006; グレーベ: 161）。

デュッセルドルフには、日本人企業派遣者が多く暮らすが、次に日本人居住地区に注目する。

### 3.2.3 日本人居住地区

デュッセルドルフ市は、表 3-2 が示すように 10 の地区に分かれ、それぞれの地区が特徴を持つ。日本人の居住地区に関してはグレーベが 1976 年と 1999 年を比較した分析があり、それによると 1999 年は 1976 年に比べると北部に人口が拡張している<sup>22</sup>ものの居住パターンにおいて大きな変化はない。また日本人の居住分布の特徴として、市のビジネス中心地区のホテルが多い 1 区、日本人学校と日系幼稚園のあるライン川の西部の 4 区、市の北部・北東部に位置し、高級住宅街でインターナショナルスクールもある 5 区に集中している。1 区に日本人が多いのは、駐在員が適当な居住地が決まる間一時的にホテル住まいする為である（グレーベ 2003: 153-5）。市の南部は、多くが労働者階級、低中産階級の受託地であり、日本人駐在員はほとんどいない。また、図 3-7 は、2011 年におけるデュッセルドルフ市内に暮らす日本人の割合を示すが、ここでもビジネス中心区の 1 区と日本人学校のある 4 区、インターナショナルスクールのある 5 区に日本人が集中しているのが分かる。

次に 2017 年時点の日本人の集住形態をみると中心商業地区である 1 区には、日本人全体の 6.7%（1,522 人）<sup>23</sup>が暮らし、外国人の中で一番人口が多い。これは、前述のように駐在期間が決まるまでホテル住まいするケースもあるが、近年では、駐在期間中、家具付きですべてそろった物件、そして日本食レストランもあり生活に便利な市の中心に住む単身駐在員を示唆していると考えられる（日系不動産 V さん）。35 年日系不動産を市内で経営する V さんは、最近の傾向としては「(駐在期間が) 長くて 3 年で、1 年の人も多い」と話す。

---

<sup>21</sup> 最近では日本人がやっている日本食料品店はなく、韓国人や中国人によるものがほとんどである（聞き取り調査 R さん）。

<sup>22</sup> 日本人人口の市北部での増加は、新たな賃貸住宅の建設とデュッセルドルフインターナショナルスクール（ISD）の立地による（グレーベ 2003: 153-5）。

<sup>23</sup> Landeshauptstadt Duesseldorf  
<https://www.duesseldorf.de/statistik-und-wahlen/statistik-und-stadtforschung/duesseldorf-in-zahlen.html#c82022> 2018 年 6 月 10 日閲覧。

4区は、日本人人口の24.9%（2,598人）<sup>24</sup>が居住し、4区地区在住外国人の中で一番多い。これは4区（ニーダーカッセル）（表3-2参照）にデュッセルドルフ日本人学校があることが影響している。当校生活環境調査によると全児童（小1から中3）の66.9%が徒歩通学で、80%が通学時間15分以内のところに居住する（デュッセルドルフ日本人学校要覧2016：24）。また、Vさんは、最近では日本人学校近くの物件も築45年から50年と古くなり日本人駐在員家族に人気がなくなりつつあり、その代わりに、学校から徒歩圏内の新築高層住宅が人気があると話す。

1999年に日本人が多かった5区をみると、2017年時点で日本人は外国人上位5位から外れている。これは、高い家賃と関係があるのかもしれない。Vさんによると5区にあるインターナショナルスクール（ISD）近辺の住宅（カイザースベルト）（表3-2参照）は高級で、テラスハウスは家賃が月3,500ユーロほどで相対的に高い物件<sup>25</sup>が多い。5区地区の日本人の減少は、駐在員のコスト削減、エリート層の減少、物価の上昇も反映しているとも考えられる（Vさん）。

居住地選択においては様々な要素が影響を与え、今まで日本人が多かった5区の日本人減少はあるもののデュッセルドルフ市内における日本人居住地区に関しては、基本的には大きな変化は見られない。しかし、デュッセルドルフの隣町であるメアープッシュに目を向けると日本人駐在員家族が2010年以降増えている。詳しくは3章の3.5.2「日本人駐在員の変容と駐在員配偶者の生活意識の多様性」の節で述べる。

---

<sup>24</sup> 同上

<sup>25</sup> Vさんによると、企業や駐在員の年齢によって予算が違うが、駐在員の求める物件は通常、月2,500ユーロほどが多く、社長クラスになると3,000ユーロぐらいである。

表 3-2 デュッセルドルフ市 10 区

Stadtbezirk	Stadtteile
1 区	Altstadt, Carlstadt, <u>Stadtmitte</u> , Pempelfort, Derendorf, Golzheim
2 区	Flingern-Nord, Flingern-Süd, Düsseltal
3 区	Oberbilk, Unterbilk, Bilk, Friedrichstadt, Hafen, Hamm, Flehe, Volmerswerth
4 区	<u>Oberkassel</u> , Heerd, Lörick, <u>Niederkassel</u>
5 区	Stockum, Lohausen, <u>Kaiserswerth</u> , Wittlaer, Kalkum, Angermund
6 区	Lichtenbroich, Unterrath, Rath, Mörsenbroich
7 区	Gerresheim, Grafenberg, Ludenberg, Hubbelrath, Knittkuhl
8 区	Eller, Lierenfeld, Vennhausen, Unterbach
9 区	Wersten, Holthausen, Reisholz, Benrath, Urdenbach, Hassels, Itter, Himmelgeist
10 区	Garath, Hellerhof

出典： Landeshauptstadt Düsseldorf より筆者作成。

<https://www.duesseldorf.de/bv.html> 2018 年 12 月 11 日閲覧。

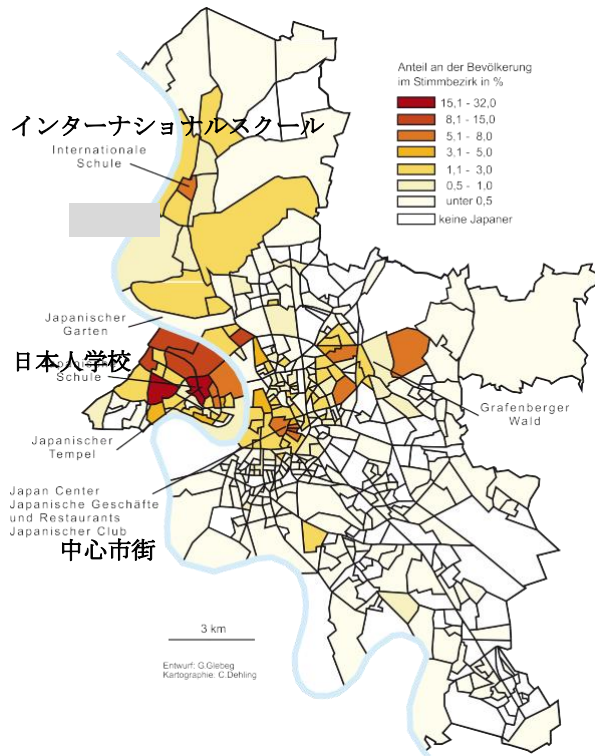
注：1 区は Stadtmitte 市の中心地区

4 区の Niederkassel (ニーダーカッセル) に日本人学校、日本人幼稚園がある。

Oberkassel (オーバーカッセル) に 3 つの塾がある。

5 区の Kaiserswerth (カイザーズベルト) にインターナショナルスクール (ISD) がある。

図3-7 デュッセルドルフにおける日本人居住者の分布



出典：Landeshauptstadt Duesseldorf 2011

[https://www.duesseldorf.de/fileadmin/Amt80/wirtschaftsfoerderung/pdf/japan\\_duesseldorf\\_ausstellung\\_d\\_ja.pdf](https://www.duesseldorf.de/fileadmin/Amt80/wirtschaftsfoerderung/pdf/japan_duesseldorf_ausstellung_d_ja.pdf) 2018年12月10日閲覧。

### 3.3 デュッセルドルフ日本人エキスパトリエイト・コミュニティの形成—戦後の歴史から

海外の日本人が多く住む都市として、上位にロスアンゼルス、上海、ニューヨーク、ロンドン、シンガポールがあり、デュッセルドルフは、25番目<sup>26</sup>であるが、北林は、デュッセルドルフの日本人社会の特徴として、日本人社会が企業の海外派遣者によって形成された点をあげている。それではデュッセルドルフ日本人社会は、どのように形成されていったのであろうか。本節では戦後からの日本人コミュニティ形成の変遷を全体の経済の動きと日本の多国籍企業の動向から捉える。

<sup>26</sup> 都市別在留邦人数の上位順は、ロスアンゼルス 71,435 人、上海 57,458 人、ニューヨーク 53,365 人、バンコック 39,949 人、ロンドン 38,314 人、シンガポール 27,525 人の順に多くデュッセルドルフ 8,388 人は 25 番目である（外務省領事局政策課 2013 年要約版 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000017471.pdf> 2018 年 8 月 5 日閲覧）。

### 3.3.1 戦後の経済再建期（1950年代）—商社のデュッセルドルフ進出

戦後の1950年代前半は、日本経済の「戦前水準に復帰する再建期」であり（亀井 1983: 192）、日本の海外直接投資がスタートする（中瀬 1979: 6）。業種別では、「資源開発鉱業投資」が第1位であり、「重化学工業化の準備期」で、商社参加型の直接投資が開始される（中瀬 1979: 1-7）。

機械製造や重工業製品の需要が増大すると、ドイツにも1950年代に日本の再建に必要な重工業製品を調達する為に重工業中心の鉄鋼関係の派遣者が姿を現す（デュッセルドルフ日本人学校 1996: 162）。

戦後の1950年代のドイツは「高度成長期」<sup>27</sup>で、旧西ドイツ経済は「ドイツの奇跡」と言われるほど、廃墟から立ち直り、驚異の発展を遂げた。そして、それを支えたのは、基幹産業、特に石炭・鉄鋼業のめざましい成長発展にあるとされる（樗木 1996: 49）。旧西ドイツにおいては、ルール工業地帯が石炭・鉄鋼産業の中心として戦後のドイツ経済を支えており<sup>28</sup>、日本企業の「鉄鋼機械産業の技術的立地条件」に合致するとして候補にあがる（デュッセルドルフ日本商工会議所 2011）。そしてルール工業地帯を背後に控えていたNRW州の州都であるデュッセルドルフは、当時「ルール工業地帯前の仕事机」（Schreibtisch des Ruhrgebiets）として知られ、ビジネスマンにとり欧州における鉄鋼産業及び重工業の裁量の拠点であった（デュッセルドルフ日本クラブ創立50周年記念誌編集委員会 2014）。

まずは、大倉商事が1952年に小さな事務所を開設し（大谷 1990: 43）、次に三菱商事が、機械部門が重機系だったこともあり、1954年に進出する（服部 1990: 40）。1955年に三菱商事は「ドイツ三菱」として当地において初めて日系企業として商業登記簿に記帳される<sup>29</sup>（デュッセルドルフ日本商工会議所 2011）。1954年には、邦人が集う初めての「デュッセルドルフ日本人会」があり、ボンからの外交官も含め、八幡、大倉、日本鋼管、住商、三菱金属鉱業、住友重工などから成る企業派遣者総計21人が参加し、日独の現況説明や今後の会の運営などについて話し合いが行われた（中川 2014）。これが後の「日本クラブ」となり、デュッセルドルフ日本社会の始まりであった（中川 2014: 18）。また、当時の日本との交信は、電話やファクシミリによる直通回線はなく、本社との連絡は、テレックスを使用していた（デュッセルドルフ日本商工会議所 2011）。

当時、当市の在留邦人は赤ん坊を入れて総計約40人で、その過半数は三菱商事の社

---

<sup>27</sup> 西ドイツの高度成長期は1950年から1958年の間、安定成長期は、1959年から1967年を指すことが多い（NHK取材班 1988: 83）。

<sup>28</sup> 1957年から1965年まで通算456人の日本人炭鉱労働者が「ルール炭鉱業における日本人炭鉱労働者の期限付き就労に関する計画」の契約にもとづき、NRW州に派遣される（デュッセルドルフ日本商工会議所 2011）。

<sup>29</sup> 三菱商事はドイツ、フランス、オーストラリア、カナダ、タイ、パキスタン、イラン、ブラジル、アルゼンチン、チリ、メキシコなどに現地法人各国三菱コーポレーションを設立（中瀬 1979: 8）。



員とその家族であった（小野 1990: 42）。1950 年代初めは家族を同伴せず単身赴任の企業派遣者が多く（デュッセルドルフ日本商工会議所 2011）、子ども帯同は、1954 年が初めてである（デュッセルドルフ日本クラブ創立 50 周年記念誌編集委員会 2014）。1950 年代当時は駐在員にとって、毎日の料理は「工夫」と「努力」が求められ、日本米の代わりにドイツのミルクライスが使われたり、ドイツの固い野菜を漬け込んで柔らかくするなど工夫していたこと（デュッセルドルフ日本商工会議所 2011）が記されている。

### 3.3.2 高度成長期（1960 年代）—製造業・金融他企業の海外進出

1960 年代は高度成長期に入り、対外直接投資は増大する（亀井 1983: 194）。表 3-3 から、1960 年代初頭から 1967 年において投資額が年々増えているのが読み取れる。1967 年の対外直接投資額は、1960 年の約 2.4 倍に伸びている。その要因として①日本がアジアにおける唯一の工業国に成長し、発展途上諸国に対し援助能力を持つ国になったこと、②日本経済の規模が拡大し、周辺市場の安定と拡大がますます要請されるようになってきたこと、③日本最大の輸出先アメリカが景気停滞に入り、今まで以上の輸出拡大が望めなくなったこと、④アメリカ、西欧の多国籍企業が、自国市場での需要の伸び悩みを打開する為、アジア諸国に目を向け、日本にも貿易自由化を要請し、韓国、台湾、香港などにも企業を進出する必要が出てきたことなどがある（亀井 1983: 195-6）。

表 3-3 対外直接投資の推移（単位 1,000 ドル）

年度	1951-59	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967
合計	197,158	93,998	164,205	99,424	127,424	120,470	157,186	227,107	228,979

出典：亀井『多国籍企業論』195 頁より筆者作成。

業種別にみると、対外直接投資において鉱業の占める割合が低下し、それに比べて、金融・保険と商業といった輸出促進型の直接投資の比重が高まり、さらに 1968 年からは輸出が拡大し、貿易収支が黒字になる（池本 1981）。

デュッセルドルフにも大手商社のみでなく他の企業も進出し、1962 年に日本貿易振興機構「ジェトロ」の事務所が設置され（デュッセルドルフ日本商工会議所 2011）、1966 年には、デュッセルドルフ及び近郊に駐在する日系企業 66 社が集まり、社団法人「デュッセルドルフ日本商工会議所」が設立された。そして、1969 年にはすでに 77 社の日系企業がデュッセルドルフに駐在していた。当市の商業中心地には、日本企業のビジネスオフィス街ができ、そこを起点に在留邦人の情報ネットワークが作られる（デュッセルドルフ日本商工会議所 2011）。邦人数も、1962 年には約 300 人だったが、1960 年代末には 1,000 人を越え、1963 年に初めて当地に日本レストランがオープン

ンし、1965年には日本食材を扱う店も現れ、家族帯同者も少しずつ増えていく（デュッセルドルフ日本商工会議所 2011）。

### 3.3.3 本格的な直接投資の展開（1970年代）— 製造業企業の進出本格化

1970年代は「日本企業の海外進出が本格化した時代」（北沢 1982: 187）で、さらに海外直接投資が飛躍的に拡大、急増する（亀井 1983: 217；高中 1991: 79）。表 3-4 が示すように対外直接投資額は 1972年に前年の 2.7 倍になり、1973年には 30 億ドル台に達している。また、1973年には中東戦争の影響で「石油危機」が生じ、直接投資は停滞するが、1978年からは 45 億ドルを超える（亀井 1983: 196-7）。

表 3-4 対外直接投資額の推移（単位億ドル）

年度	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980
投資額	9.04	8.58	23.38	34.94	23.95	32.80	34.62	28.06	45.98	49.95	46.93

出典： 亀井『多国籍企業論』（1983: 197）より作成

日本の低廉かつ優秀な労働力を用いて作られた高技術製品が、欧米諸国に殺到し始めると、諸国は自国産業の保護の為、輸入制限を取り始める。その為、日本は、輸入規制回避の為、現地生産に乗りださざるをえない状況に陥る。さらに 1973 年の固定為替相場制から変動為替相場制への移行と円高現象により、先進国における現地生産が伸びる（亀井 1983: 197-8）。

ヨーロッパへの直接投資は、商業のほか、金融、保険も増加して国際化が進展する（池本 1981；亀井 1983: 198）。デュッセルドルフを州都とする NRW 州においても日本企業の数が増え続け、特にエレクトロニクス技術の分野において、日本からの輸出が増え、初めての日本車もドイツ市場に登場した。NRW 州には、商社に続き、製造業、銀行、保険会社、その他のサービス業が進出し、日系企業の数はずっと増加する（デュッセルドルフ日本商工会議所 2011）。特に製造業関連企業進出が本格化し、1974年にはメーカーが商社よりも多かった（北林 2006）。デュッセルドルフ市においては、1971年当初約 1,500 名の邦人がおり、法人企業数は 113 で（デュッセルドルフ日本人学校 1996）、それに伴い、邦人家族も増え 1971年に日本人学校が開校、1976年には日本人幼稚園が開園する。1970年代後半には、市の邦人数も約 2,800 名となる（中川 2013）。

### 3.3.4 進む日本企業の多国籍化（1980年代）— 「リトル東京」の誕生

1970年代後半から続いていた、アメリカやヨーロッパ諸国との貿易摩擦回避を目的とした対外直接投資は、1980年代に急増し、家電、自動車分野等の現地生産が拡大した

(内田 1993: 41 ; 亀井 1983: 218)。また、1985年9月にはプラザ合意<sup>30</sup>が行われ、「日本企業の海外展開・直接投資による多国籍企業展開の加速化」が求められるようになった(奥村 2006: 160)。プラザ合意による急速な円高や金融国際化<sup>31</sup>などにより、日本企業の多国籍化が大きく進展し(町村 1994)、日本企業は東南アジアでの現地生産と北米、イギリス、ドイツなど欧州へ進出する<sup>32</sup>(奥村 2006: 168)。1980年代の日本の経済成長を支えた基幹産業は、自動車と電機で、国内、海外とも安定した成長を遂げている。非製造業では特に金融機関の海外進出が、急激に大規模に進んだ<sup>33</sup>(町村 1994: 78)。

1989年には、日本の海外直接投資額は英国、米国を抜いて世界第1位になった(在日ドイツ商工会議所 1991: 21)。伊豫谷は1980年代は、「高度成長から低成長への転換とオイルショックを乗り越え、日本経済が大きな自信をつけた時期」と述べる(伊豫谷 2001: 48)。

ドイツのNRW州にも、日本から企業の間及び上位のマネージャー・管理者層が赴任してくることが多くなり、高水準生活と職場に安全な住まいが重要視された。彼らの赴任に伴い、日本流のサービスへの需要が増加し、病院、弁護士事務所、不動産業、美容室などもでき、「リトル東京」と呼ばれるデュッセルドルフ市が作られた(デュッセルドルフ日本商工会議所 2011)。北林は、1988年までに「日本人が遠隔地で生活する場所として十分な生活インフラ」が整ったと述べる(北林 2006)。また、1980年代は「日本人と現地のドイツ人との交流を促進する目的での行事の開催」が進んだ(北林 2006)。デュッセルドルフ日本週間もそのような目的の行事の一つとして、1983年には3か月にわたって開催された。これは日独の間で「相互交流促進の必要性を具現化しようとの熱意」のもとに日独両外務省の後援を得、デュッセルドルフ市と日本進出企業が総額2億円を拠出し開催されたものである(柚岡 2014: 17)。

### 3.3.5 バブル経済の終焉 (1990年代) —日本企業一部撤退

1990年に株や不動産のバブルがはじけると、日本はデフレとゼロ成長に陥ったが日本企業は世界における競争力を失わない為にも、1990年に再統一されたドイツ、そしてヨーロッパ市場に新しい成長の可能性を求める(デュッセルドルフ日本商工会議所 2011)。1990年には約650の日本企業がドイツに、デュッセルドルフには、350社が進

---

<sup>30</sup> 日本製品の国際市場での競争優位、対日赤字に苦しむ米欧先進国5か国の蔵相・中央銀行総裁会議が1985年9月にニューヨークのプラザホテルで行われ、円高を容認し、ドル安を誘導する政策を打ち出した(奥村 2006: 160)。

<sup>31</sup> 1980年に外為法改正によって、資本取引が原則的に自由になり、日本の金融の国際化が実質的に始まる。特に1985年以降の伸びは、それ以前の3倍である(奥村・加藤 1989: 181)。

<sup>32</sup> ヨーロッパそしてEUにおける製造工場にも投資し、イギリスにおいては、日産やトヨタ、ホンダが工場設置に乗り出す(ピーチ 2003: 21)。

<sup>33</sup> 日本の銀行も海外に進出し、1986年末には、西ドイツにおいて、拠点数18、支店13であった(奥村・加藤 1989: 181)。

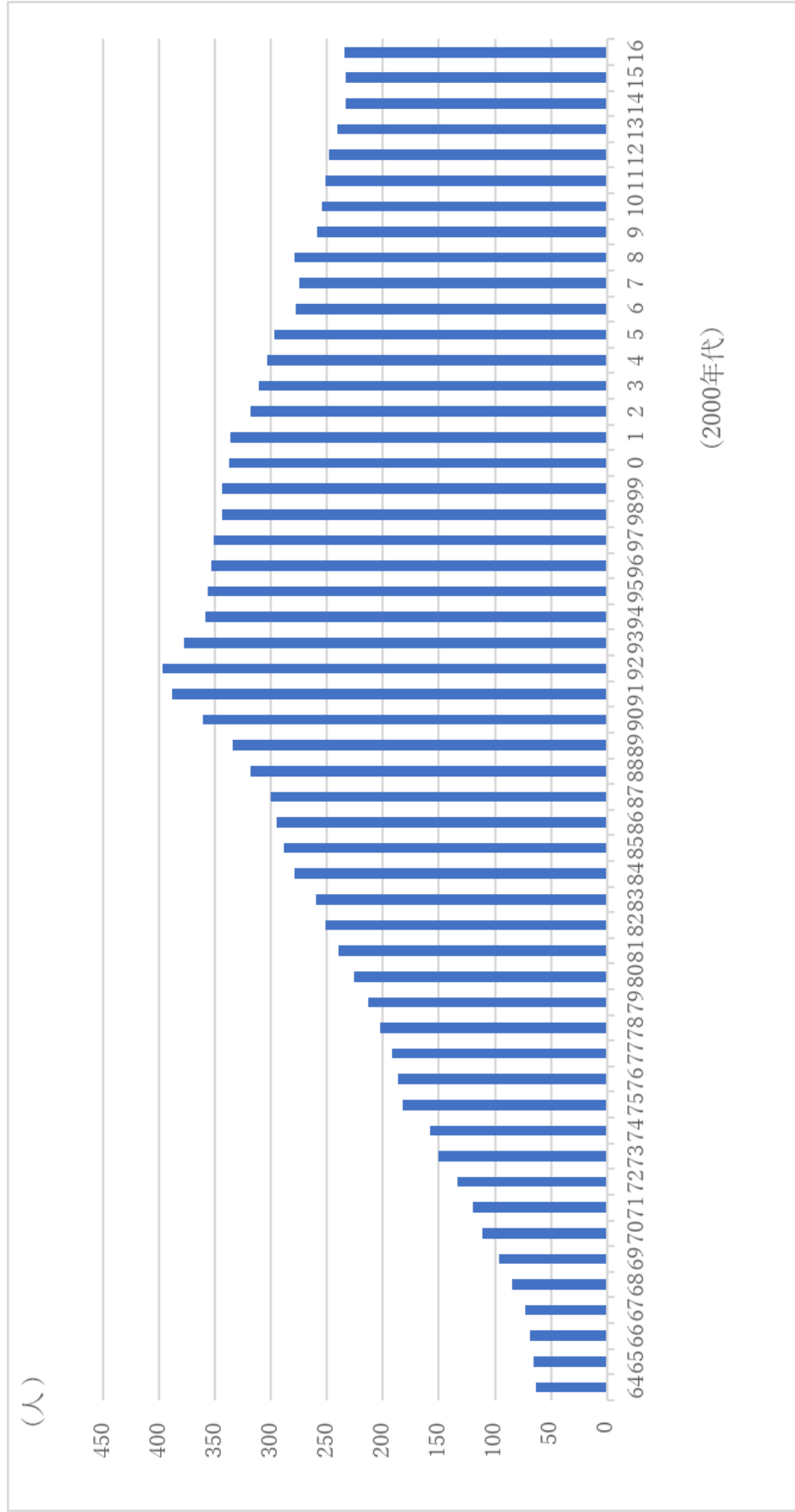
出し、日本の大手メーカーも多く進出した<sup>34</sup>（有川 1996:196）。在留邦人数は、1992年には6,000人であった（デュッセルドルフ日本クラブ創立50周年記念誌編集委員会2014）が、ドイツ国内での経済の成長は期待に反して伸び悩み、1996年には失業率が10.8%になり、失業者も戦後最多の420万人になった（デュッセルドルフ日本クラブ創立50周年記念誌編集委員会2014）。さらに1990年代前半には、日本のバブル経済終焉もあり、日本企業の一部は撤退し市の在留邦人数も減少する。

図3-8は、デュッセルドルフ日本クラブの法人会員数推移を表しているが、1964年発足時より、伸び続けていた法人会員数は1992年の397人をピークに減少している。法人会員のベースは駐在員が担っているので、法人会員数の下降から企業数が減ったことが分かる。

---

<sup>34</sup> 当時、ハンブルク120社、フランクフルトは150社（日本の金融及び証券企業が多く進出）、ミュンヘン及びシュツットガルト約100社であった（有川1996:196）。

図 3-8 デュッセルドルフ日本クラブ法人会員数推移 (1964 年～2016 年)



出典：デュッセルドルフ日本クラブ 『日本人会報』により筆者作成

一方、1993年9月から11月まで日本週間が再び開催され、同時に日本経済展、日独経済シンポジウムなども開催された（袖岡 2014: 17）。

### 3.3.6 ドイツ企業・ドイツ人社会との安定した連携（2000年以降）

NRW州の日系企業数は、1991年のピーク時の502社から2001年には425社に減少したものの2010年には500社に回復している。デュッセルドルフ市にある日系企業数も安定し、多くがデュッセルドルフを拠点として、ヨーロッパ域内、ドイツ国内にビジネスを展開している（デュッセルドルフ日本商工会議所 2011）。デュッセルドルフ商工会議所では、年間16回のセミナーが開かれ、毎回60人ほどの参加があり、年間の参加者合計は900人ほどである（デュッセルドルフ日本商工会議所代表 Yさん）。

デュッセルドルフ日本商工会議所によると日本企業の進出理由として、ヨーロッパの中心に位置するという地理的優位性がある。欧州の主要都市にも2時間以内で到着し、日本からデュッセルドルフへの直行便も2014年からANAが就航している（デュッセルドルフ日本クラブ創立50周年記念誌編集委員会 2014）。また、日本食料品店やレストラン、日本語で対応できる医療機関や日本人学校など日本人が生活しやすいインフラが整っていることも日本企業にとっての魅力である（Yさん）。

2002年からは、NRW州、デュッセルドルフ市、日本人社会が協力し「日本デー」が、毎年開催されることになった。その後、日本クラブを中心にした日本企業のスポンサー支援もあり、日本商工会議所も協賛している。2017年の16回目の「日本デー」には、60万人を超える来訪者があった。「日本デー」では、ライン川の散歩道に会場が設置され、伝統文化から、音楽、舞踊、スポーツ、ポップカルチャー、食文化などが紹介され、最後には日本の花火が上がる。そして花火師は日本から呼び、毎年趣向を凝らした花火で、現地在住の日本人にも大変人気がある。

さらに2002年から開催されている日独経済シンポジウム<sup>35</sup>は、NRW州、市、日独産業協会、日本貿易振興会、デュッセルドルフ商工会議所の共催で行われている。

## 3.4 日本人組織

前述のようにデュッセルドルフの日本人社会は、戦後の多国籍企業進出に伴い、邦人数も増え、日本人向けの生活インフラも整い2017年時点で約7,000人の民間企業関係者が居る。エクスパトリエイト・コミュニティの中核機関として、日本クラブ、日本人学校があるが、それらの設立や運営に関しても民間企業が大きな役割を担ってきている。ここでは、日本クラブ及び教育機関である日本人学校、日本語補習校、インターナショナルスクールに注目する。

---

<sup>35</sup> 日独経済シンポジウム

<https://www2.nrwinvest.com/ja/service-nrwinvest/events/wirtschaftstag-japan/>  
2018年8月15日閲覧。

### 3.4.1 日本クラブ

先述のように日本クラブのもとになったのは、1954年2月18日に大使を含む21人の企業派遣者が集まり行われた第1回日本人会である。この会は5時間にも及び①今後の会の運営、称号、会費等、②書記官による日独の現況説明や今後の情報伝達方法の検討、③自己紹介・大使館への要望などが話し合われた（中川 2014）。そして、1964年1月に日本クラブ発足の会が開かれ、同年4月には「会員相互間の親睦」を目的に社団として登録される。当時63の法人会員、683名の個人会員を記録している（高木 2006）。また、表3-5が示すように初代会長は三井物産から選出され、現在に至るまで日本の大手企業駐在員が会長を務め、創設から企業が中心的役割を担っている（デュッセルドルフ日本クラブ創立50周年記念誌編集委員会 2014）。

日本クラブの運営の会則<sup>36</sup>によると「クラブの会長は、日本企業派遣者が務め、任期は3年」で「運営委員会は、会長、副会長、及び運営委員で構成し、運営に関する必要事項を決議する。会長は、日本企業の駐在員が務める」とあり、駐在員が日本クラブ運営に大きく関わっている。

---

<sup>36</sup> デュッセルドルフ日本クラブ会則

[http://www.jc-duesseldorf.de/images/pdf/administration/2016\\_kaisoku.pdf](http://www.jc-duesseldorf.de/images/pdf/administration/2016_kaisoku.pdf) 2017年9月25日閲覧。

表 3-5 日本クラブ会長の変遷（1964 年～2013 年）

代	所属	期間	代	所属	期間
初代	三井物産	1964	第 19 代	三菱商事	1984-7
第 2 代	三菱商事	1965	第 20 代	三井物産	1988
第 3 代	八幡製鉄	1966	第 21 代	三菱商事	1989-90
第 4 代	三菱商事	1967	第 22 代	三井物産	1991
第 5 代	三井物産	1968	第 23 代	日商岩井	1991
第 6 代	三菱商事	1969	第 24 代	三井物産	1992-3
第 7 代	三菱商事	1970	第 25 代	三菱商事	1994
第 8 代	新日鉄	1971	第 26 代	住友商事	1995
第 9 代	三井物産	1972	第 27 代	三菱商事	1996-8
第 10 代	三菱商事	1973	第 28 代	三井物産	1999
第 11 代	三井物産	1974	第 29 代	三和銀行	2000
第 12 代	三菱商事	1975-6	第 30 代	三菱商事	2001-2
第 13 代	東京銀行	1977	第 31 代	三井物産	2003
第 14 代	三菱商事	1977-9	第 32 代	三井物産	2003-6
第 15 代	三井物産	1980	第 33 代	三菱商事	2006-8
第 16 代	東京銀行	1981	第 34 代	三井物産	2009-10
第 17 代	三井物産	1982	第 35 代	三菱商事	2011-2
第 18 代	丸紅	1983	第 36 代	三井物産	2013

出典：デュッセルドルフ日本クラブ『ラインの流れ』（2014）より筆者作成。

1960 年代には、日本人父母の日本語による教育への願いから、「日本人会」が中心になり、週 1-2 回の国語授業を中心とした補習授業を行った。そして 1969 年に「日本人会」は「日本クラブ」へと変更され、1971 年に設置された「デュッセルドルフ日本人学校開設推進委員会」にも関わる。1971 年日本人学校開校後、2005 年までは、学校の運動会も日本クラブ共催で行われた（デュッセルドルフ日本人学校 2016）。

1976 年には会則改正が行われ、クラブの目的を発足当初の目的であった「会員相互間の親睦」から、「日独間・国際親善及び文化交流の促進」に変更し、入会資格も日本人のみから、「入会資格は日本人であることが条件とならない」を追加したものになり（デュッセルドルフ日本クラブ創立 50 周年記念誌編集委員会 2014 : 44）、国籍を問わず誰でも入会できるようになった<sup>37</sup>。それまでは、「日本人のみ」ということで、Cohen

<sup>37</sup> 夫がドイツ人である Z さんは 1997 年当時、夫が日本企業の駐在員でないという理由で日本クラブに入会できなかったと話す（2018 年 5 月 2 日インタビュー）が、2018 年時



の述べるようにホスト社会に対して「排他的」な一面（第2章2.4参照）も持っていたと言える。

日本クラブの会員の推移をみるとバブルの1991年1992年の頃は個人会員が6,000人台、法人会員が400近くで一番多く、その後減少を続け、1990年代後半には個人会員数が5,000人台になる（図3-8・表3-6参照）が、日本クラブ入会金や年会費<sup>38</sup>が高額なこともあり影響を受けたからである（Rさん）。今までは当然のように企業は法人会員になり、駐在員家族も個人会員になっていたが、企業は、経費節減の為、日本クラブのメンバー登録をやめるようになった。日本クラブのスタッフのRさんは次のように語った。

R：1990年頃から会社が締め始め、それまでは日本の会社もお金を出していて、会社は皆こちらでは法人会員になっていました。バブル崩壊後は、（会社の出費や経費を）締められるところから締めるということでしょう。

2016年の個人会員数は3,533名（表3-6）、法人会員数は234（図3-8）で、デュッセルドルフ日本商工会議所代表のYさんによると、近年は、個人会員数は3,500名前後（表3-6）で安定している（Yさん）。

表3-6 日本クラブ個人会員数推移

年	個人会員数（人）	年	個人会員数（人）
1964	683	1992	6,672
1968	1,039	1996	5,737
1972	1,883	2000	5,268
1976	2,958	2004	4,693
1980	3,559	2014	4,100
1984	4,485	2015	3,616
1988	5,377	2016	3,553

出典：高木（2006：408）『日本人会報』により筆者作成

---

点では、個人会員として駐在員以外の日本人も入会している。

<sup>38</sup>日本クラブの法人入会金は、250ユーロ、年会費は、社員数によって37-270ユーロである。

[http://www.jcduesseldorf.de/images/pdf/administration/2017\\_uneikisoku.pdf](http://www.jcduesseldorf.de/images/pdf/administration/2017_uneikisoku.pdf) 2017年9月25日閲覧。

日本クラブは「日本デー」を含む年間 100 ほどの各種催し<sup>39</sup>（小旅行や講演会等）を実施している。生活部、文化部、運動部、娯楽部、図書部、広報部などの部があり、前述の毎年 5 月開催の「日本デー」は文化部が中心に行われ、年 2 回春秋のソフトボール大会<sup>40</sup>は、運動部が主催する。また、様々な同好会（運動系、コーラス、生け花、着物、太鼓、囲碁、将棋、ブリッジ、ダンスなど）がある。そのほかに 1997 年から駐在員の子どもを中心としたプレイグループ「ちびっこ集まあれ！」<sup>41</sup>なども催されているが、活動はすべて、ドイツ永住者や長期滞在邦人のボランティアにより成り立っている。

このように日本クラブは、創設時から会長は、日本企業の駐在員である。2017 年時点で個人会員の中には、現地日本人永住者やドイツ人なども居るが、駐在員が主要構成員である法人会員がベースとなっており、日本クラブ運営維持は、日本人エクスパトリエイト・コミュニティと深く関わっている。

### 3.4.2 日本人教育機関

デュッセルドルフの日本人児童の教育機関としては、全日制日本人学校、インターナショナルスクール（2 校）、補習校がある。補習校は現地校やインターナショナルスクールに通う生徒対象の学校であり、週 1 回の国語指導を行っている。もちろん教育機関としてドイツ現地校があるが、現地校はドイツ語の問題やドイツの教育制度<sup>42</sup>の違いから進学する日本人児童は少ない。その為、日本人児童の中心的な教育機関は、インターナショナルスクールか日本人学校になるが、インターナショナルスクールの日本人生徒数は通常 100-120 名ほどで、日本人学校には 2016 年時点で 464 人が在籍する（表 3-7 参照）。以下、日本人学校、日本語補習校、インターナショナルスクールのそれぞれの現状を見ていく。

---

<sup>39</sup> 近隣への小旅行、医療セミナー、ワインセミナーなどの講演会、料理講習会などがある（日本人会報より）。

<sup>40</sup> 日本クラブ主催のソフトボール大会は、1985 年の春に始まり、誰でもチームを作れば参加でき、2018 年春は、70 チームほどの参加があった。1993 年秋大会の 87 チーム参加が過去最多であった（デュッセルドルフ日本クラブ創立 50 周年記念誌編集委員会 2014）。

<sup>41</sup> 1 才から 6 歳までの親子対象に工作、リトミックや体を使った遊び、手作りおやつ講習会などを行う。インタビューを依頼した P さんは、プログラムの専任講師である（日本人会報より）。

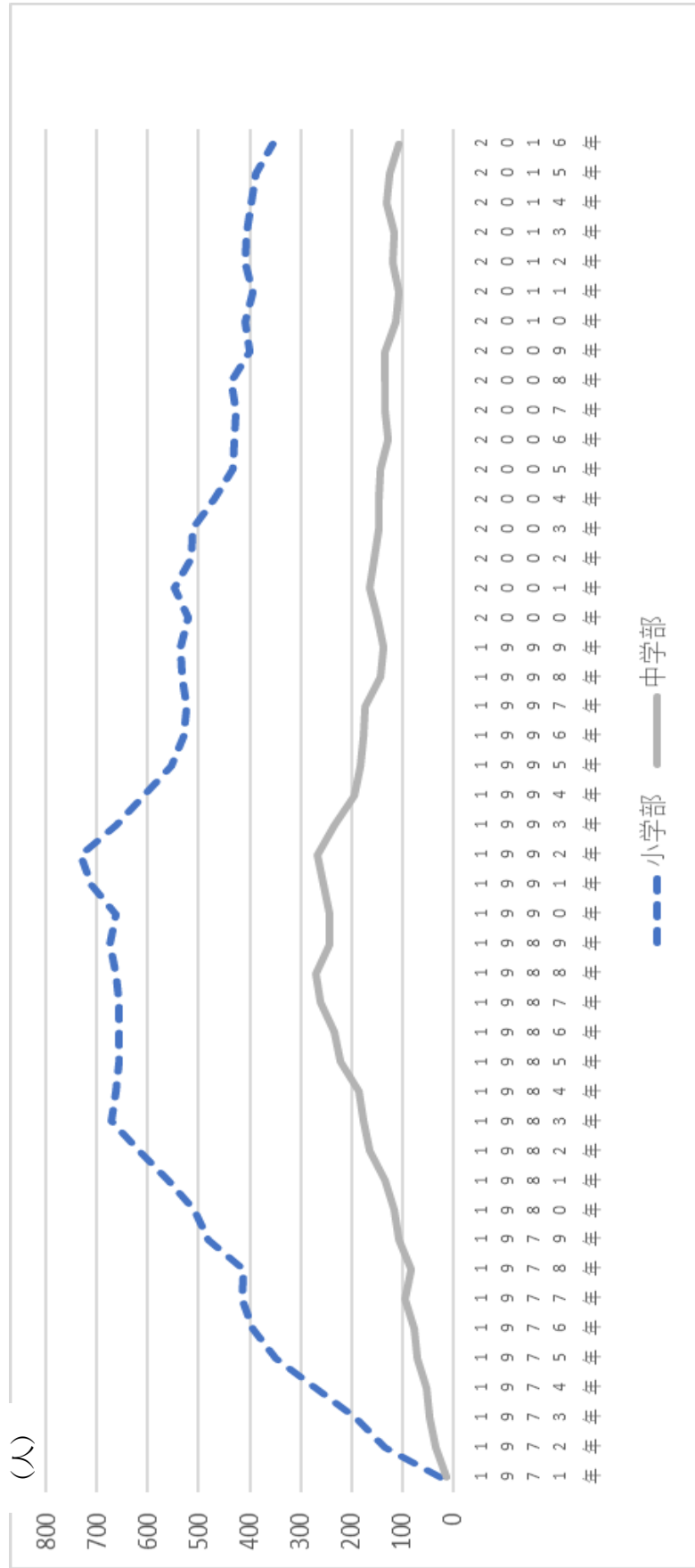
<sup>42</sup> ドイツでは小学校 5 年生から、ギムナジウム（進学コース）、リアルシューレー（実業高校）、ハウプトシューレー（中卒資格取得）、ゲザムトシューレー（総合学校）のいずれかに進学する。12 年を終了すると日本の高校卒業と同じ資格が得られる（デュッセルドルフ日本クラブ 1996）。基本的にギムナジウム希望の場合は、小学 1 年生から 4 年生までの成績や学習態度が考慮され、特に 4 年次の成績が一定基準に達し、教師による学内の進学会議にて承認されないと進学できないことが多い。

### 3.4.2.1 デュッセルドルフ日本人学校

デュッセルドルフ日本人学校の発端は、日本企業進出と大きく関係している。1960年代は日本の高度成長期であり、企業進出に伴い、駐在員家族も増え、「日本人会」による週1-2回の補習授業が行われる（3.4.1 日本クラブ参照）。1963年当初日本語学級は4クラスで39名だったが、企業進出が進み邦人数が増えるに伴い、1966年には76名、1968年には106名になる（デュッセルドルフ日本クラブ創立50周年記念誌編集委員会2014）。そして、帰国後の転入学や進学時における言語及び教育内容の相違に起因する困難性を解消する為、全日制日本人学校設立の気運が高まる（デュッセルドルフ日本人学校2016）。1970年代に入ると本格的な直接投資の増大とともに進出企業が増加し、デュッセルドルフにおいても父母家庭数は、200を越え、就学児童・生徒数が230-250名になる。そのような状況の中で日本人の為の教育機関が必要になる（デュッセルドルフ日本人学校1996）。そして、1971年1月に総領事館、日本商工会議所、日本クラブの協力の下で、デュッセルドルフ日本人学校推進委員会が発足し、同年4月に日本人学校の開校式が行われた。

日本人学校の運営主体は、会員の中から選ばれた理事を中核としたデュッセルドルフ日本人学校理事会で、理事長は企業から選出された。開校式は小5から中3までの43名で、現地オーバーカッセル区教会付属建物を仮校舎としていた。1972年には、当地進出企業からの寄付を仰ぎ、日本政府や海外子女教育振興財団の援助を得て、新校舎建設の杭打ちが開始される。同年には小1-4年まで90名の全日制授業が、現地ドイツ学校の校舎を借りて開始された。1973年には新校舎が落成し、仮校舎から解放され、その後児童生徒数は増え続け、1970年代後半には、600名近くになった（デュッセルドルフ日本人学校2016）。1980年代には、日本人向け生活インフラも進み、日本からの進出企業は増え続け、1983年には日本人生徒数が800名を超えた為、中学部の校舎をドイツ人学校の校舎を借用して移転する。そして1980年末には全校生徒数が900人を超え、1992年に998名のピークを迎える。しかし1990年代前半に日本のバブルが終焉し、日本企業の一部撤退が起こり、生徒数も減少し、1990年代末には、600人台になり、2001年には中学部がドイツ人学校校舎から引き上げ、小学部校舎に統合される。2005年以降は生徒数がさらに減り500人台になり、2016年時点の生徒数は464人である（図3-9・表3-7参照）。

図 3-9 デュッセルドルフ日本人学校児童生徒数の推移 (全日校小学部・中学部)  
(1971年～2016年)



出典：デュッセルドルフ日本人学校要覧（2016:26）より作成。

表 3-7 デュッセルドルフ日本人学校児童生徒数 (1971年～2016年)

年度	小学部	中学部	総合計 (人)	年度	小学部	中学部	総合計 (人)
1971	25	13	43	1994	610	195	805
1972	134	33	167	1995	553	183	736
1973	191	46	237	1996	529	176	705
1974	271	53	324	1997	524	173	697
1975	350	70	420	1998	532	142	674
1976	394	78	472	1999	536	136	672
1977	416	94	510	2000	522	150	672
1978	413	84	497	2001	548	163	711
1979	481	106	587	2002	514	154	668
1980	509	115	624	2003	513	147	660
1981	559	134	693	2004	469	145	614
1982	618	165	783	2005	432	144	576
1983	671	177	848	2006	430	129	559
1984	664	186	850	2007	428	135	563
1985	657	222	879	2008	437	134	571
1986	656	233	889	2009	401	133	534
1987	656	262	918	2010	409	114	523
1988	662	269	931	2011	395	106	501
1989	674	243	917	2012	410	119	529
1990	664	244	908	2013	405	116	520
1991	712	255	967	2014	398	130	528
1992	732	266	998	2015	387	126	513
1993	663	234	897	2016	356	108	464

出典：デュッセルドルフ日本人学校要覧（2016: 26）より作成。

日本企業の駐在員は、デュッセルドルフ日本人学校運営にも深く関わっている。学校の運営主体は、デュッセルドルフ日本人学校理事会で、理事会は、理事長1名、副理事長1名ないし数名、及び理事若干名から構成される<sup>43</sup>。日本人学校創設の1971年から、

<sup>43</sup> デュッセルドルフ日本人学校

[http://jisd.de/about\\_jisd/outline/image/2016teikan.pdf](http://jisd.de/about_jisd/outline/image/2016teikan.pdf) 2018年8月5日閲覧。

理事長、副理事長は企業派遣者が務める。

表 3-8 デュッセルドルフ日本人学校歴代理事長

代	所属	期間	代	所属	期間
初代	三菱商事	1971.4-1972.8	第 16 代	日立金属	1997.4-1998.3
第 2 代	三井物産	1972.8-1973.2	第 17 代	丸紅	1998.4-1999.9
第 3 代	トーマン	1973.2-1976.9	第 18 代	日商岩井	1999.10-2000.9
第 4 代	三井物産	1976.10-1979.6	第 19 代	三菱化学	2000.9-2001.12
第 5 代	日立製作所	1979.6-1981.6	第 20 代	丸紅	2001.12-2003.4
第 6 代	三菱商事	1981.7-1983.5	第 21 代	三菱電機	2003.4-2004.1
第 7 代	日産自動車	1983.5-1985.3	同代行	UFJ 銀行	2004.1-2004.4
第 8 代	三井物産	1985.4-1986.11	同代行	丸紅	2004.4-2007.3
第 9 代	丸紅	1986.12-1988.1	第 22 代	丸紅	2004.6-2007.3
第 10 代	新日本製鉄	1988.1-1990.4	第 23 代	協和発酵	2007.4-2008.3
第 11 代	丸紅	1990.4-1991.3	第 24 代	丸紅	2008.4-2010.3
第 12 代	宇部興産	1991.4-1993.3	第 25 代	協和発酵	2010.4-2011.3
第 13 代	丸紅	1993.4-1994.3	第 26 代	丸紅	2011.4-2012.9
第 14 代	富士フィルム	1994.4-1996.3	第 27 代	協和発酵	2012.10-2014.1
第 15 代	丸紅	1996.4-1997.3	第 28 代	双日	2014.1-

出典: デュッセルドルフ日本人学校要覧 (2016: 33) より筆者作成。

デュッセルドルフ日本人学校は、海外で生活する日本人の生徒に対し「日本国内と同等以上の教育を行うことのほかに、将来、児童生徒が日本に帰国した時に、または世界で活躍する上で、日本国民としての自覚と国際性を身につけられるような教育を行うこと」を使命の一つとして掲げている。学校の校長や教員は、文部科学省により日本全国から3年の任期で派遣される。また、現地校との交流や親善活動、ドイツ理解や国際教育を積極的に取り入れ、国際社会で活躍できる子どもを育成することを教育の大きな柱の一つとしている (デュッセルドルフ日本人学校 2016)。

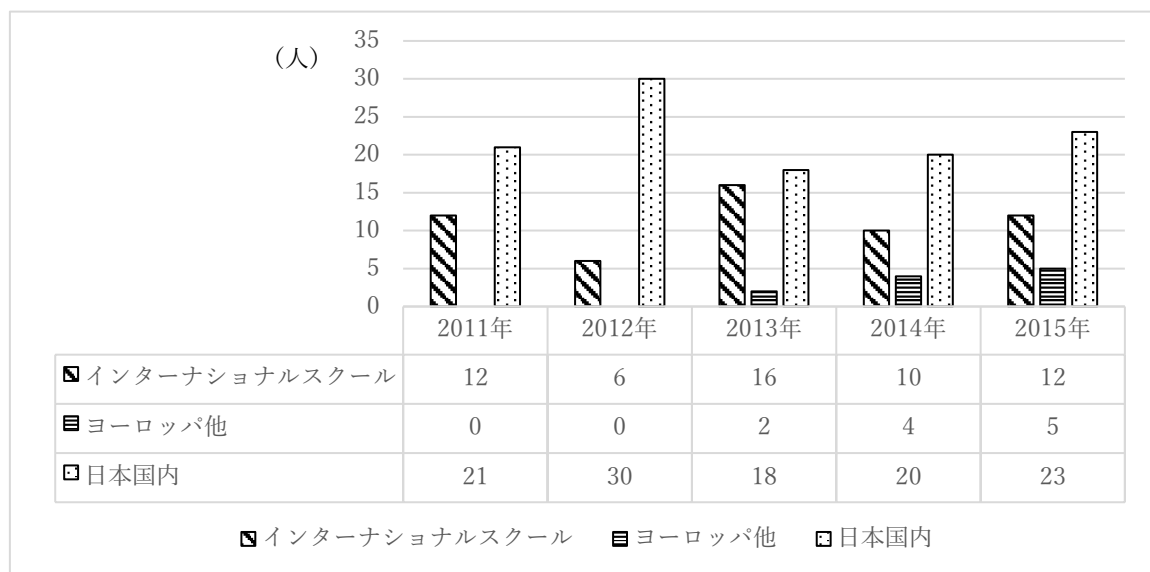
また、日本人学校は中学部までしかないので、卒業後は、デュッセルドルフのインターナショナルスクールやヨーロッパの高校への進学、あるいは、帰国し日本国内の高校に進む。図 3-10 が示すように 2011 年から 2015 年においては、日本人学校卒業生のうち日本国内の高校に帰国する生徒の方が多いが、毎年 6 名から 16 名ほどがインターナショナルスクールに編入する。

デュッセルドルフ日本人学校の生徒の学力レベルは高く、生徒の家庭環境は、日本の公立に比べ、親が比較的大手の企業に勤めていたり、両親とも高学歴など似ている

点がある（日本人学校事務局の Q さん）。

Q：日本だったら、公立の学校に行ったらいろんな家庭環境の子がいるんでね。ここはそろっちゃっている。企業の駐在員。いわゆる大企業の駐在員の子弟っていう事で。そういう人たちがばかりなんで。（中略）うちの学校で中ぐらいの学力があれば日本に帰ったらトップレベルですね。進学は毎年 20 人ぐらいクラスから国立と有名私立付属に入る。偏差値が高いと思いますね。

図 3-10 デュッセルドルフ日本人学校中学卒業後の進学先（2011 年～2015 年）



出典：デュッセルドルフ日本人学校要覧 2016 より筆者作成

生徒の出身は、関東圏が 6 割で関西圏が 3 割、その他が 1 割（デュッセルドルフ日本人学校 2016: 24）で、先生も全国から来る。その為中学 3 年の生徒の高校進学指導などにおいては、東京出身の先生が他の地区の学校事情を知らず、進学指導ができないケースなどもある。このような状況から、受験情報などに関しては塾<sup>44</sup>任せだと Q さんは話す。

Q：親御さんたちも（子どもの受験校については）よく考えていて、受験する学校に関してはあまり、質問してこないですね。

<sup>44</sup> 2018 年時点で、3 つの進学塾は、デュッセルドルフ市内の日本人集住地区にあり、それぞれ関西系、関東系、インターナショナルスクールに通う生徒向きである。また、指導に厳しくかなりの勉強量を塾生に課す塾やそれほどでもない塾など、それぞれ特徴がある。

このように塾に通う目的には、学力をつけることはさることながら、日本の学校情報を得るといふ大きな目的がある。Qさんによると中学生のほぼ全員が塾に通い、子どもたちは、学校の授業が終わると、正門のところまで母親から、塾の教材の入ったカバンと夕飯のお弁当をもらい、塾に向かう。デュッセルドルフ市内には3つの進学塾があり、子どもたちは、日本に帰国する地域により自分の帰国する地域の学校情報量が多い塾の方を選択する。日本人学校の生徒の約67%が徒歩通学で、通学時間は80%が15分以内であり、これら3つの塾は、日本人学校近くのオーバーカッセル地区（表3-2参照）にあり、生徒たちは学校が終わってからそのまま塾に通う。塾も学校や自宅の近隣にあるので便利である。

北林は、デュッセルドルフでは、全日制日本人学校、そして塾も含め、教育関連が充実し、企業派遣者の求める教育、帰国を前提とした帰国後の国内教育へのスムーズな順応、及び学校入試に備えることが目的とされていること、さらにその背景には海外の環境に子どもを置いている危機感と企業派遣者自身が高い教育を受けた社会的・経済的に安定的で恵まれた地位にある点を指摘する（北林 2006: 33）。

#### 3.4.2.2 日本語補習校

日本語補習校は、土曜日午後4時間、現地校等に通う日本人児童を対象に小1から中3まで日本の「国語」の教科書を使い、国語教育を行う。全日制日本人学校の先生が日本の学校から派遣されるのに対して、補習校の先生は、現地採用で永住者やドイツに長い日本人が多く「国語」の教員資格のない人も多い<sup>45</sup>。

日本語補習授業の始まりは、前述のように1960年に日本人会中心の寺子屋式授業で、小1から中1までの20名の生徒に対しての週1の日本語授業であった。1966年には生徒が76名になり週2回の授業になり、1968年には、幼稚園部として準1年生クラスが設置されたが、1971年に小5から中3の全日制日本人学校ができるとその学年に相当する生徒が移行し、補習授業校は、準1年生、小1から小4、高校生のみになった。それでも各学年は従来通り週2回午後の授業を継続していた。さらに1972年に小1から小4の全日制的授業が始まると、皆その学年は補習教室から移行し、日本クラブ教育部のもとでの補習授業校は12年の歴史を閉じる。しかし、1972年の全日制開校後もかなりの児童が、家庭の事情や教育方針により現地校にとどまった。その為、当時は、カトリック女子修道院のシスターたちにより、その施設内で小1から小4までの児童の日本語補習授業が私的に行われた（デュッセルドルフ日本人学校1996）。その後、保護者たちから全日制校内に小5以上の「日本語教室」設置の希望があり、日本人学校理事会の決定により、1979年に小5、1980年に小6の教室が開設さ

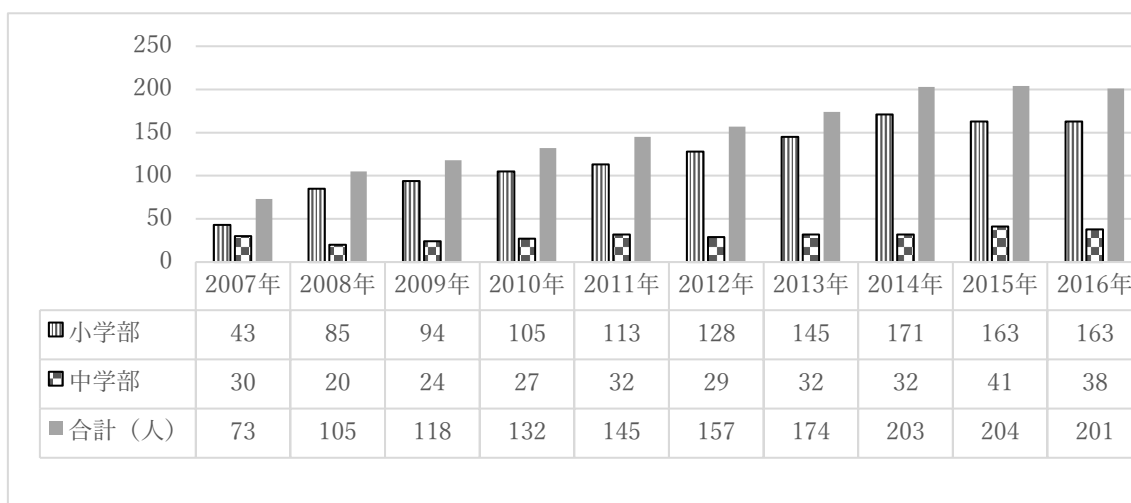
---

<sup>45</sup> デュッセルドルフ日本語補習校の運営に関わるデュッセルドルフ日本人学校事務局のQさんは、「補習校の先生には全日制的授業も見てもらい、補習校の先生のレベルアップも図るようにしている」と話す。また、先生を探すのも大変である（Qさん）。



れる。そして、1982年に中1クラス、1984年には小5から中3までの学級が開設され、1988年には「日本語教室」の父兄からの要望で、「日本語補習教室」に改称される。1990年には小5から中3の各学級で毎週土曜日午後2時から5時半に授業を行う。1996年には小4クラスが開設され、2003年に「日本語補習教室」から「日本語補習校」に改称される。2007年には小1から小4年学級が設置され、小1から中3までのクラスがそろそろ。図3-11が示すように2014年からは生徒数がさらに伸び200人を超え、2016年5月時点で、小学部163人、中学部38人で生徒数も201名で日本人学校の中学部の生徒数を追い抜く勢いである（デュッセルドルフ日本人学校 2016）。この背景には、ドイツ人と国際結婚し、片親をドイツ人とする子どもが増加したこともあり、日本人学校事務局のQさんによると2000年代の初め頃から補習校全生徒の6割が国際結婚した親の子どもたちである。日本語補習校はもともとは現地校等へ通う日本人の子どもたちの父母の熱意と理事会の創意によって、1979年に「日本語教室」として発足したが、2016年時点では、「渡独年数の長い子、片親をドイツ人とする子、ドイツに生まれ育った子」など様々な子弟に、日本語教育を指導する場になっている（デュッセルドルフ日本人学校 2016）。

図3-11 デュッセルドルフ日本語補習校の生徒数推移（2007年～2016年）



出典：デュッセルドルフ日本人学校（2016: 26）

デュッセルドルフ日本語補習校運営に関しては、日本人学校理事会の下に置かれ、補習校運営委員会がその運営を行い、日本企業代表者も運営に関わっている。運営委員会は（1）日本人学校理事会代表4名（日本人学校理事長及び副理事長から1名、デュッセルドルフ日本国総領事館代表、日本人学校校長、日本人学校理事会事務局長）、（2）補習校管理職（副校長）、（3）父母運営委員4名（小学部、中学部それぞれから選出さ

れる) から成り立っている<sup>46</sup>。補習校生は全日制日本人学校の運動会や学校祭等の学校行事にも参加し、全日制の図書館も利用できる (デュッセルドルフ日本人学校 2016)。

### 3.4.2.3 インターナショナルスクール

駐在員の子弟の通うインターナショナルスクールは、デュッセルドルフ市北西部にある International School of Duesseldorf (以下 ISD) とデュッセルドルフの南西隣町のノイス市にある International School on the Rhine (以下 ISR) がある。表 3-9 は両校を比較したものである。ISD は、1968 年 9 月に、米国式の学校として、7-12 学年の合計 32 名の生徒でスタートし、1985 年に現在のデュッセルドルフ国際学校 (International School of Duesseldorf) に改名された (吉田 2017: 76)。一方、ISR は 2003 年にできた比較的新しいインターナショナルスクールである。前述のように ISD には、毎年 4 月に、6-16 名ほどのデュッセルドルフ日本人学校中学部の卒業生が 9 年生として入学してくる。そして 4 月から 6 月までは、彼ら専用を用意された ESL (English as a Second Language) の集中プログラムで英語を勉強する。受け入れ体制もしっかりしていて、無理なくインターナショナルスクールのメインコースの授業に移行できるようにプログラムが組まれている。

一方、ISR では、近年日本人低学年の生徒数が伸びている。その理由の一つとして、小 1 から低学年向きの日本語課外授業があることが考えられる。海外で母国語を心配した親のニーズがその背景にある。また ISD はどちらかというところ「遊びの方が優先」とされるのに対し、ISR は「スパルタ教育」で授業は英語で行われることはもちろんドイツ語のクラスも毎日あり、教育熱心な日本人の親に人気がある (日本人向け NPO 法人スタッフ U さん)。さらに表 3-9 が示すように ISR にはデュッセルドルフをはじめ西隣町のメアーブッシュ<sup>47</sup>方面へのスクールバスがあり、低学年の子弟の親にとっては学校の送迎の必要性がないことも利点である。

また ISD の専任日本語教師の S さんによれば、生徒たちはインターナショナルスクールに通う一方、ほとんどがデュッセルドルフ市内の日本の塾に通い、日本の中・高・大学受験に備えている。2016 年にはデュッセルドルフ市内にインターナショナルスクールに通う日本人生徒を主に対象にした塾も新たにできた。

なお、インターナショナルスクール (ISD) の日本語担当教師は、近年の日本人生徒たちについて、インターネットを通じ、日本の情報をいつでも得られ、日本との距離も

---

<sup>46</sup> デュッセルドルフ日本語補習校 <http://jisd.de/hosyuko/shokai.html> 2018 年 5 月 25 日 閲覧。

<sup>47</sup>メアーブッシュは、デュッセルドルフから西に 10 km、車で 15 分くらいの町で、8 つの地区から成り人口 55,354 人である (2010 年)。人口の約 1,6%にあたる約 761 人 (63 人に 1 人) が日本人で、特に Buederich 地区は人口 21,500 人のうち約 4% (約 24 人に 1 人) が日本人である。

STATISTISCHES JAHRBUCH 2010 <http://www.netdemeerbusch.de/>  
2018 年 8 月 5 日閲覧。

感じることもなく、以前に比べて新たな環境に順応することも強いられず、「受動的」で自分たちからの働きかけの意欲に乏しい（吉田 2017: 76）という面も指摘する。

なお、ISD と ISR それぞれの設立クラス、生徒数、国籍数、授業料、大学進学率等の詳細は、以下表 3-9 に提示する。

表 3-9 ISD と ISR の学校情報

学校名	ISD ( International School of Duesseldorf )	ISR ( International School on the Rhine)
設立年度	1968 年	2003 年
設立クラス	3 歳から 19 歳 レセプション 3-4 歳 プレパラトリー 5 歳 小学部 1-5 年 (6-11 歳) 高等学部 6-12 年 (11-19 歳)	3 歳から 19 歳 幼稚園 3-5 歳 小学部 1-4 年 (5-10 歳) 中学部 5-8 年 (9-15 歳) 高等部 9-12 年 (13 歳-19 歳)
生徒数、国籍数	1,048 名、40 か国 (ドイツ 29%・アメリカ 15%・日本 11%・イギリス 10%・韓国 5%・他 30%)	760 名、45 か国 (ドイツ 50%・中国 10%・日本 10%・他 30%)
日本人生徒数	小学部 14 名 高等学部 66 名	低学年層に日本人が多い 77 名 (2018 年 8 月 20 日)
外国人に対する英語指導	あり デュッセルドルフ日本人中学校卒業生の為の集中クラスもあり	2-6 年生対象に短期間英語強化を目的としたクラス。
日本語教育	小 6 から	grade 1-5 週 1 回課外授業 grade 6-10 週 3 grade 11-12 IB <sup>48</sup> 日本語
授業料	レセプションーgrade 5 16,333 ユーロ grade 6-8 17,597 ユーロ grade 9-10 18,762 ユーロ grade 11 20,873 ユーロ grade 12 21,190 ユーロ	キンダーガーデン 1 11,520 ユーロ キンダーガーデン 2 12,585 ユーロ grade 1-5 14,850 ユーロ grade 6-9 16,290 ユーロ grade 10-12 17,685 ユーロ
大学進学率	全卒業生の 98%以上 日本人卒業生のほとんどが日本国内の国・公・私立大学に進学	まだ卒業生は設立後、出ていない
スクールバス	なし	デュッセルドルフ、メアーブッシュ等各方面のスクールバス有

出典：インターナショナルスクール デュッセルドルフ 外務省諸外国・地域の学校

<sup>48</sup>IB 国際バカロレア (International Baccalaureate)

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/ib/1307998.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1307998.htm) 2018 年 8 月 25 日閲覧。

情報 2017年12月時点

[https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world\\_school/05europe/sch5300000301.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/05europe/sch5300000301.html)

2018年6月10日閲覧

インターナショナルスクール オン ザ ライン

[https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world\\_school/05europe/sch5300000601.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/05europe/sch5300000601.html)

2018年6月10日閲覧

### 3.5 デュッセルドルフエクスパトリエイト及びコミュニティの現状・変容と多様性

企業派遣者の入れ替わりはあるものの、企業派遣者中心の日本人社会が2018年時点においてもしっかりと存続している。デュッセルドルフ日本人学校の児童数や日本クラブの法人会員数が、1990年以降減少しているとはいえ、それぞれの運営には日本企業が従来通り大きく関わり続けている。

全体からみるとデュッセルドルフのエクスパトリエイト・コミュニティは、戦後から企業派遣者が中心になり形成され、存続し、現地社会と安定した関係を保っている様相を持つ。さらにコミュニティの現状と変容を日本クラブや日本人学校及び日系不動産などの日本人関連業者の聞き取り調査、現地で長く暮らす日本人や永住者のインタビュー・データなどから捉えていくことで、コミュニティの新たな側面を検討する。

本節では最初に、エクスパトリエイト及びエクスパトリエイト・コミュニティがホスト社会とどのように関わっているのか、そして日本人社会の紐帯の在り方に焦点を当てる。次にデュッセルドルフにおける日本人駐在員家族の教育観や生活意識面における変容に注目する。

#### 3.5.1 現地社会とのつながりと日本人コミュニティの紐帯

日本人駐在員は、現地のドイツ社会とどのように関わっているのだろうか。また、日本人社会全体の紐帯にも注目する。1950年代当時は、駐在員家族は現地幼稚園や現地校に通う子どもを通して、現地のドイツ人と関わりがあったことが当時の駐在員の手記から読み取れる。1972年に全日制日本人学校が開校するまで、駐在員家庭の子どもたちは皆、現地の学校に通っていた。ドイツには、在独外国人は、ドイツの教育を受けなくてはならないという法律がある（デュッセルドルフ日本クラブ 1990）。現地校に通う日本の子どもたちは、皆ドイツ語がよくできた様子がその当時の日本語の補習授業講師の言葉からうかがえる。「当時は教科書の日本語の意味を説明させようとするドイツ語で説明しようとするほどで、全くといっていいほど日本語を忘れていた子が多かった」という内容が記されている（デュッセルドルフ日本人学校 1996）。また、現地校に通う子どもを持つある駐在員は、現地校の先生が入学した日本人児童に大変興味を持ち、「良いお友だちをつけたら何かと楽しい学級生活ができる様、格別に大切に扱っていただいた」と感謝の手記を記している（服部 1990: 41）。日本人児童を受け入れる現地校が日本人児童をサポートしてくれていた様子も駐在員の言葉から伝わってくる。1950年・1960年代にデュッセルドルフに在住した企業派遣者たちの手記には、次のように書かれている。

ある駐在員はドイツ人との交流に関しては、主として幼稚園や小学校の子どもの友だちの家族、近所の人との付き合いで、コーヒーやケーキに招かれたり、食事に誘ったり誘われたりなどを通して、「親密さが徐々に深まっていった」と記す（デュッセルドルフ日本クラブ 1990: 39）。さらに別の駐在員は、現地の文化や歴史、現地のカーニバルなど生活面を楽しんだり、仕事面でも現地のドイツ人と家族ぐるみのお付き合いをしたり、公私ともに充実していたと記している（デュッセルドルフ日本クラブ 1990: 41-2）。また、ドイツ語の勉強や少しでもドイツ語を覚えるように努力した方がよく、その方がドイツの生活を十分楽しめるという当時の駐在員の言葉（デュッセルドルフ日本クラブ 1990: 44）からも彼らが現地社会に溶け込もうと努力していた様子がうかがえる。1974年に声楽の勉強の為デュッセルドルフに来てから、滞独 43 年になる日本人クラブスタッフの R さんは駐在員家族からよくベビーシッターを頼まれた<sup>49</sup>が、当時の母親たちはドイツ語がかなりできたという（R さん）。

それでは近年はどうであろうか。日本人学校と日本クラブ、日本人関連団体及び関係者、そして最後にデュッセルドルフ在住のドイツ人たちの聞き取り調査から現状を捉える。

### 3.5.1.1 デュッセルドルフ日本人学校の現状から

まずはデュッセルドルフ日本人学校の現状から見ていく。日本人学校には、海外の日本人学校ということで、国際交流親善に力を入れており、プログラムの一つとして姉妹校の現地校とのホームステイ交換プログラムがある。しかし、実情は日本に興味のあるドイツ児童が増えてプログラム参加希望者が多いのに対して、日本人生徒側の希望者は少なくプログラムが成り立たない（日本人学校事務局 Q さん）。日本人学校で行われた児童生徒の実態調査結果をみても、ドイツ社会や文化、ドイツの人びとに進んで関わりを持とうとしている日本人生徒が多いとはいえない（デュッセルドルフ日本人学校 2016）。

また、Q さんによるとプログラム参加希望者が少ないのは、親の姿勢も関係している。実際、父母の間でも外国語である英語及びドイツ語教育に対する要望も多く、特に帰国後に有利と考え英語教育に対する関心が強いが、ドイツ人生徒が日本人生徒宅に泊まるホームステイとなると日本人の親も言葉の問題や家に呼ぶのには「家の中がきれいに整理整頓されていない」「家が狭い」などの理由から少しためらいがある。

このように日本人学校に通う子どもやその親たちの間で、ドイツ人と積極的に交流をしたり、言葉や文化を学ぼうとする意識の低さがみられるが、これに関連して、学校と関わろうとする親の意識面の低下もある。Q さんによると最近では、あまり学校と関わ

---

<sup>49</sup> 当時、日本語ができ車を運転する女性で、幼児や小学校低学年の子どもを見てくれるベビーシッターの需要が多かった。R さんは、夫の会社関係の食事会などの時に母親たちからよく頼まれ、15 年ほどベビーシッターのアルバイトをしていたと話す（2017 年 3 月 13 日 聞き取り調査）。

りたくない親が増えていて、保護者の協力を必要とする学校祭などで保護者の中には負担が大きいと感じる傾向があるようだ。

さらに Qさんはデュッセルドルフ日本人学校の教師においても教育に対する意識の低下があることを懸念する。

Q：先日、日本から K 高校（日本での進学校）の校長先生が見えて教育についての講演会があったんですけど（日本人学校の先生たちは）みんな行かないんですよ。日曜日の午前中なのにね。たった（20名中）6名ですよ、参加したのは。家と学校の往復だけじゃねえ。（行けば教育の）肥やしになると言うんですが、なかなか行かない。

さらに、派遣された先生の教育への意識の低下に加え、近年では海外勤務を希望する先生も減っている現状もあると話す（Qさん）。デュッセルドルフ日本人学校においては生徒数が10年前より減少した為、以前27名だった教師が2017年時点で20名に減ってしまった。そして最近では2年間派遣のシニア教員プログラムで派遣されるケースも目立つが、シニア教員には退職した校長や教頭が多く、長い間授業を受け持っていないことやパソコン操作がよくできなかつたり、病気がちの為、指導などに問題が生じている（Qさん）。

日本人学校が創立された当初は、子どもの教育に対し、親や教師の熱意や気迫が感じられ、子どもたちも積極的に現地社会になじんでいた様子が駐在員の手記から読み取られた。しかしながら、Qさんの話から、現状においては、教育面からみた場合、日本人エクスパトリエイト・コミュニティの結束が薄れ、弱体化した様相もみせる。

### 3.5.1.2 日本クラブの現状から

次に日本クラブの現状を見ていく。前述のように日本クラブには多くの部や同好会があるが、活動はボランティアにより成り立っている。しかし、日本クラブスタッフの Rさんは、最近ボランティア希望者が減っていると話す。また、ドイツに40年近く暮らし、文化部に長く携わってきた女性は以下のように述べている。

20年前とは会員の方たちの生活環境が一変し、出向かなくても情報が取れる時代となりましたので、最近では、見てやろう、聴いてやろうという意欲が薄れてきたのでしょうか、参加者を募るのに苦労している現状です（デュッセルドルフ日本クラブ創立50周年記念誌編集委員会 2014: 22）。

女性の語りから活動に携わるボランティアのみでなく、オペラ観劇、工場見学など様々なプログラムの参加者も減ってきている傾向もうかがえる。

また、Rさんによると以前は日本クラブに助けを求めてくる人が多く、クラブのスタッフも一生懸命に対応していたと語る。

SNSなどの進歩により情報が簡単に入手でき、わざわざ日本クラブまで足を運ぶ必要がなくなったこともクラブ主催のプログラム参加者数の低下に関係しているともいえる。クラブ主催のプログラム参加者やボランティアの減少が、ドイツの文化や生活への興味・関心や現地社会との接点を求めようとする駐在員の意識の低下を示唆していると単純には言い切れない背景がある。

しかし、以前に比べて、日本クラブ活動のボランティアやプログラム参加者の減少は、日本人コミュニティの紐帯の弱体化の表れとも考えられる。実際、日本クラブは筆者の在独中の2000年代と雰囲気が随分変わってしまった。当時は、日本クラブ内に日本食レストランもあり、昼食時にはビジネスマンや家族連れでにぎわい、週末は日本の図書閲覧室も座る席がないくらい混みあっていて、大変活気があった。しかし、今は場所も移転し、日本食レストランはなくなり、建物も近代的なオフィス風になり、閑散とした雰囲気になってしまっている。

それでは、その他の日本人関連団体は、エクスパトリエイトやエクスパトリエイト中心のコミュニティをどのように捉えているのであろうか。

### 3.5.1.3 日本人関連団体及び関係者から見た現状

現地に滞在する日本人向けに様々なプログラムを開催し、日本人と現地社会との交流促進に尽力する団体代表のNさんは、日本人とドイツのコミュニティの接点の少なさについて懸念する。

N：日本人コミュニティとデュッセルドルフ市は外交的にはうまくいっているし、ドイツ人は日本人を大切にします。日本人は、問題を起こさないし、経済的にも余裕がある。そしていつかは（日本に）帰るので、お客さんとしては支障がないとみています。（デュッセルドルフに在住の駐在員たち自身も）どうせ3年だからということ。（中略）でもそこには個人が介在していません。

さらにNさんは、日本とドイツの教育理念の違いについて言及し、日本人は細かい決まりを守り、規律正しさに重きを置くのに対して、ドイツ人は個人を尊重し、自分の意見をきちんと持ち、それを主張できることを大切にしていると述べる。そして、お互いを知り、理解しようとする姿勢が大事で、ドイツ人と日本人コミュニティのつながりをNさんは強く望んでいる。

また、デュッセルドルフ大学現代日本研究所で、ドイツ人学生を指導するW氏は、デュッセルドルフ日本人コミュニティは問題をはらんでいると話す。

W：ここでは、日本語だけで生活ができる環境があり、ドイツ語を習う必要がなく、日本人は充足した生活を送っていると言えますが、内にこもりやすいと思います。苦勞してドイツ人とコンタクトをとろうとする必要もなく、どうしてそんなに苦勞してまでドイツ人とコンタクトをとるのかと。そこが問題です。



確かにデュッセルドルフには、全日制日本人学校があり、子どもたちは日本国内と同じような教育を受けることができ、日本人を対象にした病院、美容院<sup>50</sup>、旅行会社、語学学校などすべてがそろっている。また、食に関しても日本食レストランや日本食料品店も増え続けている。北林によると 1988 年以降、日本人向けの十分な生活インフラが整い、その後は日本人と現地のドイツ人との交流を促進する目的での行事の開催などが進んでいる（北林 2006: 29）。2002 年から毎年開催されている「日本デー」もその一つと言えよう。

しかし、W 氏は「日本デー」は、毎年多くのドイツ人が訪れ、日独交流が非常にうまくいっているように見えるが、それはあくまで表面的であり個人レベルでの交流になっていないときっぱり話す。

W：日本デーもだんだん大掛かりになってきて、人は来るけれど日本の文化がどういうものか、片方（日本側）は見せるほうで、（ドイツ人側）は享受する方で、個人的なつながりが見えません。

日独の個人的なつながりの希薄さに関して、日本人親子の子育てサポート活動をする P さんは、多くの駐在員配偶者たちが現地のものではなく、日本人向けに用意された習い事をしている点に言及し次のように語る。

P：わざわざ日本人向けの料理教室にあえて行かなくてもドイツの市民大学などにも（一般向けの）料理教室もあるのに。

さらに子どもに関しても日本人の子どもたちは勉強や塾で忙しく自由時間もなく、せっかくドイツに居るのにもったいないと話し、子どもたちのサッカークラブなどでも現地のものもあるのに日本人だけのチームに入れたりするのは「残念過ぎる」と嘆く。デュッセルドルフ大学教授の W 氏も日本人学校生徒について、帰国後日本で落ちこぼれないように勉強にとっても忙しく、ドイツの学校の生徒とも交流がないことに触れ、「1 年でもドイツの学校で学ぶ機会でもあればいいのに」と話す。

日独交流促進の活動をする公益法人スタッフの O さんも同様に日独交流がないのは、「もったいない」と嘆く。

O：私たちの日独交流の場のプログラムに来てほしいです。ドイツ人とつながってほしい。いろんな経験をして。新しいものを知ったり、多くのことをみんなに経験してほしいと思います。

---

<sup>50</sup> ここ数年、美容院の数が急激に増えてきている（R さん）。

ドイツ人と国際結婚した永住者の Z さんも日本人駐在員配偶者たちのドイツ人とのつながりの少なさを懸念し、「せっかくドイツに来たのだから、ドイツ語を話して現地の人と交流しないともったいないと思います」と語る。

このように現地での日本人関連団体や永住日本人は、日本人駐在員が現地社会と交わらないことを懸念し、個々の日本人が現地社会から孤立化していることに言及している。少なくとも日本人コミュニティ全体としては、ドイツと経済的にも連携し、友好関係を結び、文化面でもうまくいっているといえるが、個人レベルでの現地社会との紐帯は弱いことを強調する。

しかし、聞き取り調査から見えてきたものは、日本人関連団体が、日本人コミュニティを一つのまとまったコミュニティと安易に一面的に捉え、さらに、日本人コミュニティ全体の紐帯が強いということを前提に話を進めているということである。聞き取りデータからは、個々のエクスパトリエイトが全く見えてこない。また、「個々人レベルでの現地社会からの孤立化」という言葉で一括りにしてしまうことで、個々の日常生活実践やホスト社会への意識が不可視化されてしまう。エクスパトリエイトに対する一方的な理解になっている点は否めない。

それでは、デュッセルドルフ在住のドイツ人は、どのようにエクスパトリエイト・コミュニティを捉えているのであろうか。

#### 3.5.1.4 ドイツ人から見た日本人社会と駐在員配偶者

次に、デュッセルドルフ在住ドイツ人の MF さんと WH さんのインタビューから、彼女たちがどのようにデュッセルドルフ在住の駐在員や日本人社会を見ているのかを提示する。

MF さんは、ドイツ市民大学 (VHS) の外国語としてのドイツ語会話コースの講師であるが、市民大学は半年ごとの前期、後期に分かれ、毎年、クラスに数名の日本人駐在員配偶者の参加者が居るという。そして、時には、日本人生徒たちとドイツ語コース後にカフェに行ったりすることもあるが、基本的に日本人とのコンタクトは少ないという。

MF：デュッセルドルフの日本人コミュニティとはコンタクトがあまりないかな。

\*：どのようにしたらドイツ人とつながりができると思いますか。

MF：やはり、ドイツ語がハンディキャップになっていると思いますが、ドイツ人、日本人ともお互いに学ぶことがあるのに残念です。でも市民大学には、言葉以外に、歌や絵、ダンスなどがあるので、そのようなコースをとれば現地の人や外国人と知り合えますね。

さらに、MF さんはデュッセルドルフには、日本人学校など日本人社会があるのはいいが、もっと開かれるべきであると話す。そして、日本人のみでなくドイツ人も双方がつながりを持ちたいという意識を持ち、交わることが大切だという。また、文化的な違いも指摘し、日本人はグループ行動を好むのに対し、ドイツ人は、ひとりを好むと話す。

さらにドイツ人は誘われたりしても、行く意志がない時は、はっきりと断るのに対して、日本人は常に返事は「イエス」であることにも言及した。

同様にデュッセルドルフのインターナショナルスクール (ISD) の元学長補佐の WH さんも、日本人は控えめで、「ノー」と言わない傾向があると話す。2 人の日本人に対する認識は、まさにステレオタイプ的で、比較的日本人と接点のあるドイツ人でさえも、このような見方をすることに驚きを感じ、ますますドイツ人と日本人の個人レベルでのつながりの少なさを痛感した。

さらに WH さんは、日本人社会は孤立的でとても残念だと語る。

WH : 以前、ISD で働いている時は、日本人の生徒や親と学校内においては (事務的な) コンタクトがありましたが、個人的にはつながりがなかったです。

\* : 日本人駐在員についてどう思いますか。

WH : 皆さん、家族旅行をしたり、料理やスポーツを習ったり、興味のあることはしているようですが、ドイツ人の人たちの中には入っていかないようです。

\* : それはどうしてだと思いますか。

WH : 言葉の問題もあり、ひとりだけ日本人だと不安を感じるんだと思います。勇気がないのかと。また、ドイツ人のお母さんたちも仕事や家事で忙しいこともありますね。

職場などで比較的日本人と接点を持ちやすいドイツ人でさえもなかなか日本人と個人的にはつながらず、デュッセルドルフの日本人社会は閉鎖的で孤立していると感じている。もちろん、2 人のドイツ人へのインタビューからは他のドイツ人たちが日本人社会を閉鎖的と捉えているとは断言できないが、日独交流活動を行う法人スタッフの O さんも、日本人だけのグループで買い物したり、カフェでお茶をして談笑している日本人女性たちをよく見かけるが、そのような場を目にして、ドイツ人は「日本の人たちは、ここで交わる気持ちがないのかしら」という気持ちを抱くのではないかと懸念する。

このように日独の個人的なつながりが見えない反面、日本人コミュニティは現地社会に大きな影響を与えている。

経済面においてはデュッセルドルフの日本人社会とデュッセルドルフ市は、友好関係を結び、日本企業に対する受け入れ体制もしっかり整っている。前述のように日本企業はデュッセルドルフ市及び NRW 州政府からもサポートを受け、このような安定した日独関係は、「歴史のなせる業」とデュッセルドルフ日本商工会議所総長の Y さんは話す。デュッセルドルフは、進出する日本企業にとっても滞在許可や労働許可がおりやすい。また、ドイツでビジネスをする上での知識、法律などすべて日本語でサポートがあることも日系企業がデュッセルドルフを拠点にする一つの理由にもなっている (Y さん)。

また、企業のみでなく、ドイツ人や他の外国人も個人的に日本に対して興味や関心を持つようになってきている。日本クラブ関係者によると近年は日本人のみでなく、ドイツ人やイタリア人、韓国人などが剣道、空手、囲碁などの同好会に参加している (R さ

ん、Y さん)。文化面でも日本のアニメやポップカルチャーなどに対する興味を持つドイツ人学生も多い。デュッセルドルフ大学教授 W 氏によると 1990 年代の日本のポップカルチャーが世界の若者を魅了し始め、その時代に育った学生たちが漫画、アニメ、ゲームなどに関心を持ち、大学で日本学を専攻するケースが多いという。2017 年時点で、デュッセルドルフ大学の現代日本研究所には、主・副専攻あわせて約 700 人の学生が日本の歴史、社会、文化史を学び、学生たちには、デュッセルドルフ市において日本関連機関を訪問したり、研修したりする機会が与えられている。当市には日本クラブ、日本商工会議所、日本人学校、恵光日本文化センター<sup>51</sup>、日本貿易振興会などあり、ドイツ人学生たちは、いろいろな面で日本の社会や文化に触れる機会に恵まれている (W 氏)。

学生のみでなく、前述のように、デュッセルドルフ日本人学校の姉妹校であるドイツ現地校において日本に興味を持つ生徒が多く、日本人学校との交流会、合同授業、相互訪問などドイツ人生徒に人気が高い (Q さん)。

今まで日本人エクスパトリエイトと現地社会とのつながりを見てきたが、日本人海外駐在員は国境を越えた経済活動を行い、自国とホスト国の経済発展に貢献していると言える。また、文化面においても食文化なども含め日本文化はホスト社会に大きな影響を与えている。

しかし、個人レベルの現地社会との接点においては、日本人関連団体や現地ドイツ人たちは、接点が少ないことを懸念している。そして、日本人コミュニティ全体の紐帯は、弱体化がみえつつも、経済面の日独友好関係や文化面での日独交流が前面に出され、それらに注意が向けられ、コミュニティの紐帯の弱体化は、あまり意識されていない様相を持つ。

今までの聞き取り調査データからは、エクスパトリエイト個々人の生活やアイデンティティ、自国やホスト国との個人的ネットワークなどが見えてこない。エクスパトリエイト・コミュニティの特徴を理解する為には、個々のミクロな生活世界を見ていくことが不可欠である。

それに先立ち、ホスト国における日本人関連団体が、駐在員や駐在員配偶者たちをどのように捉えているのか、また、駐在員の全体的な近年の変容を整理する。

### 3.5.2 日本人駐在員の変容と駐在員配偶者の生活意識の多様性

グローバル化がますます進む中で駐在員の在り方にも変化があるのであろうか。また、また駐在員家族の教育観や駐在員配偶者の生活意識に変容は見られるのであろうか。デュッセルドルフの日本人関連団体の聞き取り調査を中心に検討する。

---

<sup>51</sup> 恵光日本文化センター

1988 年にデュッセルドルフに作られ、仏教から生まれた日本の伝統文化の実践や紹介を行っている。伝統文化講演会や茶会、座禅会、書道展など様々な催し物があり、日本庭園もある。

<http://www.eko-haus.de/ja/about-us.html> 2018 年 8 月 15 日閲覧。

### 3.5.2.1 日本人駐在員の変容

近年の派遣される駐在員に目を向けると、以前はエリート層が多かったが、今は、その時代は終わり（日系不動産経営 V さん）、中小企業が進出している（デュッセルドルフ日本商工会議所代表 Y さん）。また、企業の方でも経費引き締め<sup>52</sup>が起こり、以前は、配偶者にもドイツ語や英語の語学学校の補助が出たが、昨今はあまり長い期間出なくなっている（O さん）。また、駐在期間も以前は平均 3.5 年であった（北林 2006: 33）が、日系不動産を 35 年経営する V さんによると最近では 1 年から 2 年で長くても 3 年の人が多く、成田からの直行便も 2014 年から就航したこともあり、「国内出張ベース」の感覚だと話す（日系不動産経営 X さん）。これはまさにグローバル化における「時間と空間の短縮」の現れである。そのような背景を反映して、今は便利な家具付きの家の希望が多くなってきているという。また、生活上トラブルがあっても、短い期間なので、引っ越さずに我慢するケースもある（V さん）。

駐在員の年齢層の若年化も近年の傾向の一つである（V さん）。35 年前に比べると現地で出産したり、幼稚園児を帯同する家族が増えている。また、単身世帯もふえ 40 代 50 代になると子どもの学校の為、日本に家族を残すケース、20 代 30 代に関しては独身者が多い傾向がある（Y さん）。

その他の最近の傾向として、デュッセルドルフ日本商工会議所の主催するセミナーにも派遣された中堅の駐在員女性参加が増え（Y さん）、駐在の妻に帯同する夫も珍しくなくなっている（O さん）。駐在員イコール男性という捉え方も見直さなければならなくなっている。

さらに、中小企業の進出、駐在期間の短縮、駐在員の若年化などが、日本人居住地にも影響を与えている。日本人駐在員の多くは、今でもデュッセルドルフ日本人学校から徒歩圏の物件を希望する（X さん）が、昨今では、値段も手頃で通学にも便利なデュッセルドルフ隣町のメアーブッシュ市に住む駐在員家族も増えている（V さん）。表 3-10 はメアーブッシュで 2014 年から 2016 年の 2 年間で市の日本人が 180 名ほど増加したことを示している。

表 3-10 NRW 州メアーブッシュ市の邦人数（人）

年度	邦人数（人）	男性	女性
2014	919	469	450
2016	1,097	555	542

出典：外務省領事局政策課

<sup>52</sup> 近年のグローバル競争においては、多国籍企業は「徹底した時間的及び費用的効率化」を求められている（日高 2012: 243）。

V: 最近はベットタウンでもあるメアーブッシュも人気があります。庭付きで広いし、日本人学校までも近いしね。(駐在員の) 奥さんでも運転する人が増えているし<sup>53</sup>。

また、メアーブッシュはデュッセルドルフ日本人学校に近いだけでなく、ノイス市にあるインターナショナルスクール (ISR) へのスクールバスが出ていて、通学にも便利<sup>54</sup>である。さらに、先述のように英語への強い関心から、インターナショナル幼稚園<sup>55</sup>がメアーブッシュにあることも当市への日本人の人口増加の一因かもしれない。

### 3.5.2.2 駐在員家族の教育観の変容

駐在員の間で子どもに対する教育観にも変化がみられる。2003年にデュッセルドルフ南西隣町のノイスに2校目のインターナショナルスクール (ISR) ができてから、デュッセルドルフ日本人学校ではなく、低学年からインターナショナルスクールに入れるケースも増えてきている。これは、今まで見てきたようにグローバル化とともに日本でも英語力が求められているという親の意識の反映と言える。しかし、同時に親は帰国後、学校での遅れや受験を心配し、子どもの母語の保持や日本と同じような教育内容も望んでいることは以前と変わっていないようにみえる。低学年に関して、近年 ISD よりも ISR に人気が出てきているのは、小1から日本語のクラスがあることも影響している。帰国後のことを心配する親のニーズに対応して、市内には、2016年にインターナショナルスクール生徒を対象にした3つ目の新たな進学塾がオープンしたことには触れたが、多くの日本人学校の生徒が通う既存の二つの進学塾もインターナショナルスクール生徒向けの講座を新たに開講し始めた。

海外に日本人学校があるにもかかわらず、インターナショナルスクールに通う場合は、インターナショナルスクールの授業料の援助をしない企業が多いが、中には全額ではないにしても援助をするところもある (Vさん)。インターナショナルスクールの授業料は、日本人学校<sup>56</sup>に比べるとかなり高額である (表3-9参照)。

---

<sup>53</sup> メアーブッシュ市のブーダリッヒ駅から日本人学校近くの駅まで電車で10分ほどで、車でも学校まで15分くらいである。

<sup>54</sup> ISRのあるノイス市は、NRW州の都市で、ライン川左岸に位置しデュッセルドルフの対岸にあるが、日本人向け生活インフラが整っていないので、居住地としてノイスを希望する日本人駐在員は少ない (Xさん)。

<sup>55</sup> 「インターナショナルモビール幼稚園」は、教諭資格のある日本人スタッフのサポートも受けながら、ドイツ語メインの幼稚園で、英語、日本語のクラスもある。  
<https://www.kita-mobile.de/ja/about-mobile.html> 2018年8月15日閲覧。

<sup>56</sup> 日本人学校の入学金は300ユーロで、年額授業料は3,960ユーロ (月額330ユーロ) である。

日本人学校編入学 [http://jisd.de/hennyugaku/nendo\\_tochu\\_hennyugaku.html](http://jisd.de/hennyugaku/nendo_tochu_hennyugaku.html)

また、今までは夫の帰国が決まると家族全員で一緒に日本に帰ることが多かったが、近年は、受験の際に帰国子女枠を使う為<sup>57</sup>に夫が帰国しても母子で現地に残るケースも増えている（Vさん）。その際には、会社から海外での生活補助がなくなるので、ドイツに残った母子は、市内の家賃の安いところに引っ越す場合もある。Vさんは、「(受験で) 使える切り札<sup>58</sup>があれば使うっていうことですね」と話す。

現地にいても常に日本を見据え、英語の優位性から、子どもをインターナショナルスクールに入れたり、帰国枠を使い、少しでも海外にいたことが受験にプラスになるように戦略を駆使する様相がみえる。

### 3.5.2.3 駐在員女性の生活意識面における多様性

次に日本人関連団体からの聞き取り調査をもとに駐在員配偶者の多様な生活意識を提示する。

日独交流サポート団体スタッフの O さんによると、今までの日本で仕事をしてきた駐在員配偶者たちが「しっかり現地でも何かやってみたい」、「ドイツ語を学ぶにあたり、日本人向けの学校ではなく、市民大学（VHS）に行ってドイツ語の勉強を頑張りたい」というケースもみられる。さらに「ドイツで仕事をしてみたい」という女性も居る。これは今まで現地の日本人関連団体や永住日本人、現地のドイツ人たちが駐在員や駐在員配偶者に対して、「日本人同士で固まり、個人レベルでの接点がない」と嘆いていた様子とは、反する状況である。

O: 以前は駐在の奥さんたちは仕事をするのができなかったんですが、今はビザも取れ、就業可能になり、日本で仕事をしてきた女性の中には、現地でも仕事をしたいと考えている女性も居るようです。

駐在員配偶者は、通常、配偶者ビザにて渡独する。現地にて就労希望の場合は、配偶者ビザを就労ビザ<sup>59</sup>に切り替える必要がある。また、会社によっては、妻が仕事をすることを禁止したり、逆に奨励するケースもある。就労ビザ取得にはドイツ語のレベルも問われ実際に配偶者が仕事をするには、難しさが伴う。

現地で仕事をするのが難しい状況の中で、ボランティア活動希望の駐在員配偶者も居る。デュッセルドルフ日本クラブスタッフの Y さんも日本クラブに駐在員女性から

---

2018年8月5日閲覧。

<sup>57</sup> 高校や大学によっては帰国子女枠を利用して受験する場合、海外での滞在期間を何年以上と指定する学校もある。

<sup>58</sup> 一定期間の海外在住があれば、一般受験ではなく帰国枠受験でき、学校によってはそれまでの成績、語学試験と面接だけの場合もある。

<sup>59</sup> ドイツ連邦共和国大使館 総領事館

<https://japan.diplo.de/blob/903852/5da5fa9b8d59dea280ca4cc0ce670ea8/visajapaner-data.pdf>  
2018年12月14日閲覧。

生活部や文化部などのボランティア活動の問い合わせがあるという。また、日本人親子子育てサポート活動をする P さんも、駐在員女性の中には、ドイツに暮らしてみても日本の教育制度の在り方に疑問を感じたり、現地の生活が気に入らず、夫が帰国しても母子ともに残るケースもあると話す。もし、ホスト国に永住するとなれば、ソジョナーからセトラーに変わることになる（第2章 2.2 参照）。

ドイツ人と国際結婚した Z さんも数人の駐在員配偶者の友だちを持つが、その女性たちは、幼稚園や小学校低学年のうちには現地の教育を受けさせたいと考えているという。

このようにみても様々な意識を持ちながら暮らす駐在員配偶者が浮き彫りになり、配偶者女性たちは、積極的に現地とのつながりをもとめず、一括りに捉えてしまうことには無理があるといえる。今まで駐在員配偶者の生活世界は企業派遣者である夫に隠れ、不可視化されてきた。生活に対して新たな意識を持ち、多様性も見せる女性たちの世界や視点に着眼することにより、デュッセルドルフエクスパトリエイト・コミュニティの新たな面を見いだすことにつながると考える。また、その際、デュッセルドルフの日本人社会が企業派遣者中心に形成され存続しているという点、そして、女性たちが駐在員である夫に帯同した立場にあるという点を見落としてはならない。これらの要素が複雑に絡みあい、女性たちは、様々な思いを抱きながら生活実践を行っている。永住者でもある日本人の Z さんや現地で日本人親子の活動に関わる P さんは、駐在員配偶者から、時折いろいろな相談を受けると話す。

Z: お友だちに駐在の奥さんがいるのですが、そのかたから、「日本の（駐在員の）奥さんたちはみんなおしゃれな恰好で、服装をあわせなければいけないのがつらい。日本人としてはずかしくない格好をするようにと夫の会社の上司の奥さんから言われる」というような悩みも聞いたことがあります。

また、日本人親子の子育てサポートプログラムを提供している P さんも、よく母親たちから幼稚園関係の相談を受ける。幼稚園児同士のけんかや時には親同士のけんかなどがある場合、誰にも話すことができず困っているといった相談や幼稚園のお迎えの後、皆でランチに行くことが多く、それに行かない自分はその中で「浮いてしまっているのではないか」という相談もあると話す<sup>60</sup>。母親たちは、何かネガティブなことを幼稚園や他の母親たちという夫の会社や夫の仕事にも影響があるのではないかと心配している（P さん）。

---

<sup>60</sup> デュッセルドルフ市には、日本人向けの幼稚園が4つある（日本人幼稚園、ライン幼稚園、恵光幼稚園、カリタス聖母幼稚園）。そのうち一つ、恵光幼稚園は市の認可の日独幼稚園で日本人とドイツ人の園児が半分づつであり、他は皆、日本人園児ばかりの私立幼稚園である。ほとんどの駐在員家族の子どもは、日本人向け幼稚園に通園する。



ZさんやPさんの話から、女性たちが、夫の会社での立場を常に意識しながらつながっている様子が見える。これは第2章で述べたCohenの「夫の仕事」が「妻の社会関係」に反映するということであろう。第5章で駐在員配偶者の語りから、さらに考察を試みたい。

本章ではデュッセルドルフのエキスパトリエイト・コミュニティの特徴、及び現状そして変容を様々なデータや戦後のコミュニティ変遷の経緯、コミュニティ内の中核機関や駐在員配偶者を取り巻く関連団体からの聞き取り調査から概観してきたが、女性たち自身は、自分たちの生活世界、そしてコミュニティをどのように感じ、捉えているのか。駐在員配偶者という立場にある女性たちが、日本人向け生活インフラが整い、日本人同士のつながりも密になりやすいとされるエキスパトリエイト・コミュニティの中で、どのように他者とつながり、どのような悩みや問題を抱え、それらに対処する為にどのような生活戦略を駆使し、日常生活実践を行っているのだろうか。

次章では、駐在員配偶者たちの日常生活実践をインタビュー・データから、考察していく。

## 第4章 駐在員配偶者の日常生活実践

本章では、デュッセルドルフ駐在員配偶者のライフストーリー・インタビューをもとにトランスナショナルな社会空間にあるエクスパトリエイト・コミュニティにおいて、女性たちがどのような日常生活実践を行っているのかを見ていくにあたり、次の8つの項目に注目する。

- ① 「駐在員配偶者」カテゴリーに期待される規範
- ② 「駐在員配偶者」同士における関係性
- ③ 結束と連帯
- ④ 妻・母としての立ち位置
- ⑤ 駐在生活における自己への意味づけ
- ⑥ エクスパトリエイト・コミュニティからの解放
- ⑦ 中断されるライフコース
- ⑧ 自国の家族・兄弟とのつながり

### 4.1 「駐在員配偶者」カテゴリーに期待される規範

仕事を目的に海外に移動した夫に帯同した妻たちは、現地にて「駐在員配偶者」カテゴリーと向き合うことになる。山田富秋は「カテゴリーには、当該文化のイデオロギーを知らず知らずのうちにその成員に浸透させていくような『権力作用』が働いている」と述べる（山田 1992: 72）。さらにサックスは、あるカテゴリーのメンバーに属する「一人の人の運命というのは（そのカテゴリーのメンバーである）他の人びとの運命に結びつけられており、その結果、内部でもメンバーによって執行されている当のカテゴリーを中心とした社会統制のシステムが規則的につくり出されていく」としている（Sacks 1979=1987: 36）。

しかし、「駐在員配偶者」というカテゴリーは、他者が駐在員配偶者たちに対して支配的に課したものではない。これはサックスが述べるように大人たちが若者に「押し付けた」「ティーンエイジャー」というカテゴリーとは違う性質のものである。つまり、「ティーンエイジャー」カテゴリーは、大人たちが10代の若者に対して課す支配的カテゴリーであり、若者たちはそれに対抗して、自分たちを「ホットロッダー」（車を改造して乗る者）という「非常に革命的なカテゴリー」で称する（Sacks 1979=1987）。それに反して、駐在員配偶者たちは、むしろ自分自身でそのカテゴリーのイメージを作り上げ、そのカテゴリーに対して何が期待されるか意識し、そのカテゴリーの持つ規範に合わせて、日常生活実践を行うことを試みる。「駐在員配偶者」カテゴリーは、他者から支配されるものではなく、自分たちが管理できるものである。駐在員配偶者たちが、どのように「駐在員配偶者カテゴリー」を捉え、日常生活実践を行っているのかに注目するにあたり、3人の駐在員配偶者（Kさん、Fさん、Jさん）の事例を取りあげる。

#### 4.1.1 「庶民」としての自分の位置づけ—K さん

K さん (30 代) は、調査協力者のひとりである J さんとそれぞれの子どもを通しての知り合いで、J さんから紹介を受けた。K さんは、インタビュー時すでに 5 年以上の在独であったが、夫はあと 1 年は確実にドイツに居ると話す。インタビュー時には長男が日本人学校の小学 4 年生、長女が「恵光幼稚園」<sup>61</sup>の年長であった。

K さんは東京生まれで、実家は飲食店の自営業で、母親も父親を手伝い、母親は 70 歳近くなっても忙しそうに働いている。実家の 1 階がお店で、2 階に家族が住み、朝食や夕飯は、お店で食べ、時にはお店のお客さんと一緒に食べることもあった。高校を卒業してから、夫と同じ会社に就職した。夫は福岡県出身で 1 才年上で、夫の父親は地元で建築関係の自営業を営み、親戚も皆、福岡に居る。夫は、高校卒業後、電機メーカーに就職し、地元勤務が希望だったが、東京勤務になる。K さんは、5 年半一般事務の仕事をしていて、結婚後は「同じ職場だとやりづらい」と夫から言われ退職した。しかし、結婚しても仕事を続けたかったので、派遣会社に登録し電機メーカーや飲料関係の子会社などで週に 2-3 回ほど仕事をした。そして、1 年半ほど仕事をしてから妊娠し、出産後も子どもが 1 歳半の時に保育園に預けて週 4 日、パートタイムで財団法人の事務の仕事をする。最初の保育園が 2 歳児までしか預かってくれないとのことで、3 歳からは別の保育園を探す。9 番目の希望の保育園にやっと空きがあり、新しい保育園に長男を預けながら、さらに半年ほど働く。そして長女を妊娠し、長女が 2 か月、長男が 4 歳になった時に夫の海外駐在に伴い渡独する。

\* : ドイツに海外勤務が決まった時はどんな気持ちでしたか。

K : 夫は海外勤務を希望していませんでした。でも言われてからはいいかなって。私は、海外には興味がなくて。海外旅行はサイパンに行ったぐらいです。

\* : 不安とかありましたか。

K : 全くありませんでした。興味もないんですけど。子どもが生まれたからみんな行こうって。

K さんは、夫の海外勤務に対して積極的な気持ちは見られないものの特に抵抗もなく渡独した。渡独時に年少であった長男はデュッセルドルフの「日本人幼稚園」<sup>62</sup>に入園を希望していたが、空きがなく 5 か月ほど待ち、年中になってから入園できた。当時は園児が多く、縦割りのクラスが 2 クラスで、1 クラス 25 人であった。お迎えの後は毎

---

<sup>61</sup> デュッセルドルフ恵光日本文化センターによる幼稚園。日本人・ドイツ人園児が半々で縦割りで 3 クラスある。1 クラスにドイツ人園児と日本人園児が 10 人づつで、先生も日本人とドイツ人がいる。ドイツ語と日本語の両方が園内で使用されるということで駐在員家族に人気があり、入園待ちであることが多い。K さんの長女は 1 才半の時に申し込みをしていたので、年少から入園できた。

<sup>62</sup> デュッセルドルフにある 4 つの日本人向け幼稚園の一つ。日本人集住地区のニーダーカッセルに位置し、日本人学校に一番近い。また、迎えの園バスサービスがある。

日皆で近くの公園に行き、夕方6時頃までおしゃべりをしていた。

\*：お友だち関係はどうですか。

K：日本のママ友は育児の話が多いんですが、こっちのママ友は、買い物とか習い事とかの話が多いです。日本のママ友の方が気を使わないです。

\*：それはどうしてですか。

K：こっち（デュッセルドルフ）は、いろんな行ったことがないいろんな世界に駐在したとか、華やかなイメージで、ああすごいなあって。私なんか庶民。そういうのを感じます。お買い物の話とかなんかも。お洋服とか食器とか。有名なお皿とか。そんなの知らない。どこどこのあれ欲しいよねっとか。私も、欲しいけど買えないな。（夫は）いろんな人がいるけどどちらが庶民だよって。

「庶民」という語りから、Kさんが日本人幼稚園に通う子どもを持つ他の駐在員配偶者とつながる中で、駐在員配偶者たちが自分とは違う世界に住む女性たちであるという思いを膨らませていった様子がみえる。Kさんの夫も他の駐在員から「あそこの奥さんからまた高い服を買わされたらしいよ」という話を聞いてくることがあり、夫はKさんに「うちは庶民だから買えないよって言う」とKさんは笑って話す。夫の「庶民」意識もKさんにさらに「庶民」意識を植えつけているのであろう。

Kさんは「駐在員配偶者」に対してあるイメージを持っていた。

\*：駐在員配偶者に対してどのようなイメージを持っていますか。

K：旅行にもいっぱい行って、料理教室とか、お花の教室とか通って、買い物とかいっぱいして楽しんでいるようなイメージがあります。

\*：実際、こちらに来ていかがですか。

K：元気な人が元気に活動しているなって。駐妻（駐在員の妻）っていうと商社のイメージ。ホームパーティーとかしているんだろうって。おもてなし上手な人がいっぱいいらっしやる。普通のお母さんでも人をいっぱい呼ぶのに慣れていようって。実際に行ってみたら、すごい上手だなあって思っ

Kさんの「駐妻」という言葉は、マスコミやテレビなどでよく使われたりするが、どちらかというと駐在員配偶者自身はあまり使わない傾向がある。筆者は、「駐妻」という言葉を聞き、Kさんが他者からのイメージで駐在員配偶者を捉えていると感じた。実際、Kさんは、「駐在員配偶者」に対して、旅行を楽しみ、家ではホームパーティをして、華やかに暮らす商社マンのイメージを持っていた。

そして、さらに駐在員配偶者につながる生活を通して、Kさんが今まで持っていた駐在員配偶者のイメージが強化、再認識され、作られていく。Kさんの「庶民」意識は、逆に「駐在員配偶者」に期待される規範に自分も合わせ生活していきたいという気持ちを表している。

友だちに関しては、自分と同じ価値観を持った人が居ることが分かり、つながっていく。長男が日本人のサッカーチームに入っているので、サッカーをする子どもの母親と仲良くなり、「子どもが仲いいとお母さんも話しやすい」と言う。また、長女の通う幼稚園の母親たちとも仲良くなり、ケーキ作りを一緒にしたりする。母親たちとは最初の出会いは緊張するが、一度仲良くなれば普通に話せるようになり、友だちは「同じような価値観の人です。なんか気が合う。私みたいな人も居るし」と安心したように話す。

K：お上品そうな人には話しづらい。私たち（気が合う友だち）は、ジーパンとかビーチサンダルで公園に行きます。公園にもきれいな恰好している人もいます。ジーパンをはいていても（スニーカーではなく）パンプスとか。みんなで話していても気づいたら、いつも同じ人と話しています。

Kさんの日常生活実践は、下の子が幼稚園に入る前は、朝起きて午前中に家事をして、下の子と公園に行ったり、「日本の生活」であり、海外においても日本とあまり変わらない生活であった。基本的に「出不精」で習い事も下の子が幼稚園に入る前は、自宅でドイツ語のプライベートレッスンやピラティスなどのレッスンを受けていた。また、他の駐在員配偶者の行く料理教室などにたまには行くが、「家で和菓子を作ったりするのが楽しい」と話す。

K：私は家の方が落ち着くんです。いろいろ（外で習い事）やっている人はすごいなあ。元気だなあ。私は疲れちゃうなあ。

そして何か悩み事があった時などは、「人には言いません。半分あきらめていますから。もともと自分のこととかは言うタイプではない」と言う。

デュッセルドルフでの生活も5年以上になり、長男は小学4年生、次男も幼稚園の年長になり、子どもを通して他の駐在員配偶者たちとの接点もあり、習い事などに誘われることも増えてくる。そんな中でKさんはあるルールを決める。

\*：お友だちから習い事など誘われた時はどうなさるんですか。

K：まずは何の習い事かどうかが聞きます。そして頑張っていきたいことは断るようになっています。もともと中学・高校時代は八方美人だったんですけど、社会人になってから嫌なことは断るようになり心がけてきました。断るキャラクターが出来上がってきたのかな。ここではそれを使って。そうすると誘われなくなります。でも興味があることは教えてって言うておきます（笑）。だから疎外感とかないです。疲れないように最初からしようかなって。

「断る」キャラクターを自分から打ち出し、定着化させることで、誘われることも少なくなり、それに伴い、断ることも減る。それでも好きなことの誘いを受けたい気持ち

はある為、「興味があることは誘って」ということは伝えておく。このような戦略により、Kさんは自分自身の中で「疎外感」を感じることは少ない。これは、Kさんが他の駐在員配偶者たちとわだかまりなく暮らしていく一つの戦略ともいえる。「あまりいろんなところに顔を出さないでいろんなことを言われないように心がけています」という語りから、自分が出ていくところを少なくすることにより、気を使いながら、うまく他の駐在員配偶者とのつながりを持つことに身をすり減らすこともなく、疲れないようにして暮らす姿勢がみえる。下の子は恵光幼稚園に通っているので、4時のお迎えまで時間があり、あいている時間は、家事や、家で和菓子作りを楽しんだり、編み物や刺繍などをしながらゆっくりと過ごす。日本で忙しくずっと働いてきたKさんにとり、デュッセルドルフでの生活は「休憩」の時である。

Kさんは、日常生活の中で、「駐在員配偶者」に期待される規範を意識しつつ、自分を「庶民」という立場に位置づけることにより、自分を例外化し、自分が疲れないように、他の配偶者女性たちの世界に自分の世界をかき乱されることなく、また同時に他の駐在員配偶者とわだかまりが生じないように上手に自分のペースで日常生活を送る。

次に、Fさんの語りから、「駐在員配偶者」カテゴリーとの向き合い方を見ていく。

#### 4.1.2 「駐在員配偶者」への感化とためらい—Fさん

Fさんは、2014年9月に重機メーカーの夫に帯同して、8歳・6歳・3歳の娘を連れて渡独する。Fさんは愛知県出身で、名古屋の大学で心理学を専攻し、外国語も英語とドイツ語の2か国語を勉強した。大学生1年生の夏休みにドイツ語の語学研修で初めて2週間海外に行く。2週間の滞在で午前中はドイツ語を勉強し、午後はフリータイムがあり、とても楽しく、ドイツの印象がとてもよくいつかドイツに住みたいと思った。卒業後は、椅子製品を扱う会社関係の営業で東京本社と名古屋支店で3年ほど仕事をするが、営業の仕事がハードで残業が多く、「自分は営業には向いていない」と思い、挫折を感じ退職する。その直後にイギリス・ドイツと10日間ほど旅行をする。渡航先のドイツの小さな町で病気になり、大学で勉強したドイツ語が全く通じず大変な思いをする。帰国して1年半ほどかけて転職先を探すが、その間、派遣会社に登録して、事務の仕事は続けていた。50通ほど履歴書を会社に送り、最終的に携帯電話関係の会社に就職する。しかし、1年半ほど働いた時に自分がいた広報部が会社の都合でなくなったこともあり、退職する。Fさんは、ドイツ旅行中にドイツ語が通じなかったこともあり、仕事をしながら週に1回ドイツ語の学校に通い、いつかはドイツに行きたいという気持ちがあった。退職後、ドイツの国内の語学学校に手紙を書いて探し、27歳で単身で渡独する。語学学校には、1年ほど在籍したが、授業料が高く、ビザの関係もあり、ドイツの大学に移る。大学では環境心理学を専攻し、2年ほど在籍したが、読む本の量も多く、授業についていくのが大変であり、挫折感を味わう。大学卒業までは7年かかると言われ、金銭的な面や自分の年齢のこと、そして「大学で勉強してもそれからどのようにつながるかわからない」と思い大学をやめる。その後、ドイツで仕事を探し、日系企業で仕事を始めるが、ドイツ人の上司と折り合いが悪く半年でやめ、2社目の日系企業では

日本人の上司とあわず、1年半でやめ、再び転職する。3社目の日系の会計会社が決まり働いている時に、日本から駐在でドイツに来ていた今の夫と共通の友だちを通して会う。夫は日本の企業から4年ほどの駐在予定で派遣されており、交際を始めて1か月ほどで帰国することになる。自分もドイツでの仕事をやめて帰国し、結婚を決める。当時を振り返り、Fさんはこのように語った。

F：この仕事はやめたくない。でも単なる事務の仕事で誰にでもできる仕事なので。大して重みがない仕事。(中略)初めてこの人といったら、人生が楽しいかなって思える人だったので。今までそういう人がいなかったんです。その時、この人といえるしかないと思いました。結婚しようと思って。

帰国後、結納を終え結婚し、夫の仕事の関係で大阪に住む。しばらく、夫の仕事の関係でドイツ語の通訳や翻訳の仕事をしたりしていたが、その年に長女が生まれ、子育てに追われる。2年半後に次女、さらにその2年半後に3女を出産する。仕事はしたい気持ちはいつも持ちつつ、育児に追われているうちに夫の海外赴任が決まる。ドイツ赴任が決まった時、Fさんは、「複雑な心境でした。ドイツは好きだし、第2の故郷なので嬉しい気持ちもありましたが、子どものことを考えると英語圏が良かったです。夫もアメリカ赴任が出世コースなので」と手放しでは喜べない気持ちであった。

渡独後、子どもの幼稚園や学校、家のことなど生活を立ち上げるのに大変で、落ち着くまで1年かかる。3歳、6歳の娘の幼稚園は、現地に行って探したが、10件ほど電話してもなかなか空きがなく、やっとのことで教会系の現地幼稚園を見つける。日本では3女は3月31日生まれで3歳になってすぐに幼稚園に入園したが、泣いてばかりで大変であった。そしてせつかく慣れた頃に今度は、ドイツの幼稚園に行くことになり、最初の2か月は「行きたくない。嫌だ、嫌だ」で大変だった。次女も人見知り激しく、言葉もできず、恥ずかしがり屋で慣れるまで時間がかかった。8歳の長女は、日本人学校の小学3年生に編入する。

インタビュー時は渡独後1年ほど経ち、現地での生活はだいぶ落ち着いたと話す。

\*：今の暮らしはいかがですか。

F：今はだいぶ落ち着きました。今はようやく、駐在妻の暮らしっていうのをしていますね。

\*：駐在員妻の暮らしというのは、どういう暮らしですか。

F：もともと現地社員。薄給で給料も悪くて、駐在員男性を横目にいろいろみてたわけですよ。(現地社員は)薄給で。待遇も悪くて。駐在員の奥さんの友だちはいませんでした。独身でこちら(ドイツ)で働いている友人しかいませんでした。今は自分が逆の立場だなんて。ああ、こういうんだな(駐在員の妻って)。みんな大体、テニスをしている人が多いかな。奥様方は(子どもの)お迎えの時間までテニスをやっていますね。あとお料理とか。あとは絵付けとか。そういう活動をね。

そういう方が多い。

「駐在妻」「奥様方」という言葉から、結婚前の自分の立場と今の「駐在員配偶者」の立場を常に比較し、意識しながら、暮らしていることが分かる。

Fさんも子どもを介して日本人駐在員配偶者のネットワークが広がり、習い事の誘いを受け、今は絵付けを他の友だちと習っている。そして「やっていることは楽しいが、複雑な心境です」と語る。

F：真っ白なお皿を自分で買って来て、書くんですね。ドイツ人の先生が持ち回りで生徒宅を回ってくるんですね。それは面白いです。でもお金が高い。レッスン代が1回40ユーロするんです。そういうのをみんな。料理教室もあるんですけど、それも1回50ユーロ。私の金銭感覚がおかしいのかわからないけど。皆さんちょこちょこ行ってらっしゃるんですね。(私と)金銭感覚が違うのかな。

Fさんは、独身時代に日本人駐在員たちを、薄給である自分とは違い、待遇もよく裕福な立場にいると捉えていた。そして今度は自分が「駐在員の妻になれた」と嬉しそうに話すが、他の駐在員配偶者たちとつながる中で、複雑な思いも抱く。金銭感覚の違いに戸惑ったり、駐在員に対して「もともと裕福な方が、駐在員として、かなり上の方がこちらに見えて。日本でも同じ生活をしているのかなあ。どうなのかなって」という語りから、生活レベルの違いも感じているのが分かる。また、日本人学校の授業参観や保護者会などに行くこともあり、「皆さん立派なんですよ。言うことが。すばらしい。話す力もあって。上手で。おもしろおかしくお話をなさって。お父さん方も立派な方なんだなって」と感心した様子で話す。保護者会には、母親のみでなく父親の参加も多く、両親が教育に熱心な感も受ける。親も一言づつ話すことも求められ、それを聞いてFさんは感心したのであろう。

さらに他の駐在員配偶者宅にお茶などに呼ばれていくと「素敵な食器とか、高そうな食器が出てくるんですね」と話す。また、デュッセルドルフの市内にある免税店のセールにも高価なブランドの食器などのセールがあり「日本の人だらけ。みんな平気で買えちゃうのかなって思います」と言う。そして自分もだんだんと他の駐在員配偶者たちに「感化」され、「ちょっと少しずつ高価なものをそろえていくのもいいかなって。きれいなものは見てきれいだし、いいものはいいし。だから自分もセールで、少し安くなっていたら買っちゃおうかな」と楽しそうに話す。

戸惑いを感じながらも周りの駐在員配偶者たちの生活ぶりを目の当たりにし、感化され、自分の中で「駐在員配偶者」の生活スタイルに少しでも近づこうと試みる。そして感化されていく過程を楽しんでいるようにさえ見える。

2回目のインタビュー時には、Fさんは、他の駐在員配偶者の誘いを受け、絵付け教室のほかに、月に1、2回日本人対象の料理教室とフラワーアレンジメント教室に通い始めていた。料理教室は1回50ユーロほどで、フラワーアレンジメントは1回120ユ



一口かかる。それに対して「自分は高いと思うんですけど、みんな（他の駐在員配偶者）は高いっていう感覚ではない。お金持ちなのかな。まあ、得られるものはありますが」と笑いながら話す。

ドイツでの暮らしも2年経ち、「いいものはいいい」「得られるものはある」と思い、他の「駐在員配偶者」の物に対する価値観に共感する様子も見られる、しかし、すんなりと駐在員配偶者の世界に入っていくわけではない。

F：しょっちゅう、金銭感覚の違いを感じます。皆さん、リッチな方が多くて、お皿もバンバン買うし。お皿も何万もするのを。うちには呼べません。すごいティーカップとか。絵付け教室の人はみんないいのを持っています。絵付け教室の人はみんな上品で。でも仲のいい友だちは、金銭感覚が同じです。本当のお友だちになっている人は、同じ（金銭感覚）でエプロンつけてジャージ着てるような人。皆さんいい人。いい人に恵まれたなと思いますね。こっちに来てる人は皆レベルが高いのかなって。みんなきれいでみんなおしゃれで。きちっとしていて教育熱心だし、おしゃれ。たまに嫌な人がいるみたいですが、そういう人には会っていません。

周りの「駐在員配偶者」との同一化を試みようとするFさんだが、「本当の友だち」は自分と同じ価値観や金銭感覚を持つ人を選んでいく。ここから、「感化」はされつつも、自分は違うと思う気持ちも抱き、「駐在員配偶者」カテゴリーに求められる規範に自分を合わせることに違和感も覚える。

それでは日本人駐在員が多く暮らすコミュニティの中で、Fさんは、どのように日常生活実践を行っているのでしょうか。

Fさんは、居住地としてメアーブッシュ<sup>63</sup>を選択するが「あんまり日本人社会にどっぷりつきたくないというのもあり、決めましたが、それは正解だったと思います」と話す。

F：（日本人学校近辺のオーバーカッセル、ニーダーカッセル地区<sup>64</sup>）に住んでいる人たちは、（日本人社会に）どっぷりですね。公園に行けば（他の日本人駐在員配偶者に）会うし、「和洋」<sup>65</sup>に行けば会うし。生活も大変だと思います。

\*：それはどのような大変さですか。

F：まず子どもが居るっていうのが大変でした。自分（ひとり）だけで来るのは楽ですが学校選びから、家、習い事選び。今のピアノの先生はあまりにも優しすぎて

---

<sup>63</sup> 注（47）参照。

<sup>64</sup> 第3章3.2.3参照。

<sup>65</sup> 日本人学校から歩いて2、3分ほどのところにある日本食スーパー。小さい店だが、野菜、肉、魚なども含めほとんどの日本食材が手に入る。

上達しない。子どもの為を思って変えました。今の先生は、優秀な先生でコンクールにも出てらして。体験してみたら、いい先生。子どもに合わせてやってくれるんです。(中略) 教える先生によって子どもは変わるんだって。今回は、子どもの学校、習い事、子どもの友だち関係とか、そういうぐちゃぐちゃとか。子どもの成績が悪くて。そういういろんな悩みがあってわずらわしさを感じます。しかもドイツ語というわからない言葉。私は分かるけど。これは大変だなあって。

Fさんは、今は駐在員配偶者として、新たな環境で新しい生活を立ち上げ暮らすことの大変さを痛感している。「ぐちゃぐちゃ」という言葉は、たくさんのことを一度に抱え込み、それらに対処しなければいけないという大変な状況をよく表している。さらにドイツの大学で学び、ドイツで日系企業で働いた経験を持ち、ドイツ語を解するFさんは、他の駐在員配偶者たちが言葉のわからない中で生活する大変さにも言及する。そして自分はドイツ語も解し、少しは助かっているという思いも抱く。

「駐在員配偶者」カテゴリーは、Fさんに今までと違う生活レベルや価値観をもたらし、その規範に同一化したいという気持ちを持ちつつも完全に同化できない、むしろしたくないと思い、一線を置く様子が見える。駐在員配偶者とのつながりにも留意して生活を送る様子が次の語りから見えてくる。

Fさんは次女の学校のお迎え時にある工夫をする。デュッセルドルフ日本人学校は小学2年生まで親の送迎の義務があり、現地幼稚園から日本人学校に入学した次女のお迎えにFさんは、毎日学校に行った。

\*：日本人学校のお迎えは毎日で大変でしたね。

F：はい。2時のお迎えなので（その時間）ぎりぎりに行きました。何か情報が欲しい時はなるべく早く（学校に）行って。それ以外の時は、一番遅く行って、すぐにバイバイって言ってサーッと帰るんです。でもこの辺（日本人学校の近く）に住んでいる人は大変です。同じマンションや日本食スーパー（日本人学校のすぐ近くにある小さなスーパー）でお母さんたちと会って立ち話ですね。

Fさんが、日本人学校のお迎え時に他の駐在員配偶者たちとの関係をできるだけ最小化するように工夫している様子が語りから伝わる。

今まで見てきたKさんもFさんも「駐在員配偶者」カテゴリーに何が期待されるのかを意識し、その期待に添うように生活を送ろうとする生活実践がみられたが、自分を「駐在員配偶者」カテゴリー範疇ではなく、その外に置く女性も居る。Jさんの語りに注目する。

#### 4.1.3 「駐在員配偶者」カテゴリーからの差異化—Jさん

Jさん（40代）は、公認会計士である夫とともに7年間のハンブルク生活から、夫の

仕事の関係で2007年にメアーブッシュ（デュッセルドルフの隣町）に3歳の長男を連れて移動した。インタビュー時にはドイツ生活は18年経っていて、12歳の長男、9歳の次男、2歳の長女と暮らす。

Jさんは、栃木県出身で父親は建築業で、母親は専業主婦である。高校まで栃木で過ごし、高校時代にロスアンゼルスに3週間ホームステイした。卒業後、東京の短大の英文科に推薦入学し、大学在学中に4か月ほどボストンに短期留学する。現地では日本の大学から来た生徒4人部屋で、週末にホストファミリーが近郊に遊びに連れて行ってくれた。短大卒業後は、国際線乗務員になり、アメリカやヨーロッパなど回り、仕事は楽しかったと話す。そして機内で夫と知り合い、27歳で結婚し、夫の駐在が3年ということで、会社の留学休職制度を使い、2年間の留学という形で休職し、夫とともに1999年からハンブルクで生活する。

\*：留学休職制度を利用したハンブルクでの生活はいかがでしたか。

J：ハンブルクに行くことになった時はワクワクしました。会社に在籍したまま、そして海外にも住めるし。駐在員の妻として生きるべく、車を買って、犬を飼って、若夫婦だったから、旅行に行ったり、テニスサークルに入ったり、飲み会をしたり、楽しかったです。

「駐在員の妻として」という語りから、Jさんが「駐在員の妻」という自分の立ち位置を意識して暮らしていたことが分かる。2年後に仕事に復帰するが、1年ほど働き、退職する。

\*：お仕事に復帰なさって、またやめたのはどうしてですか。

J：自分からやめたんです。30歳になって。夫は年上で38歳。駐在は3年と言っていたのに、長くなりそうな雰囲気です。(中略)夫のそばにいたかったし、仕事も楽しくなくなってきて。30歳ぐらいだったし、(周りも)そろそろ子どもを産んだりとかしてました。

Jさんは、仕事をやめ、ハンブルクで夫と生活するが、ハンブルクでは日本人に会うことが全くなかった。毎日ドイツ語学校に通ったり、諸外国の人とランチをしたりして過ごし、結婚5年目に子どもができる。デュッセルドルフ駐在が決まった時に、「日本人がたくさんいてうわさがすごいのではないか」と不安を感じた。

Jさんは、デュッセルドルフの日本人集住地区ではなく、隣町のメアーブッシュに住む。子どもたちに関しては、「在独が長いけど、日本人なので日本人として育てたい」と考え、「まずは日本人学校に入れ、それから次のステップとしてインターナショナルスクールに移す」という教育方針を持つ。ハンブルクで生まれた長男(12歳)は、小学5年生までデュッセルドルフ日本人学校にその後、ノイス市にあるインターナショナルスクール(ISR)に移した。次男(9歳)もハンブルクで生まれ、インターナショナル系の

モビール幼稚園から日本人学校、長女（2歳）は現地幼稚園に入園待機中である。

\*：こちらでの生活はいかがですか。

J：便利です。日本語で何でもあるし。塾、習い事、パン屋さん、美容院。

\*：お子さんの習い事は。

J：長男と次男は、日本人チームのサッカー。次男は日本人の先生にピアノも習っています。

日本人小学校に通う子どもを介して他の母親たちから情報を得て、テニスを週1回習い、「走り方教室」で個別に日本人の先生から、週1回指導も受ける。デュッセルドルフマラソンにも出ることもあり、今はまたマラソンに出ることに夢中になっていて、毎日ジョギングをする。他の駐在員配偶者のつながりも、子どもの日本人学校や幼稚園を介してできるが、「あまり深入りしすぎないように気を付けている」「あんまりべったりと誰とも付き合わない」「すごく親しくならないとあまり自分のことは言わない」と話す。そして次のように語った。

J：うちはたぶん特殊で、駐在が長いです。住んでるところも（デュッセルドルフの日本人集住地区ではなく）こっち（メアーブッシュ）だし。日本人学校や日本人幼稚園とかの近くに住んでいる方は、3、4年で帰る方で、（私たちとは）違います。（日本から）一緒にくる「私たち同期」っていうのはない。みんなでこう。私はたぶんそういうのに入れてもらえないし、私もそこまで、はしゃげないし。「ザ駐在」の方たちとは違うかなって。

語りの中の「うちは特殊」「（他の駐在員配偶者とは）違います」「（そういうのに）入れてもらえない」という言葉から、自分は駐在員の妻ではあるが、その中に入らずあるいは入れず、自身をその外に位置づけていると言える。そして「ザ駐在」という言葉はまさに他の駐在員配偶者を別の次元に暮らす女性たちと捉え、自分は一線を置いていることを示唆している。多くの駐在員配偶者たちは、日本からドイツに来た時期が一緒の配偶者たちを「同期」組と捉え、強い仲間意識を持つ傾向がある。Jさんの「そこまではしゃげない」というのは、同期の仲間同士で話が弾み、その場が盛り上がることを意味していると察する。また、他の駐在員配偶者たちの通う料理教室も「（人数が）足りないから来てっていう時には行きます」と笑って話す。

駐在員配偶者以外にも現地にずっと長くいる日本人や永住の日本人、国際結婚している日本人の友だちを持ち、悩みとかがある時は、現地ではなく日本に居る友だちや他の外国に居る日本の友だちに話す。そして、それは「信頼度が高いから」と言う。

日常生活においては、いろんな誘いを受けるが、「本当にやりたいとか、本当にそこに行きたいのかを決めてやる」ことを心掛けている。

Jさんは他の「駐在員配偶者」たちとつながる中で、「駐在員配偶者」に対してある見

方をしていることが語りからみえる。

J: 駐在同期が帰り始め、みんな帰っちゃったから、私も帰りたいていう人もいます。また違うお友だちも来るだろうし。でも最初に手をつないだ友だちでないと寂しいんだろうなって。わかります。助け合いができてすごくいいのはあるけどそういうこともある。(中略) 日本の波にのまれちゃって。日本人社会がこんな大きくないところだったら、お母さんもドイツ語しゃべるし。(ここは) お母さんも志高く来てもチャンスがない。なかなか抜けだせない。

「お母さん」という言葉から、他の「駐在員配偶者」たちを客観的に捉えていることが分かる。

最後のJさんの「私は駐在員の奥さんって思っていないんです。申し訳ないですけど」という語りは、「駐在員配偶者」カテゴリーの外に自分を置いていることを示唆している。

3人の駐在員配偶者の語りから、自分を例外化や差異化したり、「駐在員配偶者」から距離をとったりしながらも、駐在員配偶者に期待される規範は維持されていることが浮き彫りになった。

## 4.2 「駐在員配偶者」同士における関係性

デュッセルドルフの日本人エキスパトリエイト・コミュニティは、生活インフラが整い、駐在員家族が集住して生活するが、駐在員配偶者たちは、配偶者同士どのようにつながっているのだろうか。本節ではGさん、Iさん、Dさんの語りに注目する。

### 4.2.1 「与えられた環境の中で」わだかまりなくつながる—Gさん

Gさんには、渡独後1年後と2年後の2回に分けてインタビューを行った。1回目のインタビュー時には、「日本人の多く住むところからは離れたところに住みたい」「現地の人と接点を持ちたい」という気持ちを持ちながらも日本人エキスパトリエイト・コミュニティにいつの間にか「どっぷりつかっている」と話していたが、さらに1年経ち、コミュニティに対する気持ちは変容していったように見える。どのように変化していったのかを語りから検討する。

Gさんは、2014年に小学3年(8歳)と小学1年(6歳)の息子連れてデュッセルドルフでの生活をスタートする。

Gさんは、父親の仕事の関係でハンブルクに生まれ、中学1年生までドイツで過ごした。当時、周りには、日本人もおらず、ハンブルクには日本人学校があったが、場所も遠く、現地の幼稚園、小学校、そして5年生からはギムナジウム<sup>66</sup>に通った。Gさんの

---

<sup>66</sup> 第3章 注(42) 参照。

それぞれ2歳違いの兄・弟も一緒に現地校に通っていたが、当時を振り返り、幼稚園も現地校も「楽しかった」と話す。帰国後は千葉の公立中学校に入学するが、緊張して「怖かったです」と話す。自分からはドイツに居たことは話さず、「目立たないようにして」過ごした。高校は受験して私立の女子校に進む。高校では、海外に興味がある生徒が多く、ドイツに居たことを聞かれても「普通に答え」、中学時代に比べ「気が楽」であった。大学は外国語学部ドイツ語科に入学するが、ドイツ語は全く忘れていて、また大学で学びなおした。ドイツ語は「すごく懐かしかった」と話す。大学には、ドイツ語ができる生徒や帰国子女も周りにいて「ようやく自分が出せるようになりました。それまでは自分を抑えていたので」と語り、「解放感」を感じたという。そして大学3年生の時にドイツのミュンスター大学に交換留学し、「ドイツにまた来れて嬉しかった」と語る。大学卒業後は外国語を使う仕事につきたいと思い、輸出入の物流関係の会社に就職し、2年勤める。「言葉を使うことはめったになかったのですが、学ぶことも多くすごくためになる職種でした」と話す。同じ会社の同僚の男性と交際し始めるが、相手がベルギーへの海外赴任が決まり、遠距離恋愛になり、結婚することに決め、仕事をやめ、ベルギーに行く決断をする。「思い切ったことをしたと思います。よく失敗しなかったなど」と笑って話す。そして、その時を振り返り、「何となく海外に住みたいなという気持ちがあり、そこまでして仕事を続けたいとは思いませんでした」と話す。が、「今思えばもっと仕事をしたい気持ちもありました」と複雑な心境を語った。

結婚後、夫の赴任でベルギーのオランダ語圏で3年半暮らすが、語学が好きでほとんど毎日オランダ語の語学学校に通った。ベルギー滞在中に妊娠し臨月で帰国し、出産してからは育児に追われた。夫の職場は東京で自宅は千葉だったので、夫の帰りも遅く育児や家事の助けは「全くあてにできなかった」。2歳違いの次男が生まれてからは、「(育児が)一番大変で次男が幼稚園に入園した時はほっとしました」と語る。幼稚園では「時間もあったので、子どもの為にと割り切って」幼稚園の役員を引き受け、運動会、バザー、カーニバル、ハロウィーンと幼稚園行事でいろいろ忙しかった。長男も地元の小学校に入り、小学校と幼稚園の両方で行事が重なったりして大変なこともあり、7年間の日本での生活は「あっという間でした」と当時を振り返る。そして当時は子どもたちが寝静まった夜に勉強しようという気にはならず、外国語は全く使うことも触れることもなかった。次男も小学校に入学し給食になり「やっとバイトとか始めようと思った時」に夫がデュッセルドルフ赴任になる。渡独後、息子たちは日本人学校に入学するが、日本人学校に決めた理由について次のように語った。

\*：デュッセルドルフにはインターナショナルスクールとか現地校とかありますが、日本人学校にしたのはなぜですか。

G：現地校も考えたんですけど主人の赴任がどのくらい続くかがわからないっていうのがありまして、本当にもしかして、1年で帰るかもしれないって言われたんですね。で、もし1年だった場合は、現地校に入れてもちょっとどうかなって思っ

てしまひまして。インターもすごく入れたかったんですけどやはり費用がかなり

高くて。会社からはそこまで出してもらえないんで。

いろいろ考えた末、日本人学校に入学させることに決めるが、居住地は、日本人学校近くの日本人集住地区ではなく、隣町のメアーブッシュにする。「日本人学校近くの方が便利なんですけど、物件が見つからなかったこともありますし、学校のそばすぎるのもちょっとやだなあって思って」と話す。デュッセルドルフでの生活も1年4か月経ち、今の生活を次のように語った。

\*：こちらに来て今はどんな感じですか。

G：何をしているのかわからないですけど、あつというまです。でもまたドイツ語の学校に行っています。

\*：でもGさんのドイツ語レベルでしたら、通う必要はないのかなと思います。

G：いや、でも忘れてますし、語意もあの一、幼いままで止まっていますので。ここ（デュッセルドルフ）では、言葉（＝ドイツ語）を使うことはないです。（中略）ドイツ語に接することが本当にないので、せめて耳慣れの為に学校に通って。（ドイツ人の）先生とか生徒さんとかの言葉を聞かなきゃと思って。

Gさんは日本人向けのドイツ語学校ではなくドイツ市民大学<sup>67</sup>に週2回、4時間づつ通う。そこには、永住日本人や現地に長く暮らす日本人も来ている。学校は「すごく刺激になります。（ドイツ語）を聞いていて楽しいです」と嬉しそうに話す。Gさんの語りからは、毎日の生活の中でドイツ語に触れることもなく、ドイツ人との接点も見えない。Gさんは、「学校も日本人学校、習い事も日本人ばかり。本当にもう日本と全く変わらない生活を送っています。現地との関わりを深くしたいと常に思っていますけど、気づいたら、もう日本の社会にどっぷりつかっています」と笑って語る。

G：子どもたちの習い事（サッカー）にしても全部、現地に住む日本人が便利のようにちゃんと考えてくれているんです。場所も近いし、時間的にもあっていますので。それに流されてしまいます。もうレールが引かれているような気がしますね。最初の頃はもう張り切って現地のものとかすごく考えたんですけど。なんか気づいたらもうそのレールに乗ってしまっているような。

子どもたちの習い事に関しては、「何かしら現地の子と関わりを持ってもらいたいというのが第一なんですけど、なかなかそういうのがないんです。見つからないんです」と話し、車も運転しないこともあり、電車で通えるところとなると、日本人のサッカー

---

<sup>67</sup> 第1章 注(4) 参照。市民大学のドイツ語コースは初級コースから上級コースまであり、時間帯も午前、午後、夜コースがあり、様々な目的を持ちドイツに来た外国人が学ぶ。1クラス30人ほどで、先生はドイツ人で、クラスの生徒間の共通語はドイツ語である。ドイツ語の資格を目指したコースもある。

チームになってしまうという。自分の習い事も子どもの学校へのお迎えを考えると時間の関係で日本人向けのものになり、今は、日本人の友だちから誘われた日本人向けの料理教室に行く。料理教室は午前中で終わるので日本人学校に通う小学2年の子どもの2時のお迎えに間に合う。現地の料理教室もあるが、夕方4時や5時までで時間帯が全く合わないと話す。毎日、日本人学校に子どもを迎えに行くことについても「日本だと小学校は、玄関先で行ってらっしゃいですけどここは、毎日学校に行きますから、日本に居る時よりも日本人と接している感覚です」と話し、「ほんとに日本の世界」「(日本人とのつながりは) 密ですよ」という。「子どもには現地と接点を持たせたい」「自分も現地の人びとと関わりたい」という気持ちを持ちながらも、無意識的に日本人社会にのめりこんでいってしまうGさんの様子が見える。

しかし、Gさんは決してそのような日本人社会を否定的には見ていない。日本人とのつながりが密になるが、「それはそれでいいと思うので大事にしたいです」とも語る。

2回目のインタビューでは、Gさんがさらに日本人社会に深く入り込み、日本人とのつながりも増えるが、今の生活環境を「良し」とする姿勢が見えた。そして初めの頃は、「子どもたちに現地の人びとと関わりを持ってもらいたい」「自分自身も現地社会と接点を持ちたい」という強い気持ちを持っていたが、2年経ち、その気持ちも薄れてきているのが語りから見えてくる。初めは子どもたちをせめてサッカーチームだけでも現地のチームに入れたいと思っていたGさんだが、2回目のインタビューでは、「現地のサッカーチームに所属している日本人の子も居るんですけど、言葉が分からないと指示も通じない。そうすると現地チームに入れても子どもが結構つらい思いをしているみたいで」と話し、日本人チームで良かったと言う。また、今まで通っていたドイツ市民大学でのドイツ語授業も子どもが春休みになってしまい、時間的に通うのが難しくなり、今は保留中である。「1回休みに入っちゃうと腰が重くなっちゃう。絶対にという気持ちはないです」と今の心境を語る。

自分の習い事に関しては、「料理教室」は続けていて、さらに日本人学校に通う子どもの母親から誘われ、日本人向けバドミントン教室に週1回通う。子どもたちも習い事が増え、サッカー以外に体操教室、それに加えて、長男は、週1回ピアノ、塾、次男は、週1回、絵画教室に行く。車の運転も始め、午前中は、自分の趣味の習い事が週2、3回入り、午後は子どもたちの習い事の送迎に追われる。「時間との計算です。何時にどこで。その次はこっちで。2人とも場所も時間もバラバラです」とあわただしく生活を送る。

Gさんは2年経ったいまの生活について次のように語った。

G: 生活も落ちつき、特に生活上の悩みや葛藤はありません。「ノー天気」かも知れませんが、あまり深く考えない。今は家族と一緒に居る時が一番楽しくて、気が楽です。最初のうちは、これもやってみようとかあれもやってみようとか。もう少し意欲的だったかな。今は生活パターンが落ち着いてきて、居心地はいいけど刺激はありません。日常が成立していて新しいものを入れる余力がありません。



2年前の自分の気持ちを思い出しつつも日本人社会の中でルーティン化した生活を送る G さんは、他の駐在員配偶者とどのようにつながっているのでしょうか。デュッセルドルフ生活も2年経ち、「友だちも自然に増えましたが、帰る方も多くて年中送別会があります。2年ぐらいの駐在員家族が多く、1年居ると先輩になっちゃいますね。私と同じ時期に来た方もちょうど丸2年で2人帰られます。もう半分になってしまいました」と話す。同時期に来た駐在員配偶者も帰国してしまい、友だち関係について次のように語った。

G：仲良くなった友だちが帰るとすごく寂しいです。

\*：新たに友だちを作ろうと思いますか。

G：新たに作ろうとは思わないんですけど、(子どもが)習い事に行くとお迎えに行きますね。話しているうちに親しくなって友だちになります。

そして「深い友人形成は短くてもできると思います。団結して、同じ環境でなんにもわからない環境で、協力し合って助け合っというのがあると思います」と話し、友だちとの結束の大切さを感じている。また、「お付き合いもいっぱいあるので、選択肢も増え、いい付き合いも見つけることができます」と話し、デュッセルドルフの日本人コミュニティを肯定的に捉えていることが分かる。他の駐在員配偶者について言及し、「日本人だけの狭い世界で、苦痛に思う方もいらっしゃるかもしれないですね。付き合いが苦手な方にとってはつらいかもしれませんね」「あまり人と接点を持ちたくない人にとっては、逃げ場がないかもしれないですね」と話し、自分は、「誘われても行きたくない時は行けないと言うし、送別会などもストレスになるほど嫌ではない」と言う。渡独当初は、「日本人が多くて嫌だな。せつかく海外に来たのにもかかわらず日本の世界で、ちょっともったいないかなという気はしたんですが、今は、実際に(日本人社会に)入ってみるとこれはこれで良かったのかな。こんないい環境はないと思うので」と今の環境に満足しているように見える。しかし、「郷に入っては郷に従えで、与えられた環境の中でやっていくしかないと思う。吹っ切れたのは、皆さん気さくで親切でいい人ばかりなので」という言葉は、日本人コミュニティにおいて「他の駐在員配偶者とわだかまりなくやっていく」という規範への意識の示唆と捉えられる。また、「いい環境」といながらも今の環境を「与えられた環境」と受け止めて「(その中で) やっていくしかない」という語りから、半ばあきらめの気持ちも読み取れる。

G さんは、子どもたちが寝入った後、夜9時10時頃から「自分の時間」があるという。その時は「日本のドラマを見たり、ネットでニュースを見たり、本を読んだり、手芸とか。くつろげる時間です」という言葉は、常に周りの駐在員配偶者たちとうまくやっていかなければならない生活の大変さやストレスを表しているように見える。

#### 4.2.2 「駐在員配偶者」と離れすぎない関係性—Iさん

Iさん(40代)は、筆者がインタビューをお願いした時は、ドイツ滞在がまだ7か月であった。小学2年と年少の娘2人とともに、フィルムメーカー勤務の夫の仕事に伴い渡独した。Iさんの父親は商社マンで、父の仕事の関係でアメリカで生まれ3歳まで過ごした。母親は父と同じ商社で働いていたが、寿退社で専業主婦になる。Iさんは、東京出身で小学校、中学校は東京の公立学校に通ったが、「落ち着きがないからキリスト教系の高校がいい」という母親の勧めで私立の女子高校に進学する。高校時代は茶道部に入り、「楽しかった」と話す。また、高校3年間は、受験勉強に集中し「一番よく勉強した」。そして大学も同じキリスト教系の大学に進みたいと思い、英語が好きだったので英文科に進む。大学では、体育系のフィールドホッケー部に入り、週4回朝練があり、きつくて2年でやめる。大学時代には留学経験はないと話す。

\*：大学時代に留学はなさったんですか。

I：いいえ。行きたいとは思っていましたが、入学時は。でもいつの間にかその気持ちは消えました。その頃は、就職氷河期で、留学で1年でも遅くなったら就職できないっていうのがあって。

Iさんは就職に不利になると思い留学しなかったが、幼少時にアメリカで3年ほど暮らした経験から海外に憧れもあり、卒業後、商社に就職する。

\*：なぜ商社にしたのですか。

I：世界に支店があるイメージがあり。

\*：仕事はどうでしたか。

I：すごくハッピーな就職先で、幸せに働けました。出張も海外にも行きました。国内よりも海外の方が出張が多かったくらいです。マレーシアとタイと。東南アジアが担当でした。(中略)私は結婚が遅くて31歳で結婚しました。20代は仕事に。(仕事が)楽しくて。家から通っていました。

夫の勤める会社が、Iさんの仕事の取引先ということで知り合い、付き合い始めて1年半で結婚する。そして32歳で長女を出産するが、産休・育休をとり、制度上は2年とれるところを1年半で仕事に復帰する。長女を保育園に入れ、次女が生まれるまで2年働く。当時は「時間との戦いだった」と語る。次女を出産して約半年後には、また職場に復帰する。次女の保育園はなかなか空きがなく見つからず、結局は長女とは違う保育園に入れることになる。当時は、仕事と育児であわただしかった。

\*：忙しかったんですね。

I：はい。夫は、ドイツに来る前は、台湾エリア担当で、毎週のように台湾に行っていました。月曜から金曜まで台湾で、週末は日本という感じです。そんなわけで

(子どもたちは)ひとりで育てました(笑)。自分の母や父も、私が病気の時など応援にベビーシッターに来てくれました。仕事を休むわけにはいけないので。

\*: 頑張りましたね。

I: はい。やめるきっかけがなかったっていうか(笑)。(仕事は)やり切った感があります。(中略)(自分の中で)ぼちぼちやめる気持ちがやって来るのかなって思った時に、主人が駐在になりました。

Iさんは夫の駐在が決まって仕事をやめるが、その時は「あまり迷わなかった」。そして、「どっちみち長女が小学校5年、6年になった時にやめようとは思っていませんでした」と語った。しかし、制度として、「配偶者の転勤であれば妻は3年後にまた職場に復帰できる」が、自分には、その制度を利用する気持ちはなかったという。

\*: それはどうしてですか。

I: 2回も産休育休をとって、この制度(夫の海外勤務に同行した場合は、3年後に復帰できる)も使ったりすると取りすぎかなって。でも同期にも居るんですね。そういう人が。でも私にはできないかなって。独身女性も居るし。平等じゃないって思うんです。そんなに図々しくないんです(笑)。

仕事をやめて夫に同行することに迷いはなかったというIさんだが、3年後に職場復帰できるという制度に自ら触れる語りからは、17年間勤めた会社を去ることにためらいの気持ちもあったことがうかがえる。夫のドイツ赴任が決まった時には、最初は嬉しいと思ったが、ドイツ語もできず、現地で意思疎通ができるか、子どもたちが学校や幼稚園に慣れるかといろいろと心配だったと話す。

長女は、ノイスにあるインターナショナルスクール(ISR)に、次女は家の近くにあるインターナショナル系の幼稚園(インターナショナルモビーレ幼稚園)<sup>68</sup>に通う。ISRには、38世帯の日本人家族の子どもが通い、Iさんは、ISRや次女の幼稚園に通う日本人の子どもと母親たちとつながりができていく。さらにデュッセルドルフ市内にある日本人向けドイツ語学校の「生活基本コース」<sup>69</sup>に通い始め、そこで同じ頃に渡独した駐在員配偶者たちと友だちになる。また、ドイツ語学校で知り合った駐在員配偶者たちと、日本人が教えるイタリアン料理教室にも通う。

---

<sup>68</sup> 注(55)参照。Iさんの次女のクラスは現在、半分以上が日本人で、他に中国人とドイツ人、ドイツ人と日本人のハーフの園児が居る。2歳から6歳までが通園する。日本人の先生も1人居るが、基本的に使用言語はドイツ語である。

<sup>69</sup> ドイツ語が全く分からない日本人駐在員配偶者を対象に、買い物など生活において必要な基本的なドイツ語や電車の乗り方、切符の買い方など生活情報を教えるコース。

\*：今仲良くしているお友だちは。

I：長女の小学校の（日本人）ママとドイツ語の教室のお友だちです。ドイツ語のクラスは4人しかいないんですけど、授業が終わってからお昼（ランチ）に流れます。

そして、友だちのネットワークが広がる中で、驚いたことがあると語り始めた。

I：（小学生の子どもを持つ）ママたちがみんな名字ではなく、名前の後に「ちゃん」をつけて呼ぶんです。違和感があります。日本では社会人になって名字の後に「さん」づけだったので。最近やっと慣れましたが、いまだに「ちゃん」と言いづらいです（中略）でも、ひとりだけ「さん」づけすると影がある人と思われてしまうので、頑張って「ちゃん」の壁を乗り越えようと努力しています。

Iさんは、駐在員配偶者たちとつながる中で、女性たちの間の習慣やルールに戸惑いや違和感を感じながらも一生懸命その状況にあわせていこうとする。

\*：お友だちとの付き合いで何か困ったことなどありますか。

I：ここは日本人はすごく固まっているのかなと思います。最初は嫌だと思いましたけれど助けられています。（日本の人たちと）そんなに離れちゃいけないなと思います。買い物とかドイツ語ができないので。離れすぎず接点を持つことが大事だと思います。

\*：大変だと思うことはありますか。

I：（インターナショナルスクールの）長女のクラスには、日本人が少なく、学年全体でも6人しかいません。お友だちが少ない分、難しいです。日本だと大勢いるので、気の合わない人とは会わなくてもいいし、距離を置けばいいんですけど。ここだと6人しかいないので、学年で。やっぱりつながって関係をよくしておかなきゃと思うと大変です。わだかまりを作らないように。（日本からの駐在員家族は）どうせ2、3年で入れ替わるから。

ドイツ語も分からず不慣れな環境の中で、「日本人と離れすぎず」つながりを持ち、長女の学校に通う日本人の母親たちとも「限られた期間のお付き合いだから」と割り切り、うまくやっていこうと試みる。今は、ドイツ語の語学学校で知り合った仲の良い友だちもでき、相談にのってもらったりする。基本的には「つるんでみんなと居るよりもひとりで居る時の方が好き」だが、「誰かとつながっていないと困った時に助けをもらうことが多いので。日本ではないので、自分ひとりでは解決できないので」と話し、日本人とつながりががないことに対する不安の気持ちもものぞかせる。さらに次のようにも語った。

I: 日本に居たら、その方とは一緒にランチをしないだろうなっていうママ友もいます。でも大事にしなきゃって。

異国の暮らしへの不安の気持ちを持ち、他の駐在員配偶者とうまくつながっていかうとする中で、時々、他の駐在員配偶者との格差を感じることもあると話す。

I: ここでは経済的な格差を感じます。あちら（友だち）のお宅は、休みのたびに海外旅行。（友だちの）3人のお子さんたちは皆ISR。自分とは違う世界の人たちです。うちは同じことはできないというのがみえてきます。日本に居る時は、小学校も保育園も大勢居るので、自分と似たような人とつながっていました。でもここは日本人が少ないので。この家は年収も倍くらいありそうとか。でも日本人が少ないから付き合っていこうって。相手も大人だから入れてくれるけどそのへんは。自分は違う。よそはよそ、うちはうちって思っています。

日本においては、「同じような（生活）レベルの人と関わっていましたが、今は、違います。こっちに来て、うちもうちもっていうようなことはできないと気付きました」と話し、子どもたちの習い事に関して「（他のうちは）たくさんの習い事をしているようですが、ちょっとうちはできないな」と言う。Iさんの「あちら」「うち」という言葉から、他の駐在員家族の生活レベルとの差異を感じながらもその気持ちを割り切り、うまくつながっていかなければいけないという気持ちがみえる。Iさんは、まだドイツに来て7か月ということで生活上の不安も抱え、日本人とのつながりの必要性を感じているが、駐在員配偶者の日常生活においては、気の合わない人や生活レベルの違う人ともつながり、うまくやっていくことが大切だと感じている。

#### 4.2.3 「無色透明」な存在—Dさん

Dさん（40代）は、商社勤務の夫の赴任に伴い、2012年に小6の長女、小2の次女、2歳の長男を帯同する。Dさんは岩手で生まれ、高校まで親元で過ごすが、両親から「高校を出たら、ひとり暮らしをして、社会に出る前にいろいろ経験した方がいい」と言われ、18歳で上京し東京の短大の「生活芸術科」で学ぶ。卒業後は石川県で輪島塗りの職人になる為、親方のところに弟子入りし6年間修業する。その間、親方に勧められ、岩手県立の漆の学校にも通う。夫とは兄の仕事関係で知り合い、26歳で結婚し東京の社宅に住む。当時、「輪島塗」は東京にいても自分で続けることはできるし、仲間も居るので、結婚したからやめなきゃいけないという気持ちはなかった。結婚して1年後に長女を出産し、夫の駐在で4か月の長女を連れて上海に行く。上海にも漆の道具を持っていき、お手伝いさんもいて、子育てをしながら、蒔絵の作業もした。約3年間の上海での生活では、週2回、ゼロから中国語も勉強し、「コミュニケーションが楽しかった」。

上海から帰国後も蒔絵は続け、日本全国の伝統工芸展<sup>70</sup>などにも出品した。その後、次女が生まれたが、帰国して1年半で、夫が米国メリーランド駐在になり、3歳の長女と4か月の次女を連れて渡米する。その時にも蒔絵の道具は、すべて持っていった。米国には3年滞在したが、その間は、長女の幼稚園・学校の送り迎えや乳児の世話で忙しかった。また、「蒔絵」も続けたかったが、蒔絵をする上で必要な金粉や漆などが入手しづらく、作業に使う「揮発油」も乳児によくないとのことで「じたばたせずに、腹をくくり、凶案を書こう」と思い、落ち葉などの凶案を書いたりしていた。米国の生活は「周りに日本人もいなくて、英語も苦手意識があり、体もしんどかったです」と当時を振り返る。長女の幼稚園は、親のボランティア活動が熱心で、言葉もあまり分からず、コミュニケーションもとれず「自分ひとりが変なことを言っていたらどう思われるんだろう」と思い、「苦痛」であった。子どもの誕生会なども「誕生会の楽しさで子どもの人気度が変わる」こともあり、「ストレス」や「すごいプレッシャー」を感じていた。上海では日本人社会があり、日本人が固まって住んでいたが、米国では、子どもの学校にも近所にもひとりも日本人がおらず、日本大使館などから「犯罪に注意するように」などの通知が来たりして不安になり、「息が苦しくなった」と当時の生活をふりかえる。語りから、Dさんが恐怖感を持ち、緊張感を持って暮らしていた様子が見える。

その時、たまたま長女の幼稚園の時の友だち家族が近くに駐在になり、話をするのができ「苦しいのが落ち着きました。人と話すことはすごく大事だと思いました」と話す。また、長女は幼稚園が全く合わないようで泣いてばかりで蕁麻疹がでたりで、Dさんは、娘をかわいそうに思い、友だちの娘の通う幼稚園に転園させる。少しずつ長女も英語にも慣れ現地の友だちもでき、小学校に上がり1学期も終わり、アメリカ生活にも慣れた頃、帰国が決まる。

帰国時、長女は小学校2年生、次女は年長であった。Dさんは、帰国した時の気持ちを次のように語った。

D: やっとまた日本に帰るとなんていうんだろう、いろんなことがまた新しく始まる。いつも、いつもっていうか2回とも駐在している時は、自分の人生が途中で1回ストップしちゃうイメージで。なんかまた日本に帰ると自分の人生が始まるっていうか。なんか駐在している時は、一応自分としてのその、自分はこうやって漆やっていくんだって、そういう何となくのイメージが、さあ転勤ですって言われたとたん、もうシャットダウンされちゃうっていうか。そこは忘れて、まず行くこととか、行ってからの生活とかを考える頭に切り替えちゃうから。なんか帰るまでは、そこで1回フリーズさせているっていう気持ちになっちゃう。あの一自分の人生を。それで日本に帰ってから、解凍してそこから始まるみたいなイメージがあつて。

---

<sup>70</sup> 「伝統工芸展」には、織物や陶芸などの職人さんが全国からやってくる。Dさんは、蒔絵（漆の上に金粉をまいたもの）のおなつめを出品する。

語りから、日本に帰り「やっと漆ができる」という希望を抱いていた様子が伝わる。しかし、流産したり、帰国後2年して長男が生まれ、実際は「主婦の仕事と子育てで手いっぱい、自分の時間を生み出すのは難しかった」と話す。また、日本に居る間に、東北大震災も起こり、津波で岩手に住むDさんの父親の実家も流され、叔父も叔母も亡くなる。夫も国内出向などあり、「なんかこう（日本に）5年もいたんですけど、思うように漆の作業ができなくて」と話す。しかし、「気持ちの中では、蒔絵とつながっていました」ときっぱり言い、漆の研修所の先生の言葉に触れた。

D: 漆をやっている友だちとの交流もあったし、友だちの個展に行ったり、出したり、でも思うようにできていない。(中略) でも、輪島の研修所の先生から、「10年単位で作品を作りなさい。この仕事は定年がないから焦るな」って。いつも言ってくださって。焦りすぎないで、気持ちさえつながっていればいつでも始められる。

漆の世界と気持ちはつながりながらも、思うように作業ができず、焦る気持ちを持ちながら、日本で生活を送っていたが、ある日、Dさんは、アメリカ駐在時に知り合った年上の友だちからの「これが終わってからやろうと思っても、そういう時は一生来ないわよ」という言葉を思い出す。そして、漆の作業も「同時進行で進めなければ」と思い、新しく建てた家に漆の作業場を作る。しかしその家に住まないうちに夫のデュッセルドルフ駐在が決まる。

Dさんは、1回目のインタビュー時は、渡独後3年経ち、長女、次女はそれぞれ日本人学校の中学3年生と小学5年生、長男は日本人幼稚園年長であった。長女は、渡独直後はインターナショナルスクール(ISD)に入り、grade6年生から8年生まで通ったが、帰国受験の為、grade8年生が終わり、grade9年生にあがる前にデュッセルドルフ日本人学校に移す<sup>71</sup>。

3度目の海外駐在となるデュッセルドルフには、漆の道具は持っていかず、今は70代の日本人の先生に銅版画を習う。

\* : 今回、漆の道具を持っていかなかったのは。

D : それは、やろう、できない、やろう、できないっていうようになるよりは。漆をやろうとしたら、本当にその時間がかかるんです。それでヨーロッパの技術を吸収しようとも思って、今、銅版画をやっているんです。(中略) 帰ったら、今度こそはもう絶対に仕事、漆を始めたいと思っているのでその時の為の肥やしとして、

---

<sup>71</sup> 長女は高校から日本にある音楽関係の学校を希望しており、日本人中学校終了という条件を満たさなければ受験資格がなかった。その為には、中学3年生の夏までにデュッセルドルフ日本人学校に移さなければならないということで、grade8年生が終わった夏休みにインターナショナルスクールから日本人学校に移した。

とにかく今すぐ漆ができなくてもそうやって、その時の為にやっておこうという気持ちに切り替えて今はやっています。

「今はフリーズしている場合じゃない、今、ここでできることで、自分の人生は続いているというイメージを持とうと思って」と話す。そして、子どもも3人産んで、区切りもつき、日本に帰ったら家もあり、今まで「ぼんやりしていた輪郭」が、イメージが出来上がり「いろいろ組み立てられてきているのかな」と語る。自分の人生の中で大きな位置を占める漆の世界だが、今は今後のことも考え、銅版画の教室に通い、少しずつ人生設計を立て始めようとしているDさんの様子が見えてくる。

Dさんは、海外で暮らす中で「地に足がつかない雰囲気が生活の中に流れている。言葉や通貨が違うっていうのもあるけど、生活をつかんでいるっていう感覚がないです。」と話し、生活の中に「不安定さ」を感じる。そして、「ここに居るからできないという思いはあまり持たないでできることをするのが一番いい」「ここでの生活を何らかの形でつなげていくことが大事だと思います」ときっぱり語る。

それではDさんは、デュッセルドルフのエキスパトリエイト・コミュニティをどのように捉え、日常生活実践を行っているのでしょうか。

Dさんは、今までの上海、アメリカの駐在生活を思い出しながら、デュッセルドルフでの生活を次のように語った。

D: すごく、上海、アメリカに居る時は、海外に出たからには、現地の人と交流しようと、(子どもの)学校のことはすごくストレスだったんだけどもご近所付き合いはすごく一生懸命やっていたんです。お茶に呼んだり、そのハロウィーンと一緒にやったり、クリスマスデコレーションを外にして、現地の人と、そういうのはすごくやって。でもやっぱり、安心して、ここにきて日本人社会の中に今回はどっぷり入ろうって、そのなぜかっていうと子ども3人いてそれぞれお世話になって、見てもらいたいっていう、なんていうんだろう。安全面からでも。

語りから、子ども3人を育てる上でも「安全・安心」な環境を日本人のコミュニティに求め、コミュニティをむしろ肯定的に捉えているように見えるが、Dさんはどのような日常生活実践を行っているのでしょうか。

Dさんは、毎日子どもたちの送り迎えに追われる。長女は、週3回の塾と歌のレッスン、公文、週1回の家庭教師、次女は、週3回の塾、週1回の歌のレッスン、週1回の家庭教師、一番下の息子は、公文と柔道を習う。「すごい出勤回数です」と笑って話す。それでも車を運転し、日本人学校や日本食スーパーも家から近く、「皆まとまっている」のでどうにか生活は回っている。

今まで上海、アメリカと駐在生活を送ったが、「デュッセルドルフのように日本人が多い場所は初めてです。上海も多いですが、子どもがまだ小さく、幼稚園にも行ってなかったのもので、日本の社会っていうのは、あんまり(気にしなかった)」と話し、デュッ



セルドルフでは子どもが学校や幼稚園に通うことで、他の駐在員配偶者たちとの接点が増えていく。そのような状況の中で、Dさんは、デュッセルドルフの日本人社会について次のように語った。

D: (子どもたちが泊まりあっこなどして、他の駐在員配偶者たちと) 密になってくるんですけど、ここではあんまり自分のことを話さないっていうのが共通言語。プライベートなことを言いすぎると、変に噂になるし、みんなに言わないっていうのが暗黙のルールっていうのはすごく感じて。(中略) こんなことで悩んでいてとか、出身の大学とか、前職とか、なんかとにかくそういうこと誰も言ってないのに、ひとりいうとあの人は言いたいんだとみられちゃうから。日本人社会で、その人はこういう人だよっていうイメージが出来上がっちゃうから。変に自分の個性を作り上げる。だから無色透明。あんまり、できるだけ言わない。

日本人コミュニティでは、自分を出さず「無色透明」でいることが、Dさんが他の駐在員配偶者とつながる上での一つのルールのように見える。しかし、悩みがあった時は、「仲のいい友だちには話します。日本人学校の学級委員をした時の学級委員仲間たちと一番仲良しになりました」と言う。そして「本当に数年という駐在の中で、深い友だちを得られたのはすごい宝物」と感慨深げに語る。慎重に友だちを選びながら、他の駐在員配偶者とつながっていた様子がわかる。

1回目のインタビューから8か月後に2回目のインタビューをDさんに依頼したが、その時デュッセルドルフでの生活はすでに4年経っていた。長女は無事に音楽専門の高校に合格し、日本で学校の寮で暮らす。次女は日本人小学校6年生になり、日本の中学受験を考えている。

4年経った今は、日本語で生活できる環境に満足している様子が語りからみえる。

D: 日本人が多いと人間関係とか重く感じる人が居るかもしれないけれど。現地の人とお付き合いして、現地の人との交流こそが海外転勤だと最初の頃は思っていました。過去2回の駐在地(上海・米国)では、住む場所も日本人があまりいなかったり、交流する人も現地の人が多かったんですけども、でもやっぱり、心の平和、そこまで片意地張らずにその時を家族が健康に暮らすということが大事だと思います。ドイツ語ができるようになるとか、日本人からは離れて暮らし、現地校に入れるとかいろんな考えの方が居るけど、吸収するものは日本語で吸収したほうが早いし、そういう環境であるのなら、それを使ってもかまわないって思います。

また、日本人の先生の銅版画教室に通い続け、「日本にいたら浮かんでこないような発想も湧いてきて、とても良かったです。充実しています」と嬉しそうに話す。今は、銅版画の教室以外に、絵付け教室「マーレン」にも通う。日本人駐在員配偶者4人で習

っていて、ドイツ人の先生が生徒宅を順番に回って教える。お友だちも「安定してきている」が、仲良くなった友だちは、駐在期間が3年も経つと帰国してしまい、また仲のいい人を探そうという気持ちにはならないとも話す。「これからまた関係を築くのは」という言葉から、新たに友だちを作ろうとする意欲は感じられない。

最後に D さんは、銅版画の 70 代の先生に触れ、「先生と話すことで自分がとても癒されています。先生は年代が上で、自分がすごい頑張っているのに甘えられる存在がない中で、本当に癒されています」としみじみ語る。

日本人エクスパトリエイト・コミュニティを日本人も多く暮らし、日本語で安心して生活ができて良い環境と捉えつつも、コミュニティにおいては、「無色透明」で暮らすように心がける。自分の存在を目だたなくして生活する D さんの姿勢は、日本人エクスパトリエイト・コミュニティ内の生活における抑制や制約を示唆する。

今まで3人の駐在員配偶者たちが、日本人エクスパトリエイト・コミュニティをどのように捉え、他の駐在員配偶者たちとどのようにつながりながら、日常生活実践を行っているのかを見てきた。G さんは、「日本すぎる社会」と言いつつも「居心地がよく、友だちも選べ、満足して」生活する。しかし、そこには与えられた環境に合わせて「郷に入っては郷に従え」という気持ちで暮らす。I さんは、「日本人が多く固まって嫌だな」という思いも抱きながらも、「とても助けられている」と話す。そして、経済格差など生活レベル上で違和感を感じつつ、言葉の分からない中での不安もあり、他の駐在員配偶者たちとのネットワークを大切にし、そのつながりを切らないようにする。うまく繋がっていく必然性を感じ、むしろ、G さんと違い、友だちは選べない状況である。D さんは、「安全・安心」を感じながら、日本語で生活できる環境に満足しているが、「地に足がつかないような」不安定さを感じる生活の中で、自分が目だたないように「無色透明」で暮らす。女性たちは、コミュニティ内での他の駐在員配偶者たちのつながりにおいて、自分なりのルールを設けたり、自分の考えややり方に従いながら生活していることが浮き彫りになった。

#### 4.3 駐在員配偶者たちの結束と連帯

ここでは、駐在員配偶者同士の結束と連帯の在り方を検討する。Cohen によるとエクスパトリエイト・コミュニティにおいてはエクスパトリエイト同士においては強い結束がみられるとあるが、帰国して今も日本でもつながっている JD、JE、JF さんたちの現地での結束の在り方に注目する。

JD さん、JE さん、JF さんは、ほぼ同時期をデュッセルドルフで過ごし、7年から8年前に帰国した。3人にグループインタビュー、及び、JD さん、JE さんには再度、個別にインタビューを依頼した。

デュッセルドルフ日本人小学校の入学式で、JD さん、JE さん、JF さんの3人を含めた6人の駐在員配偶者同士が初めて顔を合わせる。そして JD さんが、子どもを現地でプール教室に通わせたいという希望があり、皆に声かけをしたところから、つながりがスタートする。それぞれの子どもたちが仲良くなることで、徐々に6人の駐在員配偶者

者たちは、子どもを介して生活の中で深くつながっていき、6人のママグループができていく。女性たちは、それぞれがグループ以外にも他に気の合う友だちもいたが、6人の仲間たちのつながりは、夫も含めた家族ぐるみの付き合いにまで発展する。

3人の女性たちの語りから、グループ内の結束の在り方に着眼する。

#### 4.3.1 支え合いの中のためらい—JDさん

JDさん(40代)は5年のデュッセルドルフ駐在生活を経て、小学校5年生の次女を連れて夫より1か月ほど前に帰国する。長女は日本で中学受験を終えて、合格し、ひとりで先行帰国し、夫の実家(埼玉県和光市)で暮らしていた。今は、帰国後9年経ち、夫と大学3年・大学1年の娘2人と横浜に住む。出身は大阪で、親はJDさんが小学4年生の時に離婚し、父親にはそれ以降会っていない。当時、両親は仲が悪く喧嘩が絶えず、「私としては(親が離婚して)良かったです」と話す。母子家庭となり、母親は働いてJDさんを育てた。2歳上の兄は父親と暮らす。あまり話したりはせず、自分は「母っ子で、父親は大嫌い」と言う。母方の祖父母がそばに住み、父親がいなくても「寂しいっていう感じもなかった」。地元の短大の英文科に進学し、語学に興味があり、短大1年の夏休みに学校のプログラムの一環として1か月ほどアメリカにホームステイした。就職も転職のない一般職を希望し、大阪で調味料を扱う会社に就職する。社内では販売課に配属され、事務職の仕事は「それほど大変ではなかったです」「女性も多く職場環境も人間関係も良かったです。独身で定年までいる人が多かったです」と話し、人間関係もよく職場の先輩、後輩たちと旅行に行ったりもした。就職して4年ほど経ち、飲料関係会社に勤めていた今の夫と友だちの結婚式で知り合う。夫は、山口出身で父親の転職が多く、福岡・大阪に住んだことがあり、就職時は埼玉に住んでいた。勤務地は東京であったが、知り合った時は、東京から大阪に赴任していた。そして、交際中に、夫はまた東京転職になり、大阪にいたJDさんは結婚を決める。JDさんが25歳の時で、「仕事は楽しくてやめたいとは思わなかった」が、当時「会社の雰囲気は女性の幸せは、結婚して子どもを育てること。結婚したらやめなければいけないっていう感じでした」と話し、5年弱勤めた会社を寿退職する。東京では社宅に6年ほど住む。失業手当の関係で仕事をやめて半年後に派遣会社に登録して総合研究所に半年勤めるが、長女を妊娠し、28才で出産する。その後、長女が1才半の時に次女を妊娠し、その時に夫が新潟に転職になる。次女は、母親の居る大阪に里帰りして出産する。新潟は社宅で6年生活するが、社宅には同年代の転職族も多く、皆でバーベキューをしたり、テニスをしたり、お花見をしたり、子どもサークルにも入り、友だちにも恵まれ、交流が生まれた。JDさんの夫の会社は、グループ会社が多く、社宅でも上司部下が皆違い、「わだかまりがなく付き合いやすかった」。長女が小学2年で次女が幼稚園年長の時に夫のデュッセルドルフ赴任が決まる。夫も海外勤務を希望していたが、JDさんは「新潟にいた頃は、もう海外はあきらめていました。前から海外に住みたいという憧れがありましたが、ひとりでは行く勇気がなかったんです」という語りから、デュッセルドルフに行くことを喜んで捉えていたことが分かる。

渡独時には、JDさんの勤めていた会社の後輩で社内結婚した夫婦がデュッセルドルフに駐在しており、そこから情報を得たり、いろいろ助けてもらった。居住地は、夫の会社の前任者が住んでいた日本人学校から歩いて5分ほどのところで、「日本人がいっぱい住んでいました」と話す。長女は日本人学校の小学2年、次女は日本人幼稚園の年長になる。

11月に渡独し、すぐに次女の幼稚園通園が始まるが、その年の春に来た家族が多かった。お迎えに行くと「皆きれいな人ばかり。『ごあますことば』でした。自分は新潟出身と思われているんじゃないかと思い、幼稚園のママたちの中に入っていきませんでした」と当時を思い出して話す。「ジーパン」の人もおらず、「きちんとしてなきゃだめだと思った」。「園長先生も笑わない」というJDさんの言葉から、当時のJDさんの緊張感が伝わってくる。そんな中で、JDさんはある日、ひとりで隅っこにいるお母さんを見つけ、思い切って声を掛ける。その親子が「1週間前に来た」ということが分かり、親しみを感じ仲良くなる。一方、長女が通う日本人小学校でも、学校での迎えがあり、他の駐在員配偶者との接点ができるが、最初は、「一見近寄りがたい」と思った。しかし、駐在員配偶者の中に「関西弁であいさつしてくれた人がいて、気が楽になった」。話してみると「すごい気さくな人たちもいてほっとする」が、常に「ちゃんとしなきゃ」という気持ちもあり、駐在員配偶者とのつながりにおいては、気を使っていた様子が伝わる。

日本人学校に通う長女も、「すでに友だち同士のグループができていた」が、「転校生が好きなハーフの子<sup>72</sup>」と仲良くなり、その子がバレーをやっていたので、一緒にバレーを始め、次女も同時に習い始める。JDさんは子どもたちに現地での習い事をさせたいと思い、友だち4人に声掛けして、子どもたちはテニスも習い始める。その頃は、自分たちで何人か仲間を見つけてクラスを設立してもらうやり方が多かったと話す。また、現地の幼稚園に行っていた人から情報を得て、スケート教室にも娘2人を通わせる。しかし、子どももJDさんも言葉が理解できず、教室の情報もあまり入ってこなかった。

JDさんは、最初の2年間は会社から援助ができるということでドイツ語の語学学校にも通うが、授業になかなかついていけず、公文でドイツ語を学ぶ。生活の中ではドイツ語を使う機会もなく、「何もわからなくても生活できるんです。病院にも日本人の先生とか、日本人の通訳の人が居るし。英語とかドイツ語のできる人も周りにいて助けてもらいました」と話す。そして、ドイツ語より英語の方がいいのではないかと思い、駐在員配偶者の友だち4人を誘い英語を学び始める。JDさんは、「ひとりで行くのはできないので。ひとりで行くというのは自分の中にはない」と話す。また、日本人向けのピラティスのレッスンも始める。JDさんは、「(自分の)子どもの数×知り合いの数」と話

---

<sup>72</sup> 日本人学校には、日本人のみでなくドイツ人と国際結婚した親の児童が、在籍する場合もある。JDさんの長女が仲良くなった友だちも、父親がドイツ人・母親が日本人で、日本からデュッセルドルフの日本人学校に新しく入学してくる日本人生徒と友だちになりたがっていたという。

し、子どもを通して少しずつ他の駐在員配偶者のネットワークが広がっていく。

次女も日本人幼稚園から日本人小学校に上がるが、入学式の時に JE さん、JF さんを含めた 5 人と初めて出会う。JD さんは、小学校に上がった次女にプールを習わせたいと思い、日本人向けプール教室の関係者から、日本人 6 人のグループができれば、日本人向け教室を開くことができることを聞き、JE、JF さんも含め入学式で知り合った母親たちに声掛けする。「みんなに声掛けするのは、ひとりではなんにもできないからなんですよ」と笑って話す。語りに繰り返される「ひとりで何もできない」という言葉から、常に何か新しいことを始める時に、友だちや誰かと一緒に行動することを好む姿勢がうかがえる。6 人の仲間たちとの結束は、ひとりでは心細く感じたり、新しい世界に一步踏み出す時に躊躇してしまいがちな JD さんにとり、常に心強いものであったと察する。

徐々に家族ぐるみのつながりに発展し、いろいろなイベントを皆で計画した。6 家族で公園でピクニックシートを敷いてご飯を食べたり、日本人小学校の運動会で、昼食時に日本人小学校のグラウンドで皆で鍋や材料を持ち寄り、カレーを作ったりもした。デュッセルドルフ日本人小学校の運動会は週末開催で、父母のほとんどが参加する一大家族行事である。当日は皆お弁当持参で、ピクニックシートを校内のグラウンドに敷き、家族で楽しむ。確かに 6 家族の合同カレー作りはかなり際立って人目を引くものであったであろう。「もしかして、かなり目立っていたかも」と JD さんは、はにかんだように話す。

また、生活の中で、いろいろな形で仲間同士助け合った様子が語りから伝わる。

JD：日本人小学校は毎日お弁当なので大変です。自分が病気になった時でも作らなくちゃいけない。絶対私しか作る人がいない。コンビニもないし、冷凍食品とかきのきいたのがない。(中略) ある日、ぎっくり腰になりまして。(住むところには) エレベーターもないし、外に行けない。みんなにお弁当を作ってもらい助けてもらいました。

さらに JD さんは、長女の中学校受験時のことを話し始めた。受験にあたり、次女をドイツに残して、日本とドイツを行ったり来たりすることになり、(実家の) 母にも次女の世話でドイツに来てもらった。JD さんが日本に一時帰国している間、次女や「右も左もわからず、車も運転できない」JD さんの母のことも 5 人の駐在員配偶者の仲間たちにも助けてもらったとしみじみ語る。

生活の中で困った時に仲間にもいろいろ助けてもらい、有難く思ったことが分かる。

また、5 年の駐在生活を送った JD さんは、デュッセルドルフのエキスパトリエイト・コミュニティを「日本人が密集しているコミュニティ」で「特異」なコミュニティと言いつつ、「デュッセル何秒って行って、すぐに噂が広まり、すべてがわかってしまいます」と話す。子どもの誕生会でもいろいろと気を使ったことを話し始めた。

JD：日本人学校はお母さんが迎えに来るし。誕生会でも、だれだれちゃんの家に行くのがばればれで。うちともうひとりしか呼ばれていなくて、(誕生会に行くのを)

断られたことが分かって。すごいショックだったので、私は全員、(子どもの誕生会に)呼んでいました。でも来てても(子ども同士で)喧嘩したり、みんなが嫌な思いをすることも。

児童の約7割が徒歩圏で約80%が15分以内に通り、小学2年生まではお迎えの義務がある(第3章3.4.2.1参照)中で、子どもたちが誰と帰り、誰と遊ぶ約束をしているのかも迎えに来た母親にもわかってしまう。特に誕生日は子どもにとっても母親にとっても一大イベントであり、かなり気を使わなければいけない様子が伝わる。

また、JDさんは日本人学校の行事であるカーニバル参加と学校祭にも触れ、その大変さを語る。

JD:小学校2年生のカーニバルの衣装づくりは本当に大変でした。その時(母親たち)全員、布を渡されて、その年は「忍者の衣装」を作るんだったんです。お友だちに助けてもらって(作りました)。

デュッセルドルフ市内では、毎年2月にカーニバル祭があり、日本人学校も毎年小学2年生が手作り衣装を身につけ、カーニバルのパレードに参加することになっている。衣装のテーマは毎年父母たちによって決められ、2年生全員が同じ衣装を身にまとう。裁縫が得意でない親にはかなりの重荷である。日本人学校に長男が通うKさんも長男が小学校2年生の時に、カーニバルの衣装作りをすることになったが、作るのが大変で、買うことにしたという。そしてその時にクラスの学級委員に「えーっ、買うの?」と言われたと話す。カーニバルの衣装作りは基本的に親が作ることにしているので、驚かれたという。

また、JDさんは、日本人学校の学校祭における親の関わりについても言及した。

JD:学校祭は大がかりで毎年売り上げを競い合うんです。幹部<sup>73</sup>の方が。だから下の(役員以外の)私たちがやらなければいけない。裏方のお仕事です。レシピももらって当日1品作って持っていくんです。失敗したらどうしようって緊張します。

---

<sup>73</sup> 日本人学校の保護者は全員基本的に「父母会」に属し、そこから、役員(会長、副会長、書記が選出される)。ここでは役員のことを指している(デュッセルドルフ日本人学校父母会 <http://jisd.de/fubokai/2018soshikizu.pdf> 2018年9月25日閲覧)。役員3人は、各クラスから選出された2名の学級委員の中から選ばれるが、役員の仕事の責任や大変さから、希望者が出ず、決まるまで何日もかかる場合もある。Kさんが学級委員の時には決まるまで4日かかったと話す。筆者も長女が日本人学校5年生の時に、学級委員を引き受け、役員選出会に参加したが。その時は、丸1日かかった。選出時は皆、下を向き、お互いに目を合わせず、静かで異様な雰囲気であったのを今も思い出す。

筆者も長女がデュッセルドルフ日本人学校にいた時、JDさんのようにかなり緊張して1品作ったことを思い出す。レシピは全員に渡され、おにぎりやケーキ、和菓子など自分ができそうなものを作って持って行くのだが、当日学校内で販売されるので、見栄えだけでなく、おにぎりは冷めてから個別にラップするなど、衛生面からもいろいろと注意することがある。母親たちにとっては、一仕事といえるであろう。

JDさんは日本人学校の保護者会や集まりが多く、毎回一言づつ話すことも「重荷に感じた」というが、次女が小学2年生の時に、学級委員を引き受ける。日常生活において、子どもの友だち関係や学校行事など大変さも感じるが、5年の駐在生活の中で一番つらかったのは、中学受験して合格し、日本で夫の実家に住む長女を見送る時だったと話す。

\*：お嬢さんは、先に帰国なさったのですか。

JD：はい。中学に上がる春に夫から「帰国になる」と言われて。最初は長女の受験を考えていませんでしたが、デュッセルの皆さんは、教育熱心の方が多くて、受験が当たり前で。私も流されて。東京に帰るといことで都立は荒れているっていう噂があり、ネットで調べて、帰国卒で受けられる受験校を探しました。娘は夫の母の家（埼玉県の和光）に住まわせてもらいました。

\*：一番つらいというのは。

JD：日本の中学に通う長女が夏休みに来て。また日本に帰る時に（長女を）ひとりで帰らせる時につらかったです。見送った時につらかったです。

話しながら、当時を振り返り、少し涙ぐむJDさんを見て、筆者も次女の高校進学の時を思い出し、もらい泣きしてしまった。筆者の次女も日本での高校が決まり、一足先に日本に帰り、高校の寮に入った。高校生活が始まる前に、いろいろな準備があり、筆者も次女と日本に一時帰国した。そして、次女を日本においてドイツにまた戻る時に、何とも言えない寂しい気持ちを抱いた思い出がある。

子どもの友だち関係や学校の行事との関わりの中で気を使ったり、中学生の娘と離れて寂しい思いも抱くJDさんにとり、5人の駐在員配偶者の仲間たちのつながりは、大きな存在であったと察する。しかし、2回目の個別インタビューの時に、「皆には本当に助けられました。お互い様で。でもお弁当作りなど、皆できるからいいけど、私は頼まれても料理が得意じゃないから、できなくて。だから、できるだけ自分で」と語る。そして、「JEさんもJFさんもお料理も子どもの扱い方にも慣れている。私は子どもが小さかったけど、病気もしなかつたので。あんまりみんなにお願いしないようにしました」と話し、大変な時でもできるだけ自分で対処しようとした姿勢が見える。最後にJDさんは、自分は「人見知りなので、よく6人グループの仲間に入れたなあって思います」としみじみ語る。JDさんの語りは、結束する仲間たちを大切に思い、仲間ができたことを嬉しく思いながらも、仲間たちに迷惑をかけないように気遣ったりすることもあり、またそれなりのつながり方の難しさも感じていることを示唆している。

### 4.3.2 初めての母親グループ—JE さん

次に JE さん（40 代）がどのように 5 人の仲間たちとつながっていたのかを語りから見えていく。JE さんは、インタビュー時には、6 年間のデュッセルドルフ生活を終え、帰国して 7 年経ち、夫と大学 4 年の長男と大学 2 年の長女と横浜に住む。川崎出身で両親は鹿児島出身で 3 歳違いの姉がいる。JE さんが子どもの頃、家庭内は男尊女卑で「父親の脱いだものはみんながひろっていました。母と姉が父をあがめていたことに違和感を感じていました」と話す。小・中学校は地元の公立、高校は私立、大学では建築学を学ぶ。卒業後、父の縁故で建築事務所に就職し設計の仕事をしていた。1 年半働いて 1 才年上の男性と職場結婚するが、それまでは実家で暮らす。夫は横浜出身で、父親の仕事の関係で小学 1-2 年生時にギリシアで生活した経験があり、海外勤務を希望していた。結婚後は、夫の出身地である横浜に移り、仕事を続けていたが、結婚して 7 か月後に、妊娠が分かり検査で子宮頸がん細胞が見つかる。「もっと働きたかった」が、2 年 4 か月働いた会社を退職することになる。治療を受け無事に長男を出産し、長女もその 2 年後に生まれる。仕事をしたかったが、「子育てを人に頼みたくない」、「預けたくない」という気持ちがあり、渡独時まで自宅で採点の仕事をしていたが、夫から「それが一生やりたい仕事なの？」と言われたので夫には内緒でやっていた。「自分はそれしか知らないから一生懸命だった」。そして、その他にもベビー服などの縫製、小学受験用の子ども服の縫製など自宅でしばらく仕事もした。「とにかく仕事をしたかった」と話す。JE さんの母親は子どもたちが小さい時から縫製の仕事やパン工場の事務などをしてずっと働いていた。

2004 年に JE さんは、夫の駐在で小学 3 年の長男と小学 1 年の長女を帯同しデュッセルドルフに赴く。夫のデュッセルドルフ赴任が決まった時は、JE さんはある期待を持っていたと話す。

\*：ドイツ行きが決まった時は。

JE：（日本の）幼稚園に行っていた娘のチック症状がひどくて環境を変えたら治るかなという期待がありました。自分も幼稚園ママとの付き合いも面倒くさいし。長女は他の子と比較して、いろんなことがよくできるみたいで、～ちゃん（JE さんの長女）はよくできるでしょうって、言われて。

当時、日本では「幼稚園ママは面倒くさいし、それに疲れていました。気の合う人もいないし、つるむのも嫌で。グループとか嫌でした。面倒くさいですよ」と話し、いろいろなことが重なり大変で「すごいつらかった」という。そして「デュッセル行きはチャンス。それ（つらい気持ち）を変えられるかなと思うと本当に嬉しかった」と話す。

渡独後、「日本人がいると面倒くさいから日本人がいないところ。でもあんまり離れちゃうと大変だから、微妙に遠くて」と話し、日本人学校から電車で 10 分ほどのところに住む。そして学校は「基本、受験派なので、日本人学校以外は全く考えていません



でした」ときっぱり語る。

長男は小学3年生に編入するが、子どもを介して母親のグループも出来上がり、小学1年の長女も子ども同士、同じ幼稚園から上がった友だちとつながり、母親たちも固まっていた。長女の日本人学校でのお迎えが始まり、子どもが現地幼稚園に通っていた駐在歴の長い母親や「さばけた人と仲良くなりました」と話すが、基本的には、「人付き合いはあまり。気になっちゃうので。自分も疲れちゃうので、人に会わない方がいいと思っています」と言う。誘われるのも嫌で「電話も持たない」。習い事も「面倒くさいから」せず、日本人学校のお迎えの時も遊びや習い事に誘われたらどうしようかと「警戒して、ドキドキしました。(他の駐在員配偶者の)旦那さんの話には興味がないし、『どこにお勤めですか』とか聞かれたりして、面倒くさくて嫌だったです」と話す。そして仲良くなった友だちが知り合って1年で帰ってしまうと「寂しくて神経痛になりました」と笑って話す。

長女も少しづつ友だちができる中で、長女の友だちの母親であるJEさん、JFさんと仲良くなっていく。JEさんにとっては「生まれて初めてグループ」であった。今まで人付き合いがあまり好きでなく、日本の幼稚園時代も母親同士の付き合いが面倒くさくてつらいと感じていたJEさんにとってはグループでの付き合いは考えもしなかったことであった。そして、渡独した最初の頃は、よくひとりでカフェでお茶をしていたが、だんだんとグループとつながり、一緒に行動することが増えてくる。在独中、夫が心臓の手術をすることになりJEさんは夫と日本に向かうことになるが。その時は子どもたちを日本に連れて行くわけにいかず、JFさん宅で預かってもらった。JFさんは日本人学校に通うJEさんの子どものお弁当作りなども引き受けてくれた。

デュッセルドルフ滞在中は、JEさんは、働きたかった気持ちをきっぱりと断ち切り、子どもの教育に徹する生活を送る。

\*：日本であんなに頑張って働こうとしていましたが、こちらでお仕事ができないことはどのように感じていましたか。

JE：働けないので、駐在員の妻は。だからできないからしょうがないと。そこは全く追っていません。逆にできるほうがもやもやしちゃう。誰も働いていないし。帰国後に仕事を探せばいいと思いました。

長男は中学受験を考え、小学4年生からデュッセルドルフの進学塾に入れる。そして「私は勉強を奨励して子どもたちを育てました」「すごいスパルタで『鬼母』で有名でした」と笑いながら話す。JDさんとJFさんも口をそろえて「私たちの子どもたちの先生でしたよ」と話し、JEさんが教育熱心だった様子が伝わる。勉強以外に長男は、日本人の先生のピアノ、その後バイオリン、工作、長女もピアノ、バレエ、水泳、スケートを習う。ドイツで家族旅行に行く時も勉強道具を持たせた。子どもたちに対して教育熱心なのは、自分が子宮頸がんや死への不安を持った経験が大きく影響していることが次の語りから見えてくる。

JE：がんが分かった時には、一番最初に自分が死ぬかなと思っていたので。(子どもたちは)別に食べる物とか住むところには困らないとは思いますが、誰も子どもたちのことをここまで熱心に教育する人はいないから、私がするしかないと思いました。生きていく為には勉強が本当に必要だと思って。(子どもたちには)厳しかったです。

夫は、「子どもにお金をかけすぎ、やりすぎだ」と言うが、「最終的には、子どもの教育費を払い、認めざるを得ない」と明るく話す。JEさんは「たぶん、良しと思っているのでは」と笑って語る。JEさんは、「知識はいつでも持って歩ける」「ピアノとか技とかはいつでも身につけて歩ける」と口調を強めて語る。そして、家族で夫に帯同したのは「娘が元気になる為でしたから」ときっぱりと話す。JEさんの子どもへの強い思いが伝わってくる。

また、JEさんは長女が日本人学校の2年生の時にクラスの学級委員、4年生の時に父母会の副会長<sup>74</sup>になる。「人付き合いが苦手だし、面倒です。自分が疲れちゃうから」というJEさんが、学校関係行事の打ち合わせなどで頻繁に学校に行かなければならない副会長を引き受けたことは、筆者にとって驚きであった。JEさんは、それについて次のように語った。

JE：(副会長をやることで)ある意味、立ち位置を確立しちゃったっていうか。学校にずっと通って、式典に出たりとか。でもそれ以降は、活動もせずひっそり生きていました(笑)。その前は学級委員もやっていました。子どもが4年の時に終わらせたいと思って。5、6年は受験で忙しくなるから引き受けました。

JEさんの語りから、子どもの教育のことを考え、受験で忙しくなる前に役職を済ませてしまおうという気持ちはもちろんあるが、自分の立ち位置を作ることで、煩わしい人間関係を少しでも緩和させたいという思いも感じられる。

基本的には、他の駐在員配偶者たちとのつながりより、ひとりであることを好むJEさんであるが、6人の結束は、人生「初めての」貴重な経験であったと察する。

#### 4.3.3 ともに支え合う仲間—JFさん

最後に6人グループのひとりであるJFさんの語りに注目する。

JFさん(40代)は、商社マンの夫の海外赴任により、小学校1年、幼稚園年中、2か月の乳児の3人の娘を帯同する。

JFさんは千葉県出身で、短大で幼児教育を専攻し、卒業後幼稚園の先生をしていた。4年勤めた後、短大時代に入っていたサークルの友だちを通して今の夫と知り合う。相

---

<sup>74</sup> 注(73)参照。

手が名古屋に転勤になり、1年の遠距離恋愛を経て結婚を決め、JFさんは幼稚園の年長の受け持ちであったので、年長児が卒園するのを機に仕事をやめて名古屋に行く。商社マンの夫は、英語があまりできないが、海外勤務希望であった。デュッセルドルフの赴任が決まった時、JFさんは「すごい行きたかったかっていうとそうでもない」と話す。小さな子どもがいるので実家の母に引っ越しを手伝ってもらい、渡航時は、夫の母親と一緒についてきてくれた。

居住地は、夫の前任者が住んでいたところで、日本人学校から歩いて10分ほどのところであった。小学1年の長女は日本人学校、次女は自宅から歩いてすぐのライン幼稚園に入園する。日本人学校近くの日本人幼稚園でなくライン幼稚園にしたのは、「奥さんたちが、二子玉川に住むようなマダムで、ちょっと雰囲気が違うと思い、日本人幼稚園はだめだと思いました」と笑って話す。ライン幼稚園は園児の運動に力を入れて、スポーツプログラムが多く、先生方も気さくなことから、そちらの雰囲気の方が気に入ったこともあるのであろう。

長女が日本人学校に入学し、小学校での初めての保護者会の時に、自己紹介があり、「乳児がいて、来たばかりで、全くわからないので、いろいろ教えてください」と皆の前でお願いした。保護者会のあと、「ドイツ生活歴の長い面倒見のよい人（駐在員配偶者）が声掛けしてくれ、ベビー用品など家まで届けてくれました」と嬉しそうに話す。その女性が、ドイツでの生活スタートを助けてくれたが、駐在員家族の為すぐに帰国してしまう。

幼子を抱えての生活だが、夫は出張が多くあまり頼ることができなかった。一番大変だったのは、3女がサルモナラ感染して入院した時だと話す。夫も出張中で、JFさんは入院した3女につきっきりで病院にいなければならず、2人の子どもは仲間のJEさん宅に預ける。その時「頼れるのは、近くに居る友だちなんだなって。親も親戚もいなくて」としみじみ語り、友だちの存在のありがたみをつくづく感じた様子である。

またJFさんもJDさんと同様に日本人学校に通う娘の友だち同士の付き合いの難しさに触れた。

JF：子どものお誕生会の時、みんなが学校から一緒に歩いて帰るので、みんなを誕生会に呼ばないわけにはいかないです。以前、呼ばない子の母親からうちに電話がかかってきたことがあります。でも子どもにもこの子とは遊びたくないというのがある。

親としては他の親ともうまくやっていかなければという気持ちもあり、子ども同士の関係が親の関係にも響いてくるという複雑な状況が見える。

また、日本では、子どもが小学生になると、友だちが遊びに来てても自分で帰っていくが、ドイツでは、遊びに来た子どものお迎えに親が来るので、「何かお茶菓子も用意しておくんです」と話す。日本に居る時よりも親同士の密な関係が生まれる状況がある。JFさんは、子どもの付き合いイコール親の付き合いと話し、子どもの付き合いには親も大

きく関与し、接点があるという。そして、特に金曜日は子どもたちがそれぞれ友だちの家に行ったりするので、お迎えが大変だったと話す。

また、遊びの送迎のみでなく、3人の子どもたちは、習字やお絵かきなどの習い事もしていて、その送迎もあり、まるで「3人のマネージャー」のようであった。3人の子どもたちの育児に追われ、子どもを介した駐在員配偶者のつながりにも気をもむこともあった様子が見える。そのような日常生活において、何かあった時に助けてもらったり、話ができる5人の仲間は、JFさんにとり心のよりどころともいえる。

JDさん、JEさん、JFさんの3人の語りを見てきたが、それぞれが日常生活実践を行う上で、仲間たちとのつながりは大きな心の支えになっていたように見える。不慣れた環境の中で新たに生活を立ち上げ暮らす中で、夫や子どもが病気になったり、子ども同士の付き合いや他の駐在員配偶者とのつながりにおいて困ったり悩んだ時に支え合った様子が浮き彫りになった。

3人のグループインタビューは終始、笑いが絶えずにぎやかで、筆者が驚いたのは、仲間の夫たちのことも「ちゃん」づけで親しそうに呼ぶことである。夫を巻き込んだ家族ぐるみの付き合いがあったことがうかがえる。

一方、「固い結束」ではなく、「緩い結束」で他の駐在員配偶者たちとつながる女性も居る。次にLさんの語りに注目する。

#### 4.3.4 緩い結束—Lさん

Lさんは4歳の幼稚園年中の長女と2歳の次女とともに商社勤務の夫に帯同し、デュッセルドルフでの生活も6年目である。渡独後、長女はインターナショナルスクール(ISD)に5歳から入学し、次女も日本人幼稚園卒園後、長女とともにISDに通い、それぞれ5年生と2年生である。

Lさんは、神奈川県生まれで、自動車メーカー勤務の父親の仕事の関係で4歳から7歳までオーストラリアのメルボルンで過ごした。帰国後は公立小学校に入り、小学6年からアメリカのデトロイトに家族で駐在し、中学3年の4月に帰国して公立中学校に編入する。そして帰国子女枠で神奈川県の私立高校に進学し、大学で国際関係法を学ぶが、法律の勉強がかなり大変で「人生で一番大変だった」。大学ではチア一部に所属する。大学入学後からは、「家を出る」ことを決めていたので、大学の学生寮で2年暮らし、その後、姉が就職して都内に引っ越した為、姉と一緒に住む。卒業後は、姉が航空会社の国際線乗務員であったこともあり、興味を持ち、別会社の航空会社に就職し、姉と同様に国際線乗務員になる。4年後に友だちの紹介で今の夫と知り合い、6年の交際を経て結婚する。夫は名古屋出身で大学院まで実家暮らしで、商社に就職し、東京勤務になる。Lさんは、結婚後も仕事を続けるが妊娠して休職する。仕事に復帰した理由については、「本当はやめようと思い、会社にも電話したんですけど」周りから「とりあえずやってみたら」と言われ、「できるところまでやろう」と思ったという。そして2年後に2人目ができ、次女が1歳半、長女が3歳の時に職場に復帰する。母の助けも借りながら、月に15日間働いて仕事を続けた。フライト先はNYが多

く、1回の勤務で4日間家を空けた。仕事は「息抜きになった」が、復帰して半年ほどして夫のデュッセルドルフ勤務が決まる。

\*：仕事をやめる時の気持ちはどうでしたか。

L：ちょうど良かったって思いました。仕事がしんどかったので。子どもができて休職した時に、ちょうどビジネスクラス（向けの）訓練が終わってこれから経験を積んでいかなきゃいけない時だったんです。復帰した時に一応ビジネスクラスの資格は持っているし、仕事期間としても4年経っているので「当然できるよね」って言われて。でも資格は持っているけど仕事をこなす力量がない。対お客様なので、そこがしんどかったです。

Lさんはドイツに来ることになって「ほっと」して、夫についていくのも「抵抗なかった」。夫も海外希望で、商社に就職したのも「海外に行けるから」という理由であった。渡独後、夫の会社の前任者が住んでいた家に住むことになり、日本人学校や日本人幼稚園近くの日本人集住地区で暮らす。次女は、日本人幼稚園まで歩いて送迎し、長女はインターナショナルスクールまで車で送迎した。

新生活が始まる当初は、「知り合いがひとりもいなく」、夫の会社と同じ部署の「奥様たち」が声を掛けてくれて、町案内やスーパー等の案内をしてくれた。徐々に子どもの幼稚園や学校を通して、日本人駐在員配偶者たちと知り合う。「仲のいい友だちは最初（にいた時の）ほうができましたね」と話す。

\*：「最初のほうができた」というのはどういうことですか。

L：（こちらの生活に）慣れていないので、友だちもほしいし、お互いに需要と供給もあうし。同じ時期に来た人。

\*：日本人幼稚園のお迎えの時にできたんですか。

L：はい。お迎えの時に行って話す。仲のいい友だちもできたし。

さらにLさんは幼稚園のお迎え時に「私はすぐに（長女をインターナショナルスクールに）お迎えに行かなきゃいけなかったのが良かった」「帰るタイミング、引き上げるタイミングが難しいです」と話す。母親たちとつながることで、生活情報などいろいろ入り生活を送る上では有難いと思う一方、幼稚園お迎え時に他の母親たちと一緒に居る時、「その場を去る」難しさも感じている。Lさんは「（先にその場を去るのは）やらなきゃいけないことがあるから」と話す。が、わだかまりを作らないように関係性を保つのに気遣いしているようにもみえる。

また、他の駐在員配偶者たちから料理教室、ドイツ語、フラワーアレンジメント、ペーパークラフトなどの習い事の誘いも受けるが、最初の頃は、「興味もあり、自分もやりたいと思った」。しかし、だんだんと「そういうのが面倒くさくなって、今はなんにもやってないです」と話す。駐在生活も5年経ち親しい友だちは皆帰ってしまい、一緒

にドイツに来た駐在員配偶者も「誰もいない」。今は子どもが通うインターナショナルスクールの日本人母親たちとつながっているが、特定の友だちはいない。そして今の生活について次のように語った。

\*：今の生活はいかがですか。

L：ほとんど家にいます。長女はひとりで学校に行き、次女の送迎はありますが。(中略) 午後、家にいて動画とか見えています。日本のドラマとか。週1回はインターナショナルスクールの親向けのドイツ語に行っていますが。

ドイツ語のレッスンは、生徒が6-7人で日本人が4人いる。

\*：お友だち関係はどうですか。

L：ほとんどつながっていない状況です。みんな帰っちゃったっていうのもあるしあんまり人付き合いが好きじゃないんです。来たばかりの頃はいろいろ行きたかったし。みんなが帰っちゃった後は新たに開拓しようという気持ちは全くありません。今いるメンバーもがっちり付きあうというのではなく、時間があればなんとなく。

Lさんは、ドイツ生活にも慣れ、今の生活を「自由に過ごさせてもらっているので全く不自由はない」と話す。今は特に生活上では困ったこともなく、他の日本人駐在員配偶者とつながっていなければ不安という危機感も持っていないように見える。「時間があればなんとなく」と言い、他の駐在員配偶者たちと緩くつながっている。自分のペースで生活を送るLさんは、「今は日本人コミュニティから離れて、新しく来る人たちとほぼ交流がないので、気楽といえば気楽です。3、4年前はまだ、下の子が日本人幼稚園で、オーバーカッセル地区のだ真ん中で、人の目を気にしていました」が、今は「どんな噂をされてもどうでもいいなって」と吹っ切れたように語る。

夫の会社関係のフラウ会<sup>75</sup>は年に3回ある。Lさんは、渡独当初は30代前半であったが、今は30代後半になり、若い駐在員配偶者も増え、年齢的に上から3-4番目である。渡独当初は、上司の奥さんたちを「怖い」と感じ、フラウ会には「気を使うから出たくない」という気持ちがあったが、今は、「円滑なコミュニケーション」の為にも大切だと思っている。「年齢でしょうかね」「何かあった時は友だちの方がお願いしやすいけれど、友だちがいなければ頼れるかな」と話し、自分の中での気持ちの変化がみられる。「困った時に頼める友だちはいる」と話すが、友だちとは緩くつながりながら、夫の会社の駐在員配偶者とのつながりは保つように心がける。

友だちが帰ってしまうのは「寂しいのは寂しいけど、日本に帰りたくはない」と話し、ドイツの「生活のゆとり」に言及し、「せかせかしていないからいい」と話す。さらに

---

<sup>75</sup> 注(7)参照。

「受験戦争に巻き込まれたら大変だろうと思います」と子どもたちの帰国後の教育についても心配する。

Lさんはドイツで、何かあった時にお願いできる場所はしっかりと確保し、他の駐在員配偶者とは適度な距離を置き、緩くつながり生活を送る。

今までの駐在員配偶者同士の結束と連帯の在り方を見てきたが、JDさん、JEさん、JFさんの「固い結束」は、裏を返せばコミュニティ紐帯の弱さも示唆している。生活の中で何か困った時のサポートシステムが、コミュニティ内に十分でないと言える。

前述のDさんは、3人の子どもを育てる中で、フラウ会や会社の配偶者の集まりなどで子どもを預けなければならない時があり、ベビーシッターの少なさを痛感したという。デュッセルドルフには、「ポーランド人や東欧のベビーシッターは多いが、頼む感覚はないです。日本人のベビーシッターは3人しかいなくて、皆さん高齢になられて、開拓しなければいけない」と話す。母親にとっては、経験もある日本人のベビーシッターさんの方が安心感があるのであろう。また、Dさんの子どもたちが、日本人学校で悩みがあった時に相談したくても校内では、月に1回しかカウンセリングを受けることができなかったことに言及し、子どもの成長過程においてサポートの必要性を強調した。さらに、第3章では、デュッセルドルフの日本人学校の先生の教育に関する熱意があまり見られなくなり、子どもや保護者に対するサポートが十分でないことが読み取れた。これもエクスパトリエイト・コミュニティの紐帯の弱体化と言えるであろう。

生活の中で問題や悩みがあった時は、専門的な相談をする機関もコミュニティ内では期待できず、仲の良い友だちや夫の会社関係の駐在員配偶者たちに頼ることになる。

#### 4.4 駐在員配偶者の妻・母としての立ち位置

駐在員配偶者たちは、夫の仕事により海外で生活する。その為、Cohenによれば、妻の社会関係が、夫の会社や会社内での立場を反映し、妻が他の駐在配偶者たちとうまくやっていくことが夫の仕事の成功につながる。また、妻たちは、新しい環境で家族や子どもが順調に生活を送れるように努める。さらに異なった生活環境に「戸惑い」を感じ、生活を「むなしく意味のないもの」と感じる女性もあると述べられている。

本節では、実際に駐在員配偶者女性が、エクスパトリエイト・コミュニティにおいて妻や母としてとしてどのような意識を持ち暮らしているのかを他の駐在員配偶者や夫、子どもとの関係に留意してみていく。

##### 4.4.1 家族をつなぐ接着剤—Mさん

まずは商社勤務の夫がドイツにおいて社長であるMさんの語りに注目する。

Mさん(50代)は、2016年に夫の駐在先のヒューストンから日本に帰国せずそのまま夫に帯同しデュッセルドルフに移動した。インタビュー時は、デュッセルドルフ生活は1年4か月余りであった。ヒューストン生活前に夫の海外赴任でマドリッドに5年、デトロイトに3年半の駐在生活経験がある。今回は高校生2年生の息子は本人の選択で日本に残し、夫の母宅に暮らす。デュッセルドルフには、中学2年の娘のみを帯同した。

長女は、ヒューストンでは現地の学校に通ったが1年余りの滞在だった為、英語もあまりできず、「自分の納得がいかない。デュッセルドルフに行き、もう1、2年英語を勉強したい」といい、本人の希望により、インターナショナルスクール（ISD）に通う。居住地は学校近くに決め、家族3人で暮らす。

Mさんは、東京生まれだが、喘息の為、小・中・高校時代は千葉の田舎に引っ越し、大学の時にひとりだけ東京に戻り、都内の父方の祖父母宅に住む。国語の教師になるのが夢で大学は国文科に進んだが、英語に興味があり、大学3年時に3週間イギリスにホームステイする。そして、在学中に、教育実習も行い教職の資格も取るが、「職員室だけで一生が終わってしまい、世界が狭い気がして、もう少し世界を見たい」と感じた。しかし、自分の希望する職種が見つからず、商社、銀行、デパート、IT、アパレルなど種々の職種の会社をそれぞれ2社ずつ受ける。最終的には、「自分の世界が広がる」と思い、商社に就職する。就職後も、祖母がひとりになったこともあり、祖母と一緒に住み、週末だけ千葉の自宅に戻る生活であった。仕事は、自動車のアメリカ担当の輸出入業務で、仕事も楽しく、社内の人間関係も良かったが、同じ部署にいる男性と結婚することになり、5年勤めた会社を辞職する。当時、同じ部署の場合は、女性がやめるといふ暗黙の了解があった。また、仕事を通して、知らない世界で得るものも多かったが、仕事において女性社員のステップアップはなかったと話す。しかし、今振り返ると「会社をやめてもったいなかったかな。復職の制度がなく、やめたのは失敗だったかな」と語る。夫は仕事で忙しく、自分ひとりの時間もありません。その後、子会社に就職するが、2年ほど経ち、「子会社で規模も小さく、仕事自体もあまり気が進まず、もう少し違うことをやりたい」と思っていた。その時に、夫がスペインに駐在になる。夫の駐在が決まった時は、自分が商社で仕事をしている時に他の駐在員配偶者のお世話をした経験から興味もあり、「楽しみで、迷いもなく」夫に帯同する。

スペインでは、当時英語があまり通じず、すぐにスペイン語の学校で勉強を始める。子どもは結婚後、すぐにほしいと思っていたが、5年ほど流産が続いていた。そして、スペインに赴任して1年後に長男が生まれる。スペイン語の勉強は楽しくて続けたいと思ったが、出産の為、語学学校を一度やめる。しかし、出産後もスペイン人の先生に自宅に来てもらいレッスンを続けた。そして、スペイン滞在4年後に長女を出産し、生まれて半年後に帰国になる。日本で3年生活するが、幼稚園児と乳児の世話を専念する。「子どもが小学校卒業までは仕事をする事は考えていませんでした」と話し、自分の両親について語り始めた。

M：母は専業主婦で、父親は自営業でした。父が事業に失敗し、そこから這い上がる姿を見ていました。母親は父を助ける為にしんどい時は、内職やアルバイトをしたりして。今になって振り返ると金銭的に苦しい時期があったんだなあって。でも母はそれを全く見せなかったんです。

さらに高校生の時は、父親が仕事を転々としていたのが嫌で、「子ども心にコンプレ



ックスを持っていた」とも語るが、大人になり、金銭的にも苦しい時でも母親は子どもの為に頑張っていたと感じているのであろう。Mさんは自分が子どもを持つ親になり、自分もしっかり生きていかなければと改めて強く感じているように見える。そしてさらに次のように語った。

M：子どもたちは、自分で育てようかなって。外に預けるのはもったいない気がして貴重な時間なので。あと主人の職業がこんな（海外転勤が多い）なので、子ども自身、生まれた時から住む場所が転々としていると思って。そこで母親まで家を空けちゃうとすごく精神的に根っこがないような人間になってしまうような気がして。やっぱり子どもにはアイデンティティっていうか日本人として育ててほしかったので、やっぱり、場所とか帰る場所がないと、と考えて。ちょっと格好よく言えば自分しかないのかなあって。

そして、当時は、自分自身は外に出たかった（仕事を始めたかった）のを「我慢」していたと話す。Mさんは、自分が家族にとって「帰る場所」であり、そのような場所を提供することが自分の役目だと強く感じていることが語りから伝わる。

Mさんは、3年間の日本での生活を経て、2007年から2011年2月まで駐在の夫に伴い、デトロイトに暮らす。デトロイトには、自動車関係の日本人駐在員家族も多く、居住地にも比較的日本人が多かったが、常に会うことはなかった。夫と同じ会社の家族も3、4家族いたが、仲良くなったのは、子どもを通じて知り合った他の会社の駐在員配偶者であった。「同じ会社の人たちは、人数が少なかったので、いい意味でつかず離れず。仲良しでべったりっていうのは自分では望んでいなくて。数か月に1回くらいのペースでみんなで会っていました」と話し、とても「いい感じ」のつながりだったという。長男は小学1年から4年まで現地校、長女は4歳から6歳までプレスクールに通い、長男は土曜には日本語補習校に行っていたが、補習校には日本人生徒が900人ほど在籍していた。滞米中は、子どもを介して、他の駐在員配偶者や現地の人ともつながりがあり、「充実した時期」であった。自分自身の英語については、「会話には自信がないけど失敗を恐れない。英語を話せなくても間違えても全然恥ずかしくなかったです。通じれば文法はどうでも」と笑いながら楽しそうに話す。4年のデトロイトでの生活を終え帰国するが、帰国した翌月に東北大震災にあう。

M：その頃、下の子も小学生になり自分も外に出たい（働きたい）という気持ちはありましたが、震災の1年後までは何があるかわからないという気持ちでした。娘が小学3年生になるまでは心配の方が先でした。その時は我慢というより、そうしなきゃいけないという思いがありました。

子どもが小さい時は、自分より子どものことが優先で、「我慢」よりもむしろ、子育てを「義務」として感じていた。そして、長女が小学5年生になり長男の中学受験も済

み、一段落したところで、「また何かしたいという気持ちがあり」1年間小学生対象の民間の学童保育で週に3-4日、午後4時間ほど一緒に遊んだりして、子どもの面倒をみる。

\*：お仕事を始められたのはどんな気持ちからですか。

M：娘も小5になって、少し成長してほしいという思いがすごくあって。自分が手を離れた方が、(娘が)自分でできることの方が増えるかなって。自分もやりたいことがあったし、ひとりで居る時間を子どもにも作って、子ども自身に自分でやるということを考えてもらいたかったということもあります。

仕事を始めるにあたって、何かしたいという自分の気持ちもあったが、子どもの成長の為にも子どもが自分と離れる時間を持つことが大事だと考える。Mさんが常に子どものことを優先する意識を持っていたことが分かる。

日本の生活も4年経ち、夫のヒューストンへの海外駐在が決まる。夫は結婚前にデュッセルドルフに2年研修で駐在していたこともあり、夫にとり4回目の海外駐在であった。夫のアメリカ滞在の1年後、Mさんは長男、長女を帯同してアメリカに赴く。当時、長男は、日本で中高一貫校の高校1年生であったが、休学させ(高校は1年半休学可能)ヒューストンに連れて行った。Mさんは、中学校ぐらいまでは父親が居るところに家族で居るという「基本的なポリシー」を持ち、「何があっても家族一緒」で居ることが大事であると考えている。

ヒューストンからそのままデュッセルドルフに移動し、家族3人の生活が始まる。今回は息子をひとり日本に残してきたが、家族が離れて暮らすのは初めてで、「常に心配です」と話す。

Mさんは、自分は家族を結び付ける「接着剤」と話す。Mさんは、「主人が仕事をできる環境を作るのが自分の仕事なのかとずっと思ってきました。子どもも手から離して人に任せたり、主人だけどこか行って仕事をして来てっていうのはなかったです」と語る。

渡独後は、日本人向けドイツ語の学校に通い、生活情報を得て、30代、40代の駐在員配偶者たちと仲良くなった。また、夫がデュッセルドルフ赴任前の前社長夫妻が、社内の組織変更でデュッセルドルフに駐在しており、その社長夫人とは時々会う。自分より2、3歳上で「精神的に頼れる存在」で、情報交換や愚痴を言いあったりするという。

ドイツでの生活も1年半ほど経ち、今は、ドイツ語をやめてスペイン語を週2回プライベートにスペイン人の先生から習う。ドイツ語は1年間やってみたが、「ドイツ語が合わない。音が入ってこないんです。マドリッドにもいたし、スペイン語の方が好きみたいで」と話し、ドイツ語で買い物したり食事の注文ができるようになった時点で、スペイン語の勉強に変えた。今一番夢中になっているのはスペイン語の勉強という。スペイン語を週2回先生のところに習いに行く。そして、Mさんは、「外に出るのが好きで、家にずっと居ると鬱になっちゃう」と笑って話し、スペイン語学習で出かける以外に、自分でカフェに行ったり、友だちを誘って食事に行ったりする。また、日本人向けの料

理教室やお菓子教室にも月に1、2回出かけ、いい「息抜き」になり「楽しいです」と話す。「必ず週2回ぐらいは行かなければいけない場所を作るんです。今までの3回の駐在地でもそうしていました」といい、スペイン、デトロイトでの駐在生活時代に触れた。

M：スペインの時は、語学学校に通いました。子どもを産んだ時はスペイン人の先生に家に2回くらい来てもらって。子育てのことを教えてもらったり。

\*：デトロイトでは。

M：学校のボランティアとか。あとは教会とか主婦のボランティアとか。

\*：ヒューストンでは。

M：短かったの。最初から週に3回ぐらいジムに行っ。

それぞれの駐在地で、常に外に出かけるようにしていた。そして今は、長女の通うインターナショナルスクール（ISD）の日本人保護者会の役員をしている。保護者会の総会に関わったり、日本人生徒の家族に学校連絡をしたり、学校のインターナショナル・フェスティバルのお手伝いで月に数回学校にも出かける。そこで日本人の駐在員配偶者とのつながりもできる。また、ドイツ語学校で仲良くなった日本人駐在員配偶者たちともつながっている。

積極的に外に出て他者に関わっていく姿勢を持つMさんは、「1週間家に居るように言われたら、気が狂っちゃいます」と笑う。多くの駐在経験を持つMさんだが、今までの駐在経験について次のように語った。

\*：人との関わりの中で困ったこととか、難しいと思ったことはありますか。

M：ほとんどないですね。毎回駐在地は、今まで困ったことがなくて、助けてもらうこともすごく多いんです。人間関係で嫌な思いをしたことがないんですよ。今まで。ここは日本の方が固まりすぎているので、いろいろあるって聞いてきたんですけど。今はないですね。子どもがひとりなので、知り合う数も半分。自分の忙しさが。だいぶ暇になっています。

そして、しばらく考えてから、「本当に強いて言えば」と言い、語り始めた。

M：会社での主人の立場が上がるにつれ、自分が一駐在員としてエンジョイするのはどうかなって。例えば自分が若い時は、羽目を外すとか、知らなかったですむようなことが夫が上の立場になると（・・・）自分が羽目を外してしまって、それがぱあーっと広がるのは。ちょっと気を付けなければいけないかなって思ったり。常に会社の奥さんのだれだれさんどうしてるって（気遣ったり）。例えば、病気とか出産とか。

今回の駐在では、Mさんの夫は社内で一番上のポジションであり、Mさんは50代で、20人ほど居る社内の駐在員配偶者の中で年齢的にも一番上である。社内では、小さい子どもを帯同した30代の駐在員配偶者が一番多く、あとは20代から40代までの年齢層が占め、50代はMさんひとりである。

Mさんは、夫の会社の部下の妻たちの生活を案じている様子であるが、同時に「皆さんそれぞれ楽しんでいらっしゃるようで。それはそれでいいかな」と複雑な心境ものぞかせる。また、自分の役割として、部下の妻たちに、駐在員配偶者としての心得を話す必要もあると感じている。

\*：同じ会社の女性たちに対して何か難しさを感じていることなどありますか。

M：会社として、ここ（海外）に出してもらっているという意識をその20人（の女性たち）に浸透させるのが今少し難しいかなって感じています。ちょうどこちらに来て1年経って、自分もそうだったかもしれないけど、若い時に海外に行くとき自分の力で来ていると思ってしまう。若いからエネルギーもあるし、本来自分の力だけでここに居れるわけじゃないのにそうってしまう人が多いですね。それがちょっと違うんだよってというのは、この年齢になって分かったことですが。ご主人が会社員でなくなって、ひとりでどんなに大変かって。そこを分かってほしい。

そして「自分が偉くなったわけではないけど、言えるのは、年が上の人しか言えない。自分が言わなければいけない立場にあるのかな」と語る。さらに、デュッセルドルフは、今までの駐在地と比べ、日本への直行便もあり「気持ち的に距離も近く、日本の物もあふれていて、海外に暮らしていても海外でないような気がします。ここは日本だなと思います」と話す。そしてその為、「若い人たちは、何でもできるような気がしちゃって。海外生活をちょっと勘違いしてしまっている」という。過去の駐在生活を振り返り、デュッセルドルフを「日本」と言い切る。

Mさんは、家庭の中では、家族が離れ離れにならないように家族を結び付ける「接着剤」であり、子どもたちが帰ることのできる場所でもある。そして海外生活は「主人あつての生活」ときっぱりと言い、妻として、夫が仕事ができる環境を提供し、夫の部下たちの配偶者たちにも「上司の妻」として気を配り日常生活を送る。

#### 4.4.2 義務としての夫・子のサポート—Hさん

Hさんは、エンジニアの夫に帯同して2014年に小学3年生、幼稚園年長、1才半の3人の息子を連れ渡独した。インタビュー時には、デュッセルドルフ生活も3年経ち、3人の息子は、翌月の4月から日本人小学校の6年生、3年生、日本人幼稚園の年中になる予定で、日本人学校や日本人幼稚園近くの日本人集住地区に住む。

Hさんは埼玉出身で3歳違いの姉が居る。父親は電気技術系の会社員だったが、Hさんが10歳の時に事故で他界する。母親は、大学病院で栄養士をしていたが、夫の死後、

フルタイムで働くことが難しくなり、保険の外交員をしばらくしていた。その後、個人医院に勤め、10数年栄養士として働いた。Hさんは、子どもの時、母の働く姿は「恰好よく見え」、病院で働くことは「素敵」で、小学生頃から料理をやってみたいと思っていた。Hさんの祖母も叔父も教員であり、Hさんの姉は母親から教員になる事を勧められ、「手をかけて」育てられたが、Hさんは、2番目の子どもということで、親もあまり口出しせず、「野放しで自由奔放にやらせてくれ、好きなことをやっていい」と言われていた。県立高校を卒業後、母親から「遺族年金のサポートがあるから、大学に行きたければ行きなさい」と言ってもらい、私立大学に進学し、栄養管理を学ぶ。卒業後、栄養管理士の求職が少なく、手紙を書いたり、電話をしたり、大学を通じて募集があるところに面接に行ったり、大変な思いをして都内の大学病院での仕事を見つけ、そこで2年働いた。Hさんは、大学の友だちの紹介で同じ年の男性と知り合い結婚する。夫はHさんと同じ埼玉出身で3人兄弟の真ん中である。結婚後は職場の先輩の勧めもあり、自宅近くの病院に移るが、その病院は、前職場の大学病院に比べ「中規模」であった。そこで栄養士の仕事を続け、患者さんたち個人及び集団に対して栄養指導を行っていた。2人の子どもを出産後も、ヘルパーさんに掃除や家事を頼んだり、食料品の宅配サービスを頼んだりして仕事を続けた。

そして3人目を出産後に1年前後で仕事に復帰しようと思っていた時に夫のデュッセルドルフへの赴任が決まる。仕事はやめたくなかったが、夫の駐在期間は5年前後ということで、病院から「2年ほどの赴任であれば復帰可能だが、3年から5年になると無理」と言われる。また仕事の引き継ぎにあたり、「可能なかぎりいてもらって、引き継ぎをしてほしい」ということであったが、「中途半端な形では終わらせたくない」と思い、夫は1月に渡独したが、自分は3月31日の年度末まで働く。夫が渡独してからの3か月間は、Hさんは、仕事と保育園の送迎、家事・育児と目まぐるしい生活を送った。当時、長男は、小学校の学童、次男は保育園、3男は次男と同じ保育園に空きがなく自分の勤める病院の保育室に特例で預かってもらった。また、ドイツでの日々の生活の為に少しでもドイツ語ができなくては思い、子どもと一緒にドイツ語をカフェで教えてくれる先生を探し、自分の仕事後、週に1回1時間、2か月間ドイツ語を習った。渡独ぎりぎりまで仕事を続けたHさんだが、夫の会社から、ドイツでは配偶者控除を受けている為、妻は働けないと言われる。

Hさんは、ドイツに来てからの生活について次のように語った。

\*: こちらに来てからの生活はいかがですか。

H: マンツーマンで育児っていうのは、自分の時間もほしいから、ずーっと1歳半の子どもと居ると大変。(こちらに来て)半年くらいは悶々と。本当もう不安定。私はやりたいこと今までやってきたのに。私は我慢。私は子どものサポートはするけどそれが私がやりたいものではないです。料理教室に行っても、気晴らしにはなるけど。自分が生かされている意識はないです。

Hさんは、渡独前の仕事・家事・育児という目まぐるしい生活とは打って変わり、海外では1対1で幼い子どもと向き合うことになり、戸惑いを感じる。語りに「私は」という言葉が頻繁に使われるのは、夫は仕事ができる環境にあるが、自分はやりたい仕事ができないという鬱積した不満の気持ちの表れと考えられる。そして「家に居ると煮詰まる」ので、1才半の3男を連れて日本クラブ主催の幼児教室「ちびっこ集まあれー！」<sup>76</sup>やPさん主催の子育てサークル「ぶなの森」<sup>77</sup>にも参加した。また、長男が現地でドイツ人のサッカーチームに入会希望していたので、子どもの為にもドイツ語をやらなければと思い、託児付きの日本人向けドイツ語学校に週2回通い始める。長男は希望通り、ドイツ人のサッカーチームに入ったが、言葉が分からないとのことで、ドイツ人チームから日本人チームに移り、次男も同じチームに入会する。その後、次男の通う日本人幼稚園送迎で駐在員配偶者の母親たちと知り合う。日本人幼稚園は希望者には朝にはお迎えの園バスがあったが、帰りは園バスサービスがなく、迎えが必要であった。Hさんも毎日次男を迎えに幼稚園に行くことになったが、最初は「あまり気が進まなかった」。それでも、勇気を出して思い切って他の駐在員配偶者たちの世界に飛び込んでいく。

H：幼稚園のお迎えに行き話をするのが好きじゃなかったです。ここは、テレビの話題とかで盛り上がることはなくて、子どもの話とか習い事とか。最初はすごく嫌で。同じ人に会うこともあって。でもその人はそんなに悪い人じゃなくて。数か月後くらいにはお互いに行ったり来たりするようになりました。殻を破って飛び込んでいくことが大事なのかな。

Hさんは日本では仕事をしていて、子どもたちは保育園に預けていたので、幼稚園のお迎えは初めてであった。母親たちの話題も含め、年齢差にも触れ、「お母さんたちの年齢もバラバラで、10歳くらい離れている人もいて、最初はどうしていいものかわからなかった」と話す。しかし、頑張って駐在員配偶者の輪の中に飛び込み、仲の良い友だちもできた。基本的には、自分は「社交的じゃなく、あわなさそうな人や目が笑っていない人とは距離を置く」という。気の合う友だちは「かなり絞られていて、帰国で減ってしまうので寂しく思う。そして、子どもを通して新たに知り合うことはあるが、来独した時が一緒などのグループができてしまっていて、新しく仲良くなるというのはあまりないという。Hさんにとり、仲の良い友だちとは、「同じような価値観を持っている人」である。

\*：仲の良い友だちとはどんな友だちですか。

H：次男を通して知り合いました。子どもに対して同じような価値観を持っている人です。自分の子どもだけじゃなくて人の子も可愛がったり、注意したり。（子

---

<sup>76</sup> 注 (41) 参照。

<sup>77</sup> 注 (94) 参照。

もがサッカー教室に行っている) サッカーに対して一生懸命やっていて切磋琢磨し合えるお子さん。

さらに H さんは、幼稚園のお母さんたちの世界に触れ、そこでは I さんの語りにもあったようにお互い名字ではなく名前の後に「ちゃん」つけて呼ぶのがあり、始めは慣れなかったという。

H: あまり距離感を置いて「～さん」というのも失礼かなって思って。そういうのに慣れてなくて。小学校の親たちも「～ちゃん」って呼ぶんですよ。

H さんは、このようなルールに違和感を感じながらも、他の駐在員配偶者たちのやり方に合わせていこうとする。

「家に居ると煮詰まる」「家でボーッとできない」H さんは、3 男が 2 歳になる頃から料理教室にも通った。そこは託児所があり、子どもを預けることができた。そして、毎日、次男をお迎えに行くうちに日本人幼稚園の園児の母親たちから、誘いを受けるようになり、いろいろ習い事を始めていく。そして、3 男が日本人幼稚園に入園してからは日本人幼稚園や日本人小学校に通う子どもたちを介して知り合った母親たちからさらに情報を得るようになり、語学学校、料理教室以外にフラワーアレンジメントに月 1 回、日本人の子ども向けの読み聞かせ会を月 1 回、パン教室に月 1 回、ワインのおもてなしの講座やカルトナーージュ<sup>78</sup>などに参加する。料理教室には今も 1、2 か月に 1 回通う。先生は夫が日本人の永住日本人女性で、朝から 13:30 までで、軽食もつき 1 回 38 ユーロである。料理教室は中華やイタリアン以外にケーキやクッキーなども作るが「日本のような美味しく繊細なケーキがないのでケーキ教室は（駐在員配偶者に）すごい人気で、毎月教室はあるのですが、なかなか予約が取れません」という。

また、現地の公益団体「ヒューマネット」<sup>79</sup>のお店のお手伝いも頼まれ、週 1 回 3 時間ほど半年ほど店番をしている。お店で売る商品整理も時々手伝う。「無給だけどボランティアには興味があったので。何かお役に立って、誰かの笑顔につながっているのならやりがいがあります」と嬉しそうに話す。

いろいろな習い事をしたり、ボランティア活動をしたり、H さんの生活はとても充実

---

<sup>78</sup> カルトナーージュは 18 世紀ヨーロッパで生まれた手工芸で厚紙（カルトン）で作った箱に布や紙をはって仕上げたもの。

<sup>79</sup> 「ヒューマネット」ドイツ公益団体で、デュッセルドルフに住む日本人を中心とするボランティア団体で、1986 年以来活動。日本人家庭から、帰国や引っ越しなどで、不要になり寄付された物を売り、その収益を東欧や第 3 世界の援助活動にあてている。

<https://humanet1986.jimdo.com/> 2018 年 8 月 15 日閲覧。

H さんは、オーバーカッセル地区にある公文教室に子どもが通っていて、公文教室代表の永住日本人女性を中心に「ヒューマネット」の活動をしている関係で、仕事を頼まれるようになった。

しているようだが、日本にいた時のように好きな仕事ができないことを、忙しさで埋めようとしているようにも見える。

それでは、Hさんはエキスパトリエイト・コミュニティ内の日々の暮らしの中で母として妻として他者とどのようにつながり、どのような生活実践をしているのであろうか。

Hさんは、長男と次男の通う日本人小学校で2年続けて学級委員も引き受けたが、そのことについて次のように語った。

H：(学級委員を決める時) みんな(保護者)がなすりあいみたいになっちゃって。ひとりづつ言うんですよ、(学級委員の仕事が)できない理由を。妊活中とか。今妊娠3か月とか。もうじき横移動(他の国に海外赴任する)とか。言いたくない理由を。(それを)聞くのもつらい。そうなるんだったら、もういいです。(学級委員) やりますって。

学級委員や役員決めは、学校行事関係で学校に出向くことも多く、積極的に自分から希望する親が少なく、皆、引き受けることができない理由をいろいろ用意して保護者会に臨む。何かの病気があるとか、皆に知られたくないこともクラスの保護者全員に暴露することになる。皆が黙り込んでしまい、異様な雰囲気の中で、Hさんはいたたまれなくなり、立候補したのであろう。

さらにHさんは、長男が日本人小学校4年の時にクラスで数人の男子児童から仲間はずれにされ、いじめにあったことを語り始めた。

H：(いじめた子の) お母さんは真面目な人で。土真面目。そうすると息子さんも。息子さんも受験で。ちょっとうちの子、柔らかいから言われやすいので。どうしようかなって思いましたけど(相手の)お母さんには言えない。子ども同士で解決しなさいって。でも子どもが言ってもだめみたいで。

親が子どものことに関与すべきか悩み、学校の先生に相談しようと思った矢先に先生から連絡があり、話を聞いてくれた。その男子児童とは、学校登校も一緒に、習い事のサッカー教室も同じで会わないようにあえて時間を外して出かけたりした。最終的にはクラスの担任の先生が対応し和解したが、いじめの理由について次のように述べた。

H：その(子どもの) ママさんは、父母会の副会長で熱心。ひとりっこさん。お父さんもお母さんも土真面目だし。(お子さんも) たぶん受験のストレスから(いじめたの) かな。

しかし、Hさんは長男にも「言われたほうにも原因がある」と思い、「あなたももっと強くならなきゃって言いました」と話す。日本では仕事をしていて、「ママ友との付き合い」はあまりなかったが、「こっち(デュッセルドルフ)に居る人は、比較的学歴



の高い方とか、(ご主人は) いい会社に勤められているから。その奥様だから、お子さんだから、当たり前みんなできるし。家庭自体も落ち着いているし」と話す。語りから H さんは、駐在員配偶者のみでなく、駐在員である夫、子どもはこういうものだと捉えているのが分かる。

それでは、H さんは子どもと夫とどのようにつながり、生活しているのでしょうか。

3 人の子どもは皆サッカー、その他に長男は塾、次男は水泳、パズル道場、3 男は水泳、お絵かき教室に通い、H さんは子どもたちの送迎に忙しい毎日を送る。

\* : お忙しそうな毎日ですね。

H : 他の人から見るとすごい忙しいよねって言われます。(中略) 子どもと家にずーっといたくないので。

\* : お子さんたちの送迎もあるし、家事もあるし。

H : はい。でも洗濯、掃除、料理、(子どもたちの) 送迎はやりますが、でもそれは自分がやりたいことではないです。子どもたちがだらーとしていたり、文句言ったりすると、私はあなたたちをサポートする為に居るけど文句を言われるのはおかしい。感謝の気持ちを持ちなさいって言います。

家事、育児そして送迎を「自分がやりたいことではない」ときっぱり話す語りから、本意ではないが、しっかりと子どもたちの為に母親役割をやらなければいけないという義務感を持ち、家事や子どもの世話をこなす様子が見える。

次に夫との関係性に注目する。夫は、渡独して家族が来る前の 3 か月間は、仕事を英語でしなければならず、英語が分からなかったり、仕事の引継ぎもあつたり、食事も自分で作らなければならなかったりで「ストレスがマックス」であった。家族と一緒に住むようになり、生活は落ち着いてきたが、仕事は忙しい。

\* : ご主人はお仕事お忙しいですか。

H : 帰りは 9 時とか 10 時 11 時っていうこともあります。日本でも遅かったの。土曜日は仕事がないので自分のサッカーをしに行きます。私に用事がある時は、子ども 3 人をお願いしています。日曜日は、家の前で日曜サッカーがあるので、その時は、上の 2 人の子どもには自分たちでそこに行ってもらうこともあります。

\* : ご主人にもっと手伝ってもらいたいというのはありますか。

H : あんまり頼むと(夫の) キャパシティオーバーでしんどそうなので。疲れているみたいで。朝は起きるのもしんどそうです。夜も大変だと言っているの、これ以上プレッシャーをかけることはどうかなって思います。仕事も英語を使うので大変そうです。最近ようやく英語が聞き取れるようになってきたみたいですが、思うようにやれていないみたいで。職場での仕事の分業もちょっとうまく回らない気がするって言っています。それだけでいっぱいなんだろうなって。

今も会社に行く前と帰宅後、20分ほど英語のCDを聞いたり、本を読んだりして勉強している。それでもまだ英語での仕事は大変そうで、Hさんは、「(家事や子育てを)もってやってくれると助かるんですけど、いろいろ言っても嫌な雰囲気になるので」と語る。

H：夫は一生懸命やっているのです。本当にフルで頑張っている姿を見せてくれているので。これ以上は(頼めません)。土曜の午前中も死んだように寝ています。主人は(週末は)仕事がお休みですが、私は土曜日はないものと思っています。夫はストレスフルになっているので、土曜日には「サッカーに行ったら」って夫に言います。お酒もたばこもやらないので、ガス抜きするところがなくなっちゃっているのです。

Hさんは、海外での仕事にストレスを感じている夫を気遣う。自分は仕事をしたいけどもできない状況ですっきりしない不安定な気持ちを抱きながらも、夫や子どもたちのサポートに努める。日本に帰ったら、また栄養関係の仕事をしたいときっぱり語るHさんは、時折求人サイトを見て復職を狙っている。

#### 4.4.3 価値観のずれへの恐怖—Bさん

Bさん(50代)は、次女の学校生活のことを案じ、夫と価値観がずれないように夫婦のコミュニケーションに留意して駐在生活を送る。

Bさんは、商社に勤める夫の駐在で、渡独前に、英国に1年半、サウジアラビアに3年の駐在経験がある。2015年渡独時には、長男(23歳、英国ロンドン生まれ)はロンドン大学院、長女(18歳)は日本で大学1年で、小学5年生の長女のみ帯同する。日本人集住地区のオーバーカッセル地区より離れた市の中心部に近い地区に住む。

Bさんは、総合職で就職してから、休職してフランスのビジネススクールに1年2か月留学する。商社マンの夫と結婚するが、夫はアルジェリアに駐在になる。その時、Bさんは日本に残り仕事を続けるが、夫がアルジェリアからロンドンに横移動になった時に、夫の駐在期間が長くなるとのことで、Bさんは仕事をやめて渡英する。英国で長男を出産し、1年半の滞在を経て日本に帰国する。そして帰国後に、次女を出産し、サウジアラビアの赴任時には、7歳の長男、4歳の長女を帯同する。また、サウジアラビアから帰国後、何か仕事に結びつくかもしれないと思い、アラビア語の勉強を始め、2年間学校に通い、その後、在日サウジアラビア大使館で働く。数年後に次女を出産するが、保育園の空きもなかったり、長女の中学受験や登校拒否などもあり「仕事より大事なものがあ」と思い、大使館での仕事をやめる。その時を「人生を考える時期」と捉える。

B：体調も悪く、なんだかうつ病っぽくなって。そんな時に通信販売の仕事を紹介されて、その仕事が楽しくなって。続けていく仕事として考えました。会社の製品

を自分で使って、(その製品を) 勧めたり、使い方などを教える仕事で。研修もあります。ドイツに来る前、日本で5年ほどしていました。

さらに Bさんは、「主婦の役割は報われにくいもの」で、「経済的に自分に力がほしい」「経済力があって初めて自立できると思う」と強く語る。そして、Bさんの母親が、Bさんの祖母のお世話をする時、「自分のお金がないとお父さんに申し訳ない」と言っていたことを話し始めた。「(私の母は) 女性の経済力はとても大事とよく言っていました」と話す。そして自分の親も80代になり体も弱ってきており、「親の面倒をきちんと思いのままみる為にも経済力は大きい」としみじみ語る。

B: お金がない為に(親の面倒をみる事が)できない事実。お金があったらできることがたくさんあります。年をおうにつれてひしひしと感じています。経済力を持っていたいと思いました。夫のお金は使いにくいですし。

自分の「経済力」に重きを置く Bさんは、夫のドイツ赴任が決まった時は、通信販売の自分の仕事があり、仕事が「中断はされる」ことになり「悩んだ」が、帰国してからも続けられるし、ドイツでクライアントを増やすこともできると考えなおす。ドイツでは、現地に居る日本人駐在員配偶者や国際結婚した日本人永住女性に製品を勧めたいと思っている。また、小学校の登校拒否の次女にとって「良いチャンス」になるということが夫に帯同する大きな理由でもあった。次女の通う地元の公立小学校は、クラスが荒れ「崩壊状態」で、勉強できる状況ではなく、次女は登校拒否になり、学校を変えることも考えていた。そのような状況の中で、ドイツ行きは、次女にとり「チャンス」であった。

渡独後、本人の希望で、日本人学校ではなく、二つあるインターナショナルスクールのうち、ノイスにあるインターナショナルスクール (ISR) に決める。ISDの方は、夫の会社の子弟が多く通い、日本人が多いということや、ISRの方が「小規模」であることも選択理由であった。

Bさんは、現地の生活も半年余り経ち、どのような日常生活を送っているのだろうか。

Bさんが生活の中の「軸」として「プライオリティ」として考えているのは、「会社の奥様たちとお付き合い」である。実際にはそれほど会う機会は多くはないが、「何かあれば」出かける。そして、もう一つの軸は、インターナショナルスクールに通う次女の学校関係である。学校の行事である「ハロウィーン」、学内のコンサート、インターナショナル・フェスティバルなどでのお手伝い、また、図書館などのボランティア活動<sup>80</sup>も必要があれば参加する。学校行事の参加は「娘の様子も分かるし」と肯定的に捉え

---

<sup>80</sup> インターナショナルスクールでは父母によるボランティア活動がいろいろあり、その一つである図書ボランティアは、2時間ほど学校にいき、傷んだ本の修理や整理などを行

る。

今は、日本で登校拒否だった次女は「(学校が) 楽しい」と言う。Bさんは、次女が「落ち着いてきて、元気で学校に行っていることが一番嬉しい」と語る。そして「子どもって一大プロジェクトじゃないですか」と笑って話す。子育てを「一大プロジェクト」と考えるBさんが、次女が学校になじみ、ほっとしている気持ちが伝わる。

二つの軸はあるものの、生活の中で「一番長い時間を過ごしている」のは、日本人向けのドイツ語の学校である。週2回通い、授業後に時々日本人駐在員配偶者たちとお茶をして帰ることもある。しかし、そこでは、「グループで動く」ことが多く、なかなか個人的な深いお付き合いには発展しづらい。仲良くなりたい人がいても、「結局みんなに声かけないとなんかいけないような感じ」で、難しさを感じると話す。

\*：グループで動くとは。

B：私はひとりを誘ったつもりでも、その人がお茶行くからって。別に（他の人たちに）広めてほしくないんだけど、かといってクラスのみんなと一緒に終わるのに、私たちがって。そういうのやりにくくないですか。

Bさんは友だちになりたい人への声掛けの難しさに、筆者に同意を求めるように言い、語り続けた。

B：他の人が嫌なわけじゃないですよ。でもお話って2人ですのお話と大勢ですのお話と違うわけじゃないですか。（中略）声の掛け方が。誘っても「一斉メール状態」。クラスの人みんなにランチいかがですかって誘って、じゃ全員はそろわないけど3人で行こうって。その繰り返し。だと人間関係って深まらないですよ。

そして「微妙に4、5人だったりすると、ここであった話は、そっちにももちろん伝わるみたいな」とも話し、人間関係の難しさを感じる。デュッセルドルフでは、うわさが広まりやすいことにも言及しているのであろう。今までの駐在地であるロンドンやサウジアラビアではそのような形での日本人同士の付き合いはなかったという。

また、週1回、現地に長い日本人の先生にヨガも習うが、そこでは友だち同士で来ている人が多く、知り合ってもあいさつをする程度だという。

人間関係における大変さを嘆くBさんだが、一方、「丸見えな生活は息苦しいかなっていうのがありますね」とも話す。さらに日本人駐在員が多く暮らす日本人コミュニティは、「安心感」もあり「最初は有難い」と感じていたが、今は会社や他の駐在員配偶者たちに頼らなくても「自分で解決」できるようになり、日本人駐在員配偶者たちとの接点は特に必要とは感じていないように見える。

しかし、日本人学校に通っていない次女に関しては、「日本の子との接点があると嬉

---

う。

しい」、「(インターナショナルスクールに)日本人の児童がいて良かった」とほっとする。さらに「日本人の大人との接点が少ないので、お稽古事は日本人の先生です」ときっぱり言う。娘の為に日本人の子どもだけでなく日本人の大人との接点まで配慮する姿勢に、筆者は少々驚きを感じた。そして、「(次女が学校に)満足しているので、できるだけここにいっしょにいたい」という語りから、ドイツでの生活が「良いチャンス」になったと受け止めている様子が伝わる。

渡独を決めたのは、次女のこともあるが、夫との「気持ちのずれが生じる」ことへの懸念もある。Bさんは次のように語った。

B: 日本にいたって、ものすごく(夫)と密に話すわけではないですけど、用事がほとんどで、用事ばかりなんですけど。それでもあの一、それでもずれている気持ちがあるのに、ここで(夫と)離れたら、取り返しのつかないっていう、私には恐怖感がありましたね。今回の駐在は。まあ、駐在、2回とも一緒に行ったからかもしれないけど。

そして「駐在に行くのも面倒くさいけど、デュッセルはいいとこだし、行こうかっていう気持ちもあったので」と話すが、「やっぱりその夫婦のコミュニケーションが一番」と言葉を強める。「子どもは寂しいかもしれないけど、夫婦間ということを考えてなるべく一緒に」という。「同じ空間で暮らさないと「価値観がずれていく恐怖」がある。また、「夫婦関係が良ければ、親の相談もしやすい」とも話す。Bさんの語りから、娘を心配する母の顔、「夫婦のコミュニケーション」を重視する妻の顔、そして自分の親を思う娘の顔が見えてくる。

#### 4.5 駐在生活における自己への意味づけ

駐在員配偶者たちは、駐在生活の中における自己とどのように向き合い、自己存在の意味づけを行っているのだろうか。テッサ・モーリス＝鈴木は、「自己に存在の土台をあたえるのは、まさに集団への帰属一家族、社会、文化、エスニシティへの関与一」であると述べる(鈴木 2000: 160)。様々な視点から自己の存在への価値づけを見ていく必要がある。

駐在員配偶者の中には、前述のHさんのように仕事をするに自己存在の重きを置く女性も居る。Cohenは、自国で仕事をしていた女性たちは、夫の海外赴任にあたり、辞職を余儀なくされ、海外での生活をむなしく感じると述べる。しかし、女性たちの渡航時の気持ちや生活への意味づけは様々であり、「むなしさ」や「深刻な適応」と一括りにすることはできない。駐在員配偶者たちは、どのような気持ちで渡航し、自己の存在に意味づけようとしているのだろうか。

まずは、Aさんの語りに注目する。Aさんはドイツ生活が10年近くになり、夫は留学生として渡独し、現在、夫は日本企業の現地採用で働いているので、駐在員の配偶者ではない。しかし、ドイツで出産し、妊婦教室などで日本人駐在員配偶者たちとつなが

っていく。そして、彼女たちが海外で自分と同じような価値観を持ち暮らしていることに気がつく。Aさんと他の駐在員配偶者とのつながり方やAさんの語りから、駐在員配偶者たちの生活への意味づけが浮き彫りになると考える。

#### 4.5.1 経済的自立の重要性—Aさん

Aさん(30代)は、夫が日本の大学で博士課程を修了後、ロースクールに留学する為に渡独することになり、留学する夫に同行した。インタビュー時(2015年)にはデュッセルドルフの生活も9年経ち、現地校の公立小学校に通う6歳の長男と現地幼稚園に通う3歳の次男が居る。夫は、留学で渡独したが、その後、日本企業の現地採用になり、今は現地で働き、Aさんはドイツのデュッセルドルフ大学の博士課程に在籍している。

Aさんは高校卒業後、推薦を受けて、短大の国文学科に進学するが、「高校の成績が悪かったんでそこしかなかったんです」という。短大卒業後、旅行会社に就職するが、その会社が倒産し、その後広告代理店で働く。しかし、女性は昇進できないことを目の当たりにし、広告代理店を辞職する。そして、当時、ハワイアンジュエリーが流行っていたので、年上の知人とジュエリー販売ビジネスを始め数か月ほどそのビジネスに関わる。ビジネスは、うまくいき「おもしろかった」が「リスク」もあり「ストレス」を感じ「勉強の世界に戻りたい」と思った。ビジネスで得たお金で大学編入の為に専門学校に通い、無事に大学3年に編入する。卒業時は、他の新卒生徒より3歳年上ということで、就職に難しさを感じ、また同時に「アカデミックな中で頑張りたい」と思い大学院に進む。以前働いていた職場で仕事における男女差を感じ「アカデミックな世界に行けば、男女の区別がなく認められるかな」という気持ちもあった。

大学院では、ジェンダー研究で修士に2年そしてドクターに5年在籍するが、そこは「ジェンダーバイアスのある社会」で「(考えが)甘かったです」と話し「打ちのめされ」る。

\*:ドクター課程を最後まで終わらせずに。

A:大学院って入院みたいなもんじゃないですか。みんな病んでいて。自分も病んできて。このままじゃいけないと思ひまして。ねっとりした感じ。あそこに身を置くことの恐怖とか。なんか気持ち悪いような。

そして、在籍中に他大学の博士課程在籍の男性と学生結婚することになるが、当時、大学内では結婚や、結婚して女性が改姓することに抵抗感を抱く仲間や先生が周りにいて、博士論文が終わるまでは結婚はタブーのような雰囲気が、研究室にあったという。仲間や先生には知らせずこっそり結婚した。親からは「30歳までには結婚して。誰でもいいから」と言われていたが、親にも「秘密で」結婚した。Aさんは結婚して、名字を変えることで「今までの自分を捨てて新しい自分になりたかった」と話す。

その後、「ジェンダー関係の研究に嫌気がさし」大学を休学し、「全部自分の生活を捨ててゼロから生きていくぞという覚悟」で「ドイツに行くことをチャンスにしよう」と

いう気持ちで、ドイツのロースクールに留学する夫に帯同する。

夫は1年のドイツ留学ということで、Aさんは、渡独後すぐにドイツ語学校でドイツ語を学ぶが、夫はドイツにて日本の企業の現地採用を希望し、終身雇用になる。Aさんはひとりで帰国することを決めるが、その理由は「覚えてないんですけど。彼の人生ですものね」と話す。大学は休学という形だったので、「一度は復学しなければいけなかった」ので、また元の大学に戻り、1年間、大学のゼミに通う。帰国時に「自分の親に内緒」で離婚届を出す、その理由について「大学で離婚関係の研究をしていたので、離婚がどういうものか一度確認してみたかった（笑）」と淡々と語る。そして「結局はお互いの気持ちは何も変わらなくて、紙的なものなんだなあ」としみじみ話し、また夫と再婚した。大学院に一度復帰したものの、大学をやめてまた渡独することに決める。その理由として、「ゼミの雰囲気嫌だな」と思い、「やめてやろうって思った」と話す。一方、「やめる気満々ではなくて、アカデミックに残ろうという気持ちもあった」と話し、自分でもはっきりわからないという。

渡独し、ドイツでの生活も9年経ち、Aさんは、どのような気持ちを抱きながら暮らしているのだろうか。

\*：ドイツにいらしてどうでしたか。

A：やっぱり葛藤があります。向こう（＝夫）は稼いでいても私には稼ぎがない。どんなに精神的に博論を書いても経済的に自立していない自分が嫌で年に2、3回暴れます。食べさせられている苦痛な人生から脱したくって。

\*：暴れるって、どうやってですか。

A：物を投げたりして。

渡独後、経済的に自立出来ず、悶々とした気持ちで暮らす様子が見える。その後、少しして、たまたまデュッセルドルフ大学の日本人教授と知り合い、相談し、その教授のもとで博論指導を受けることになる。大学で勉強する為、1年間ドイツ語の学校に毎日通い勉強し、大学に行く資格を取るが、その時に妊娠が分かる。出産後、授乳をしながらゼミに出たり、勉強を続ける。出産後も大学で研究を続けているのは、「専業主婦になること」への「抵抗」だと語る。

\*：子どもができたことでご自分の気持ちは変わりましたか。

A：専業主婦になる事に非常に抵抗が。自分の母親はずっと専業主婦で。転勤族で。母親みたいになりたくないって思っていたので。でも葛藤がありますよね。実際子どもがいて。専業主婦で論文書いたらってお金にならない中で、ただつらいみたいなどありましたけど。でも専業主婦になりたくないの、何かして別の自分のステータスがほしかった。だからドクターの学生っていうそのステータスで自分を癒していました。

Aさんの語りから、「専業主婦」という立場に収まる自分が受け入れられない気持ちが伝わる。それに対して夫は「何でもいから目標に向かって頑張ればいい。お金を稼ぐ必要はない」と言うが、「経済的なものは夫婦のパワーバランスに反映する」と考え、「精神的自律」していても「経済的には自立していない葛藤」を抱える。夫は「全く気にしない」素振りだが、Aさんは「ひとりで切れてひとりで終わる独り相撲」と言って笑う。

長男が生まれ、3年後に次男を出産したのも自分が「(研究の)本を読んだり、文章を書いたりする時間がほしかった」からであり、子どもがひとりだと子どもの「面倒」を見なければいけないが、年があまり離れていない子ども同士であれば「2人で遊ぶかなと思った」。そして「全部自分の基準で。自分好きなので」と笑って言葉を足した。Aさんの語りには、「自分好きなので」という言葉が繰り返される。自分の言動を「自分好きなので」という言葉で正当化しているようにも見える。しかし、笑いを伴った語りは、正当化することに戸惑いも感じられる。子どもたちは、今は6歳と3歳だが、「あと3年ぐらいすれば、2人とも小学校に上がればもっと自分の時間ができる」と考え、「人生設計半ばの出産」と捉える。

論文の方は、次男出産後、次男が寝ている間に日本語ですべて書き上げ、後はドイツ語に直すだけの段階まで終えるが、ドイツ語で論文を書くことに葛藤も覚える。そんな状況の中で自分には「資格が必要だ。経済的に自立が必要だ」と強く感じる。

また、他の駐在員配偶者たちとつながる中で、「駐在のママたちをみて」ますます「手に職を持つこと」の重要性を認識する。

\*：手に職だと思ったのはどうしてですか。

A：ここ（ドイツ）で駐在の奥さんの中にパティシエの友だちがいて、彼女にケーキを教えてもらったり。手に職を持っていると人をハッピーにしながら、自分も経済的に。(中略)(駐在員配偶者の中には)いろいろな芸を持っている人が居るんですよ。フラワーアレンジメントの資格を持っている人とか、ヨガのインストラクターをやっている人とか、皆さん手に職。手に職を持っていると強いなと思いました。

そして、Aさんは、思い切ってドイツの大学の指導教授に相談し、現地のエステ専門学校に通うことに決める。次男は現地の保育園に預け、学校に毎日通い、次男が2歳になる前にエステシヤンの資格を取り、今は自宅で「日本人駐在員の奥さん」対象にエステサロンを開く。顧客には「アッパークラス」「(企業)社長夫人」が多く「ロコミ社会」で広がっていく。

エステシヤンの仕事も始め、渡独して3、4年の頃は、夫を「攻めまくって」いたのが、今は「だいぶ切れることがなくなり」、ドイツの生活も「良いんじゃないか」と感じている。「ポジティブになれたのは資格を取ったのが大きかったのかな」と語る。

Aさんにとり「手に職」「資格」「経済的自立」が大きな意味を持つが、そこには母娘



関係が影響しているように見える。Aさんは母娘関係が「非常に密」であることを語り始めた。

A：私には兄と妹がいますけど。母は専業主婦で、母娘関係が非常に密な関係なんです。母親もひとりっこで専業主婦で娘にべったりなので。親からも自立出来てなかったんです。母は茨城にいますが、よく東京に来ました。母娘関係はなかなか難しく、距離を離れることで。それでも年3回くらい（ドイツに）来るんです。乗り換えもないし近いわねって。すぐ来るんです。（中略）親からの自立も海外に来てみてから。あと、夫からいろいろ言われて。自分は親にごちそうになる事は当然と思っていました。でも夫に指摘されて。夫の家はすごくきっちりしていて、どっちが払ったとか。それで自立するというのを覚えて。

Aさんは、「母親から自立する為に距離もすごく大事だった」と話し、夫からの影響も受け、今は母親には「ここは私が払うからと言えることで親にも切れなくなった」と語る。今までは「経済的に自立したいのに自立できない自分が嫌」で「親を攻め」ていた。また、母親からは、「女の子だから、短大だけ出ていけばちょうどいいとか、早くいいところに就職して早くお嫁に行きなさい」と言われていた。それに対して「抵抗」を感じていた。

今後はエステサロンで「地道に小銭を稼ぎながら、趣味のドクター論文を書きながら、本職はたぶんエステにしながら」という将来像を描く。ドイツは大学の授業料は無料で「ドクター課程もただ」であることに言及し、まだ在籍しているのは「ドクターのタイトルがほしいだけです。ドクターの方が（エステシャンより）いいかなって」と話す。「エステシャンの社会的地位は低く、ドクターのタイトルの方が聞こえがいい」という。最後にAさんは、「自分を満足させる為にもがきながら、生き続けて。これからもまた、満足いかないものがあつたらまた埋めていくんでしょね」と遠くを見つめて話した。

「経済的自立」を求め続けるAさんだが、他の駐在員配偶者とのようなつながり、女性たちをどのように捉えているのかに注目する。

Aさんは妊婦教室を通して他の駐在員配偶者たちとつながっていくが、駐在員配偶者には「経済的自立への葛藤」を抱えるタイプと「デュッセルドルフでの主婦生活を満喫する」タイプの2タイプがあると語り始めた。

A：駐在のママ友を見てて、二つに分かれていて、旦那より稼いでいた友だちとかなんかは、こっち（ドイツ）に来て、仕事やめてきて、子育てを一緒にしている。そんな不満を抱えて、日本に帰ったら私はもう職はないっていう友だちと。あと本当にこっちの主婦生活をものすごく満喫している友だちとかもいて。そういう方はたぶん疑問に感じないんですよね。主婦で楽しくやっていることに。だからそっちの方が幸せだなんて思って。

自分は、「そうになりたい（主婦生活を満喫する）と思ったんですけど、なかなかねっとりした性格は治らないから」と笑って言う。一方、駐在員配偶者の中には、「結構自分と同じ感覚」を持つ女性たちもいて仲良くなったと話す。

\*：どのような友だちですか。

A：日本でバリバリ働いていた人とか、夫と同じくらい稼いでいたという友だちとかがこっちで専業主婦になったとたん、子どもが生まれたとたん、旦那が今までは日本で（友だちが）バリバリ働いていた時は、家にどっちか先に帰ったほうがご飯作っていたのが、こっちに来たら急にすべて私任せって、すごい不満を言っている友だちもいましたし。自分はどこかで自立したいと思っているママ友が周りに多かったです。

そして駐在員配偶者同士の結束感や支え合いについて「半端じゃない」と感慨深げに語った。自分も随分、駐在員配偶者から「支えられた」という。

\*：どのように支えられたのですか。

A：夫が出張とか子どもが熱を出している時に仲のいいママ友が、大根とかうどんとか、彼女も生まれたばかりの子どもが居るので外に出れず、野菜を送ってきてくれたり。（中略）彼女は、もう（日本に）帰っちゃったんですけど、日本に行けば絶対会いますし。大人になってこんなに仲のいい友だちができるんだって。

そして海外で乳児を抱えて皆で支え合った話を始めた。

A：海外に来て不安な中で、皆さん、親戚やみんなは日本じゃないですか。そんな中で奥さんたちの支え合いはすごいですね。あれがなかったら、私も日本に帰ってましたね。他の友だちもみんな泣いて。5か月、6か月の赤ちゃん連れて、みんな不満も抱えているわけですよ。文化も違うし言葉も通じないし。みんなでどっかの家に行って。誰かが泣いて。帰りたい、帰りたいって。みんなで慰めたり、みんなでご飯食べたり、みんなで会ったり。そういうのがあって。

Aさんは、海外駐在は、「国内転勤と違って」親戚もいなく、小さな子どもを抱え大変な中で、駐在員配偶者同士の結束感は、「高校中学の部活レベル」「クラブレベル的な結束力」と強調する。そして、駐在員配偶者たちと支え合う経験を通して「駐在員の奥さん」に対する見方も変わり、「普通にただの専業主婦をしている人たちっていうのではなく人としてお互い理解し合う友として」とみるようになったと話す。語りから、それまでは「専業主婦」に対してある種の偏見を持ち、自分は「専業主婦」にはなりたくないと思っていたことが分かる。

また、エクスパトリエイト・コミュニティにおける自分の立ち位置を「すごくいい立

ち位置」と捉える。

A：日本人のどろどろした人間関係もお話に聞くので、自分はすごくいい立ち位置にいて。日本社会も少し垣間見ておいしいところをつまめて。でもどっぷりではない。

一緒に子育てをして、仲がとても良かった駐在員配偶者の友だちは帰ってしまったが、今は「そんなに深入りはしない感じ」で他の駐在員配偶者とつながる。また、現地で働いている日本人や現地幼稚園に通う子どもを介して仲良くなったドイツ人のママ友も持つ。「おいしいとこどりでストレスがないです」と話す。

Aさんの語りから、駐在員配偶者たちが、経済的にも自立をしたいがそれができず悶々と暮らしていたり、不安の中で強い結束をし、支え合いながら乳幼児を育てる姿が浮き彫りにされた。さらに日本人エクスパトリエイト・コミュニティが、人間関係において、ストレスを生み出しえることも語りからうかがえる。

それでは、実際に駐在員配偶者は自分たちの生活をどのように捉え、生活に意味づけしけようとしているのかを2人の語りから検討する。

#### 4.5.2 自分への挑戦—JAさん

筆者の知人であるJAさん(40代)には帰国後、日本にてインタビューを行った。デュッセルドルフに5年3か月暮らし、帰国してすでに12年ほど経っていたが、当時の生活を思い出しながら語ってくれた。1999年に建設会社に勤める夫の赴任に伴い、11歳(小学6年)、9歳(小学4年)の娘2人と5歳(年長)の息子をデュッセルドルフに帯同する。

JAさんは、父親が国家公務員で転勤が多く、小学校時代は東京、その後、静岡、高松、そしてまた東京というように子ども時代に国内転勤を経験した。

\*：国内転勤を何回か経験なさっていますが、大変でしたか。

JA：そうですね。新しいお友だちと別れなければならないから。でもまた行った先に、新しい友だちができるし、それは幸せなことだったかもしれません。いじめとかにあわなかったし、いいお友だちもたくさんできたし、幸せです。

自分が転勤族であったことをJAさんは、今ポジティブに捉えている。一浪して大学に入り、心理学を専攻し、卒業後、化学メーカーに就職し、調査やマーケティング部で仕事をする。夫は東京出身で高校の同級生で、大学時代から交際を始める。そして夫が、大学院修了後、就職し、1年間新入社員研修で大阪に行くことになり、東京に戻ってきてから結婚する。結婚後も仕事を続け6年勤めたが、出産を機に退職する。

\*：お仕事をやめたのは。

JA：長女出産の時に産休を取りました。女性の多い職場で。部長も理解があって。3

年休みが取れるとのことで、割とそういう制度は整っていました。でも次女がすぐに生まれ（子どもが）2人になって。保育園に預けて働くというのもありましたが、子育てに興味があったのでやめました。

JAさんは、やめたことに関しては、「抵抗なくやめたというのはちょっと違うけど。主婦の生活がいいと思ってというのではなく、いずれ仕事はしたいと思っていました」と語る。そして3番目の子どもを36歳の時に出産したが、息子が幼稚園に入る頃、自分が40歳になったら時間が空くので、「その時に何かしようかと思って」いた。長男が幼稚園入園後は、「何ができるかなって、一生懸命探していました」と話し、消費生活アドバイザーや「主婦の力を発揮でき、結婚前のメーカーでの仕事の視点を生かせる仕事」などを考え、通信教育も受けていた。ところが長男が幼稚園年中が終わる時に夫がドイツへ海外赴任になる。

夫は、海外勤務を希望しており、JAさんも「なかなか海外で生活することもできないし、子どもたちにとってもかけがえのない経験だと思うので」と語り、前向きな気持ちで夫に帯同した。

デュッセルドルフ赴任後、JAさんは「40歳になったら何かしたいという気持ち」を抱き続けながら、デュッセルドルフで新たな生活をスタートする。「朝目覚めた時に鳥の声が聞こえて、すごくいいとこだと思ったけど、聞こえる言葉は全部ドイツ語だった。それでここは日本ではないな」と思った。居住地は日本人学校近くということもあり、日本人駐在員家族が多く暮らし、「ドイツという言葉も通じない知らない国に来たという孤立感はなかった」。そして、長女、次女が日本人学校に通学していたこともあり、駐在員配偶者のネットワークも広がっていった。しかし、周りの女性たちが「ドイツ語を勉強しない」「日本語だけで生活する」「ドイツ人と会話しようとしなない」様子を目の当たりにして、「(そのように生活することは)可能であったかもしれないけど、みんなと同じように生活しようとは思わなかった」ときっぱり話す。自分は、買い物をしたり、近所付き合いなど日常生活を送る上でドイツ語の必要性を感じ、ドイツ語の学校に週2-3回2年、その後はドイツ市民大学(VHS)<sup>81</sup>に3年ほど通う。

また、現地においては、仕事はできないので、「(仕事ではなく)いろんなことに挑戦しようと思った」と語る。小学6年生と4年生の次女は日本人小学校に入れるが、息子は、現地の幼稚園に入園させる。渡独した当初は、近くに日本人幼稚園があったので、そこに入園させるが、「型にはまった幼稚園でみんな同じことをするので堅苦しかった」。また、夫の会社のスタッフに「一番下のひとりくらい現地校に入れたら」と勧められたこともあり、手伝ってもらい、2、3週間日本人幼稚園に通ったが、その後、長男を現地幼稚園に移す。そして長男はそのままその年の8月からドイツの現地

---

<sup>81</sup> 注(4)参照。

校に1年生で入学する<sup>82</sup>。長男の通った現地小学校は、自宅から車で10分ほどの隣町のノイス市にあり、その地区は「トルコなどからの移民が多く、そんなにハイソサエティではなくいろんな子」がいて、「そんなに勉強をガンガンやるところじゃなかった」という。

\*：長男だけ現地校にしたのはどうしてですか。

JA：日本で帰国子女財団<sup>83</sup>に行って相談したら、9歳ぐらいまでだったら、現地校に入れても大丈夫だと言われました。次女は、9歳でしたが、ちょっと神経質な子でちょっと難しいかなって思って。駐在は5年くらいって決まってるから、長女、次女は、日本に帰る時は中学、高校になります。それで日本の教育を受けさせた方がいいと思って、日本人小学校にしました。

そしてJAさんは、長男は、「割と適応力があつたから。それに本人に聞いてみたら、行ってみてもいいって。(本人は小さいし) 分かんなかったかもしれない」と笑って語った。

長男のドイツ語のサポートには、日本人と国際結婚して日本語ができるドイツ人先生を探した。長男をドイツ現地校に入れることは「他の人はやっていなかった」「一番の挑戦で、一番頑張ったことかな」と笑って話す。「息子もよく頑張ったと思う。それが日本に帰ってから彼の自信になってるし、強味にもなっているということもあると思うのね。それにあなたはこれをやったんだから、頑張ったって言うこともできるし。私も彼の為に頑張ったという自分の自信にもなったかな」と満足したように語った。

\*：どのようなことをしたのですか。

JA：(ドイツ現地校で) 父母会みたいなミーティングがあるっていえば、なるべく行くようにしたり。学校の先生とのコンタクトを一生懸命にとるようにしました。お誕生日とかいうとケーキを持っていったり。息子がいたホルト<sup>84</sup>には一時

---

<sup>82</sup> ドイツの現地校は、日本の学校システムと違い、新学期は通常8月から始まる。公立学校は居住地の管轄地域にある数校の学校の中から選ぶが、入学前に簡単な面接がある。JAさんの長男は、ドイツ語があまりできないこともあり、比較的教育レベルの高いオーバーカッセル地区の学校には行けなかった。

<sup>83</sup> 帰国子女財団とは公益財団法人で正式名は「海外子女教育振興財団」で海外赴任する家族の教育相談などのサポートを行っている  
<https://www.joes.or.jp/kojin/sodan> (2018年12月13日閲覧)。

<sup>84</sup> ホルトは就学前から小学4年生までの子ども(5歳から10歳)を対象とした始業時間前と放課後の保育所で、昼食も用意される。通常、親が職業を持つ子どもが優先される。場所は小学校内や幼稚園付属、または独立して設置されているところもある(Fisch 2004: 240)。

帰国の時に買った日本のお菓子を差し入れたり。それから息子の友だちを呼んだりとかどこかに連れて行ったり。

ドイツ語の学校に通っていたとはいえ、ドイツ語も思うようにできず、また日本と全く違う学校のシステムやカリキュラム、先生とのドイツ語での面談など JA さんにとって大きな挑戦であったと察する。筆者も次女が現地小学校に通っていた時、必死の思いでドイツ語を学びながら、子どもが仲良しになったドイツ人母親やドイツ人家庭教師の先生からのサポートを得て、どうにか、現地校に通わせていたことを思い出した。さらに JA さんは語りを続けた。

JA：仕事ではないけど自分の中で違う方向に向けられたかな。40歳から46歳ぐらいで。負じゃなくて仕事ができなくてというマイナスな気持ちじゃなくて、すごいその気持ちを違う方向に向けられた期間だったかな。

当時の自分にとっての「挑戦」を思い出し、感慨深げに語る JA さんだが、その頃、落ち着くと感じるのは同じアパートに同じ時期に赴任してきた駐在員配偶者やドイツ語の語学学校と一緒に学んだ日本人の友だちと話している時だったという。帰国後もその時の友だちと時々会う。「生活上の情報交換したり、心配事を話したり」と語り、友だちは日本人がほとんどでドイツ人の友だちはなかなかできなかったと話す。また他の日本人駐在員配偶者と一緒に日本人向けの料理、フラワーアレンジメント、テディベア作りなどの教室によく通ったという。

「日本語でしゃべっているいろんなことを共有できる友だちがいなかったら、ドイツでの生活は大変だった」としみじみ語る JA さんにとり、日本人社会はまさにほっとできるところであった。安心感を得ることができるエクスパトリエイト・コミュニティを基点にし、今までずっと温めていた「40歳になってからの挑戦」をドイツにおいて実行した。海外にいて仕事ができない環境の中で、経済的葛藤を抱えるのではなく、仕事ではない別の形での挑戦をすることで、現地での自分の生活を充実させ、生活への意味づけを試みたのであろう。

#### 4.5.3 「運命」の駐在生活—Cさん

Cさん（50代）は、商社勤務の夫に帯同し、1997年-2004年までデュッセルドルフに7年暮らし、2008年に2回目の夫の赴任に伴い、高校2年の長女と小学6年の次女とともに再びデュッセルドルフに帯同する。Cさんは札幌生まれで、両親は九州出身で父親が鉄を扱う商社で大変忙しく土日もなく働き、自分の母親は「すごい苦労」した。「九州ってすごく男尊女卑」ともいう。父の仕事は転勤が多く、小学1年から中学1年までは、名古屋で暮らし、中学・高校も東京都内で転校を繰り返した。Cさんが大学入学時に、両親は九州に暮らしていたので、姉と2人で東京暮らしをする。1984年に大学卒業後、商社に入社して6年半勤務し、さらに結婚後も1年働くが、残業も

多く共働きは大変で退職する。その後、何か仕事をしたいと思い、ホテルのリゾート関係の会社で旅行のプランを立てる仕事をする。「仕事が楽しくて、夢のような仕事でした」と当時を振り返る。そして1993年に長女が生まれ、仕事をやめ、家庭に入る。長女が幼稚園年中時に次女を妊娠し、その時、夫の1回目の赴任が決まる。夫が一足先に渡独した為、ひとりで引っ越しの準備や長女の世話などで忙しく渡独時、体調を崩し、実家の母の助けをかりながら渡独する。渡独してしばらく家で安静状態で、夫も出張が多く頼ることもできない状況だった。日本人幼稚園に通う長女の送迎は、日本人のベビーシッターに頼み、日本のお惣菜屋さんにも毎日のお弁当を届けてもらった。「とても感謝です」と当時を振り返って語った。

また、海外赴任が決まった時、「(ドイツ行きを)楽しみにしていた」と話す。

C: 私、英語はしゃべれないんですけど、とにかくあの頃怖いもの知らずというか度胸があったのか、とにかく楽しみで。デュッセルドルフはどんなところかわからなかったんですけど、とにかく楽しみでした。すごく楽しみでした。

夫の海外赴任を肯定的に受け止め、楽しみにして渡独するが、居住地は、「せっかくなので、言葉もできないんですけど日本人がいないところがいいと思って、オーバーカッセル地区ではなく、少し離れた郊外」にした。

渡独して、翌年2月に次女が生まれたが、夜泣きがひどく大変で「髪振り乱して子育てをしていた」。次女が幼稚園になった時に現地の幼稚園に入園を決める。「ドイツにせっかく来たんだから絶対に次女をドイツの幼稚園に入れたいと思いました。長女は日本人幼稚園に入れてしまっているし、次女を家の近くの現地幼稚園に入れるしかないと思って。でもあいにく、その幼稚園は定員いっぱい毎日のようにお願いに通ったんです」と語る。そして思いが通じて、無事に3歳から入園させてもらう。Cさんの「日本人がいないところ」、また次女を「絶対に現地幼稚園に入れたい」という語りから、現地社会に溶け込んで暮らしたいというCさんの強い思いが伝わる。次女の幼稚園では、親の集まりがたびたびあり、ドイツ語もよく分からず「もう覚えてたの言葉を何個か言うだけで、苦痛」であった。

1回目の7年間のデュッセルドルフ滞在中は育児に追われるが、ドイツ語の先生に来てもらったり、お皿の絵付けなどの日本人向けの習い事をしたり、会社の婦人会にも年に数回参加した。当時を「楽しい思い出ばかりで嫌なことはなかった」と語り、日本に帰国して1年目は何もやる気が起こらず、友だちに会う気もしなかった。「とにかくドイツが楽しかった」「静かなドイツが懐かしかった」と話し「中途半端な気持ち」を抱きながら、実家の母や義理の母のところに出かけたり、「なんとなくあつという間に1週間が過ぎていく感じ」であった。帰国時、長女は小学6年生、次女は小学1年生<sup>85</sup>で、2学期から公立の小学校へ通う。しかし、長女はなかなか学校生活に溶け

---

<sup>85</sup> 次女は小学校に上がる頃、夫の帰国が決まり、「日本人学校に少し慣らした方がいい」

込めず、「無視されて孤立感」を感じたり、「泣いてドイツに帰りたい」という日々であった。担任の先生にも相談したが、うまく解決されなかった。Cさんは「ドイツの日本人学校は誰が来ても受け入れてくれる状況」で、「デュッセルドルフの温室で育ったので」と言う。その後、神奈川県内の大学付属中高一貫校を帰国受験して、その学校に高校1年まで通う。「雰囲気の良い学校でいい友だち」ができ、オーケストラ部に入り「いい思い出」ができる。次女は、公立小学校に1年生から5年生まで通うが、「ノー天気」な性格で、特の問題もなく、むしろ、「思ったことをはっきり言いすぎて、友だちが傷ついて泣いてしまった」こともあるという。

Cさんは、日本での4年間は、町内会の役員や子どもの学校の役員をやったりしたが、「何か仕事をしようと思っているうちになんか転勤がまた決まっちゃった感じで、ああ何もできなかったなあって。アルバイトもしなかったですね」と話す。そして、近くに住んでいた母も「7年間ちょっとほったらかしだったので、ちょっと母のことも気になったりっていうのもあって」と語る。日本に居る間に次女の学校の友だちを介して、「自然体で接することができるママ友だち」もできた。そして2回目の夫のデュッセルドルフ駐在が決まった時は、「まさか2回行くとは思わなかったので、すごく嬉しかった」し、「前回の（ドイツでの）7年間は楽しい思い出ばかり」でドイツへの赴任を心待ちにしていた。また、夫も「海外が大好きで、絶対出たい」という気持ちがあり、「大変喜んで」いた。高校1年の長女も高校は、1回退学したら戻れない学校だったが、「また、あの不便なところに戻れるのが嬉しい」と喜んでいて。Cさんは、「娘は日本では物があふれ、便利だが、それに疲れちゃうっていうのがあるのかな」と言い、長女がドイツ行きを喜んでくれて「嬉しかった」と話す。

2回目の赴任時は、長女はインターナショナルスクール（ISD）の10年生、次女も日本人学校という選択もあったが、本人の希望でインターナショナルスクールの6年生になる。長女は11年生からIBプログラム<sup>86</sup>が始まり、勉強が大変であった。長女は12年生を終え、インターナショナルスクールを卒業し、ひとりだけ先に先行帰国し、日本の大学に進学するが、次女は、10年生の時に友だち同士のいざこざがあり「人のことが信じられなくなり、あまり笑わなくなった」。また、11年生になり「日本語もあやしく、英語も思うように伸びない」こともあり、「自分に自信を持たず、自分はだめなんだ」と思うようになったという。12年生の時に次女は「大爆発」し、父親とぶつかる。友だちとうまくいかず、勉強にも悩み、自分に「コンプレックス」を感じ自傷行為にまで及び、部屋に鍵をかけて出てこない日が何週間かあった。「今まで朗らかだった次女」が自傷行為をしたことに対して、Cさんは「長女がインターで勉強が大変で、長女ばかりで、次女はほったらかしにしていた」「私の育て方が悪かったのかな」としんみり話す。また、「私はそんなに口うるさく言ったつもりはないんですけど」、娘は「干渉されているって言うんです」という。

---

ということで、帰国年の4月から6月までデュッセルドルフの日本人学校に通う。

<sup>86</sup> 注（48）参照。



次女の自傷行為はCさんにとって大変ショックであり、「ほったらかしにした」という語りが繰り返し出てくることから、自分で責任を感じ、悩んでいた様子が見える。次女は、自分で学校のカウンセリングを受けたりしながら、最終的にインターナショナルスクールを卒業し、自分でいろいろ調べ、オランダのアートの学校に行くことに決める。父親との関係も少しずつよくなってきている。Cさんは、「子どもには好きなものを見つけてほしい。好きなようにしたら良い」と話すが「できたら、夫は今（駐在期間が）8年目なんですけど、次女の為にももう少しドイツに残りたい」と不安な気持ちものぞかせる。

Cさんは友だちを作る為に積極的にいろいろなことに参加した。インターナショナルスクールの保護者対象の英語サークルに入ったり、そこで知り合った外国人の友だちから料理を習ったり、お互いに家を行き来したりしていた。「あちこちに首をつっこんで、いろいろな活動をして、飛び回っていた感じでした」と当時を振り返る。しかし、赴任して5年後に胸にしこりが見つかり乳がんであることが分かる。最初の先生からは「がんを小さくしてから手術をしよう」と言われ、次の先生からは、「(もうこんなに大きくなっているの) 希望を持たないでください」と言われた。そしてまた別の先生は、「大丈夫。ポジティブに考えましょう」と言うが、自分の中では「もうだめだと思ったので絶対日本に帰りたい」と思い、2013年の年明けに日本に一時帰国した。母親には心配をかけると思い、がんであることは告げず、姉にだけ話した。それから、ドイツに戻った翌日に手術を受ける。抗がん剤治療そして放射線治療を終え3か月ごとに検診を続けている。治療により髪の毛が一度すべて抜けるがまた生え始め、「白髪があったんですけど白髪もなくなりました」と笑って話す。ドイツ人の先生は「ほんとにいい先生」で今の治療方針にも満足し、「あの時方向転換して良かった」としみじみ語る。

2回目のインタビュー時(2016年)には、手術後3年経過し、Cさんの体の方は落ち着いていた。そして「喉元過ぎればとにならないようにその苦しかった時のことを思い出し、本当にいただいた命だと思って、後悔のないようにしたいと思うんですね」と語る。手術の時に台所にぶら下げていたやどり木はそのまま残して、入院、治療を受けた。今も残る台所のやどり木に目をやり、「カサカサでごみみたいなんですけど、それを見ると当時のことを思い出すんで」と話す。小さな茶色の枯れたやどり木が天井からぶら下がっていた。やどり木を見ながら、「健康が一番。今の気持ちは、家族みんなが健康に過ごせることです」ときっぱりと語る。そして、夫の将来の夢について楽しそうに語り始めた。

C:うちの夫はお店屋さんになることが夢なんですよ(笑)。マルクトめぐりが好きで、マルクトに行ってはちょこちょこ買い集めて。実家の倉庫には私の知らないものが、いっぱいあるんですね。気ままな人が来るお店を持ちたいと言って。一緒にやろうって言われているんですけど。私にできるのかな。

そして「主人は夢がいっぱい」と話し、自分も「主人と一緒にそのお店をやるのかなとずっと思って」いて、「今はどんなお店にするか、雑誌を見たり、設計プランを考えてみたり」と嬉しそうに話す。がんという病気になり、家族の大切さやつながりを強く感じているCさんの気持ちが伝わる。

2回目のインタビュー時には日本の大学に通う長女の就職も決まり、次女もオランダのアートの学校に受かり、翌月からオランダで4年間勉強することに決まり、次女も少し落ち着いてきたと話す。そして次女のオランダ行きに関して、次のように語った。

C：自分ですごくずるいんですけど、考えないようにしようと思って。考えることはやめようと思って。(中略) 私自身落ち込むこともあったんですね。あの子に対してもっとなんかしてやれたかなって思うんですけど。もう考えても仕方がないし。離れば、自分であの子も成長できるんじゃないかって。一緒に居ると口を出してしまうし、あの子の為にはならない。

これから親元を離れてオランダに行く次女のことは心配であるが、これからは遠くから見守ってあげたいと思っている。

ドイツの駐在も2回目で8年目の生活を送るCさんは、どのような日常生活を送っているのだろうか。

病気になる前は、「クラシックを聞く集い」や「友だちを作る為に」インターナショナルスクールの保護者と生徒の混合「コーラス」や「英語サークル」にも参加していた。そして「英語サークル」でいろいろな国から来た母親たちと仲良くなり、お互いに家に呼びあったり、外国の料理を習ったり「すごく楽しかったです」と話す。しかし、知り合って2、3年ほどすると他の国々から来た駐在員も帰国してしまい、メンバーも変わり、雰囲気も変わり、先生もやめてしまう。Cさんは「自分も何となくやめてしまって。まあ、病気したこともきっかけになったこともあると思うんですけど」「なんかすべてが真っ白になって。すべてやめて」と話す。

病気の前は「積極的に」「あちこちに首を突っこんでいろいろな活動」をして「飛び回っている感じだったんですけど、ちょっとそれをやめてみようと思った」。病気になったことは、Cさんの生活スタイルに大きく影響を与える。今は皆やめてしまい、「ひとりであることが多くなった」という。

C：自分の活動する場所が増えれば増えるほどそれだけ、ちょっとこの人とあわないって人との付き合いも増えますよね。でも1回それを全部切って、自分の好きなことだけを始めて。もうそんな考え方はいけないかもしれませんが、自分が心地いい人とだけ一緒に居れるひと時を大事にしようと思い始めて。リセットみたいになって。

そして「人付き合いがあんまり得意じゃないのかなって思ったりする」と話し、今はストレスをなくす為に、「人間関係を狭めてしまっているかもしれないんですけど、じっくり考えてここには入れそうだなって思うところに」だけ身をおき、「無理のない範囲で自分の好きな人たちと過ごせたらいいな」と言葉を選んで語った。

今は、駐在員配偶者ではなく、ずっとドイツに居る女性で仲の良い友だちがひとりいて、「(話していると) すごく癒される」そして「うわべとか義理とかで付き合うのはもうやめようと思って。それだったら、ひとりで居るほうがいいなって思っちゃったりして」と話す。それでも「何となく新しいお友だちで気が合いそうだとか、楽しくなりそうな友だちにはもちろん会いますけど」という。

Cさんは、最近になり、だんだんと病状も落ち着き、また、「体を壊していったんやめた」カリグラフィーやクマのぬいぐるみ作りの習い事も定期的ではないが再開する。ドイツ語の勉強もドイツ人の先生に自宅に来てもらい再開した。そして、「さすがにこんなに居るのに何かしたいな」と思い、「何を自分は(今まで) やってたんだろ」と考えるが、その時インターナショナルスクールでの「お寿司づくり」が「一番自分が楽しんでいたものだ」と再認識する。

Cさんはインターナショナルスクールに通う日本人生徒の親におにぎりやお寿司を作ってもらい、それらを学校で売る仕事に6年ほどたずさわり、4年前からまとめ役をしている。

C: インターナショナルマーケット<sup>87</sup>のお手伝いを続けています。マーケットに出すお寿司を作ったりするとりまとめは今もやっています。ここ何年も。とにかく日本食が大人気なんです。おにぎりは200個以上、手巻きずしも200本ぐらい売れていくんですね(笑)。

自分たちが作ったお寿司が「大人気」で「本当に皆さん喜んでくれるんです。そうするともっと作っちゃおうと思うんですよ」と心の底から嬉しそうに語る。病気発症後は、売り場には立てないので他の保護者に頼み、自分は調整の仕事を担当している。「それ(調整の仕事)は病気の時も家でできることなので、やらせてもらっています。早く元気になってお店に立ちたいな」と待ちきれなさそうに話す。「日本の保護者の方でおにぎりは作れるけどお寿司は作れませんっていう方が多いんですよ。それでお寿司を作る講習会を家でやるんです。すごくそれはやりがいがあります」と楽しそうに語る。また、外国人サークルに入っている日本人の友だちから頼まれて、外国の

---

<sup>87</sup> インターナショナルスクール (ISD) ではインターナショナルマーケットを月1回学校で開いている。各国の保護者が自分たちの国の品物や手作り食品などを学校で販売して、その売り上げの一部は学校に寄付し、子どもたちの為に使ってもらい、残りの売上金は仲間で分配する。日本人の保護者たちは、日本ブースでおにぎりやお寿司を提供して、マーケットに立ちあう。Cさんの2回目のインタビュー時は、母親6人で活動していた。

人たちにも今まで2回ぐらいお寿司の講習会をしたという。

またCさんは、ドイツに2回も来られたことは「運命だったのかな」と語り、ドイツで乳がんの治療を受けられたこと、子育てができたことに「感謝」しているという。Cさんは、夫は「気ままな生活」が好きで、会社以外のプライベートの時間に、趣味のアンティークや時計のマルク巡りを楽しむが、それができることも「有難い」と言い、感謝の気持ちを持つ。

そして一番幸せに感じる時は「ライン川河畔を散歩している時」「本当にリラックスして話せるお友だちと話している時も幸せを感じますし」と話す。「日本に居る時も早く（ドイツに）帰りたいなって」「こっちに居るほうが落ち着くというかほっとする場所ですね」という。

C：散歩して、景色を見ているだけでも幸せな気分になれるんです。日常のストレスを解消するには、自分を非日常の世界にもっていきのが一番だと何かで読んだことがあるんですよ。でも日本では難しい。がやがやしているし、家は狭いし。でもここは、いつでもポンと外に出れば違う景色が待っていて、すごくリラックスできる。こんな静かなところに入れるなんて、有難いなって。

Cさんは、デュッセルドルフに暮らしながら、自分の「時間は止まっていると感じる」と話す。

C：今回、日本に3週間ほど帰ったんですけど、学生時代の友だちに会ったり、あと会社の帰国なさった方たち何人かと会ったんですね。皆さん、もうそれこそどんどん動いている。時間がこう止まっていなくていいか。学生時代の友だちも何年か会ってなかったんですけど、もういろんなことをしてどんどん変わってきているんですよ。みんな。で、ああ、私の時間は、デュッセルドルフで止まってるなあって。みんなはいろんな情報を吸収しているし。

そして、Cさんは「こっち（デュッセルドルフ）では日本のテレビも映らないし、新聞もとっていないし、パソコンでニュースぐらいは見ますけど。そんなにたくさんの情報はないし」と話す。さらに、日本の友だちに対しての気持ちを次のように語った。

\*：日本に居る友だちに対して、どのように感じますか。

C：みんながいろんなことを成し遂げている。「私、こんな資格を取って今こういうことをしようとしている」とかいうのを聞くとああすごいな。私、何をやっていたんだろう、この7年間、と思うこともあります。これから帰って、53歳で何かを始めようと思うとできるんだろうか。例えば、働けるんだろうかって思うとまあ焦りがないということはないですね。

Cさんは、ドイツで生活する中で、日本に居る友だちに遅れを取ってしまうのではないかという戸惑いの気持ちも持つが、「ゆっくり静かにドイツらしい時間を楽しめるというのは本当に貴重なことじゃないかと思います」としみじみと語る。

そして、これからひとりでオランダの美術学校に行く次女について「不安な気持ち」があるかという問いに対して次のように語った。

\*: 次女がオランダに行かれるとのことですが心配はありますか。

C: 自分はすごくずるいんですけど、考えないようにしようと思って。ここまでできてしまったので。こう子育ての結果が今、来ていると思うんですね。(次女は) 18歳です。ほったらかしにしてしまった結果が。でももう考えても仕方がないと思って。(私は今まで) 何やってきたんだろうって、すごく私自身も落ち込むことはあったんですね。あの子に対してもっとなんかやれたかなって思うんですけど。

Cさんは、「でももう考えても仕方がない」と話し、オランダ行きに対して「親から離れれば自分で成長できるんじゃないかって」と期待を抱き「悩んでいた時期が終わった感じですね」と自分に言い聞かせるように話した。日本での就職が決まり、23歳になった長女に対しては、「あの子は土台みたいな、根っこみたいなものがある」ので「もう大丈夫かなって思うんですね」と安心した様子を見せる。

娘たちの方向性も決まり、自国の目まぐるしく動く世界に邪魔されることなく、ドイツという居心地よい場所で、気持ちがつながる友だちと時間が止まっているような感覚で静かに過ごす。Cさんの語りに繰り返しでる「有難い」「感謝」という言葉は、ドイツという「心地よい」場所で駐在生活ができること、家族が皆健康で暮らせることへの深い感謝の気持ちの表れである。

Cさんにとりドイツで暮らすことは「運命」であり、ドイツという場所に帰属感を持ち、自分の人生を自然体で淡々と生きている。Cさんは、「経済的自立への葛藤」や「主婦生活を満喫する」という両義性を超越し、「今ここで暮らす」ことに大きな意味を見出し、感謝の気持ちを持ち暮らす。Cさんがこのような心境になったのは、がんという病による影響もあるが、ドイツに長期にわたって滞在していることにもよるのであろう。

#### 4.6 エクスパトリエイト・コミュニティからの解放

次にアンクレーブ化したエクスパトリエイト・コミュニティの「閉鎖性」について検討する。Cohenは、エクスパトリエイト・コミュニティ内においては、自国と同じような生活環境が整い、ホスト社会との接点をもたなくても生活ができることをあげるが、海外駐在員配偶者は、日常生活実践において何らかの形でホスト社会や現地の人びとと接点があると考えられる。

また、駐在員配偶者たちは、同じエスニック集団の他のサブコミュニティとの乖離が指摘される (Cohen 1977) が、ここでは現地の人びとと接点を持ち、現地社会に溶け込んで生活を送る JB さん、永住の日本人や現地で長く仕事に携わる日本人とつながる JC さんの語りに着眼する。

#### 4.6.1 現地の人びとの触れ合い—JB さん

7年のドイツでの滞在を終え、帰国後5年ほど経ったJBさんに日本でインタビューを行った。JBさん(60代)は、40代の時、メーカー勤務の夫の赴任に伴い、大学1年生(18歳)の長男を日本に残し、10歳の次男を連れて渡独する。ドイツ赴任前にマドリッドに5年駐在経験がある。

JBさんは、東京出身で、5歳違いの弟が居る。サラリーマンだった父親は大変教育熱心で、JBさんは小学5年生から塾に通い、私立女子中・高一貫校を受験する。大学は女子大で美術史を専攻し、美術の中学・高校の先生の資格を取得する。また、3歳からピアノを習い、大学時代にヤマハ音楽教室の指導者認定資格も取る。大学在学中に、外国に行きたいと思ったが、父親が心配して反対し、行けなかった。卒業後、川崎市内南部の中学校で美術と音楽を教える。学校は川崎市内の工場地帯で公害指定地区であった。ほとんどの生徒は「普通の子」だったが、一部の生徒と近くの朝鮮人学校の生徒たちと乱闘などもあり大変だった。4年後希望を出して川崎市内北部の高校に異動する。その高校は、父母の教育レベルが高く、教育熱心であった。子どもたちも「1を言えば10を知るような感じのいい子」で成績もよく、「立派に育ち」「めちゃくちゃ楽しかった」と当時を思い出し、嬉しそうに話す。そして2校目に移った時に周りの友だちも結婚し始め、自分も結婚願望がありお見合いをする。28歳で2歳年上のメーカーの海外営業部に居る男性と結婚する。「海外に行くこともある」ということを聞き「やったー。これだって」と嬉しそうに話し、海外に行けることも結婚を決めた理由の一つでもあるという。

JBさんは、結婚前に教員の仕事をしている間に2回海外に行く。1回目は23歳の時で、知り合いがドイツに居る関係で、ドイツに3週間ホームステイする。2回目は25歳になってからで、ドイツで働く日本人の友人宅に泊めてもらい、オーストリアにも3週間ほど旅行する。そして、旅行している時に、先生の仕事は「いつかはやめたいと思った」。先生同士結婚する人が周りに多く、「先生と結婚したらずっと先生だな」と感じていた。会社員の男性とお見合いをして、結婚を決めたのは、先生ではない世界を求めていたのかもしれない。28歳で結婚し、結婚後も仕事を続けるが、結婚後2年目に第1子を妊娠し、妊娠8か月まで働き、31歳で長男を出産する。育休を取り、長男が7か月の時に職場に復帰する。その時、長男は区の保育園に預ける。学校勤務は、朝8時半からで、保育園も同じ時間の為、夫がJBさんの母親のところに毎朝子どもを連れて行き、母親が保育園に連れて行ってくれた。保育園の運動会や父母会も仕事があり参加できず、すべてJBさんの母親が代わりに行った。

\*：お仕事に復帰なさったのは。

JB：みんなが働いているから。みんなと一緒にみたい。そんなもんかなあって。先輩の人たちも働いていて、周りの先生たちから、昔は産休しかなかったのよって言われました。(中略) (教員) 採用の時は激戦だったので。その時、美術の先生は5人採用で、150人くらい来てたから。あんな激戦だったのにやめるのももったいないなって。

そして、2校目の教員生活も8年で、合わせて12年の教員生活を振り返り、次のように語った。

JB：大変なこともいっぱいあったけど教員冥利っていうか。1年か2年に1回くらいじーんとくる。ああ、いい子たちだなって。こちらがじーんとくる温かい気持ちになります。8割、9割は泣いていたんだけど (笑)。

結婚して5年経ち、教員生活を続けていたが、長男が3歳になった時、海外勤務の希望を出していた夫の駐在が決まる。JBさんも結婚当初から、海外で生活したいという気持ちは、ずっと抱いていた。JBさんは学期の途中だったので、すぐに退職できず、夫より半年遅れてマドリッドに3歳の長男を帯同する。仕事をやめる時は「泣きました (笑)。子どもたちから花をもらって。でも海外に住んでみたいという気持ちが強かったので」と笑いながら語った。マドリッドには日本人が周りにおらず、長男は現地の幼稚園に通う。スペイン語ができない長男に、園長先生が自分のスカートを広げて、そこにABCとアルファベットを書いて教えてくれたのはとても「有難い経験」だったと話す。2年ほど経ち、長男もスペイン語にも慣れ始め、友だちのお誕生会には喜んで行ったりするようになった。小学校は、日本人学校がマドリッド市内になく、インターナショナルスクールに通う。JBさんは、現地ではスペイン語の語学学校に通い、現地の友だちもでき、市場にも毎日出かけたり、5年間のスペイン生活は、とても楽しく帰りたくなく「大泣きした」と話す。スペイン生活に深く溶け込んでいた様子が伝わる。スペイン滞在中に、次男を妊娠し8か月の安定期で帰国する。

帰国後、千葉に住み、当時小学3年生(8歳)の長男は地元の小学・中学校に行き、次男も同様に地元の幼稚園から小学校に進む。次男が小学校3年生頃になりそろそろ仕事をしたいと思っていた矢先に、夫がデュッセルドルフに赴任になる。その時に長男が大学受験の為、JBさんは長男の受験が終わるまで日本に残った。そして大学が決まった長男は日本に残し、夫より半年遅れて小学4年生の次男を連れて渡独する。日本に残っていた長男は都内に居るJBさんの母親のところへ同居した。長男は、日本で保育園に行っていた時に毎日、JBさんの母親に送迎してもらっていたので、仲は良かった。

\*：ドイツへの赴任が決まった時はどんな気持ちでしたか。

JB：嬉しかったです。スペインから帰国して、10年（待つこと）は長かったです。

\*：ドイツでの生活は。

JB：全く知り合いもなく。夫も駐在員ひとりで。家は、夫が不動産屋に頼んで探して。日本人から離れたいという気持ちもありましたが、そこしか空いてないと言われ、日本人幼稚園や公文の近くのオーバーカッセル地区に住みました。

\*：学校はインターナショナルスクールに。

JB：はい、（スペインで過ごした）長男の例をみて、その国の言葉ができないとだめだと思いました。長男がスペイン語ができて楽しかったから、次男もドイツ語と思いました。でも10歳だとギムナジウム<sup>88</sup>ですね。夫の会社関係の人に頼んで個人的に校長先生に会いに行ったら、無理ですって。息子は名前も書けなくて、4年生に入るのは無理で学年を2年落とすなら大丈夫ですと言われました。ドイツ語の壁はとっっても高くて。それでインター（ISD）に行ってみたんです。

インターナショナルスクールでは「英語ができない子を教えるのは、私たちの役目です」と言われ、快く受け入れてくれたが、授業料が高くて驚いたという。会社からはインターナショナルスクールの授業料の援助はなく、日本人学校の授業料しか出ず、「何とかギリギリ」で授業料を捻出した。

それではJBさんほどのように他の駐在員配偶者や現地のコミュニティとつながっていったのであろうか。

次男の通うインターナショナルスクールには同学年の日本人が少なく、日本人向けの生活情報などがあまり入手できず、日本人が多く通うドイツ語の語学学校に行く。学校に週2回午前中、4年ほど通った。そこで自分よりも若い駐在員配偶者の知り合いができ、ランチなど一緒にしたが、特に仲の良い友だちはできなかった。ドイツ語学校は授業料も高く、次男のインターナショナルスクールの授業料も値上がりしたこともあり、中級レベルのドイツ語の資格を取ってからドイツ語学校をやめる。

その後、デュッセルドルフ日本語補習校から、先生の仕事の話があり、1年間国語を教えることになる。

\*：補習校のお仕事はいかがでしたか。

JB：最高の学年でした。いい子たちばかりで。ちゃんと労働許可も取り、無期限ビザももらって。ドイツ語を捨てて、日本語を一生懸命勉強しました。優秀な子たちで（全日制）日本人学校に行ってるみたい。うんと授業準備しとかないと（授業）時間が余ってしまうんです。駐在員の奥さんは時間がいっぱいあるし、（自分の）子どもは大きいし。午後2時からの授業開始なんですけど、私

---

<sup>88</sup> ギムナジウム  
注(42) 参照。



は学校に 12 時には行っていました。

休み時間に一緒に大縄跳びをしたりして遊んだことなど、JB さんはとても懐かしそうにそして楽しそうに当時のことを語った。補習校では日本での 12 年間の先生時代のこととも思い出したりしたと話す。補習校の先生たちは、現地永住の日本人がほとんどで月曜から金曜まで会社などで仕事をしていて忙しそうで、あまりつながりはなかった。

居住地は日本人集住地区で周りには日本人駐在員家族が多く、ほとんどが日本人学校に通う子どもの居る家族で、JB さんの息子はインターナショナルスクールに通っている為、日本人駐在員配偶者との接点はあまりなかった。しかし、とても気の合う日本人駐在員配偶者の友だちがいて「一番仲がいい」と話す。JB さんはドイツ語の語学学校から情報を得て、以前日本で習っていたトールペインティングの習い事を渡独して数年後に始めていた。その女性とは、トールペインティングの教室で知り合い、その後、日本クラブの種々の講習会やセミナー、子どものピアノ教室でも偶然に会うことがあり、「ご縁がある人」で「気が合った」。ドイツ滞在中は一緒に旅行にも行った。その友だちも帰国し、今は仙台に住むが、毎月 1 回は会うのが「楽しみ」である。

ドイツでの JB さんの人間関係は息子が高校生になると一変する。

次男が高校 1 年生になると、デュッセルドルフ日本人学校の中学部を卒業した日本人生徒たちがインターナショナルスクールに編入してくる（第 3 章 3.4.2.3 参照）。そして、JB さんは、編入してきた日本人生徒の母親たちと急速に打ち解けていく。

JB：（日本人学校から）お母さんたちが入ってきてすごく楽しくなっちゃって。もう日本人学校に居る間（中学までの間）にお母さんグループができていて、なんだか私は外様（とぎま）ぼかったです。「仲間に入れて、入れて」って。（ドイツの電車の）時刻表の見方とか、（日本人学校から来たお母さんたちは）なんにも知らなくて。私に任せなさいって。

ドイツ生活も 4 年目になり、次男もインターナショナルスクールに長く通う為、JB さんは学校関係のことも含め、ドイツでの生活一般のことにも詳しく、日本人学校から来た母親たちに、ケルンなどの近郊都市に行く時の切符の買い方などいろいろ教えてあげた。また、日本人学校から来た生徒の母親たちが、あまりに「何も知らない」のに驚いたという。心の中では、「（ドイツにもう何年居るのかしら。何やっているのかしら）」と思ったというが、「でもそんなこと言えないですよ」と話す。

また、JB さんの語りの「外様ぼかった」というのは日本人学校から来たお母さんグループがすでに出来上がっていたのでその部外者という意味と、自分は他の母親たちよりも 10 歳ほど年上で、「長老」というような立場にいるという意味も含んでいるであろう。母親たちは皆駐在員配偶者であるが、JB さんは女性たちとつながる中である種のルールを決める。

\*：そのお母さんたちとは個人的にも仲良くなさったのですか。

JB：いいえ。なんかこう一本釣りしたら申し訳ないかなって。何かやる時にはみんなに声を掛けていました。その学年に。その中で特にこの人というのはなくて、みんな平等に。もちろん向こうから声を掛けていただいたら喜んで。でも自分からはあえて気が合う人には声を掛けません。抜け駆けみたいになっちゃうから。本当はいいたいけど。

駐在員配偶者同士のつながりを円滑にする為に JBさんは、皆への声掛けを試みる。そしてルールに従い、気遣いながら、他の駐在員配偶者とのつながりを維持していく。

JBさんは、息子の学校の同学年生徒の母親たちとつながっていくが「ちょっと気を使ってしまって」、「自分が出せるのは」は、(前述のいろいろな場所でよく出会う)「ご縁のある人」で「もう一番好き。何でも話せちゃう」ととても嬉しそうに話す。

JBさんは、渡独後、数年して「日本人の多く住む地区から離れたい」と思い、ドイツ人ばかりが周りに住むアパートに引っ越す。「あそこ(オーバーカッセル地区)は日本だよ」と話し、「なんで日本の人はあんなにドイツ語を勉強しないのかな。失礼でしょ。勉強しなきゃ」と憤慨したように話す。そしてデュッセルドルフに暮らす日本人に対して、「もっと緊張感を持って暮らした方が良い」「一度、日本食も何もないところに暮らしてみたら(それが)分かる」と強調する。

引っ越し先では、同じアパートに住むドイツ人とお茶をしたり、ドイツ語で困った時など聞きに行き行って助けてもらったりして、交流が生まれる。今までの語りから JBさんは、現地の言葉を学ぶことを当然と感じ、現地との交流を自然体で楽しむ姿勢が見えてくる。

帰国が決まった日の語りからも、JBさんが深く、現地と人びととつながっていたことがうかがえる。JBさんは、帰国が決まり、アパートを去る日の光景を思い出して涙ぐみながら、次のように語った。

JB：ドイツで引っ越しが終わって、今日ホテルに泊まるっていう日にアパートのおばちゃんたちが、コーヒーに呼んでくれたおばちゃんたちが上から降りてきて、(自分たちの)マフラーとってずっと手を振っていてくれて。涙が出ちゃう。また来るわーって。

エキスパトリエイト・コミュニティ内で暮らしながらも、現地の言葉を学び、現地の人びとと接点を積極的に持って暮らした JBさんだが、日本人がほとんどいないマドリッドでの駐在生活も JBさんの海外生活に対する姿勢に大きく影響を与えていると考える。

帰国後、数年経ち、仕事も考えるが、「年齢的」にも難しくなかなか見つからない。

今は、「なきゃないでしようがない」と気持ちを切り替え、「節約に節約を重ね、体が動く間は、ドイツに遊びに行きたいな」と思っている。そして、将来的には今の家を改築して、B&Bのような宿泊施設を提供したいとも考えている。できたらドイツの友だちも呼びたいと抱負を楽しそうに語る。

また、帰国して友だちとの関係にも変化があった。高校のクラス会にも行ったりするが、「外国に行ってない人」とは「話が合わなくなって」、「全然楽しくない」と話す。そして自宅近くでガス工事の作業をしている外国人を見かけ、スペイン語で話しかけるとペルー人であることが分かり、言葉も文化も違う外国で生活することの大変さに共感を覚えたりもする。

ドイツで駐在員配偶者とのつながりを越え、現地の人びとと積極的に交流し、友情をはぐくんでいった経験は、JBさんの今後の人生における生き方につながっている。

次に駐在員配偶者のみでなく、現地の人びと、現地に長い日本人や永住日本人との関係性を構築していったJCさんの語りを見ていく。

#### 4.6.2 グラデーションのある生活—JCさん

JCさん(40代)は独立行政法人の貿易機構勤務の夫に伴い、2011年に小学5年の息子と小学1年の娘を帯同してデュッセルドルフに赴く。デュッセルドルフ駐在前には2回のウィーン駐在(計4年間)、ハンブルク駐在(2年間)経験がある。

JCさんは栃木出身で父親は公務員、母親は専業主婦で2歳下の弟と3歳下の妹が居る。地元の公立の小・中・高校に行き、高校2年時にメキシコにAFS<sup>89</sup>のプログラムで1年間交換留学し、現地では現地のホストファミリー宅で生活する。渡航国に関しては、選ぶことができず、事務局が振り分け、たまたまメキシコになった。英語圏に行きたい気持ちもあったが、父親からも勧められ、留学する。

\*：留学生活はどうでしたか。

JC：すごい楽しかったですよ。なんにも知られていない国だった。今みたく情報もなくて。県立図書館に行っても、メキシコについての書籍なんてなんにもなかったんで。あの一(自分がメキシコに対して)偏見がなんにもないんですよ。予備知識がなくて逆に楽しい。

メキシコでの生活は、全く「予備知識」もなく、「全部自分で発見」で、「面白かった」と話す。ただ、「言葉がなかなか通じなくて」「相談できないのがつらかった」。授業は、現地の学校で皆と一緒に受けるが、「わかんなくてもただ座っていればよくて」「ずっとスペイン語を勉強していました」と笑って話す。クラスメートたちは「みんなすごくよくしてくれ」、「(スペイン語の)優しい言葉を(選んで)使ってくれた」。JCさんは「わかんないことがあったら聞けばいい」と明るく話す。言葉が何もわからない状況でも、

---

<sup>89</sup> AFSはAmerican Field Serviceの略で高校生の1年間交換留学プログラム。

楽観的に捉え、「わからなければ聞く」という姿勢を学んだことが分かる。さらに「メキシコの人には暖かくて情が深くてすごくよくしてもらった」と当時を懐かしそうに話す。

帰国後、高校2年次を繰り返した為、高校には4年間通うことになるが、当時を振り返り、次のように語った。

JC：後輩のクラスに入るには、日本の社会はちょっと難しかったです、まあ今になってみれば、2学年にわたって友だちができたのですごく良かったです。すごくいいですね。すごく面白い。知り合いが増えて（笑）。

その後、メキシコ留学でスペイン語が好きになり、「もっときちんと勉強して、留学先の友だちと文通もしたい」と思い、高校を卒業し、19歳で上京して東京の私立大学でスペイン語を学ぶ。「裕福な家ではなかった」ので、親からは、「それだけの出費をするのなら、それ相応の大学に行かなければいけない」と言われ、「頑張っただけ勉強した」。そして希望の大学に合格し、「親も喜んで」くれ、「快く送り出してくれた」。当時は、地元では勉強の為に娘が家を出てひとり暮らしすることを許してくれない親もいたことに触れ、「快く送り出してくれた」親には感謝の気持ちを持つ。JCさんは、「その大学に絶対入りたかった。スペイン語をやりたいかった」と話し「スペイン語ができて嬉しかった」と話す。大学時代の最初の2年間は、出身の栃木県からの補助を受け、県が保持する学生寮で生活し、その後、上京した妹と都内のアパートに住む。高校時代に管弦楽部にいたので、大学ではオーケストラ部に入部し、バイオリンを担当する。自分の学科では、スペインに留学する学生も多くいたが、「自分は高校の交換留学でメキシコに行って1年遅れているし、高校時代にも行かせてもらって親に経済的に負担もかけてるので」と話し、留学はしなかった。卒業後は、高校でのメキシコ留学中に貧しい農村で暮らす人びとを目にし、日本に居ながら開発経済援助に関わる仕事がしたいと思い、第1希望の貿易機構に入社する。入社後は、開発部門ではなく管理部門に配属され、海外事務所とのやりとりなどの仕事で、海外出張もなかった。社内で6歳上の今の夫と知り合うが、夫は、先にウィーンに海外赴任になり、1年ほどの遠距離恋愛の上、結婚を決める。仕事と結婚のどちらを取るか迷ったが、「乙女ですし、ウィーンは大きかった」と笑って話す。会社は1年半ほどで退職する。

ウィーンでは、毎日ドイツ語の学校に通い、3時間半のコースで学んだり、会社の上司の奥さんの声掛けで、皆で会って情報交換したり、部下の妻を心配した社長夫人から紹介を受け、「半分義理で」日本人会の婦人部コーラスなどにも参加した。JCさんは、当時はもっと「会社の奥様同士の付き合いが今よりあった」と話す。これは部下の配偶者たちを心配する前述のMさんの語りにもみられたが、以前は上司の妻たちが社内の配偶者同士のつながりを気にかけていた様子が見える。そして部下の配偶者たちは、「義理」や「義務感」を感じ、対応していたのであろう。

2年のウィーン生活を終え、帰国し、日本で3年ほど過ごす。日本では「できたらスペイン語を使った仕事をしたい」と思い、派遣会社に登録して、文化交流協会でスペイ

ン語の事務の仕事をした。仕事は「スペイン語も使えるし、周りの人にも恵まれ、楽しかった」が、2年半ほどして夫がハンブルク赴任の辞令がおきる。その時は、「ちょうど仕事の方も煮詰まってきたり、人間関係もいろいろあり、必ずしもハッピーじゃなかった」と話す。そして、帰国して数年の海外赴任ということで、あまりに早い辞令で驚いたが、「積極的な気持ち」で夫に帯同する。ハンブルクでは、夫がひとり事務所の為、周りには同じ会社の駐在員配偶者がおらず、「結構（ドイツの空は）暗くて<sup>90</sup>」会社の「奥様」たちとのつながりもなかった。しかし、半年近く経ち、母校の大学の現地同窓会や日本人向けの料理教室などで少しずつ日本人駐在員配偶者とつながる。当時、自分は20代後半で、自分と同年代で子どものいない女性たちとも知り合ったが「ゆるーいつながり」であった。また、週2回ほどドイツ語の語学学校にも通った。

2年のハンブルク駐在生活の後、そのまま帰国せず横移動で再びウィーンに赴任になる。その時、妊娠5か月で引っ越し、ウィーンで出産するが、産後の肥立ちが悪かったり、長男が夜中に何度も起きたりして育児が大変で、「（睡眠時間が少なくて）まず寝たい」といつも思っていた。ウィーン的生活は「出産と子育て」に追われる日々であり、海外にいながらベビーシッターなどを頼んでメールを使って仕事をしている女性の話を目にして、「すごいな」と思ったが、「自分には絶対無理だと思いました」と話す。会社の「奥様方」も数人いて、いろいろ情報を得たり、以前のウィーン駐在中に知り合ったオーストリア人ともつながるが、親しく会って話をするという感じではなかった。ウィーンでは、病院の先生も皆オーストリア人で、ドイツ語しか使えないので検診前に自分でドイツ語の単語を調べたり、1週間前から勉強して用意した。夫は、「自分でできるでしょう」と言って、病院に同行せず、JCさんは「自分で何でもやる感じで、大変な思いをしてやりました」と語った。そしてその後駐在したデュッセルドルフの生活とウィーンでの生活の違いに触れ、「（デュッセルドルフは）不動産もお医者さんも日本人がいて、私の苦労はなんだったんだろうって。全く苦労が報われないと思った。あんなに大変な思いをしてやったのは」と半ば憤慨する気持ちで語る。しかし、夫から「あなたはできる人でいたいでしょう」と言われ「確かにそうだなと思って。うまく言われて、納得して（笑）」という語りからは、自分は「できる人」でありたい気持ちを持ち、そしてそれができるという自信もうかがえる。

長男が1才10か月の時に帰国して横浜の社宅に住む。周りは海外から帰国した家族ばかりで、皆、携帯電話などもあまり知らず「知らなくて当たり前みたいで、そういった意味では楽でした」と話す。半年ほどして東京郊外に家を購入し、引っ越す。最初は子どもを連れて公園に行くと、他のお母さんたちと「会話がつながらなかった」と話し、次のように語った。

\*：会話がつながらないというのはどうしてですか。

---

<sup>90</sup> ドイツの冬は日も短く、晴れの日も少なく重い雲が立ち込め、どんよりしている日が多い。日本と比べて「暗い」印象を受けたのであろう。

JC：子どもはもともと好きではなかったから、他の子とどのように接するのか、わかってなかったから。オーストリアの子どもの接し方と日本と全然違うんですね。子どもが遊んでいても、ひとり、本を読んでてもいいし。ここだと初めましてとか、おいくつですかと。でもすぐ仲間に入れてくれるわけじゃないですし。全然逆。(中略)知らない子を友だちって言うんだって初めて知って。お友だち、今会ったばかりの子がお友だちって言うの。

帰国して、子を介しての日本人の母親たちとの接し方に、駐在先のオーストリアと違いを感じて戸惑ったり、なかなかうまく仲間に入れなかった。しかし、長男が幼稚園に通園し始め、引っ越し後に生まれた長女も同じ幼稚園に通園したこともあり、幼稚園仲間の母親たちと仲良くなっていく。次女の幼稚園送迎で「ママ友」とおしゃべりするのは、「苦痛じゃなくて楽しかった」。また、近隣も「すごくいい人」で「誘ってくれ」「会うと嬉しい人」もでき、とても「ラッキーでした」と話す。

日本の生活においては、1回目のウィーンからの帰国の時と同様に「逆カルチャーショック」を感じていた。海外では「はっきりと話さなければいけない」のに日本では「話し方を丁寧」にしたり「柔らかく話さなければいけない」「きつく思われちゃうみたいで」と人間関係において違いを感じる。また、「年上の男性と話す時も日本の女性は下手に出なくちゃいけない」と話し、「(男性に対する)無駄な謙遜ですよ。今も嫌いですけど」ときっぱり言う。

8年半、日本での生活に「どっぷり」使ったJCさんは、次に海外赴任になった時、「ぬるま湯のような日本の生活からも抜け出せるか」不安であった。そして、長女が幼稚園を卒園し小学校1年、長男が5年生になる時にデュッセルドルフに夫の赴任が決まる。

JCさんは、夫の会社は、入社してから、「3-4回(海外に)出る会社なので」覚悟を決めていたのに、また海外に出ることに「ショック」を受け、また「ショックを受けている自分にもショックを受け」4日間ほど寝込んでしまった。3回目のドイツ語圏でデュッセルドルフは、「日本人が多すぎて大変」という噂も耳にしたり、引っ越しや子どもの学校手続きなど的大変さを考えると「あまり行きたくなかった」と話す。しかし、夫は海外行きを希望し、子どもにも「海外体験をさせたい」とも思い、「いざとなったら覚悟」を決め、渡独する。

居住地は「日本人が固まって多く住むところには住みたくない」という理由でメアープッシュに決めるが、子どもたちの学校は、子どもたちの希望で2人とも日本人学校に入学する。

\*：学校は現地校やインターナショナルスクールという選択がありますが、どうして日本人学校になさったんですか。

JC：うちの原則です。本人に選ばせるっていうのが。親としてはインターナショナルスクールか現地校ですよ。もったいないと思って。せっかく向こう(ドイツ)に

行っているのに。学ぶことがいっぱいあるのに。もったいない。夫も同じ考えです。だけどやっぱり子どもが望むものじゃないと伸びないから、子どもがいい方がいいかなって。だから日本人学校になりました。

渡独後、デュッセルドルフは初めてなので知り合いもなく、まずは「子どもの生活を軌道にのせることが必要」と考える。JCさんは日本人学校周縁地区を「あそこはまるで出島みたい」と言い、現地社会と隔離された世界と捉える。そして日本人学校に通う子どもたちは「学校の周りと家族（との世界）で終わり」でもっと「それプラス他の世界を見てほしい」と思って、子どもたちをいろいろなところに連れ出して教えたり、ドイツ語も習わせました」と話す。日本人学校の生徒たちの多くは、受験も考え、英語を習う傾向があったが、JCさんは、「私と夫のモットーです。うちはドイツ語」ときっぱり言う。そして、JCさん自身も独文法を教えたりするが、子どもたちは、「興味を持ってどんどんやりたくなるような感じでな」かった。「まじめにはやるが、意欲的ではなく」子どもたちにドイツ語学習させることに対して「疲れちゃって」「疲れちゃって」と笑って話す。そして言葉はできなくても、「せめて社会とかに目を向けてもらいたい」と思い、カーニバルなど現地の行事や大会などにも積極的に参加させ、現地との接点をできるだけ増やそうと奮闘する。また、現地のテニスの習い事もさせる。

子どもたちに現地社会と接点を持ち、つながってほしいという強い希望を抱くが、子どもたちはそれほど積極的な姿勢を見せず、空回りしていた様子である。

次に、JCさんがどのように他者とのネットワークを広げていったのかに注目する。

渡独後、最初の2年間は日本人小学校に通う長女のお迎えなどもあり、お迎え時に同学年の子どもを持つ母親たちとのおしゃべりは「息抜き」になった。そしてハンブルクでの駐在生活を思い出し、「ハンブルクのように私が出ていく場所がどこにもないということはなった」「どこかに出ていく場所があるのは嬉しかった」と話す。「社会的にメンバーとして認めてくれる場所」「居る場所」があることは「すごく有難かった」。さらにJCさんは次のように淡々と語った。

JC: まあ、人間関係はいろいろありますよ。でもとりあえず社会的に居る場所がある。

駐在員の奥さんの一番つらいのはそこだと思うんですよ。夫は会社があるし、今までの人とつながって。子どもは学校がある。でも、奥さんは、日本とのつながりはないし、根っこから引き抜かれるっていう言葉を使うらしいんですけど、根っこそぎ引き抜かれる。家の中で家事をしていればもちろん役割は終わるんですけど、行く場所がない。自分を必要としてくれないし、社会の一員としても認知してもらえない。

語りから、全く知らない土地で生活をスタートしていく中で、自分の居場所があることの「ありがたみ」を痛感し、何らかの形で社会とつながっていることの大切さを実感していることが伝わる。

そして今回は夫が、会社の所長というポジションの為、会社関係においても「出ていく場所がたくさんあった」。個人的にも特に駐在生活最後の2年は「人とのつながりは今回（の駐在）が一番良かった」「充実していた」と話す。どのようにネットワークを広げていったのか語りから見ていく。

\*：どのようなつながりですか。

JC：母校の大学の同窓会の幹事。幹事はたくさん居るんだけど。私、暇だし。幹事さんたちはみんな（現地で）仕事をしてらっしゃる。それから「ヒューマネット」<sup>91</sup>のお店のお手伝い。（中略）あとは、教会のコーラス。ドイツ人の中で始めたコーラス。メアーブッシュ市と日本との交流協会。時々、月1で、飲み屋に集まって、おしゃべりを日本人やドイツ人とする。結構、専業主婦以外に出ていくところがある。夜の集まりです。普通、専業主婦していると夜出て行かないですよ。しょっちゅう出ていけて。大人の世界ですよ。

JCさんは駐在員配偶者以外に、現地に長い日本人、永住日本人、そして現地の人びとのネットワークを積極的に広げていく。そして、そのつながりの中で感じたことを次のように語った。

JC：デュッセル（ドルフ）だとドイツ社会で生きている人とか、ドイツ企業に勤めている人とか、割とはっきりものを言うのが当たり前だったりするので気楽なんですけど、日本人学校のお母さんたちはそこまでではなかったです。でもやっぱりドイツ風でちょっとはっきりになっている人も居るので、いろんなグラデーションの人と常に付き合っていたので良かった感じですよ。

そして、日本人学校にも「すごく日本的な人」「ドイツに長くて、（物事を）はっきり言う人」「周りをすごく見る人（気にする人）」などがいたことにも触れ、「すごく日本的な人」には、「あまりはっきり言わないように」していた。一方、現地に長く住む「ヒューマネット」の日本人スタッフは、話していても「気持ちよく」日本人でも「ドイツ人」のように感じた。JCさんは、「ドイツ風」というのは「物事をはっきり言う」ことと捉えている。

そして今までの駐在生活を振り返り、「人生に強弱」が付き、「人生のアクセント」と語る。「好奇心満開」で「常に学ぶことがあった」と強調する。

現地で「充実した」生活を送るJCさんであるが、ドイツの生活も3年過ぎ、長男が日本人学校の中学2年になると「さすがに（受験の）現実を見ないといけない」と考え、デュッセルドルフにある日本人生徒向けの進学塾に行かせる。夫のデュッセルドルフで

---

<sup>91</sup> 注（79）参照。JCさんは、ボランティアベースで週3回お店に立ったが、移民のお客が多く、「日本にいたら、絶対できない体験」で「楽しかった」と話す。



の赴任期間が長引いた時は、日本の高校受験の為に母子で先行帰国しようと考えていた。

JC：周りの帰国された方の話や（日本の）学校の先生の話を知ると中学3年の途中に帰って来られても内申書の成績がよくつかないとのことでした。だから、その前に帰らないといけないと。中3の初めぐらいに帰ったほうがいいよって言われました。私たちは、マックスで4年で帰るっていうのは、どこかで決めていました。夫もしょうがないよって。

そして2015年4月、長男が中学3年になる直前に母子で帰国する。帰国後1年8か月ほど経ち、JCさんにインタビューを行った。帰国後は、長男の塾決めや学校のことなど「受験一色でした」と話す。受験はうまくいき希望通りの高校に進学し、長女も地元の公立小学校に編入する。今は、長男は、希望校に合格し、「ほっと」したところで、日本での生活について次のように語った。

\*：息子さんの受験も終わり、これから少し時間的に余裕ができますか。

JC：何か仕事をしたいです。皆さんパートですね。まず息子の友だちのお母さんたちは、ほぼみんな働いてますし、娘の友だち（のお母さん）だと半分以上働いているかな。デュッセルドルフから帰った友だちもみんなパートで働いていらっしゃる。そういう話を聞くとなんか私もやらなきゃって思います。

JCさんはできたら結婚前にできなかった「開発援助」の仕事をしたと思うが、職場が「都心」になると通勤時間が長くなり、「何かあった時に、子どもを学校に迎えに行ったり、母としての機能を果たす」ことができなくなることを懸念する。できたら家の近くでの仕事を希望するが、仕事をするにしても「家のことはちゃんとやって」影響が出ない形で働ければいいと考えている。JCさんはドイツに居る間も「子どもたちが充実して暮らしていたのが、精神的支え、精神的安定のもとだったのかな」と話す。

JC：仕事をして家のことを全然やらないで働くっていうのも自分的にちょっとどうかなって。自分の中でも家のことはまずちゃんとやりたい。基本、主婦なので家の中のことをやって、それでプラスアルファするんだったら、自分的にOKです。何が優先って思うと、子どもとか夫の健康とか安全とか精神的な落ち着きだったりするので、お母さんが毎日、自分の満足の為に働いてきてキーキーヒステリー起こして夜になって怒りまくって怒鳴りまくって、家を散らかしているよりも、もっと収入が少なくても、もうちょっとバランスのとれた生活をしたいですね。

生活の中で、家族を優先する姿勢が見えるが、帰国後、仕事をしたり、活躍している知人を目の当たりにして揺らぐ気持ちも持つ。

JC: 自分なりに、いろいろ努力もしたし体験もしたり、駐在員夫人としてはプロだと思っんです。でもなんかこう日本に帰ってきて周りを見ると何かの仕事をしている人が多いんですよ。先日 AFS で同窓会があったんですね。ほとんど同期が多いんですけど、お互いに近況報告したんですね。皆さん素晴らしくて、キャリアが。英語圏から帰ってきてアメリカの大学院に行き、コンサルになりましたとか。女性でもみんなキャリアを築いて。そんな中で専業主婦やってますなんて。わかります？わかります？私なりに頑張ってきたんだけど社会的に認知されていないんです。私はつまらないおばさんで終わるなんて、ちょっと寂しいかなあって。

海外では「駐在員夫人のプロ」として頑張り、自分の中でも「充実した生活」を送った JC さんは、日本に帰り、自分のやってきたことが全く認められず、「ただのおばさん」になる事に危機感を覚える。

そして最後に大学時代の親友が「輝いている女性」という記事で新聞に載ったことに触れ、「(友だちは) 皆、素敵に生活してますねえ」とため息まじりに言い、「何に優先順位をつけるかですよ。人生何事もそうなんですよ。何に重きをおいて暮らすかなってということだと思いますよね」としみじみ語った。JC さんは、駐在生活で駐在員配偶者以外の同じエスニック集団の様々なサブコミュニティや現地の人びととつながり、「いろいろ体験」し「駐在員夫人として」「努力」も重ねてきた。しかし、日本に帰り、今まで頑張ってきたことが「社会的に認知されない」ことを実感する。今までの駐在生活をこれからの自分の人生にどのようにつなげていくのか模索する日々を送る。

#### 4.7 中断されるライフコース

駐在員配偶者は、ホスト国に数年という期間で滞在し、帰国あるいはさらに他の国へ移動し、新たに駐在生活を送るが、赴任期間が読めないことが多く、それが女性たちの生活にいろいろな形で影響を及ぼす。駐在員配偶者たちは、駐在期間がはっきりしない中での生活をどのように捉えているのだろうか。そして、中断されるライフコースにおいて、駐在生活を帰国後の生活にどのようにつなげようとしているのかを考察する。

I さんの場合は、駐在生活は3年から5年と言われ渡独したが、次のように語った。

I: 3年から5年の赴任期間といわれて、そのつもりで来たら、景気が悪くて結果によっては早まるかもしれないって。早い人は2年、長い人は8年ぐらいで、(赴任期間が) 読めないのがすごく嫌です。ドイツ語の勉強にしろ、お付き合いにしろ、何年居るかわからない。どこまでドイツ語をやるべきなのかとか。短いんなら、短いなりに楽しむものも探さなきゃいけなし。子どもの教育にしてもそうですね。

そして最後にそれは「仕方ないのかなあって」と半ばあきらめの境地を語る。また、帰国後の仕事についても不安を抱える。I さんは、結婚、出産後も仕事を続け、17年間働いていたが、夫の海外赴任に帯同の為、職場をやめて渡独した。そして、帰国後に「自

分が戻るところ（職場）がない」、「何か資格を取るとか、身につけて日本に帰らなければ」と焦る気持ちを語った。

同様に G さんも、夫の赴任期間が分からないのは「すごくもどかしいです。何年って決まっていればその期間内に自分なりにいろいろ予定も立てられるんですけど。いつ帰るかわからないので、あまり思い切ったことができないですよ」としみじみ話す。

4 回の海外駐在で、一時的な滞在生活を繰り返す M さんもいろいろな貴重な経験をして、「それはそれで満足している」としつつ、「日本の社会とのつながりがぶちぶちって。移動のたびに切れてしまう。気持ち的に寂しくて」と語る。会社に入り 5 年働いた後の自分の人生は、「ずーっと中途半端、全部が全部途中で終わってしまった気がして」としみじみ話す。そして、今後の抱負を尋ねると今までは家族を結び付ける「接着剤」の役目を果たしてきたが、今は子どもたちも大きくなり、家族が離れていく中で、これから、他の人びとをつなぐ役割をしていきたいと話す。そして今まで「恵まれたことが多かった。だからそれを返したい」と目を輝かせて語る。

D さんは、国境を越えて移動した異国での生活を「仮の生活」「一時的なもの」と捉え、「仮の土地に」「異邦人」として暮らす感覚で「地に足がつかない雰囲気が生活の中に流れている」と語る。しかし、今回の駐在生活については、「今までとは違う思いで暮らしている」ときっぱり言う。

デュッセルドルフの駐在が海外赴任 3 回目で、結婚前までは漆作品を生み出していた D さんは、今までは自分の人生がそこで「フリーズ」してしまい、日本に帰ってからまた「解凍してそこから始まる」というイメージを持っていたが、今は違うと語る。

D：日本に帰ったら、今度こそは絶対に仕事、漆を始めたいと思っているので、その時の為の肥やしとして、とにかく今すぐに漆ができなくてもその時点にやっておこうという気持ちです。（駐在が）3 回目になって、これフリーズしている場合じゃないぞ。自分も年を取るし、子どもも育っていくし、自分だけ凍結してたら、本当にもう凍結した人生で終わってしまう。（中略）自分の人生は続いているというイメージを持とうと思っています。

こう語る D さんは漆の作品を生み出す際の「肥やし」になると思い、銅版画をドイツ在住の日本人の先生から学ぶ。今までとは違った発想も湧き出てきてとても勉強になり、「充実した時間」だと話す。D さんは、帰国後の人生を漆のある暮らしにしたいと強く願う。

このように国境を越えて移動し、滞在期間もはっきりしない生活の中で、駐在員配偶者たちは、「今ここに居る」意味を自己に問いかけ、自己の存在や生活に意味づけや価値づけをしようと試みるが、自分の将来の為に勉強を始める女性も居る。

日本では栄養士の仕事をしていた H さんは、家事・育児・送迎と忙しく過ごす「それはやるけどやりたいことではない」ときっぱり話す。そして、海外にいても「時々、求人サイトを見て復職、求人を狙っています」と話し、海外にいても在宅で勉強できる

資料を取り寄せ、勉強を続けていきたいと思っている。帰国したら、栄養士の仕事を再開する気持ちを持つ。

このように、帰国した駐在員配偶者たちの語りには、帰国後、また新しい生活をゼロからスタートし、子どもたちが成長し、社会性がついていく中で、自分だけが取り残されないように自分の生き方や帰属先を模索し続ける姿がうかがえる。

帰国して12年ほど経ったJAさんも今は、学童保育とおもちゃコンサルタントとしてパート的に働く。学童保育の仕事は、帰国して「社会と関わりたい」と思い、「自分は、何ができるのだろう」と自問し「子どもを育てたこと」という結論にいきつき、帰国後1年して始めた。そして学童保育の仕事をするうちに「小さな子に関わる母子関係」に興味があり、おもちゃコンサルタントという仕事を見つける。ドイツで子育て中に、日本のおもちゃと違い、木で作られたおもちゃが多いことに気がつき、日本にも木のおもちゃを普及させたいと思った。おもちゃコンサルタントの仕事は木のおもちゃを使い、母子に遊びの指導をするもので、都内の児童館や、子ども広場、おもちゃ美術館に月7、8回出向く。そして「小さな子に関わっていることも、おもちゃに関わっていることも楽しい」と嬉しそうに語り、「私の中で、ドイツの生活は、今の自分の生活に大きな影響を与えている」ときっぱり話す。

しかし同時に複雑な胸の内も明かす。

JA：バリバリ働いて自分で稼ぐという人生もあつたら良かったなとも思いますが、自分の中では、今の生活は不幸とは思わないです。基本、社会とはつながらない生活はしたくない。老人になってもどこかではつながっていなければいけないと思う。そこの方がお金を稼いで自立することよりも私には価値がある。

JAさんは自分の人生を振り返り、出産後、「子育てに興味」もあり、自分の意志で仕事をやめ、また40歳になったら仕事を始めたいと思った時に、海外赴任の夫に帯同した。現地では、仕事ができない代わりに、長男をドイツの学校に入れるという挑戦をし、納得のいくようなドイツ生活を過ごし、現在も仕事を楽しんでいる様子であるが、同時に、仕事をしてこなかった人生をこれで良かったのかという気持ちものぞかせる。

「(社会とつながっていることが)お金を稼いで自立することよりも私には価値がある」という語りは、今の自分の人生に自分なりに意味づけをしようとするJAさんの姿を浮き彫りにする。

しかし、妻・母の役割をこなし、一生懸命頑張って、「駐在員夫人プロ」として「充実した」生活を送ってきたのに、帰国後には、専業主婦で「ただのおばさん」になってしまうと悲嘆する配偶者も居る(JCさん)。海外では、一生懸命言葉を学び、現地の人と触れ合ってきたのに帰国後に仕事にうまく結びつかず、仕事をさがしてもうまく見つからないこともある(JBさん)。

海外においては自分のライフコースが中断され、今後の自分の人生を考える際にも滞在期間もはっきりせず、もやもやした気持ちを抱きながらも、将来に向けて日常生活実

践を送る女性たちが浮き彫りになった。また、帰国後、不連続のライフコースにより、自己実現することの難しさも示唆された。

#### 4.8 自国の親・兄弟とのつながり

海外駐在員配偶者たちは、トランスナショナルな社会空間にあるエクスパトリエイト・コミュニティで生活を送るが、第2章で述べたようにグローバル化とともに、海外にいながら自国との距離を身近に感じ、親や兄弟とのつながり方の変容も考えられる。駐在員配偶者たちは、日本に居る親や友だちに対してどのような思いを抱き、どのようにつながっているのかを見ていくにあたり、EさんとCさんの語りを検討する。

##### 4.8.1 自国の親を案じる気持ち—Eさん

デュッセルドルフの生活が7年になるEさん(40代)も、日本に居る親が気がかりである。Eさんは、2008年に商社に勤める夫の赴任で10歳、8歳、6歳の長男、長女、次男を帯同して渡独した。

Eさんは、千葉県出身で父親の転勤で神奈川、東京にも住むが、また千葉に戻る。商社に勤めた時に、社内の同じ部署の男性との結婚を決める。仕事を続けたい気持ちもあったが、当時は、「同じ部署だとやめるという風習」があり、「夫に居心地悪い気持ちをさせるのも」と思い退職する。結婚後、埼玉の夫の実家に同居するが、同じ敷地内で別宅であった。夫の母親からも「仕事をしただけの方がいい」と勧められ、3か月ほど職探しをして工作機械関係の会社で9時から5時、6時までフルタイムで働く。2年弱働くが、長男を妊娠した時に夫が大阪に転勤になる。大阪で長女、次男を出産する。夫が大阪から東京勤務になり、年長、年少、幼稚園入園まえの3人の子どもを連れて埼玉の夫の実家に戻り、夫の母のそばで暮らす。そして1年半後に夫は、八王子支店勤務になり、八王子に家族で引っ越す。そこで長男は小学2年生、長女、次男は、転校、転園する。八王子では、子どもの小学校の図書ボランティアなどの活動に関わったりして、「子育てに没頭する」。そして次男が小学校に上がると、「自分の時間も少しづつできる」。八王子には3年半暮らしたが、引っ越して、1年半ほどして、子どもの友だちの母親が白血病になり、「心身ともに大変で」いろいろお手伝いをしたり、助けてあげたりした。また、女性がヘルパーの仕事をしていた関係で、「その仕事をやらないか」と言われ、Eさんはヘルパーの仕事をするようになった。

ヘルパーの仕事をしているうちに資格を取ろうと思いつく。そしてその理由について次のように語った。

E:(私の住んだ)地域はご老人が増えて同居される方が多かったです。私もゆくゆくお母さんとか自分の母のことも何となく考えてきた時期で。免許を取って、人の最後のお手伝いが少しでもできるのであれば、それはそれで自分の何かの糧になるかなと思って。あと、そういうことに対して子どもにも死に対して話ができるのではないかと思います。つらいですけどね。

Eさんの住んでいた地域には、ひとり暮らしや、子どもが遠くに住んでいる為、介護や世話を頼めない高齢者などが多く、ホームヘルパーをしている人も「たくさん」いた。そのような状況の中で、自分も将来的にそのようなことが起こるのではないかと「ひしひしと感じ」、仕事を試してみようと思った。「(子どもが幼稚園に行ったり、学校に行ったりしている間に、少しでも時間があるのであれば、お話し相手になったりするのもできるのかなと思った」と話す。ホームヘルパーの学校に半年ほど通い、実技なども行う。

ホームヘルパーの仕事は、最高2時間で洗濯、介助で自宅に行ったり、デーサービスと一緒に「手遊び」「折り紙」「散歩」などをしたりした。「すごくいい勉強をさせていただきました」「人の最後ってすごく大事で」としみじみ語る。そして「家族に支え」られながら、皆「明るく楽しく」過ごすのを目の当たりにする。中には、亡くなる人もいて「気持ちが落ち込む」が、「子どもの笑顔や夫の楽しい話」を聞いて癒されたという。仕事をするにより、「社会とつながり」があり、自分の子どもたちに対しても「人の最後について話し」たり、「地域との関わり」もでき良かったと話す。また、「本来なら、(夫の)母と住みたかったんですけど、それができなかったんで」という語りから、海外駐在や転勤の為、結婚後しばらく、同じ敷地内に住んでいた夫の母親と一緒に住めなくなったことに申し訳なさの気持ちも感じられる。

八王子での暮らしも3年半経った頃、夫のドイツ赴任が決まるが、その時の気持ちを次のように語った。

E：八王子の時はホームヘルパーという形で、もうちょっと実技を積むと介護福祉士とかそういう資格も取れたんで。そういう手前だったので、ちょっともったいないかなと思ったんですけど。惜しいことをしたなと思いましたが、いつも良いご縁がいつもあるので(笑)。

Eさんの語りには繰り返し「ご縁がある」という言葉が出てくる。結婚後、工作機械関係の仕事をするようになった時、結婚して家を建てることになった時、友だちからホームヘルパーの仕事を紹介された時など、Eさんの人生の転機に必ず出てくる言葉である。ドイツ行きに関しても「良いご縁がある」という期待を持ち、夫に帯同する。その時の気持ちを次のように語った。

E：今度は海外なんだと思って。また、前向きに楽しくいろんなことを得られればいいなという期待感と子どもたちがちょうど良い年頃に行けるので、いろいろ経験できるのではないかとという明るい気持ちを抱いてこちらに来ました。夫もだんだんと責任ある立場になり、ひとりで行ってというわけにもいきません。

渡独時、長男、長女、次男はそれぞれ日本人小学校5年生、3年生、1年生であった。長男は、小学5年生まで日本の教育を受け、「日本人ですから、ある程度日本人として

の集団社会や日本語教育とか価値観とか」を学んでほしいと思い、日本人学校を選択した。実際、夫の会社の方針として、日本人学校がある時は、そこに通うという決まりがあった。長男は日本人学校に中学3年生まで通い、卒業後、日本の高校に進学するか、そしてその場合は、夫を残して子どもたちと一緒に帰るか悩んだが、息子の希望でデュッセルドルフのインターナショナルスクール (ISD) に通うことにする。夫の会社にも相談した結果、許可がおりる。次女も日本人中学校では、「英語の弁論大会に参加」したり、「英語が大好き」で、インターナショナルスクールを希望する。Eさんは、娘が英語好きになったのは、日本人小学校時代のドイツ現地校とのお泊まり会や中学時代の現地校との授業交換会があったからだとし、これも「いいご縁」だと捉える。

Eさん家族は、日本人学校近くの日本人集住地区にある集合住宅に住むが、周りは年配のドイツ人が多かった。ドイツ語の学校に通ったり、生活情報を得る為によく出歩いたと話す。友だちに関しては、3年を過ぎると帰国する人も多く「がらっと人も（入れ）替わる」と話し、仲の良かった友だちも帰ってしまう。その「寂しさ」には慣れず、3月の「別れ」の時期は一番「嫌な時期」だという。

ドイツ生活も8年近くになり、子どもたちも大きくなり、「自分はこれからどうしたらいいのかなってそういうことを考えますね」としみじみ話す。そして次のように続けた。

E：ドイツではそういうことを考えるといういい時間がとれるところなので。周りを気にせずに。何をしたらいいんだろうって。日々やっぱり。あと子どもの進学のことと。すごい探す時期ですよ。

そして突然、筆者に向かって「三浦さんとの出会い。一つの選択なんだなあって。どういうきっかけで、大学で勉強しようと思ったのですか」と逆に質問を受けることになった。これからの自分の生き方を模索していく中で、筆者の生き方も参考にしたいと思ったのであろう。さらに「今の心境は」という質問に対して、Eさんは次のように答えた

E：こっち（デュッセルドルフ）に居る間、（自分の）父を亡くしたんです。（中略）私の母も夫の母もある程度の年になってきていますから。義理の母はずっとひとりで過ごしています。いろいろ理解してくれて外（海外）にも出してくれて。夫の父は、がんで私が結婚する前に亡くなられて。お母さんひとりで。

夫は長男で、結婚した姉が居るが、姉は母親宅からは離れて住んでいる。また、姉の夫の両親も介護が必要なので、夫の母親に何かあった時、義理の姉に助けを頼むことは難しい。Eさんの母親は、千葉にいて、「何とか」ひとりで暮らしていて、弟が近くに住む。Eさんは義理の母について次のように語った。

E：(母は) 本当に苦勞してきました。戦争中(でもありました)。つらい思いをしている母にひとりで逝ってしまわれては困る。ずっと離れていて子どもたちの成長もなかなか見せれなかったし。少しでもよく過ごしてほしいというのは基本にあつて。

そして自分の母親のことに触れ、「まだ元気ですけど、私がない間に父を亡くしたり、その辺のケアとか。帰ったらいろいろと母と話したい」と言葉を強めて話す。日本に帰って何か仕事をしたいと思う気持ちはあるが、優先順位一番は「(夫の) 母のお世話」だときっぱりという。

グローバル化が進み、日本との距離を近く感じるがゆえに、ますます、そばにいてお世話できないと焦る気持ちが強くなるのであろう。前述の C さんも日本に住む親に対して心配の気持ちを抱く。

#### 4.8.2 申し訳なく思う気持ち—C さん

C さんは、デュッセルドルフに 2 回目の駐在で 8 年目になるが、C さんの父親は、C さんの結婚後に亡くなり、母親が東京近郊にひとりで住んでいる。母親は難病があり、C さんの姉が母親の近くに住み介護している。姉は在宅でする仕事で 2 人の子どもはすでに大きく、家を出て別に生活している。

C：姉には悪いなって思いますけど。介護って大変ですよ。母はひとりで生活はできるんですけどちょっと難病になってしまつて。もう 10 何年前から。介護は必要ですね。頭はしっかりはっきりしているんですよ。母と姉とぶつかる、ぶつかる。それを聞いていると(母が) かわいそうだなあつて。私はたぶんあんまり感じないので、そういうことを。そんなこと気にしなくてもいいと思うようなことを。たぶん一緒に居ないからですね。一緒に居るとやっぱり考えなくていいことも考えちゃうのかな。

C さんは、姉と母親がぶつかることがあると話す、幼少時代の母が、姉に対してとても厳しかったことが影響しているのではないかと感じている。

C：姉は、引っ込み思案な性格だったんですね。変わりもんなんですけど、実はすごく繊細だったんじゃないかなと思います。姉は今になっている母にぶつけているんですね。(子どもの時に母が) こんなことしたか、あんなことしたとか。子どもの頃の写真を見ても姉は浮かない顔をしているんですよ。それは母が厳しかったんですよ。父も母も。人間てふしぎだなあ。こんな年とっても昔のことを思い出して母についぶつけてしまうなんて。なんかちょっと悲しくなりますね。そんな弱い母にぶつけないでよつて。



Cさんは、時折一時帰国もするが、自分が母親のそばにいて介護を手伝うことができないことで姉に対して申し訳ない気持ちを持っているが、同時に姉に対して憤りを抱く感情も語りから伝わる。そして帰国したら、「姉とバトンタッチかな」と話す。また自分の親ばかりでなく夫の両親のことも懸念する。

C：夫の父はパーキンソン病なんですけど母が何年も介護していて、今、老々介護になりつつあって。母もいろんなところがあちこち。夫には独身の妹が居るんですけど。いろいろ嫁の私には口出しできないところがあるみたいで。妹は東京なんですけど、あんまり（親のところ）に行っていないみたいで。母は腰も悪いし。この間帰った時は割と安定していて、話もできましたが。なんか波があるみたいで。

夫の母親のことも案じるが、嫁の立場としての難しさも同時に感じている。

Cohenによるエクスパトリエイト概念では、あまり自国に住む家族のことは触れられていなかったが、トランスナショナルな社会空間に存在するエクスパトリエイト・コミュニティにおいては、国を越えた家族とのつながりにも留意することも必要である。グローバル化が進み、国境を越えた異国においても駐在員配偶者は自国に住む家族をいろいろな面で身近に感じることができるようになったと捉えられる。Iさんは、子ども時代に父親の仕事の関係で海外に暮らした経験を持つが、当時、Iさんの母親は、国際電話で自分の親と連絡を取り合っていたと話す。そして「今は便利で、外国に居る気がしないね」と日本に居る母親と話しているという。中高一貫校に通う高校生の息子が日本に居るMさんも、息子とはラインの電話で話せるし、息子は自分の両親と一緒に暮らしているので、親の状況もよくわかり、安心であるという。また、デュッセルドルフ・東京間には直行便があり、国内移動する感覚で日本とドイツを行き来することが可能であり、距離的にも近く感じると話す。田嶋は地理的には離れていても「情報やメディア」を介して、人びとは共有する空間を形成することを指摘し、それを「共住性」という言葉で表す（田嶋 2003: 74）。海外にいても同じ時間と空間を共有することができる。このように、自国に居る家族を身近に感じることができることは良い面があるといえる。しかし、身近に感じるがゆえに負の側面もある。母国に居る年老いた親を身近に感じ、親の介護ができず親や兄弟に申し訳なく感じたり、身近に感じるがゆえに親に心配をかけるからという理由で、ホスト国でいろいろな悩みや問題を抱えていても話さなかったりもする。

トランスナショナルな社会空間にあるエクスパトリエイト・コミュニティは、身近なようで遠くに居る親や兄弟との関係性にも影響を与えている。

本章ではデュッセルドルフに暮らす（暮らした）駐在員配偶者の日常生活実践を第2章のCohenのエクスパトリエイト概念に対する6つの問いをもとに、いくつかの項目に沿って記述してきた。駐在員配偶者の語りから、女性たちが駐在員配偶者に期待される規範と自分たちの思いの間で揺れ動くアンビバレントな気持ちや駐在生活に意味づ

けを行おうとする思いが浮き彫りになった。

次章では、今までの語りから見えてきたものを分析・考察する。

## 第5章 デュッセルドルフ日本人エクスパトリエイト・コミュニティの特徴

本章では第2章で提示したCohenの知見をもとにした6つの問いに対して、駐在員配偶者からのインタビュー・データ及び日本人関連機関への聞き取り調査などの実証データをもとに考察を行う。6つの問いは以下の通りである。

- (1) アンクレーブ化したエクスパトリエイト・コミュニティの閉鎖性、(2) エクスパトリエイト・コミュニティ内の結束と連帯、(3) エクスパトリエイト同士の軋轢や摩擦、(4) 同じエスニック集団の他のサブコミュニティとの乖離、(5) 妻の社会関係と夫の仕事の関係、(6) 深刻な適応—妻として・母として

### 5.1 アンクレーブ化したエクスパトリエイト・コミュニティの閉鎖性

ここではコミュニティの「閉鎖性」について検討する。コミュニティ全体とホスト社会とのつながりにおいては、経済的には日本人社会とホスト国の関係は安定した友好関係を提示し、日独文化交流においても「日本デー」のように日本文化を紹介するイベントや日本クラブ主催の現地の文化に触れる様々なプログラムが用意されている。日本人学校もドイツの現地校との交流プログラムを実施し、ホスト社会に対して開かれているように見える。しかし、プログラムは、日本人関連組織団体により組織され、経済友好関係や文化交流促進という目的のもとに施行され、実際に個々人が主体性を持ち、ホスト社会とつながっているのかが見えてこない。

ホスト国との個人的なつながりを見るにあたり、駐在員配偶者からのインタビュー・データに注目する。データから日本人エクスパトリエイト・コミュニティ内において現地社会と交わず、乖離して暮らす女性たちも居ることが浮き彫りになった。日本人コミュニティ内で、日本人学校に子どもを通わせ、自身も子どもも日本人主催の日本人向け習い事をして、日本人向けのドイツ語学校に通い、日本食材店で買い物をし、病気の時にかかる医師も日本人である。このような生活をルーティン化して送る女性たちは、日本語で日本人のみのつながりで生活を送ることが可能であると語る。筆者自身は、ホスト社会で暮らすのであれば、現地との接点は不可欠という考えを抱いていたので、正直なところ、女性たちの暮らしぶりに大変驚いた。

しかし、駐在員配偶者たちのインタビューから、現地社会とのつながりを求める女性たちも居ることが提示された。女性たちは、日本人コミュニティ内における他の駐在員配偶者たちとのネットワークにとどまるだけでなく、現地の市民大学でドイツ語を学んだり、現地社会と接点を求め、ボランティア団体の手伝いをしたり、現地の人びとと積極的に交流したり、現地校に子どもを通わせたりする。もちろん、そのような女性たちも、日本人の友だちや日本人社会との接点を切ってしまうのではなく、日本人コミュニティを基盤にすることで安心感を抱き、日本人の友だちと打ち解けて話をするにより、ほっとしたり、心のよりどころを感じていることも語りからうかがえる。

Cohenによるとエクスパトリエイト・コミュニティは、アンクレーブ化し、閉鎖的であるとされ、個人レベルにおけるホスト社会との接点が明示されておらず、ホスト国に

対してオープンな気持ちを抱き、現地社会に溶け込んで暮らしたいと願う人びとの存在を見過ごしてしまう。

## 5.2 エクスパトリエイト・コミュニティ内の結束と連帯

日本人コミュニティ全体の紐帯に関しては、いくつかの面で紐帯の弱体化がみられた。コミュニティの中核機関でもある日本人学校、日本クラブに関しては、それぞれ設立当時から運営の維持において、民間企業が深く関わっている。しかし、聞き取り調査から、日本人学校においては、教師や親の教育に関する熱意や気迫の薄れ、日本クラブにおいては、活動におけるボランティアやプログラム参加者の減少もみられた。これらは、コミュニティの紐帯の弱体化の表れともとれる。また、エクスパトリエイト・コミュニティ内のメンバーは変わっても、組織機関の大きな枠組みは維持され、しっかり運営されているように見えるが、エクスパトリエイトを受け入れる組織側とエクスパトリエイトの相互のコミュニケーションがうまく機能していない側面も浮き彫りになった。一例として日本人学校の学校祭においても、保護者側は学校祭でのボランティア活動、役員選出をかなり負担に感じている様子が語りから見られたが、学校側は、もっと親に協力してほしいと願い、親の関わり方の意識の低下を懸念する。相互の意志の疎通がうまくいかないのは教師や親もメンバーが常に数年で交替することも影響しているのかもしれない。

生活の中での悩み事や問題に関しては、駐在員配偶者たちは、自分の周りの仲間たちに相談する。コミュニティ内において、駐在員配偶者たちの結束は、同時期に渡独した同士、子どもを通して知り合った仲間同士に強く、特に乳幼児を抱える仲間同士においては生活の中での支え合いが大きな意味を持つ。新しい環境の中で、生活への不安や情報を得る為、必然的に友だちとつながっていなければいけないと感じる女性も居る。他の駐在員配偶者とのネットワークは、子どもや自身の習い事などを通して広がっていくが、仲の良い友だちには、自分と価値観が同じ駐在員配偶者を慎重に選ぶ姿勢がみられた。また、せっかく仲良くなった友だちが帰国してしまうと寂しい気持ちを抱いたり、虚脱感があるが、また新たに仲の良い友だちを一生懸命探そうという積極的な姿勢は見られない。結束の在り方も、ある程度、英語や現地の言葉ができたり、滞在期間が長くなると他の駐在員配偶者と緩くつながる様子もうかがえた。

## 5.3 エクスパトリエイト同士の軋轢や摩擦

エクスパトリエイト同士の関係性における軋轢や摩擦が、Cohenにより指摘されているが、ここでは「駐在員配偶者」同士の関係性に着眼する。女性たちは、他の駐在員配偶者たちとつながる中で、経済的格差を感じたり、生活感覚に違和感を覚えたりする場合もある。それは女性たちが「駐在員配偶者」に期待される規範を意識して生活していることを表す。女性たちの語りから「立派」「いい人」「裕福」「上品でおしゃれ」「社交的」「いい会社」「高学歴」「落ち着いた家庭」「きちっとしている」「教育熱心」など様々な言葉が飛び交う。女性たちは「駐在員配偶者」に対して自分なりのイメージを抱き、

「駐在員配偶者」に期待され、求められている規範に自分も添うように日常生活実践を行うことを試みる。そしてその期待に同一化しようとするがゆえに、様々な思いを抱くことになる。独身時代に現地社員として働いていた経験のあるFさんも駐在員配偶者になり、「駐在員配偶者」に期待される規範に自分を同化させようと高価な食器を買ってみたり、高い料理教室にも通ってみたりするが、多少、感化されることはあっても、どうもしっくりせず、違和感を覚える。そこで、他の駐在員配偶者たちを「奥様方」というような言葉で呼び、他の駐在員配偶者たちと距離化を図ることにより、自分を差異化し、正当化させようと試みる。「庶民」「あちら」という言葉も同様である。しかし、それは逆に「駐在員配偶者」に期待される規範を維持しようとする姿勢を示唆する。

「駐在員配偶者」に期待される規範は教育面においても表れる。日本人駐在員が多く暮らすデュッセルドルフにおいて、日本人学校の事務局長は日本人学校の生徒たちの多くが「大企業の駐在員の子弟」で「トップレベルの成績」を保持すると述べる（第3章3.4.2参照）。これらの言葉から、駐在員配偶者のみならず、子どもにまで同質性が期待され、その同一性の維持に向け、親も子どもも奮闘する様子がうかがえる。

Jさんのように駐在員生活が長くなり、生活も安定してくると「駐在員配偶者」以外に現地に長い日本人や国際結婚した日本人などにつながるようになる。しかし、「駐在員の奥さんって思っていないんです」という語りから、Jさんも「駐在員配偶者」に求められる規範への同一化の試みから解放されているようにみえるが、規範自体は、維持されていることが分かる。

乳がんを患ったCさんは、どうであろうか。Cさんは、デュッセルドルフという場所に帰属感を持ち、本当に気持ちがつながり、「心地よい」友だちとだけ会い、静かに自然体で生活を送る。しかし、「鈍感でいるほうがいいんです。そういうテクニックが必要なんです」という語りから、「駐在員配偶者」からの距離化を試みる様子がみえ、駐在員配偶者に何が期待されるかという規範の維持が行われている。

#### 5.4 同じエスニック集団の他のサブコミュニティとの乖離

駐在員配偶者と同じエスニック集団のつながりに関しては、聞き取り調査からは、駐在員配偶者たちが、現地に長い日本人と接点があることが提示された。ドイツ人と結婚して現地に住むZさんや日本人親子の活動に関わるPさんは、日本人駐在員配偶者から、いろいろな相談を受ける。また、現地に長いAさんも同じ子育て仲間として駐在員配偶者たちと支え合いながらつながる。インタビューした駐在員配偶者たちの中にも、現地に長い日本人や永住者などとボランティア活動や、同じ大学の同窓会などを通してつながるケースもある。しかし、インタビュー・データから駐在員配偶者の多くは、駐在員配偶者同士でつながり、現地に暮らす他の日本人サブコミュニティとの接点は見られなかった。筆者の場合は、子どもが現地校に行った為、毎週土曜日に日本語補習校に通い、そこで現地永住の日本人保護者たちとのつながりが広がっていった。子どもが日本人学校に通う場合は、日本人の他のサブコミュニティと接点を持つことは難しいと考える。

駐在員配偶者と同じエスニック集団との個人的なつながりが少ないことは、日本人関連諸団体や現地に長い日本人や永住日本人が、駐在員家族を「ホスト社会との接点が少なく閉鎖的である」とステレオタイプ的に捉えていることからもうかがえる。

## 5.5 妻の社会関係と夫の仕事の関係

ここでは、駐在員配偶者たちが他の駐在員配偶者たちとつながる中で、夫の仕事関係が妻の社会関係にどのように影響を与えているのかを検討する。

駐在員配偶者は、子どもや習い事などを介して、他の駐在員配偶者とのネットワークを広げていく。JDさんの「子どもの数×知り合い」という言葉、また、「子どもの付き合いイコール親の付き合い」という言葉から、ネットワークの広がりが見える。

最初は緊張したり、駐在員配偶者たちの輪の中に入っていくことに躊躇もあるが、実際に話してみると思ったより「気さくな人」だったり、自分と同じ価値観を持っていたりすることがわかりほっとする。JD、JE、JFさんのように気の合う友だちが見つかり、グループで固い結束を結ぶこともある。

しかし、エクスパトリエイト・コミュニティ内における駐在員配偶者たちの社会関係においては、常に夫の仕事関係が見え隠れする。

日本人社会では、「無色透明」で、あまり目立たないように、そして他の駐在員配偶者たちとわだかまりなく関係を維持することが大切と考えるのは、夫の仕事上の立場を考慮してのことであろう。Cohenの「妻の言動が、夫の仕事での成功に影響する」という知見は、まさにデュッセルドルフの日本人社会に当てはまると言える。日本人社会が「狭い社会」であり、うわさがすぐに広まるという懸念、自分の言動が夫の社内の立場や仕事に支障があったら大変だという気持ちが見える。

そして駐在員配偶者間で波風の立たない関係を維持する為に、駐在員配偶者同士の付き合いにおける生活ルールにも違和感を感じつつも合わせていこうとする。お互いを「～ちゃん」づけで呼ぶこともその一つのルールである。また、習い事などに誘われて行かないのはどうかと思い、日本人小学校に通う子どものお迎えはぎりぎりに行き、他の駐在員配偶者との関係を最小化しようと試みる。

夫が社内が高いポジションにいる妻の場合は、自分が羽目を外した行動をしないようにしたり、若年化した部下の配偶者たちの言動にも気を使う（Mさん）。Mさんは、夫の部下の若い駐在員配偶者たちに対し、「海外生活をちょっと勘違いしてしまっている」「（日本への直行便もあり、精神的に）日本との距離も近く、海外にいても日本を感じることが多いので、何でもできるような気がしちゃっている」と話し、若い世代の海外生活への危機感の低さや意識の変化を感じている。デュッセルドルフの駐在生活が2回目でデュッセルドルフ生活が8年目のCさん（50代）も、Mさんと同様に若い世代の駐在員配偶者に対して同様の気持ちを抱く。

C:若い人の悪口になってしまうんですけど、駐在員の妻として来て、前回(1997-2004)の時は(主人の会社の)上司の奥さんから、まず第一にご主人を支えること。そ

して緊張感を持って過ごすことを言われました。上司にご挨拶したり。でもここ（デュッセルドルフ）に居ると便利だし、お友だちとランチ、旅行も行ける。ご主人に子どもを預かってもらって。独身と同じことができる。そうするとなんかだんだん感覚が勘違いしてきてしまう。あまりに便利で、日本と同じような生活ができるんで。自分たちだけで生活できるって勘違いしてしまっていますね。

そう語るCさんは最後に「そんなことを考えること自体、自分も年取ったんですよ」と笑って話す。駐在員配偶者においては、以前から、上司と部下の配偶者においては立場上や世代間の価値感の相違はあったことは想定できるが、日本を身近に感じるエクスパトリエイト・コミュニティでは今までとはまた違う世代間の相違を生み出している。そのような状況の中で、夫が上司の妻は、夫が仕事をしやすいように部下の配偶者の言動にも気を配る。Lさんも、夫の会社の配偶者の集まりでもある「フラウ会」を「円滑なコミュニケーション」の為にも必要とみなす（Lさん）。

## 5.6 深刻な適応—妻として・母として

ホスト国においては基本的に海外駐在員配偶者は仕事を持たないこともあり、はっきりした性別役割分業がみられ、家族における妻・母役割が強化される傾向がある。もちろん、妻が働いていないのは、夫の会社の方針やビザや言葉の問題もあり、働きたくても働けないという現状がある（第3章3.5.2.3参照）が、仕事の有無に関しては、駐在員配偶者は個々によって受け止め方は様々で、中には働くことははじめから眼中にない女性たちも居る。また、インタビューした駐在員配偶者の中に夫の海外赴任が決まった時に「どうしても仕事をやめたくない」という理由で帯同を躊躇した配偶者は皆無であり、むしろ「嬉しい」「良いチャンス」と感じる女性が少なくない。日本では、一生懸命に時間をやりくりして仕事と家事・育児と奮闘していた女性たちは、現地では、むしろ、Kさんのように働くことができない環境を良しとして、ドイツに居る間を「休憩」期間と割り切る女性や、不満を抱えながらも半ば義務として家事・育児をこなす女性も居る。経済的自立を目指す配偶者たちは、悶々とした気持ちで生活する。

しかし、筆者がインタビューした多くの駐在員配偶者たちは、自分は仕事をしていないのだから、自分が家事や子育てをしっかりとやらなければという思いに駆り立てられる。そこには、言葉も職場環境も違う中で、現地の社員とうまく仕事を回していかなければならないと苦戦している夫の姿もみえる。英語での仕事に苦勞し、英会話学校に通ったり、独学で英語を勉強する夫も居る。ドイツ人は、定時に仕事を終えて帰るのに、日本人社員は残業をし、深夜に帰ることも珍しくない（Iさん）。多忙期には週末にも仕事をしたり、出張も多い。Gさんも「私よりもたぶん主人の方が大変だと思う」と言い、夫は週末は疲れていて、「日曜は家でごろごろしています」と話す。仕事をする夫、仕事をもたない妻という構図の中で女性たちは、仕事で忙しい夫を気遣い、心配し、子育てや家事の協力を頼むことも控え気味である。夫の方も日本では共働きだったので、家事・育児面でいろいろと協力していたのが、海外では、仕事をしていない妻へのサポー

トはなくなる (K さん、I さん)。I さんは、そのような夫の態度に対して「今は、仕事をしていないし、時間があるので、仕方がない」と割り切っている。駐在員配偶者は、妻として夫を気遣い、母として、子どもの習い事の送迎、学校の友だち関係、受験の心配などを抱え、忙しく毎日を送る。

異国において家族がバラバラにならないように家族をつなぎとめ、まとめていかなければならないという自覚を持ちながら暮らし、自分は家族をつなげる接着剤 (M さん) であったり、夫が海外赴任になっても家族はできるだけ一緒に居るように心がける (D さん)。また、子どもの教育に関しても熱心である。子どもたちに対しては「きっかけを与えることが大事 (F さん)」と水泳、ピアノ、公文など多くの習い事をさせて、子どもたちの送迎に奮闘する。また、デュッセルドルフ日本人学校に通う児童に対しては、学力の高さや学習態度も含め、母親たちは、皆、口をそろえて「いい子ばかり」と話す。そして、帰国後の学校のことを心配し、スムーズに日本の教育に移行できるように母としての役割にも励む。それまではドイツの現地校やインターナショナルスクールに入っていた子どもを帰国が近くなるとデュッセルドルフの日本人学校に移したり、受験に少しでも有利な帰国卒を使う為に、夫が帰国しても母子で現地に残るなど、様々な教育戦略がみられる。

妻・母役割を頑張るあまりに自分が甘えられる存在がいないと嘆く駐在員配偶者もいる。3 人の子どもの持つ D さんは、「自分がすごい頑張っているというか、子どもに言われたことを叶えるとか、主人に要求されていることを叶えるみたいにしてやっているのに甘えられる存在がいなくて、駐在していると」としみじみ語る。

本章ではデュッセルドルフの日本人エキスパトリエイト・コミュニティの特徴を実証的な観点から提示したが、終章の結論においては、トランスナショナルな社会空間に存在する日本人エキスパトリエイト・コミュニティの特徴を提示することを試みる。



## 第6章 結論 トランスナショナルな社会空間の日本人エクスパトリエイト・コミュニティの特徴

今までのエクスパトリエイト・コミュニティ研究においては、仕事を目的として国境を越えて移動する駐在員に焦点が当てられ、夫に帯同する駐在員配偶者たちの生活世界は不可視化されてきた。本研究では、駐在員配偶者の日常生活実践に焦点を当て、語りを分析、考察することにより、駐在員配偶者の視点からエクスパトリエイト・コミュニティの特徴を描くことを試みた。終章では今までのエクスパトリエイト・コミュニティ概念と実証データのつながりや相違点、課題を明らかにする。

### 6.1 同質性を生み出す社会構造

駐在員配偶者たちのインタビュー・データから、エクスパトリエイト・コミュニティ内では、女性たちが「駐在員配偶者」に期待される規範を常に意識して暮らすことが浮き彫りになった。駐在員配偶者たちは、その規範から零れ落ちないように日常生活実践を行う。しかし、その中で違和感を覚えたり、ストレスを感じ、他の駐在員配偶者たちから距離を置いたり、差異化を試みたり、自分を例外化していく。

ここで一つの疑問が生じる。「駐在員配偶者」に求められる規範とは何かということである。女性たちの語りに繰り返される「駐在員配偶者」像を表す言葉は、女性たちが他の駐在員配偶者たちとつながる中で、作り上げられていく「駐在員配偶者」言説によるものとする。「駐在員配偶者」ゆえに「こうでなければならない」「こうしなければいけない」という言説に翻弄されながら暮らす姿がみえる。

「駐在員配偶者」に期待される規範は、同質な駐在員配偶者の生活世界を生み出し、「駐在員配偶者」言説が維持されていくという構図が提示された。

### 6.2 駐在員配偶者のニーズに合ったサポートの必要性

インタビュー・データから、駐在員配偶者たちには、現地社会に溶け込もうとする女性たちが居る一方、整った日本人向け生活インフラ構造の中で暮らす女性たちの姿が提示された。

多くの駐在員配偶者たちは、言葉の問題や新しい環境での生活不安から日本人社会との接点を求める。そのような中で、日本語での情報が安易に入手できることや日本語での習い事やイベントが数多く用意されていることから、考える間もなく気がつくといつの間にか日本人コミュニティの中にどっぷりつかるといふ構図がある。自分でじっくり考えて選択する間もなく日本人社会の渦の中に巻き込まれていく。

インタビュー・データから日本人エクスパトリエイト・コミュニティにおいて、海外に居ることを意識せず、日本に居るような感覚で暮らす女性たちの姿も見えた。しかし、このような日本人にとって利便性の高い日本人エクスパトリエイト・コミュニティは、ますます現地社会からの孤立化を招き、現地社会に溶け込みたいと願う人びとの機会を奪ってしまうのではないかと懸念する。安易に日本語で日本と同じような生活環境を整

えることが、果たして、本当に女性たちの望む現地での生活サポートになるのであろうか。もちろん、日本人コミュニティは、駐在員配偶者にとり安心や安全感、心の安らぎをもたらす役目も持つが、今一度、駐在員配偶者の様々なニーズに留意し、それに合ったサポートの在り方を検討する必要があるのではないだろうか。

### 6.3 双国のかみ合わない制度や枠組み

自国と海外との制度や枠組みの違いが存在する場合、帰国後に子どもの教育や女性の再雇用面などにおいて難しさを創出する。学齢期の子どもが、現地のインターナショナルスクールや現地校に行った場合、自国との教育制度の違いにより、学校受験や受け入れがうまくいかないこともある。ドイツの現地校に息子を入れたJAさんも最終的には息子の帰国後の学校受け入れのことを考慮して、現地の小学校からデュッセルドルフの日本人学校に小学校4年生で移す。これは日本独自の帰国する生徒の受け入体制や現地の学校との教育システムの相違の為である。

このようにグローバル化が進んでいるといえども教育システムも含めいくつかの面においては「国」単位で施行され、国境を超える人びとの生活にも支障をきたすことがある。石井は、貿易面や金融面において「国」による承認や保証が必要とされることや、国家だけが人権を守る現状に言及する（石井 2017: 4-5）。

また、駐在員配偶者の就労に関しては、企業によっては妻が就労することを禁じるケース、禁じることはないがあまり奨励しないケース、また、奨励するケース<sup>92</sup>など様々なケースがみられたが、言葉の問題や数年単位の限られた滞在ということもあり、実際に就労することが難しいという現状がある。駐在員配偶者たちが、駐在生活を帰国後の自分の仕事や生活にどのようにつなげていくのか思案して暮らす様子もデータからうかがえた。帰国した女性たちは、再雇用希望の場合でも海外では仕事が中断され、継続された職業経験がない為、帰国後の職場復帰や再就職の難しさに直面する。そして社会との接点や社会的に認知されないという意識を持つに至ることも提示された。

### 6.4 変容する家族との関係性

グローバル化が進み、トランスナショナルな社会空間に存在するエクスパトリエイト・コミュニティは、今までの概念では言及されなかった新たな課題も提示する。インタビュー・データから、異国にいても自国に居る親や兄弟を身近に感じ、親の介護や世話ができず、兄弟に対して申し訳ない気持ちを抱くことがうかがえる。そこには、自国に居る家族からの制約や拘束がある。

また、トランスナショナルな社会空間は、家族の分断化を生じさせる。今回のインタビューでは、基本的には家族のポリシーとして家族一緒という考えを持つケースが多く

---

<sup>92</sup> Iさんは、夫の海外赴任に伴い渡独するまで17年間日本の商社で働いた経験があり、デュッセルドルフにもIさんの会社の支社があるということで、就労希望を出したが、ドイツ語ができないと難しいと言われたと話す。

見られたが、実際に学校の関係で学齢期の子どもを日本に残したり、高校受験を考え、母子だけで先行帰国したりするケースもみられ、二つ以上の国にまたがり暮らす家族も提示された。

さらにデュッセルドルフでは近年、30代40代の単身の駐在員の増加がみられ、これは、妻が仕事の為、夫の海外赴任に帯同せず、日本でそのまま仕事を続けるということも背景にあるのかもしれない。この点に関しては、さらなる調査が必要になるが、グローバル化とともに時間・空間の短縮がおこり、インターネットの発達により、国内感覚で暮らすことができるようになったことも反映している。

このように家族に対する制約や家族の分断化などの変容もエクスパトリエイト・コミュニティの特徴として捉えられる。

## 6.5 エクスパトリエイト・コミュニティの再考

本論文は、トランスナショナルな社会空間に形成される日本人エクスパトリエイト・コミュニティの特徴を明らかにするのにあたり、海外駐在員配偶者の日常生活実践に焦点を当て、日本人エクスパトリエイト・コミュニティの現状をミクロ的に捉えることを試みた。今まで日本人エクスパトリエイト・コミュニティは、「整った日本人向け生活インフラ構造」、「日本人同士が堅固に結びつく均質なコミュニティ」、「経済面、文化交流面における日独友好関係」が前面に押し出されてきた。コミュニティは、一つのまとまった共同体として括られ、個々人のミクロな生活世界にあまり関心が向けられてこなかった。

また、日本人エクスパトリエイト・コミュニティは、構成メンバーが替わっても日本人関連諸機関や受け入れ体制は存続し維持される為、変容をせず固定化されたものとして捉えられ、日本人コミュニティで暮らす人びとの個々の生活意識、価値観、ライフスタイルも見過ごされてきた。女性たちは、駐在生活の中で様々な気持ちを抱きながら暮らす。ドイツに長く暮らすAさんの語りから「主婦生活を満喫する」とことと「経済的自立をしたいが仕事ができず悶々と暮らす」という二つの駐在員配偶者のタイプが提示されたが、そのように簡単に分けることができないことも明らかになった。女性たちは両義性を抱えながら、複雑な思いで生活を送る。主婦生活を満喫する中にも妻として母として、そこには与えられた環境の中でやらなければならないというあきらめの気持ちも見え隠れし、手放して駐在生活を楽しんでいとは言えない。また、仕事ができないことに対しても気持ちを切り替えたり、新たな挑戦をすることで自己への意味づけを試みたりもする。

さらに駐在員配偶者の生活に対するサポートの在り方や自国と海外とのかみ合わない制度などコミュニティの抱える課題も提示された。もちろん、これらの課題は、政治、社会、経済というマクロな社会構造と深く結びつき、個々人が単独で対処していくことは難しい。個々人の力を越えた国や政府、組織や機関からのサポートが不可欠である。しかし、少なくとも駐在員配偶者たちが提言しなければ、問題はいつまでも解決されない。エクスパトリエイト・コミュニティで暮らす駐在員配偶者たちが、根強く残る「駐

在員配偶者」言説から解放され、自己と真摯に向き合うことで、エクスパトリエイト・コミュニティは、また違った空間になる。

トランスナショナルな社会空間にあるエクスパトリエイト・コミュニティは、駐在員配偶者たちを自国や現地のコミュニティや、様々な集団や人びとと多様な形で横断的につなげる空間でもある。女性たちに様々なつながりや機会をもたらす可能性あふれる社会空間であると考ええる。

## 参考文献

(アルファベット順)

- 有川陽, 1996, 「ドイツにおける日本企業」大西健夫編『ドイツの経済』早稲田大学出版部, 195-206.
- Befu, Harumi, 2001, “The Global Context of Japan outside Japan,” Harumi Befu and Sylvie Guichard-Anguis eds., *Globalizing Japan: Ethnography of the Japanese presence in Asia, Europe, and America*, London and New York: Routledge, 3-22.
- ベン-アリ, イヤル, 2003, 「シンガポールの日本人——海外移住者のコミュニティの動態」岩崎信彦・ケリ・ピーチ・宮島喬・ロジャー・グッドマン・油井清光編『海外における日本人、日本のなかの外国人——グローバルな移民流動とエスノスケープ』昭和堂, 186-203.
- Cohen, E., 1977, “Expatriat Communities,” *Current Sociology*, 24(3):5-133.
- ドイツ連邦共和国大使館・総領事館  
<https://japan.diplo.de/ja-ja/themen/willkommen/nordrhein-westfalen/921450>  
(2018年8月15日閲覧)
- <https://japan.diplo.de/blob/903852/5da5fa9b8d59dea280ca4cc0ce670ea8/visajapaner-data.pdf> (2018年12月14日閲覧)
- デュッセルドルフ日本語補習校 <http://jisd.de/hosyuko/shokai.html> (2018年5月25日閲覧)
- デュッセルドルフ日本人学校, 1996, 『デュッセルドルフ日本人学校——創立 25 周年記念誌』.
- , 2016, 『デュッセルドルフ日本人学校要覧』.
- , 2016, [http://jisd.de/about\\_jisd/outline/image/2016teikan.pdf](http://jisd.de/about_jisd/outline/image/2016teikan.pdf) 2018年8月5日閲覧
- 父母会, 2018, <http://jisd.de/fubokai/2018soshikizu.pdf> (2018年9月25日閲覧)
- 編入学 [http://jisd.de/hennyugaku/nendo\\_tochu\\_hennyugaku.html](http://jisd.de/hennyugaku/nendo_tochu_hennyugaku.html) (2018年8月5日閲覧)
- デュッセルドルフ日本クラブ, 1990, 『ラインの流れ——社会・歴史編』.
- , 1996, 『デュッセルドルフに暮らす』日本貿易振興会 (ジェトロ)
- 『日本人会報』
- 会則  
[http://www.jc-duesseldorf.de/images/pdf/administration/2016\\_kaisoku.pdf](http://www.jc-duesseldorf.de/images/pdf/administration/2016_kaisoku.pdf) (2017年9月25日閲覧)
- 運営規則  
[http://www.jcduesseldorf.de/images/pdf/administration/2017\\_uneikisoku.pdf](http://www.jcduesseldorf.de/images/pdf/administration/2017_uneikisoku.pdf) (2017年9月25日閲覧)
- 創立 50 周年記念誌編集委員会, 2014, 『ラインの流れ——デュッセルドルフ日本クラブ創立 50 周年記念誌』デュッセルドルフ日本クラブ.
- デュッセルドルフ日本商工会議所, 2011, 『日独交流 150 周年記念経済展開催報告書』.
- <https://www.jihk.de/ja/page/180> (2018年8月15日閲覧)

恵光日本文化センター

<http://www.eko-haus.de/ja/about-us.html> (2018年8月15日閲覧)

Faist, Thomas, 2004, "The Border-Crossing Expansion of Social Space: Concepts, Questions and Topics," Thomas Faist and Euep Oezveren eds, *Transnational Social Spaces: Agents, Networks and Institutions*, England: Ashgate Publishing Company, 1-34.

Fisch, Mieko, 2004, 『「あつ、そう」ドイツ・暮らしの説明書』 ach so Verlag.

藤田順也・竹内竜介・平野恭平, 2009, 「戦後日本企業の海外進出の変遷——海外従業員ランキングの検討——」『国民経済雑誌』200(6): 57-98.

ヒューマネット <https://humanet1986.jimdo.com/> (2018年8月15日閲覧)

外務省 ドイツ連邦共和国 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/germany/data.html#01>  
(2018年8月15日閲覧)

外務省領事局政策課「海外在留邦人数調査統計2013年要約版」2012年10月1日現在

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000017471.pdf> (2018年8月5日閲覧)

——「海外在留邦人数調査統計2017年要約版」2016年10月1日現在

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000293757.pdf> (2018年8月10日閲覧)

——「海外在留邦人数調査統計2018年要約版」2017年10月1日現在

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000368753.pdf> (2018年8月15日閲覧)

Goodman, Roger, Ceri Peach, Ayumi Takenaka and Paul White, 2003, "The experience of Japan's new migrants and overseas communities in anthropological, geographical, historical and sociological perspective", Goodman, Roger, Ceri Peach, Ayumi Takenaka and Paul White eds, *Global Japan: The experience of Japan's new immigrant and overseas communities*, London and New York: Routledge Curzon, 1-20.

グレーベ, ギュンター, 「デュッセルドルフの日本人コミュニティ——エスノスケープのなかに生きる」2003, 岩崎信彦・ケリ・ピーチ・宮島喬・ロジャー・グッドマン・油井清光編『海外における日本人、日本のなかの外国人——グローバルな移民流動とエスノスケープ』昭和堂, 152-69.

服部盛栄, 1990, 「去り難き思ひ」『ラインの流れ——社会・歴史編』デュッセルドルフ日本クラブ, 40-2.

Harvey, David, 1989, *The Condition of Postmodernity*, Oxford: Basil Blackwell. (=1999, 吉原直樹監訳『ポストモダニティの条件』青木書店.)

日高克平, 2012, 「経営学から見た多国籍企業」丸山恵也編『現代日本の多国籍企業』新日本出版社, 235-49.

ホワイト, ポール, 2003, 「ロンドンにおける日本人——コミュニティ形成過程」岩崎信彦・ケリ・ピーチ・宮島喬・ロジャー・グッドマン・油井清光編『海外における日本人、日本のなかの外国人——グローバルな移民流動とエスノスケープ』昭和堂, 132-51.

IB (International Baccalaureete)

国際バカロレア [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/ib/1307998.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1307998.htm) (2018年8月25

日閲覧)

池本清, 1981, 「日本企業の多国籍化と経営」池本清・上野明・安室憲一著

『日本企業の多国籍的展開』有斐閣, 42- 87.

インターナショナルモビーレ幼稚園

<https://www.kita-mobile.de/ja/about-mobile.html> (2018年8月15日閲覧)

インターナショナルスクール デュッセルドルフ, 2017, 外務相諸外国・地域の学校情報ホームページ, (2018年6月10日閲覧)

[https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world\\_school/05europe/sch5300000301.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/05europe/sch5300000301.html)

インターナショナルスクール オンザライン, 2018, 外務相諸外国・地域の学校情報ホームページ, (2018年6月10日閲覧)

[https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world\\_school/05euroe/sch5300000601.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/05euroe/sch5300000601.html)

石井香世子, 2017, 「国際社会学への案内——国境を超える社会現象をとらえる視点」『国際社会学入門』ナカニシヤ出版, 1-9.

岩崎信彦, 2003, 「グローバルな移民流動と日本」岩崎信彦・ケリ・ピーチ・宮島喬・ロジャー・グッドマン・油井清光編『海外における日本人、日本のなかの外国人——グローバルな移民流動とエスノスケープ』昭和堂, 2-9.

———・油井清光, 2003, 「移民流動の分析枠組みとエスノスケープ」『海外における日本人、日本のなかの外国人——グローバルな移民流動とエスノスケープ』昭和堂, 458-63.

伊豫谷登士翁, 2001, 『グローバリゼーションと移民』有信堂高文社.

海外子女教育振興財団 <https://www.joes.or.jp/kojin/sodan> (2018年12月13日閲覧)

梶田孝道編, 2005, 『新・国際社会学』名古屋大学出版会.

亀井正義, 1983, 『多国籍企業論』ミネルヴァ書房.

北林陽児, 2006, 「日本企業の海外進出と日本人社会——デュッセルドルフのケーススタディ——」『資本と地域』3: 23-39.

北沢洋子, 1982, 『日本企業の海外進出』日本評論社.

小井土彰宏, 2005a, 「グローバル化と越境的社会空間の編成」『社会学評論』56(2): 381-98.  
———, 2005b, 「国際移民の社会学」梶田孝道編『新・国際社会学』名古屋大学出版会, 2-23.

———, 2010, 『社会学事典』丸善株式会社.

小内透, 2007, 「トランスナショナルな生活世界と新たな視点」『調査と社会理論』研究報告書, 24: 1-11.

Landeshauptstadt Duesseldorf, 2011, “Düsseldorf – Japan Eine Beziehungsgeschichte” 『デュッセルドルフと日本友好関係の歴史』.

[https://www.duesseldorf.de/fileadmin/Amt80/wirtschaftsfoerderung/pdf/japan\\_duesseldorf\\_ausstellung\\_d\\_ja.pdf](https://www.duesseldorf.de/fileadmin/Amt80/wirtschaftsfoerderung/pdf/japan_duesseldorf_ausstellung_d_ja.pdf) (2018年12月10日閲覧)

———, 2017

<https://www.duesseldorf.de/statistik-und-wahlen/statistik-und-stadtforschung/duesseldorf-in-zahlen.html#c82022> (2018年6月10日閲覧)

———, 2017 (デュッセルドルフ市人口)

- [https://www.duesseldorf.de/fileadmin/Amt12/statistik/stadtforschung/download/stadtbezirke/Duesseldorf\\_kompakt.pdf](https://www.duesseldorf.de/fileadmin/Amt12/statistik/stadtforschung/download/stadtbezirke/Duesseldorf_kompakt.pdf) (2018年8月15日閲覧)
- , 2017 (デュッセルドルフ市在留邦人数)
- <https://www.duesseldorf.de/fileadmin/Amt12/statistik/stadtforschung/download/stadtbezirke/Stadtbezirk04.pdf> (2018年8月15日閲覧)
- , 2018 (デュッセルドルフ市10区)
- <https://www.duesseldorf.de/bv.html> (2018年12月11日閲覧)
- 町村隆志, 1994, 『「世界都市」東京の構造転換——都市リストラクチュアリングの社会学』東京大学出版会.
- , 1999, 『越境者たちのロスアンジェルス』平凡社.
- , 2003, 「ロスアンジェルスにおける駐在員コミュニティの歴史的経験」岩崎信彦・C・ピーチ・宮島喬・R・グッドマン・油井清光編『海外における日本人、日本の中の外国人——グローバルな移民流動とエスノスケープ』昭和堂, 170-85.
- Machimura, Takashi, 2003, “Living in a transnational community within a multi-ethnic city: Making a localized ‘Japan’ in Los Angeles,” Goodman, Roger, Ceri Peach, Ayumi Takenaka and Paul White eds, *Global Japan: The experience of Japan’s new immigrant and overseas communities*, London and New York: Routledge Curzon, 147- 56.
- 丸山恵也, 2012, 「序章 世界経済危機と多国籍企業」丸山恵也編『現代日本の多国籍企業』新日本出版社, 5-31.
- 三田千代子, 2011, 「ホスト社会とホームランドを生きる外国人就労者——アンケート調査を中心に」『グローバル化の中で生きるとは——日系ブラジル人のトランスナショナルな暮らし——』上智大学, 293-321.
- 三浦優子, 2017, 「『海外駐在員配偶者女性』 カテゴリーと自己」『語りの地平——ライフストーリー研究——』2: 45-68.
- 宮島喬, 2015, 「国際社会学に向けて——現代社会へのトランスナショナルな接近」宮島喬・佐藤成基・小ヶ谷千穂編『国際社会学』有斐閣, 1-12.
- 水上徹男, 1995, 「ソジョナー——国境を超えた人の移動とセツルメント形態——」『年報社会学論集』8: 131-42.
- , 1996, 『異文化社会適応の理論——グローバル・マイグレーション時代に向けて——』ハーベスト社.
- , 1997, 「同化・融合理論をこえて——多様性に向けて——」奥田道大編『都市エスニシティの社会学——民族/文化/共生の意味を問う——』205-25.
- Mizukami, Tetsuo, 2007, *The Sojourner Community: Japanese Migration and Residency in Australia*, Leiden/Boston: Brill.
- 水上徹男, 2008, 「グローバル都市国家とエキスパトリエイト・コミュニティ——日本からシンガポールへの人口移動を事例に——」『国際的な人の移動と文化変容』ハーベスト社, 80-98.
- , 2018a, 「シンガポールの日本人社会——海外駐在家庭を中心としたエキスパ



- トリエイト・コミュニティ」『移動と移民——複数社会を結ぶ人びとの動態』昭和堂, 243-59.
- , 2018b, 「グローバル化とエスニシティ——社会や社会学理論にどのような変化をもたらしたか」奥村隆編『始まりの社会学——問いつづけるためのレッスン——』ミネルヴァ書房, 183-202.
- 永田貴聖, 2011, 『トランスナショナル・フィリピン人の民族誌』ナカニシヤ出版.
- 中川慎二, 2013, 「戦後ドイツの日本人コミュニティ——デュッセルドルフをめぐって「語られる物語」と「歴史的事実」——仮りそめが長く異国に住み在りて(中村2006)」『エクス 言語文化論集』第8号: 29-60.
- , 2014, 「1954年日本人銀行員の物語」『ラインの流れ——デュッセルドルフ日本クラブ創立50周年記念誌』デュッセルドルフ日本クラブ, 18.
- 中瀬寿一, 1979, 「戦後日本独占資本の海外進出と多国籍企業化の展開」藤井光男・中瀬寿一・丸山恵也・池田正孝編『日本多国籍企業の史的展開 下巻』大月書店, 1-38.
- NHK取材班, 1988, 「日本・西ドイツ——二つの戦後経済」日本放送出版協会. 日独経済シンポジウム  
<https://www2.nrwinvest.com/ja/servicenrwinvest/events/wirtschaftstag-japan/> (2018年8月15日閲覧)
- 日本人会報, 2000-2018, デュッセルドルフ日本クラブ
- 奥村昭博・加藤幹雄, 1989, 『多国籍企業と国際組織: グローバル機構と海外進出部隊』第一法規出版.
- 奥村皓一, 2006, 「日本企業のグローバル展開——歴史的発展とその特徴、米英企業との比較」奥村皓一・夏目啓二・上田慧編『テキスト多国籍企業論』ミネルヴァ書房, 154-201.
- 小野義盛, 1990, 「30年前のデュッセルドルフ」『ラインの流れ——社会・歴史編』デュッセルドルフ日本クラブ, 42-3.
- 大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館, 2016, 『ドイツ連邦共和国』.
- 大谷治, 1990, 「デュッセルドルフの思い出」『ラインの流れ——社会・歴史編』デュッセルドルフ日本クラブ, 43-4.
- 樗木航三郎, 1996, 「企業の構造改革と経営戦略」大西健夫編『ドイツの経済』早稲田大学出版部, 48-68.
- Park, Robert E., 1928, "Human Migration and the Marginal Man," *The American Journal of Sociology*, 18(6):881-93.
- ピーチ, ケリ, 2003, 「日本、ヨーロッパ、北アメリカにおける経済成長と移民政策に関する比較」岩崎信彦・C・ピーチ・宮島喬・R・グッドマン・油井清光編『海外における日本人、日本の中の外国人——グローバルな移民流動とエスノスケープ』昭和堂, 12-29.
- Portes, Alejandro, 2003, "Theoretical Convergencies and Empirical Evidence in the Study of Immigrant Transnationalism," *International Migration Review*, 37(3):874-92.

- Sacks, H., 1979, "Hotrodder : A Revolutionary Category," G. Psathas ed.,  
*Everyday Language: Studies in Ethnomethodology* (pp23-53) , Irvington Publisher. (= 1987, 山田富秋・好井裕明・山崎敬一編訳「ホットロッダー——革命的カテゴリー」『エスノメソドロジー——社会学的思考の解体』せりか書房,21-40.)
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房。  
 ———, 2012, 『ライフストーリー論』弘文堂.
- Sassen, Saskia, 2001, *The Global City: New York, London, Tokyo*, Princeton University Press.  
 (= 2018, 大井由紀・高橋華生子訳『グローバル・シティ——ニューヨーク・ロンドン・東京から世界を読む』筑摩書房.)
- Schutz, Alfred, 1964, *Collected Papers II, Studies in Social Theory: The Hague*. (=1980, 桜井厚訳『現象学的社会学の応用』御茶ノ水書房.)
- Simmel, Georg, 1908, *Soziologie: Untersuchungen ueber de Formen der Vergesellschaftung: Duncker & Humblot*. (= 2016, 居安正訳『社会学 (下) 社会化の諸形式についての研究』白水社.)
- Siu, Paul C. P., 1952, *The Sojourner, The American Journal of Sociology*, 58(1):34-44.
- STATISTISCHES JAHRBUCH 2010 <http://www.netdemeerbusch.de/> (2018年8月5日閲覧)
- 鈴木, テッサ・モーリス, 2000, 大川正彦訳『辺境から眺める——アイヌが経験する近代』三陽社.
- 田嶋淳子, 2003, 「トランスナショナル・ソーシャル・スペースの思想——中国系移住者の移動と定着のプロセスを中心に——」瀬戸一郎・広田康生・田嶋淳子編『都市の世界/コミュニティ/エスニシティ——ポストメトロポリス期の都市エスノグラフィ集成』明石書店, 47-79.
- 高木常治郎, 2006, 『デュッセルドルフの思い出』アトリエ ルーフアス.
- 高中公男, 1991, 『多国籍企業論——先進国からの開発戦略——』谷沢書房.
- 樽本英樹, 2016, 「国際社会学とは何か」西原和久・樽本英樹編『現代人の国際社会学・入門——トランスナショナリズムという視点』有斐閣, 2-18.
- 徳田剛, 2005, 「よそ者概念の問題機制——『専門家のまなざし』と『移民のまなざし』の比較から——」『ソシオロジ』49(3) : 3-18.
- 東洋経済新報社, 2017, 『海外進出企業総覧』.
- 内田吉英, 1993, 『多国籍企業論』御茶の水書房.
- Uriely, Natan, 1994, "Rhetorical Ethnicity of Permanent Sojourners: The Case of Israeli Immigrants in the Chicago Area," *International Sociology*, 9(4): 431-45.
- Vertovec, Steven, 2003, "Migration and Other Modes of Transnationalism: Towards Conceptual Cross-Fertilization," *International Migration Review*, 37(3): 641-65.
- , 2004, "Migrant Transnationalism and Modes of Transformation," *International Migration Review*, 18(3): 970-1001.
- , 2007, "Super-diversity and its implications," *Ethnic and Racial Studies*, 30(6): 1024-

54.

VHS (Volkshochschule) ドイツ市民大学 <https://www.duesseldorf.de/vhs/> (2018年9月2日閲覧)

山田真茂留, 2013, 「モダニティの理想と現実——グローバル時代のコミュニティとアイデンティティ」 宮島喬・船橋晴俊・友枝敏雄・遠藤薫編『グローバリゼーションと社会学——モダニティ・グローバリティ・社会的公正——』ミネルヴァ書房, 205-24.

山田富秋, 1992, 「精神医療批判のエスノメソドロジー」 好井裕明編『エスノメソドロジーの現実』世界思想社, 70-87.

吉田孝, 2017, 「デュッセルドルフ国際学校」 岩崎久美子・大迫弘和編『国際バカロレアの現在』ジーアス教育新社, 76-8.

柚岡一明, 2014, 「日本週間、日本デー」『ラインの流れ——デュッセルドルフ日本クラブ創立50周年記念誌』デュッセルドルフ日本クラブ, 17.

在日ドイツ商工会議所, 1991, 「平成3年版 日本海外投資の分析と動向——欧州進出企業一覧」 在日ドイツ商工会議所.

## 付録

### インタビュー調査協力者のプロフィール一覧

表1 調査協力者（ドイツ国内）

	年齢 (調査時)	インタビュー日時	デュッセルドルフ渡航日 (過去の駐在経験)	子どもの年齢 (渡航時)	子どもの学校 (渡航時から調査時まで)
A	30代	2015年12月7日	2006年	子どもなし	調査時6歳3歳 長男；現地校 次男：現地幼稚園
B	50代	2015年12月7日	2015年6月 (英国：1年半・ サウジアラビア：3年)	10歳 (23歳長男ロンドン大学院・ 18歳長女日本大学1年)	次女：インターナショナルスクール (ISR)
C	50代	2015年12月9日 2016年8月11日	2008年8月 1回目： 1997-2004	0歳 長女：16歳 次女：11歳	長女：日本人学校からインターナショナルスクール (ISD) 次女：インターナショナルスクール (ISD)
D	40代	2015年12月11日 2016年8月4日	2012年6月 (上海：2000- 2003 ワシントン DC：2004- 2007)		長女：インターナショナルスクール (ISD) から日本人学校 次女：日本人学校 長男：日本人幼稚園
E	40代	2015年12月14日	2008年8月	長男：10歳 次女：8歳 次男：6歳	長男・次女：日本人学校からインターナショナルスクール (ISD) 次男：日本人学校
F	40代	2015年12月17日 2016年8月7日	2014年9月 (独身時留学・ 仕事ドイツ 1997-2004)	長女：8歳 次女：6歳 3女：3歳	長女：日本人学校 次女・3女：現地幼稚園
G	30代	2015年12月22日 2016年8月7日	2014年8月 (生まれてから13歳まで家族とハンブルクで生活経験)	長男：8歳 次男：6歳	長男・次男：日本人学校

			ベルギー: 2001-2005		
H	30代	2017年3月8日 2017年3月15日	2014年4月	長男:8歳 次男:5歳 3男:1歳半	長男:日本人学校 次男・3男:日本人幼稚園
I	40代	2017年3月9日	2016年8月	長女:8歳 次女:4歳	長女:インターナショナルスクール (ISR) 次女:インターナショナル幼稚園 (モビーレ)
J	40代	2017年3月14日	2007年11月 (ハンブルク: 1999-2017)	長男:5歳 次男:2歳	長男:インターナショナルスクール (ISR) 次男:日本人学校 長女:インターナショナル幼稚園 (モビーレ)
K	30代	2017年3月15日	2011年11月	長男:4歳 次男:2か月	長男:日本人幼稚園 次男:日本人幼稚園 (恵光)
L	30代	2018年1月3日	2012年	長女:4歳 次女:2歳	長女:インターナショナルスクール (ISR) 次女:インターナショナル幼稚園 (モビーレ)
M	50代	2018年1月3日	2016年9月 (マドリッド: 1999-2004 デトロイト: 2007-2011 ヒューストン: 2015-2016)	長女14歳 (高校生の長男は日本)	長女:インターナショナルスクール (ISD)

表2 調査協力者（帰国女性）

	年齢 (調査時)	インタビュー日 時	デュッセルドルフ滞 在期間	子どもの年 齢 (渡独時)	ドイツにおける子ど もの学校
JA	50代	2016年7月23日	1999年-2004年	長女；12歳 次女：10歳 長男：5歳	長女：日本人学校か らインターナシヨナ ルスクール (ISD) 次女：日本人学校 長男：日本人幼稚園 から現地幼稚園・現 地校から小4時に日 本人学校
JB	60代	2016年11月20 日	2004年-2011年  (マドリッド： 1988-1993)	次男10歳 (18歳長男 は日本の大 学)	次男：インターナシ ヨナルスクール (ISD)
JC	40代	2016年12月2日	2011年-2015年 (ウィーン：1993- 1995 ハンブルク： 1998-2000 ウィーン：2000- 2002)	長男：11歳 長女：6歳	長男・長女：日本人学 校
JD	50代	2017年2月24日 (JD/JE/JF グループ) 2017年8月7日	2003年-2008年	長女：7歳 次女：5歳	長女：日本人学校 次女：日本人幼稚園
JE	40代	2017年2月24日 (JD/JE/JF グループ) 2017年12月20 日	2004年-2010年	長男：8歳 長女：6歳	長男・長女：日本人学 校
JF	40代	2017年2月24日 (JD/JE/JF グループ)	2004年-2010年	長女：6歳 次女：5歳 3女：2か月	長女：日本人学校 次女：日本人幼稚園 (ライン幼稚園)
D	40代	2018年3月5日	2012年-2017年	表1参照	表1参照

表3 日本人関連団体機関

	年齢	インタビュー日時	概要
N	60代	2016年8月3日	デュッセルドルフ市内で日本人向けの公益法人の代表 <sup>93</sup>
O	50代	2016年8月4日	Nさん代表公益法人のスタッフ
P	50代	2016年8月6日	デュッセルドルフ市内で小さな子どもを持つ日本人親子をサポート・「ぶなの森」代表 <sup>94</sup> ・日本クラブの幼児向けプログラム「ちびっこ集まれ！」専任講師
Q	60代	2017年3月7日	デュッセルドルフ日本人学校事務局長
R	60代	2017年3月13日	日本クラブのスタッフ
S	40代	2017年3月16日	インターナショナルスクール (ISD) の日本語科専任教師
T	50代	2017年3月16日	インターナショナルスクール (ISD) の日本語科非常勤教師
U	40代	2017年3月16日 (N/O/U グループインタビュー)	Nさん代表公益法人スタッフ
V	70代	2017年12月27日	市内日系不動産経営者
W	60代	2017年12月27日	デュッセルドルフ大学現代日本研究所教授
X	60代	2017年12月28日	市内日系不動産経営者
Y	60代	2018年1月4日	デュッセルドルフ日本クラブ・日本商工会議所代表

<sup>93</sup> 2015年12月に発足し、2016年6月に正式に公益法人として認可された団体で 日本人向けに下記を目的として様々な活動を行っている。

- (1) グローバル社会に求められる人材育成
- (2) 複文化・複言語環境にある子どもたちのことば力の支援。
- (3) 地域社会への闊達な適応、交流の推進。

活動内容：

そろばん講座、ドイツ語講座、独日ティーラウンジ、音楽遊び、子ども向けスキーツアー等

<https://watashi-de.jimdo.com/watashi> とは/ (2018年8月15日閲覧)

<sup>94</sup> 「子育てサポート ぶなの森」は、託児、遊びのグループ、子育て相談、人形劇、ライブコンサートを開催し、子育てをサポートしている。

<https://www.facebook.com/kosodatebunanomori> (2018年8月15日閲覧)



表4 ドイツ人(デュッセルドルフ市内在住)

	年齢	インタビュー日時	概要
MF	60代	2016年8月9日	ドイツ市民大学の外人向けドイツ語教師
WH	50代	2016年8月10日	インターナショナルスクール (ISD) の元学長補佐

表5 ドイツ永住日本人(ドイツ人と国際結婚)

	年齢	インタビュー日時	概要
Z	50代	2018年5月2日	1997年からデュッセルドルフ在住

## 謝辞

本研究の実施にあたり、研究の趣旨を理解し、快くインタビューにご協力して下さった海外駐在員配偶者の皆さま、日本人関連団体諸機関の皆さま、そして、ドイツの友人たちに心から感謝の気持ちとお礼を申し上げます。お忙しい中、何時間も時間を費やしてインタビューに応じてくださった皆様のご協力なくしては、本論文を完成することはできませんでした。

また、本研究を遂行し論文の作成にあたり、終始、多くのご支援とご指導を受け賜りました、主旨導教員である水上徹男先生、副指導教員の木村自先生に深く感謝しております。水上先生には、何度もくじけそうになった時に励まし、支えていただきました。最後まであたたかく見守ってくださり、心から感謝いたします。

本論文作成にあたり、審査委員として多くのご助言をいただきました桜井厚先生、前田泰樹先生、太田麻希子先生には、深くお礼申し上げます。桜井厚先生には、立教大学大学院異文化コミュニケーション博士前期課程の在籍時から長い間、ご指導をいただきました。先生方には限られた時間の中でご丁寧に見ていただき、貴重なご助言をいただきました。厚く御礼申し上げます。

そして同じ研究室で励まし合った仲間たちがいたからこそ、この論文を最後まで書き上げることができたと思います。

博士論文を書き上げられたことに対して、社会学研究科の学部事務の方々、大学の図書館職員の皆さま、そして応援して下さったすべての方々に改めて感謝の意を表します。

最後に、これまで私をあたたかく応援してくれた夫と子どもたち、母に感謝したいと思います。彼らの協力や支援がなければここまで到達することはできませんでした。本当にありがとう。